

第一分冊（自一九四三年二月二日 至一九四五年四月二四日）

学窓雑感 想ふ日来る日、思い出す日過ぎる日、書く日記す日

松亭眉葦 著

（編註…眉葦は細野氏の論評を行う時のペンネームか？）

『ブーゲンビル島沖航空戦』に寄す 眉^び葦^い

一 沈みたりく アメリカ太平洋艦隊は

ブーゲンビル沖 すさぶ波間に

微塵に砕け 没し去りぬ

この時この日を忍びたり 勲功高し海の荒鷲

千載不朽 偉業は香れ ラバウル海軍航空部隊！

二 撃ちたりく 脚下に迷ふ敵艦隊を

必殺雷撃 撃ちてし止まむ

全艦殆んど 破り去りぬ

この時この日を忍びたり 勲功高し海の荒鷲

千載不朽 鬼神と強し ラバウル海軍航空部隊

三 雄々しかりく 譽に羽搏く海の荒鷲よ

太平洋の 固き護りぞ

すめらみくにさだめ
皇御国の運命擔ひし

この時この日を忍びたり 勲功高し海の荒鷲

千載不朽 空の鎮めぞ ラバウル海軍航空部隊

四 万才ぞく ブーゲンビル沖 勝鬨ぞ

五十余隻の 不逞のこの仇を

沖の夕陽と高らかに

この時この日を忍びたり 勲功高し海の荒鷲

千載不朽 偉業は香れ ラバウル海軍航空部隊

十一月十八日 第五次ブーゲンビル沖航空戦の戦果に

感謝しつつ記す

十一月二十一日（日） 晴天

この日遂に海兵突破の決心を定む。只この上は一意誠心断じて頑張り抜く決心也。力足らずば玉碎あるのみ。行くぞ断じて行くぞ。嗚呼！人生僅か二十五年也。誓って、江田島湾頭に凱歌を舉げん。我、この日 遂に海兵突破の決心を定む。

思ふこと貫かずして止まぬこそ

大和男子の心なりけれ

（明治天皇御製）

一粒の麦地に落ちて死なずば生きず

點滴穿石

断じて行へば鬼神も之を避く

日本刀

鍛冶研磨幾百回。霜降三尺玉無埃。

不疑日本刀銳利。曾試磐根錯節来。

Success comes to him who faints not --

十一月二十四日（水）曇

今日は朝より陰鬱な嫌な天気。こんな日は早く過ぎて呉れ。授業も大したことはなし。五時限の八代、急に試験のこと言ひ出す。何しろ十二月十四日からヴィクターへ勤労奉仕らしいから。もう学期末気分だ。これで来週は地、乙、代、幾（地理、乙、代数、幾何）が登場した。余程しつかりしないと駄目だぞ。夜は、又猪俣さん宅へ一寸用事のついでに上りこんで駄べる。忙しいことを自覚してゐ乍らのこの態には大いに残念なり。律ちゃんもよくしゃべる。やはり俺と同じやうに、断呼としては出来ぬらしい。いつもは七時頃からやってゐるのに、今日は九時過迄駄べりし。九時一寸過ぎ、中田荘一人来宅。大人、愈々学徒出陣に应へて応召入隊なそうな。勇ましき哉。大いにその前途を祝す。祈武運長久。これより大いに感ずるところありて、徹夜を決心す。寒夜守独一燈、幾度か睡魔に襲はれども、遂に頑張り通す。さう

だ、この精神力こそ何物にも変へ難いのだ。

Success comes to him who faints not -

何しろ一九四三年もあと三十八日、ラストヘビーだ。頑張れくく 本日
日を期して本物の勉強が出来さうな気がする。感謝々々、不言実行！ 初心
貫徹！ 倒已後！

十一月二十九日（月）

ギルバート島方面激戦中のところ、又大戦果昂る。曰く、我が潜水艦、敵
空母一隻を沈没確実見込の大破せしめ、又、第二次ギルバート島沖航空戦は
空母一隻轟沈、一隻撃沈。そして曰く、第三次ギルバート島沖航空戦空母二
隻撃沈、巡洋艦二隻撃沈、巡洋艦（若くは戦艦）一隻大破炎上、なりと。噫！
偉大なる哉帝国海軍航空部隊・潜水艦隊。

本日、西洋史、代數、試験あり。目下のところ、両者も上々。吾輩、初の
試みである總括的準備、功を奏したるか？ 旧来の丸暗記式準備の型を破り、
思ひ切ってやってみたのだ。全く丸暗記式はいけない。断呼排斥すべき也。
満点とる位、楽なものはない。丸暗記式こそその最善の方法である。然し、
学問即戦争の世の中、一夜漬主義等断じて許されない。事此處に至り、吾輩
の草案なる總括的学問。これこそ学問を愛するものの最上の方策である。無
闇矢鱈に暗記する過去の準備法を根本から覆へしたのだ。まあ今日の試みで
九分通り成功したとは云へまだわからない、これからだ。この次の地理にも
やって見るべし。代數の方はあまり準備しなかったが、全部出来た。答の方
も大体いいらしい。あと残ったのが問題の幾何！ 土曜だ。断じて頑張らねば
ならぬ。それに国語・地理。打續く試験。何糞、負けてたまるか。今日古木
と若し上級学校入試に落第したら、断然現役志願をすることを約束する。微
用令などうけるより 男子の本魂第一線に立つべし。然し、余は初心貫徹ま
で頑張る決心なり。

十一月三十日（火）快晴

朝から余り気分良くなし。況して大下さんの時間。さんぐく お叱言を戴
くに至り、今日一日全く台なし。「余程しつかりせんと駄目だぞ。いいか、
今の君達の力だと、何處も入れさうもないぞ。いいか、いつも言ふやうに、
一年分の勉強は、三ヶ月みっちりやれば取返せるのだ、いいかわかったか」
第三時限チャピンは「模型航空機の根本理論の解説」の長講。四時限書道は
清書「春水満四澤・夏雲多奇峯」、五時限 ガンマー 六時限全校教練。終
ってイの一番、校門をすつ飛んで出たら後から「オーイ、凄くハヤイジャネ

「カ」と呼ぶ。誰かと思ったら田中なり。彼氏も歸るのなら早い方がいいと馳せて来たとの事。二人で明日勤務奉仕に少し遅れて行く事申し合す。彼氏快諾！ 気の合った二人なり。歸宅四時。入浴。夜は国・地の試験準備。十四日、ヴィクター行だとすると、もうあと少して二学期とお別れだ。実に短い。こんなことで果していいのか、畜生！

十二月一日（水）晴

学徒出陣の日。世界最強、神州学徒出陣の時来る。怖れよ米鬼英魔！ 高邁なる理性に培れ、愈々それを戦陣に發揮する彼ら学徒こそ、正に世界無比だ！ 征け／＼学徒！ 日本国民の絶大なる期待を雙肩に負ひて堂々往け。我も續くぞ、きつと續くぞ！ 断じて續くぞ！

今日から「火の用心」始め、子供隣組有志と「戸締り用心！ 火の用心！」を又二月迄やるのだ。

十二月二日（木）快晴 風甚ダ強シ 霜降ッ

白霜降り寒風肌を刺す。然し乍ら南冥の彼方、マキン タラワの孤軍奮闘の勇士に思いを馳す。何のこれしき、断じて頑張りの一途のみ。磐根錯節世のならひ。戦果に酔ふなど非国民の第一たるもの。況んや「寒い」など言はずもがな。只、ひたぶるに精進、孜々黙々あるのみ也。

本日第五・六時限、前陸軍報道班員、「少女の友」社主筆、内山某氏来校せられ、滔々と熱辯をふるはれる。氏の大陸・南方方面の視察より得た体験記録大いにセンセーションを惹起す。現下、大東亜指導民族をして、大陸・南方方面に活躍中の日本人は、必ずしも立派な日本人とは云へない。誠に微々たるものである。

大日本帝国臣民としての自覚が足りない。南方・住民華僑は今こそ日本人の一舉手一投足を注視してゐるのだ。だからこそ 彼らの指導者としての日本人の使命こそ、第一線将士の勞苦にも比すべき緊要事である。日本人としての自覚、指導民族としての自覚である。現下の状況では、実に慨歎に堪えぬものがある。此處に於て帝都に赴き、ここ横浜の地に日本文化の中心地に、かくも立派な教育を受けた君らが新鮮にして熱烈なる意氣・頭腦を以て、この日本人としての自覚に生きて戴きたい。南方の彼方に、この意久地ない日本人を激励してやって戴きたい。誰が南方の彼らと君達に關係が無いと云ひ得やう。君らこそ、日本の力なのだ。この日本の力となる君らが完全に日本人としての自覚をもつてゐるか？ 疑問だ。君らの中には悪い、くだらない人も居やう。だが、君達の中から真に目覚めた人が 五十人でもいい、十人

でもいい、出て戴きたい。女の子たちなら随分話をしたが、君達にお話ししたのは始めてで、とりとめない面白くも無い話をしてしまったが、十分僕の話の意味を了解して欲しい、と結ぶ。

噫！日本人としての自覚！知らなんだ！くく！くく！々々 かくも偉大なる大使命を天より授った大和民族、理想の果は深遠だ。だが、その偉大なる使命を 同胞は知らざりし乎 歎！！々々
噫！日本人としての自覚！知らなんだ くくく！

十二月五日（日）晴天 温暖

家庭学園へ礼拝に行く。静かな聖なるひととき感謝す。

今日晴れの退園をする生徒を見たが、実に驚ろいた。彼女が入園して居たとは。全然良家の令嬢と変りない。しつとりと落着いて、然も整って何處となく品のある容貌。今日を晴れの服装に飾って、外套を片手に嬉々とした姿を見ると、実にその変ったのに驚く。もう誰が何と云っても彼女は立派に一人前になったのだ。この学園の偉大なる力が判る。入園者の大部分が良家とは限らないかも知れないが、不運なる彼女らが皆一人前になった姿は、一点の汚れも無い実に立派だ。ここにもこの家庭学園の重大なる使命があるのだ。彼女は元より、彼女の両親、兄弟姉妹の喜び、それに使命を為し終へた園長始め職員、それにも況してお喜びなさるのが神様だ。更生した最愛の子供の姿！ 神様はその偉大なる愛の御力をお注ぎ下されたのだ。自分は今日、この社会の一端に醸し出された一情景に接して、大いに感ずる所あった。良い一日を過して満足である。晝飯馳走に預る。深謝々々。

第六次ギルバート島沖航空戦の大戦果である。空母・大巡等隻轟撃沈！ 敵の底知れない戦意は何だ。益々必勝の信念を以て頑張らねばならぬ。今日、机上各装飾の大模様替へを行ふ。愈々定った一本道を驀進だ。気分大いに良し。山本・古賀両提督の温容、イエスの豊かな容顔、一しめしめて、さあ、次期作戦へ突撃だ。忙しいくくく。

十二月六日（月）曇天 寒風刺々

不逞なる哉！ メリケン艦隊。又もやマーシャル諸島に来攻す。その機動部隊なる特有の陣形を組み、我を屈従せしめんと。然し、我に荒鷲在り。沈黙の無敵艦隊あり、何ぞ恐れん。見よ、断末魔の叫び声も無残に海底に屠り去られる敵艦群。勝てり海鷲、誇れ海鷲。だが叩かれてもくその保有する七十隻の空母陣を主体として出撃し来れる、侮れぬ戦意！ 敵米艦隊 断じ

て全滅せずんば止まじ。

十二月八日（水）快晴

大いなる感激の日より二周年、噫！二周年、光陰矢の如く少年易老、想起す。かの十二月八日の感激を。何たる偉大なる二ケ年であつたらう。善謀勇戦の二ケ年。然し、今だ大東亜新秩序建設の巨歩を障碍する悪魔の群は跳梁（編註…広辞苑六版では ちようりやう はねまわること・悪人などがわがもの顔にのさばること）してゐるのだ、撃碎せよ！米鬼英魔！愈々、忍苦の度は重なるであらう。然し、それが重なれば重なる程、万朶の開花は楽しいのだ。待たう。期待しよう。そして頑張らう。この日早朝、我が関東学院中部全生徒、校庭集合。大詔奉讀式を舉行。あの日の感激を思ひ起す。式後、この歩調、この足音、先輩に續け、断じて續く。高鳴る血汐をこの歩調に合せて、前線に届けと、堂々の分列行進を行ふ。関東健児、三春の山の六角塔も青空にその英姿を聳え立たせ、霞ヶ丘の霜降を踏んで見よ。前進する健児の双貌、朝日に映える橄欖の森、今朝は一汐の輝きを見せ、何物をも踏み倒す銃後若人の心意気、鉄血天に迸り、今だ曾てない歩武堂々の盛行である。大いなる歴史の日の朝。世界史に一新紀元を畫すこの大御戦の感激の日の朝なり。

十二月十日（金）晴 寒風甚し

関東学院中部、昭和十八年度査閲実施せらる。査閲官、東部第六十二部隊長飯田大佐殿。分列、閱兵共に「優良」なる成績。往年の三春健児の意気は認められたのだ。第三学年教練受閲は「概ね良好」と認められ、まづ無難々々。早朝より寒氣刺々たるも、斯の如き成績を得たのは、全校一致の賜と云へ、舉心一致の実こそ大切なれ！

十二月十二日（日）very fine

今日は朝五時半少年団神社参拝（浅間神社）。寒氣を刺いて銃後の少年少女意氣天を突く。

午前十時十五分東神奈川発で、田中と二人で山下さんへ勤勞奉仕に赴く。久しぶりで満腹感に酔い乍ら桑の根掘り。

さつま芋を土産に戴き午后七時歸宅。

『三度十二月八日を迎へて』

眉葦

天も泣け 地も泣け 人も泣け

天も震へ 地も震へ 人も震へ

かの十二月八日のあの朝だった。あの時の一億の心は

驚愕！ 否 恐怖！ 否！ 霹靂！

否！ 希望！ 然り 澁刺たる希望の朝だった

それまでの あらゆる妄念邪想は すつ飛んだ

あの一瞬の出来事 大いなる歴史の 朝だった

それより早や二ヶ年 又もや巡り来った十二月八日

その日は静かだった 万物皆静かだった 寝静ったやうだ

静かに明けた十二月八日。然し、その静の中に脈々として

暴戾米英撃たで止まじ！ の意気が流れているのに

気がついた たゞ日の丸のみ旭光に映え ほんとに静かな朝

これだ／＼躍進日本の真実の力

静中有動！ 帝国海軍然り皇軍然り

静中有動！ これこそ帝国が三千年来の傳統なのだ

米 英 何ぞ恐れる。 静中動有り

自分は今気がついた

この大いな到底知り得べくもない

この大いなる力のありかを

皆、一億すべてが持つてゐるのだ

自分も持つて居たのだ。光榮ある帝国臣民として

この大いなる力を持つてゐるのだ

何たる感激ぞ！

十二月八日の一億の気持だ

あの感激の朝のあの気持だ！

以 上

十二月十七日（金）

愈々今日から日本音響株式会社へ勤務奉仕行。二十三日、終業式前日迄。

その間、十八日休電日に就き休日。その代り十九日（日）は就業。芝浦・田奈部隊、農家、二俣川作業等々、多忙なる今学期の作業日割。今日より又一週間を加えて終止俯か？ 然し、正月の作業がなくてのんびり出来るのも嬉しい。何しろ殺人的ラッシュアワーのおでかけは辛いこと／＼、そして帰途の

それに優るとも劣らぬ混雜。日頃の産業戦士諸君の労苦の程、察するに余りある。芝浦の「根岸さん」「三上さん」田奈部隊の「岩崎喜一さん」「鈴木孝治さん」瀬谷の「勇さん」等、勤勞奉仕に行くと、きつと印象の深い人に出会ふ。沢山の人の中で、強く頭に浮んで忘れられぬ人だ。それだけ特異的な性質の持ち主なのかも知れない。今日の作業にもその特異な印象の深い人が居る。「手には？」のをじさん、「パンチャン」「矢嶋さん」だ。殊に「手には？」氏、忘れられぬ人なり。

十二月十九日（日）晴

昨十八日は休電日。代つて今日は日曜就業。朝より張切つて能率百%の成果を擧げる。その為、歸宅するとぐったり疲れて勉強の方は零。八代の言葉を思ひ出す。「君らは学徒だよ、勤勞奉仕に行つていくら疲れても、学徒の本分である勉強の方は平常通りやらなくては駄目だよ」残念であるが、体が言う事きかぬ。うらめしいのは八代。あゝ疲れた、眠い、実に眠い。机に向ふ氣力全然無し。「火の用心」を了つて歸ると何もしたくなし。もつとやりたい氣は充分あるのだが、ねむい、たまらぬ、畜生！残念！口惜し……駄目だ……

映画「海事」批評 松竹株式会社製作 演出田坂且隆

あの松竹にこんな大規模な勇壮な映画が大丈夫作れるかな？ 軍神になる人の演技は如何なものかな？ 僕はこの二つの好奇心を持つて映画館に入つた。然し、この二つの好奇心の中、前者は僕のこの疑心が十分もつともであると云ふ事を知つた。松竹にとつては空前の作である従来の松竹調、大船映画の型を破つた暴舉に近いものであつた。演出者の並々ならぬ熱意、大本营その他の盡大なる後援！ 原作の余りの力篇たる事より察して、この映画の持つ使命は大きかつた。二番目の問題である。谷軍神に扮する山内明の演技は、はじめな位の失敗であつた。前半、兵学校卒業前後迄の好演技は板について居ないとは云へ無難であつた。それがクライマックスたるべき十二月八日の壯舉前あたりの彼の演技は新人とは云へ（もつとも重荷すぎる）見るに忍びない。然し、この半面が我らをして渴仰止まぬ軍神が我らの極く身近な人の中より出るものであり、軍神の宿るやうな人は超巨人的なひとであるやうに思つていた我らの考へを覆した点はよかつた。惜しむらくは新人として余りの重荷過ぎるのかもしれない。然し、演出者としての立場から見れば、その辺に人知れぬ幾多の苦心が拂れたかも知れない。このやうな映画は凡人をして云々するやうな事は許されなだらう。だが、この様な映画が 今後

續出するやも知れない今日 製作者自身をしての自重を祈って止まぬ。總体的に云へば、映画「海事」は何も云はず一億總て一丸になって起つ時、一機でも多く前線への心構を以て見れば頭が下がる映画である。まあ、力作の部類に属する哉。次に海兵力に於ける逞しき鍊成の有様が見られるが、その反面どちらかと思ふ場面が随分あったと記憶してゐる。そのエダと真人との關係、隆夫卒業後の人生行路等、あまりぱーとしないところがありはしなかったか？ 原作に焚きつけられてこの映画を見た人は運のよかつた人である。松竹今後の奮闘を望むと共に、変りつつある映画俳優の一層の自愛を望んで筆を措く。

寸松亭にて 眉葦

十二月二十日（月）

噫、南冥の海を深紅に染めて、海ゆかば大君の辺にこそ水漬く屍。壮烈玉砕せるマキン・タラワ西島守備の海軍陸戦隊三千名、及び協力奮戦せる千五百名の軍属の千古に香る勲は。本日、三時十五分大本営より発表され、一億をして肅然、襟を正さしめた。かくありとは、予想して居つたとは云へ何たる壮烈！ 我等断じて怒敵米英撃滅せざんば止まじ。先にアツツの悲報あり、今亦、この悲報に接し、我らの憤激、頂天に達す。

「火の用心」巡廻前、子供隣組集合。柴崎海軍少将以下の英霊に対して宿敵米鬼、必ず打ち破りますの決意をこめて祈念を捧げ「海ゆかば」を一唱。少国民の意気は壮なり。

今亦我聞けり！

水漬く四千五百の荒御霊よ

遠く祖国を距たる數千軒の小島に

数十倍の米鬼を一舉に屠り

我が身又 敢然として 玉と砕けし

御身等の 紅き真心は 火と燃えたのだ！

御身らの 銃・劍は しっかり握られたのだ！

御身らは 愛する祖国の為 ひるまなかつた

御身らは 大君の辺にこそ 何物も惜しまなかつた

御身らの 最後の雄叫びは この祖国にも響いた

續くぞ！ 断じて續くぞ！ 四千五百の 水漬く軍神の

最後の突撃に！ 續くぞ！

噫！ 怨敵、メリケン奴！ 覚悟はよいか

四千五百に代る全一億の總突撃を受けて見よ

十二月二十一日（火） 快晴

勤勞奉仕 第四日目。昨夕、マキン・タラワの玉砕を聴き、一層の働き甲斐を覚ゆ。この上は所期の目的に向って、ひたすら突進のみ。徒らに徒手空拳を歎いてゐる場合にあらず、まだく我らの時代はあるのだ。きつと来るのだ否来なければならぬのだ。よし！ その時こそ、暴戾米鬼奴！ 覚えて居れ！ この腕で必ず見参するぞ。此處二三日の悲報に、国民の意気消沈しているの感あり。こんな事では駄目也。一喜一憂は戦争の常、玉砕勇士に応えねばならぬ。勇士たちは必ず後に續く人々を期待して、従容死に就いたのだ。その期待に背かぬ。総力を擧げて、全身全力を擧げて頑張るのだ。それでこそ、南海の玉砕勇士は冥するのだ。

十二月二十四日（金） 曇天

噫！ 待つてゐた、全日本の若人は待つてゐた。この日この時全若人は歓喜した！ 果せる哉、若人の歓喜は絶頂に達した。俺もその中の一人だ。潮の如く出て行く先輩諸兄の激しい気魄に圧倒されてゐた自分だったが、今こそ何もかも晴れた。征くぞ！ 断呼として。我らの前途には雲霞の如きメリケン野郎が構えてゐる。我らの前途にはアメリカ本土が爆撃を待つてゐる。我らの前途には無数のメリケン軍艦が沈没を待つてゐる。よし！ 偉大なる神国日本の光榮ある躍進の時に生を享けし、この感激。愛する祖国、十有八年の間 平穩に育んで呉れた祖国。その祖国、日本の為に我らは征くのだ。何たる光榮！ 馬鹿野郎！ メリケン、アングロ、迷利犬、暗愚櫓！ 暫く待つて！ その中にこの鉄の一拳を受けて見よ！ きつと見舞ふぞ、メリケン、アングロ。俺は征くのだ、光榮ある祖国の為に、偉大なる祖国の為に、全一億の信望は双肩に輝いてゐる。畏くも大君の御信賴はこの俺達に迄繋つたのだ。海行かば、山ゆかば、大君の辺にこそ俺達は勇んで死ねるのだ。「俺も行くぞ、お前も来るか」「うん！ 俺も行くぞ！」何冀！ 負けてたまるか。祖国を汚してなるものか。不侵の国、不震の国、大日本帝国万才。
(十八年十二月二十四日 徴兵適齡一年低下、満十九才検査の報を聴きて)

十二月二十五日（土） 曇時々晴

謹みて、大正天皇祭の佳き日を迎ふ。前の克ちゃん、ラバウルより輸送船補給の大任を果して歸る。輝くその使命を無事に果して、次の大任の為に、二日間休養が出たさうな。

日の本の男子を我も謳はれむ

いつくの波に碎け散るとも

すっかり変った克ちゃんを見て、益々、我も征かむの氣を強くする。若き人々が續々として出て行く。取り残された感じは俺の心に一杯だ。

十二月二十六日（日）

午前十時より、横浜家庭学園大二学期終業式、及午后一時より同学園×マス祝会に出席す。降誕祭礼拝

一、国民儀礼

一、説教「主の祈りに就いて」有馬園長

一、頌

一、賛美歌 一一〇

一、聖書朗讀 ルカ傳第二章

一、祝禱

一、祈禱

一、賛美歌八八

五分休憩の後第二部に入る

第二部は合唱・劇・遊戲等。

この日を楽しみに練習を重ねた園児たちの一心不乱の演技に、心を惹かる神様はほんとお喜びなされたに違い無い。就中、劇「良きサマリヤ人」は、衣粧とて貧しきとは云へ、少からず感激す。一所懸命に小さき掌合せ、額く幼児の舞踏乏しきとは云へ、前線の兵隊さんに感謝しつつ楽しき一時を迎へ得た喜び、神様の寛きお恵み、何を感謝してよいのだらうか。これも大日本帝國に御民吾たりしお陰、感謝々々。午餐会の御料理は美味しいこと天下一品、園関係者の限らない御歓待と共に、忘れられぬ前田先生の人形芝居、傑作々々。先生にこれだけの器量があるとは思はなかった。

近來にない楽しい日を送り感謝しつつ退園す。板垣も相当嬉しかったと見え、途々「一〇五番」を高唱しつつ、ほんとに清く晴れ渡り、輝く星を仰ぎ心から佳き日を祝ふ。歸宅六時半

もろびと 舉りて 迎へまつれ

ひさしく待ちにし 主はきませり、主はきませり

主は 主は きませり 感謝々々

十二月二十八日（火）晴

昨夕、山下さんから持って来た餅を逗子へ持って行く。そこで青島のアー坊に会ふ。実に奇逅！ お正月は逗子ですとの事。然し、大磯以来何年目か 約五年目の解逅！ お互にその成長に驚く。小学校六年の時別れ、今は女子専門の一年、大磯、北鎌倉、よく喧嘩をしたものだ。然し、今会ってみれば懐しい、実に懐しい。あの時のいろ／＼な事柄が思ひ出される。夕御飯、スキヤキを馳走になる。北鎌倉時代の毎晩のやうに喰べたスキヤキを思ひ出す。七時叔父・叔母と歸宅。（田舎へ行つたとの事）片桐よりの挽

茶・罐。連日の健闘のお礼に戴く、感謝す。盡きぬ名残を惜しんで、九時一寸前歸る。

十二月二十九日（水）晴 夕陽美し

連日の疲勞でぐったり、お午過迄寝る。俺の発心も元日からすると、あと三日大いに遊ぶ可し。午后から机上、勉強室の大掃除に忙し。然し、麗な事は気分よし、大いに励行する價值あり。

ニューブリテン島に対する敵の侵攻作戦、愈々熾烈。かくして、ソロモン決戦は第二段階に入る。空と鉄を總動員する量の反抗戦だ。畜生！敵の量に対する我的肉弾、鳴、言語に絶する将兵の勞苦。血も涙も盡きぬ、補給戰の忍苦。銘すべし、一億！ニューギニヤを、ニューブリテンを、ソロモンを、量には量だ、鉄には鉄だ。一機一艦一船でも多く増産だ。年始年末気分等吹き飛ばせ。然し、伊勢佐木町の繁雜を見ると、眞！これでいいのか、何も無いザキ街を行く人の數の多い事。同胞幾百万の血の滲む辛苦を君達は知ってゐるのか。何を言ふか！「知ってゐるものか」「知ってゐるなら自粛せよ」。朝夕・輸送機關の混雜。通勤者諸君は何故譲らぬか、夜も晝もなく増産に挺身する産業・勤勞戰士諸君を想へ。戦争は忍ぶ事の出来る國民が勝つのだ。君らは日本人ではないか。父祖傳來、侵さざれぬ国日本の國民ではないか、なんのこれしき忍べるぞ。否、否。忍ばなければ負けるのだ。侵されるのだ！光榮ある神国が侵されるのだ。さあ、お互に頑張らう。神州日本の國民だ。メリケン・アングロ共に負けてたまるか。さあ日本人だもの頑張らう。そして一步も退きはしない。お互い日本人だもの！

十二月三十一日（金）晴

偉大なりし昭和十八年は今ぞ行く。山本元帥の散華あり。アツツの玉碎あり。イタリヤバドリオ政權の裏切あり。学徒徴兵蟄豫停止あり。否学徒出陣あり。ブーゲンビル沖大戦果あり。大東亜會議の盛典あり。ビルマ・フィリッピン両国の独立宣言あり。そしてタラワ・マキン両島守備陸戦隊の玉碎あり。徴兵年令一年の低下あり。かくして決戦昭和十八年は暮れて行く。今こそ静かに過ぎて行く。何かしら得体の知れぬ。大きなものをつかり抱いてゐるやうだ。次に起るべき躍進の時に、胸一杯にふくらましてゐるやうだ。噫！何もかも昭和十八年の過ぎ去ったものは大きかった。そしてその偉大なる年は今静かに過ぎ去らんとしてゐる。静かだ！実に静かだ。怖ろしい程静かだ！躍動する前の静かな一時だ。何事もなかったやうな静けさだ！

これが果して偉大なる昭和十八年なのか。さうだ！ 決勝へ第一歩を踏み出す新春は明日だ！ 決勝だ。昭和十九年こそ、吾等一億決死の進軍の秋だ。今此處に静かに過ぎゆく昭和十八年を送るのだ。然し乍ら、余りに静かで怖い程静かだ。

二六〇四年十二月三十一日

○ 限りなき恵を四方にしき島の

大和島根は今さかゆなり

○ 西ノ海よせくる波も心せよ

神のまもれるやまと島根ぞ

昭和十九年一月一日（土）

君がため花と散りにしますらをに

みせばやと思ふ 御代の春かな （加納諸平）

安みしし吾大君のしきませる

御国ゆたかに春は来にけり （大倉鷺夫）

初春の初日かゞよふ神国の

神のみかげをあふげ諸 （荒木田久老）

春にあけてまづ見る書も天地の

はじめの時と讀み出づるかな （橘 曙覧）

新しき年のはじめに豊の年

しるすとならじ雪の降れるは （葛井諸会）

大いなる歴史の旦、今ほのぼのと明け初めた。小さき掌を合せて拝む童心はをののいてゐる。何たる莊嚴な旦、みたみわれ生けるしるしあり。天地のさかゆるときに、あへらく思へばしつとりと霜を帯びたこの日の街々、家々。今、真紅の太陽は登り初めた。子供達は懸命に拜んでゐる。征きし父・兄。亡くなりし父・兄、よくぞの私を育て呉れました。有難ふございます。子供は眞剣だ。拝み了つて上げた瞳！ 純真無垢なその瞳。彼らは泣いていたのだ。涙こそ見えぬが彼らは泣いていたのだ。大國難の中に育つ彼ら、深刻な物資難の中にも彼らは立派に育つてゐるのだ。翻つてこの自分を考へた時、俺は泣けてく仕様がなかった。徒に十有九年もの間、他人の作りし粒米布匹を戴き宏大無辺の御代のもと、何一つ不自由なく育てられ、今まだ為すことなくしてゐる自分。上よお許し下さい。神よお恵み下さい。さうだ、この俺はこのいたいけな子供達の為にも死ななければならないのだ。この子供達が、まだこの大國難の中にも立派に育つて呉れてゐる。この子供達是不侵の

国を守って呉れるに決つてゐる。汚れざるこの神国は大盤石だ。さうだ、俺はもうこの子供達の為に死ぬのだ。噫！ 徒に十有九年もの間、々々：

何糞！ 俺は負けるものか。断じて征くぞ。何一つ不安なく平安に育んで呉れた。我が大君の辺にこの偉大なる祖国日本の為に俺は恩返しをするのだ。噫！ 感謝々々。

元旦 記

午前八時四十五分集合（中庭）。午前九時新年祝賀式舉行、関東学院全部門参加。大講堂にて

君がみかげにたぐへつつ 仰ぐ今日こそ 尊とけれ

一月二日（日） 快晴

断じて行へば鬼神亦之を避く。

一月四日（火）

軍人に賜りたる勅諭御下賜記念日。午后八時より学院合併の盛式舉行さる。

一月五日（水） 曇後雪

新年宴会の佳き日、午后より伊藤さんの信義さん達と上京。先、毎日天文館見学。出て、丸ノ内日映劇場に於て観映。四時、兼て打合せたる日本橋三越一階ホールで伊藤さん夫妻及び〇〇氏夫妻と会ひ、直に人形町末廣亭に赴き 九時迄楽しい笑ひを、續く柳好、柳橋（左楽（休））始め、大小ハナシ家連中に感謝しつつ午後九時頃出る。

一月六日（木） 晴

有馬氏宅訪問。兼て打合せ中の新年会を開く。大いに騒ぎ、且つ、食ひ且つ飲み、気の合った同士、一日中遊ぶ。

一月七日（金） 晴

ひねもすのたりく。

一月八日（土） 快晴

第三学期始業式。午前八時集合。院長訓示内容

「愈 一大決戦の秋、学びの道にいそしむ事の出来るのはこれ一重に大秩威の然ら使むるところ、感謝のまことを捧げる次第なり。我らは全力を奮つて敵米英粉碎の意気を新たにして、一億総力戦の陣頭に立ち、決戦に勝利を齎

すやう、努力せねばならぬ」了って、大詔捧讀。教務報告あり。新任、国漢科某氏の挨拶あり。了って、校庭集合。分列並に閱兵あり。大いに決戦学徒の士気を昂揚す。

一月九日（日）快晴なるも夕刻より曇天 雲行き悪し

上海の親爺より来信あり。決戦下学徒としての本分を尽せ。家を守って母の手助をせよとあり。直に返信を書く。俺の信念を打明け、大いに感激しつつ書く。さて親爺、何と言ってくる哉？ 河合の叔母さん来宅。夕刻遅く迄居られる。

一月十日（月）夕刻より強風

第六時限 大下氏 大いに皆を激励す。決戦の年は 君らに取っても、決戦の年である。この一年間、君らは絶対に遊ばないで、死物狂ひになって勉強せよ。学問途中で徴用されてもよい、只、一心になって勉強し、その時が来たら勇んで国家の危急存亡の時に馳せ参ずるだけだ。いいか、絶対遊ぶな。気違いと言はれて見ろ。その位勉強しろ。その位勉強した者だけが榮冠を得るのだ。少くも三組だ。さあ、俺も張り切る。お前達も張り切れ。約束せよ。いいか、約束したからには少年だ、守り通せ。早く大人になるな。純心であれ。少年の気持だ。いいか、頑張れ……

一同大いに感激す。畜生！ 何が何でもやるぞ。断じて行へばいいのだ。何糞！ やるぞ、あと余すところ十八ヶ月！（一年半）總力だ。何が何でもやるぞ。決戦昭和十九年 意義深し、頑張るぞ！ 負けないぞ！ 畜生！ やるぞ。

一月十四日（金）曇

ラバウルに対する敵の侵攻愈、熾烈！ 今月に入り来攻敵機、延機數六百數十機。在ラバウル我部隊の辛苦。断じて勇士の要請に応へねばならぬ。

一機でも多く一刻でも早く送らう。勇士は草を嚙んでじーと応援を待って、報復を期してゐるのだ。十一日徴用令に依り、東京航空計器に入所した喜ちゃん身体不調で歸宅。何分の沙汰ある迄、家で静養す可しとの命。

じーと耳を澄ましてごらん、聞こえるだらう。二機でもいいから早く……と言つてゐる。勇士の声が足りないのだ。少いのだ。勇士達は苦しいのだ。だが、じーと泳えてゐる。勇士達は知つてゐる期待してゐるから……

「今に内地の人々が頑張つて呉れた結晶が、沢山の飛行機になつて送られて来るぞ、それまでだ……」

この勇士の期待を無にしてよいものか、否、々、々。
この勇士に応へるのが銃後を守る者の任務ではないか。

じーと聞き澄ましてごらん、聞えるだらう。「晝の疲れがなんだ。さあ、又働くぞ」と言つてゐる。戦士の声が頑張つてゐるのだ。産業戦士は死物狂ひだ、晝も夜もなく働いてゐる。戦士達は知つてゐる。期待してゐるから：「今はこの飛行機で前線の戦士が戦つて呉れる。憎いメリケン飛行機を打ち落して呉れる。さうだ、もつとく造らう」。

この戦士の期待は報いられるのだ。直に／＼この戦士の燃える心はきつときつと報いられるのだ。

前線・銃後 一丸に燃えて轟くこの歩調、今、決戦の時来る！

一月十七日（月）曇天寒風颯々

今日より耐寒鍛錬、馳足行進開始。本日、午後授業無し。歸途、大下さんに会ふ。彼曰く「今日はもう終りか、しつかりやれよ」

余曰く「ハイ、やります」

「書評」

○『大原幽学』 高倉テル著 長編小説 アルス発行

自分はこの本をこの間の日曜日、朝から読み始めて、夕方迄で完讀してしまつた。確かに面白い。元来この面白いには随分沢山の面白いがある。自分は久しく小説は避けてゐたが、この本を讀んで、又別の小説を讀まうとは思わない。前に最後に讀んだ小説も面白かつた。世界最初の農業組合を造つた幽学の轉々とした生涯、それに絡る心境、それからその非業の死。これが作者の特異な書風に書かれてゐる。作者が變つてゐる故か、書風が變つてゐる故か、作中の人物が變つてゐる。幽学然り、深雪然り、主善然り、山猫スカン然り、作右エ門然り、等々。どうせ幽学の生涯を書くなら全生涯を知りたい。郷土出奔の経緯、深雪とのエピソード。讀後自分は痛切に感じた。然し、作者特有の筆風がこの作のクライマックスたるべし。「入る教会」周囲の情勢は手に取るやうに判る。余りに縁遠い銚子の「エソ」の話。俠客連の話等もう少し簡単にゆかなかつたか？ 何だか知らぬが「泣ボクロ恨め、誰もかも俺を恨め！」云々の項は判らない。要するに今少し全場面を豊に描寫して欲しい。そして余談が多過ぎる。又講談本的な活力を帯びてきた辺りはもう一步…。結論として「先祖様組合」成立迄の幽学の辛苦。師提宗のあの寺に於ける生活を除いては幽学が果して上の偉人になる哉？ 然し、隠れたる

偉人を浅い史実から、これまで紹介させる作者の努力は偉とすべきである。農は国の大本である。いつになっても農業は国の源泉である。この意味に於いてこの書は、もっとく多くの人が読んで欲しいと思ふ。只、作者の特異の筆風を知ってからでないかと完讀出来ない。

一月十八日（火） 晴天

在ラバウル航空隊の大奮戦来襲敵機二百機の中、一〇二機（五割強）撃墜。又、先十四日の戦果に、更に三十三機撃墜を加へ、合計九十九機撃墜。正に怖る可し。海鷲の敢闘振り、本日大本營より発表さる。吾らの感激、更に彌増す耳。第一期特別幹部候補生志願。学徒總ケツ起大会は明日、市内四千学徒を動員して松竹映画劇場で舉行さる。銃後学徒たるもの、勇んで第一線に馳せ参ずべし。特幹こそ軍が吾々に期待された唯一の途である。行こう、特幹へ。起つ可し、特幹（編註…陸軍特別幹部候補生、太平洋戦争末期の日本で十五歳以上二十歳觀未滿の男子志願者から選拔され、陸軍の短期現役下士官となる教育を受ける者 一九四三年十二月制定）へ。

一月十九日（水） 快晴

特別幹部候補生志願学徒總ケツ起大会、松竹映画劇場に於て開催さる。市内四千学徒を前にして中村内政部長、平岡少将の熱辯を振る。「諸君は勇んで第一線に起る。全力を奮つて戦つて下さい。及ばず乍ら、私、諸君の乗る飛行機は引受けました。銃後に在る者、諸君の奮戦を期待してをります」終つて映画「雛鷲の母」観映、解散正午。午後は出征軍人家族慰安会に赴く。又映画もうあきた…勉強だく。のらくら遊んで居られる身分か。

映画短評 大映作品 「雛鷲の母」

この映画は中心人物の一少年が国民学校入学から、少年飛行兵志願して合格。郷土訪問飛行を為す處迄を画きそれにこの少年の母親、旧世想を脱しない本家の祖父、古川ロッパ然としたその子の医学士、ビッコの提灯家、お寺の和尚、等々。少年成長期に於ける種々の出来事を収録したものである。題して 静涙篇と銘打ち、限らない母の慈愛に伸び行く只一人の子、その母が喜んで 大君に捧げまつたその子が郷土訪問飛行の晴れ姿を迎へる。郷黨一同の歓喜。この辺をこの映画は狙つたのである。然し、肝腎の場面へ来て、観客の中から微笑さへ聞へるのはそも何故か。余りに突飛過ぎた本家の祖

父親子ではなかったか。周囲の五月蠅（編註：周囲のうるさい人）の中に在り乍ら立派に一人子を育て上げ 大空に捧げた母は静かであった。またそれに扮した杉村春子の好演技は、寺の和尚に扮した小杉勇のそれと相俟って素晴らしい。中学の入試に不幸落ちで落胆した少年を慰め激励したのはこの和尚と小学校の先生であった。クライマックスに「爆音」効果を狙ったのは余り長過ぎた。だが、ピッタリと合った。この映画の題名は、外れて居ない。重厚な、それで居て肩のこらない映画である。

一月二十日（木）快晴

今日二時帰宅すると、長本の叔母さん来訪中。自分の成育ぶりに驚かれる。聞けば自分はこの叔母さんに一番お世話になった由。いくら威張っても三つ子の時分の事を言はれたら、頭は上らぬものなり。さんぐお世話になった叔母さんのご健康を祈って止まぬ。

自分は間違つてゐた。自分は知った。總てを知った。
情ない自分である。馬鹿な自分である。

愚かな自分よ、恥じよ恥じよ生れ変れ！

「それでもお前は神州男子か」、濟みませぬ。

噫！ 何という愚かな自分だ。くたばってしまへ。

今迄の總てを打拂へ！ それでなければ死んでしまへ。

妄念！ 邪想！ 自己満足の何物でしかなかったか。

誇張！ 慢心！ 何だ 糞喰らへ！

噫！ 俺は知ったのだ。總てが判ったのだ。

愚かであった。馬鹿であった。自分よ。

今こそ精新な氣憤で張切るのだ。死ぬ迄だ。

倒れてもよい。起き上れぬ迄頑張り抜くのだ。何糞！

一月二十二日（土）曇

曇って寒くて嫌な日、早く暮れてしまへ。おまけに足が痛い。嫌な日。青年団の詰らないことがある。嫌なぐ一日。鍛錬会的事 前田さんへ行かねばならぬ。さてどうしやうか。

彼女は学校の屋上で俺に語った。「君、俺は決めた。俺の進路は決った。君よ、俺の總ての悩みは解決した。俺は嬉しい、嬉しくて仕様がな。解決の光明は俺の間近にあった。すぐ側にあった。俺は知らなかった。だが今は何もかも決った。君よ、俺の喜びは如何に大きいか察して呉れ。かくなりしか

らは俺は只管頑張るのみだ。君もどうか所信を貫徹して呉れ。お願いだ」と。彼奴は夢中になって語った。俺は一所懸命聞いた。そして彼女は寒い風に吹かれ乍ら、じーと港の方を見つめてゐた。その瞳には何かしら鋭い、何物をも突き通す、ある物が溢れてゐた。若い悩みを解く事が出来た彼女は起った儘動かなかった。俺は彼女の底知れぬ頑張りの成功を彼女の側から祈ってやった。鳩が一羽中空をかすめて野毛山の方へ飛び去った。寒風に頬を打たれながら彼女はまだ動かなかった。

一九・一・廿二

一月二十三日（日） 快晴 温暖

生れて始めて憧れの故郷に行く。父や叔父始め、細野一族発生の地を見て、我大いに感激す。あの山、あの川、あの森、總てが懐しい。新家で御馳走になり、祖父・母始め一族の墓所に詣ず。眠る一門の人々の御霊よ冥すべし。じつと祖父の墓の前で祈れば、何か知らぬが、胸にじーと込み上げて来た。そして、心の中に、前途の安穩を祈った。そしていつの日か、きつと成人して額きます。きつと偉い人になります。大君の御役にたつ人になります。そして一門の人々の供養をさせて戴きます。どうかそれ迄この私を守って下さいと祈った。生れて始めて先祖の前に額く感激。来てよかった。この御先祖様の為にも自分は死ななければならない。御先祖様に御恩返しをするのだ。この偉大なる天地に生を享けしめて下さったご先祖様。きつとくそのご恩は返します。どうかそれまでお守り下さい。

（附記。自分は後日必ずや祖父母始め 細野一族の菩提を弔ふ大供養会の開催をあの場所で行ふ事を誓った）

一月二十七日（木） 快晴 久方に仰ぐ青空

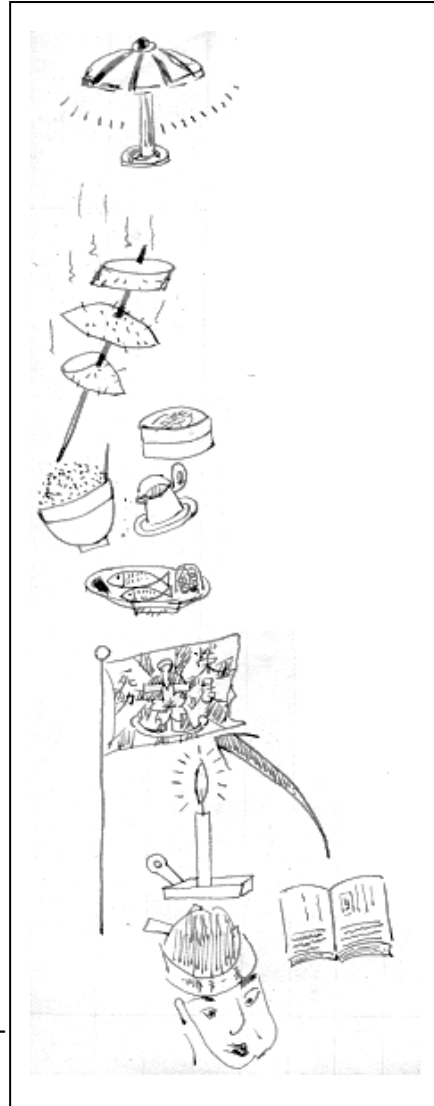
祝、関東学院創立満二十五年。午前九時より大講堂に於て、記念式挙行さる。午後鎌倉の菅井の家を訪れる。彼病床と思ひしや、やはり、勉強が面白くないらしい。何しろ自由学園時代は、猛烈に遅れてゐたとの事。それがこちらへ来て、大下、八代等の連中の猛ピッチは、古強者の自分でさへタヂくなのだから、新参の彼等問題ではない。全然勉強する気が無いらしい。「いくらやっても判らない。判らないものをやっても仕様がな。学校へノートしに行くだけだ」と歎じてゐた。まあ、激励してやって来た。こんな意気地ないことでは駄目だ。お互に男だ。死ぬ迄やれ。そしてこそ花が咲くのだ。だが人のことまで世話をやける、この自分か？ 自分はどうか。浅間しい。だらしない自分は。

決戦の二月はあと四日！

二月～八月（七ヶ月間）こそ俺の戦機だ

一字一文たりとも揺がせにすべきや

糞 頑張るぞ！



一月三十日（日）曇 寒

午后、雪ヶ谷の梅^{うめ}叔母^{おば}さん宅を訪問す。叔母さん、進ちゃん田舎へ行つて不在。叔父さんと叔父さんの学生時代の友人とか云う人（非常に愉快）といろく話する。皆さん変つて（自分の成長は？）しまはれたのには少からず驚く。鎌倉の家へ来られた時、自分は丁度小学校四年か：自分が先頭になつて駆け出すと、後から悦ちゃん洋ちゃんが走つてついて来たことを思ひ出す。あれ以来、既に幾星霜。光陰如矢！今会つてたら全く判らなかつたらう。大いに語り、且つ笑ひ、且つ食べる。勝ちゃん（初対面）の雄辯は凄い。俺はかなはない。実に叔母さんの立派な躰には感心する。自分も幼い頃は、母さん叔母さんの躰に育つたのだ。然し、今は徒に：噫！口惜しい：俺は、俺はやるのだ。飽くまでやるのだ。愈々明後日より二月一日、俺は出発するのだ。凡ゆる人が俺の成人を待つてゐて呉れるのだ。この穢い俺の成長を待つてゐて呉れる。俺は死ぬまでやるのだ。さもない時は俺は男ではない。然し、今日一日遊んだ。心ゆく迄遊んだ、感謝々々。

九時一寸過ぎ、久方ぶりの訪問を了り帰る。帰宅十時半

二月二日（水）晴 寒風刺々

再出發第二日。大体順調、歸宅三時。午後十時半迄ぶつつづけ（無論食事省）この調子くく、又明日。

敵米鬼、マーシャル迄進攻し来る。不敵なる哉。我が精銳皇兵あり。断じて顧みるを許さじ。我こそ断じて征かむ。敵米鬼よ 今に見て居れ！ 大和魂の總突撃を 受けてみよ。愈、空襲必至だ、来るなら来れ。待つあるを頼む、神州盤石の構へ。侵すものなら侵して見よ。一億の一丸の体当りは今着々と準備成つてゐるのだ。今少しだ。きつとくく 覚えて居れ。其儘で歸すものか。嵐の前の静けさ。これを知つてゐるだらうな。今はく 汝らの眼前に大和男子の熱血の洗礼を物見せて呉れむ。

二月三日（木）曇 時々雪

議会に於て女子徴用の問題が騒がれてゐる。東條首相の「我國の家族制度を保守する為に女子徴用は行はず」の言明に対して、議員側は「皇国の勤勞觀の是正は目下の急務である。勤勞こそは皇国民として最大の名譽である。この最大の名譽の勤勞は決して賤しむべきではない。むしろ、現代の女子は喜んでこの名譽の元に馳せ参ずるであらう。政府は速かに女子徴用を断行すべきである」と譲らず。厚生大臣も「時機が早い」と述べて、東條言明を一歩進めた辯明をした。果して如何なる事にならうか？ 愈、明後五日より、暗渠排水工事、勤勞奉仕。於小机、中山方面。予定に狂ひが来るが致し方ない。欣然参加すべし。今夜は「火の用心夜警」寒風吹きまくる。然しく、ここが男の…だ。本日調子好し。この調子くく。

二月五日（土）曇

米鬼マーシャル諸島、クエゼリン・ルオツト両島に上陸す。見よ、神州準領土は今米鬼の足下に踏まれてしまった。この事實は誰がし出かしたのか！ 一億だ。一億が頑張らないからだ。神州大和島根二千六百年、不可侵の国の準本土は今こそ侵されたのだ。一億！ 祖先の御靈に恥じよ。敵米鬼の穢れた足下に踏み碎かれるか、世界新秩序建設者としての榮譽を擔ふか、何れなりや。だが、前者に今は一步一步近づきつつあるのだ。今こそ總力をげて奮起するのだ。頑張るのだ。噫！ 断じて奮起す可し。必ず奮起すべし。本日より 愈々 暗渠排水工事に出動す。マーシャルに敵軍上陸すの報を聴きて一層働き甲斐を覚ゆ。少年団の合併問題、紆餘曲折、難産、六敷（編註…中原中也の詩「そのうすいくちびると」の中で難しとして表記されている。以降四ヶ所あり）事也、この原因たるや。總て中町内会不融和の原因なのだから、

全く六敷^{むっか}しい事だ。ああ、俺は困ったく。

二月六日（日） 快晴

母さんと淵野辺の井上直造氏宅を訪問す。いろ／＼の昔話に花が咲き、夕飯を馳走になる。帰宅七時半。

二月七日（月） 晴

マーシャルの激闘、愈、苛烈。敵米鬼の驕勝に乗ずる進攻は遂に我本土に達した。我神州の聖地断じて守るべし。暗渠排水勤奉、油がのつて順調に進む。然し歸途、電車の買出し部隊の猛烈な攻撃は一体何とかならぬものか。日本人の本当の怒を見せるときがきた。敵米濠兵の若干は、もう日本兵に見参して悲鳴を擧げてゐる。しかしこれから日本民族全体の本当の怒を見せてやる。日本人と雖も本当に自分の怒を見たことはさう幾度もない。日清、日露の役は、これからといふ所からで戦争は勝った。弘安四年は皇紀一九四一年、六百六十余年の昔であり眞の日本の怒がよく記録がされてはゐるが、時代が距り過ぎてゐる憾がある。民族は悠久であり、特に世界に冠絶する純潔さを持つ日本民族は、あの怒を必ず寸分違はず再現するに違ひなく、現に比較的近い三国干渉後の十年間にその片鱗を見せた。その時の日本は決して騒ぎはしなかった。沈みもしなかったし、浮かれもしなかった。黙々としてただ為すあるを期した。支那事変後はいふまでもなく大東亜戦争になつてからも日本はこれまでは相当に騒いだ。やり方がいいの悪いのともいったし何をどうしなければなるまいともいつて廻った。本当に怒つてゐた姿とはいへない。本当に怒る前に、さういふ段階もあるのだから。それがいけなかったとはいふまい。しかし、これからもそんな調子なら、日本はつひに、怒るべきに怒ることを忘失した民族になる。何をどうしなければならぬかは、もう考へるときでなく、論ずる必要もない。怒心頭に発して怒れることをする。自覚せずに、一路実践して、しかも誤ることなきときに至つてゐる。敵の怒も激しい。獣類の怒なるが故に、貪婪以外の何物ではないが、世界制覇といふ大きい餌に飛びつくときのあのすさまじさがある。日本の怒は獣類の怒りのやうに咆えることを必要としない。知性ある人間の世界無比の優秀民族の眞の怒れる姿をこれから全世界の人々に見せるのだ！

十九・二一・七日付 毎日新聞より

二月十四日（月） 晴

彼の鈴木某より返信来る。彼恐れ入った人物なり。俺を評して「絶対的皇

民観を把握せられざる外来宗教徒」と長い文句をつけた。そこで、皇民吾れの何たるを識らず、自証出来得ずと来やがる。何とでも云へ。癪にさはったから、長々と下らない事を綴って又出してやった。広い大きい温かい大秩威の中に育れて、その中では得る事の出来ない、或物を求めてゐるのだと結論した。

二月十六日（水）晴

女子挺身隊の記事は、近頃の新聞紙上を賑はしてゐる。愈、国民總動員の秋。女なりとも戦士なのだ。敵米英の婦人は生産に奮闘してゐるのだ。吾大和民族の光榮ある躍進の秋。女なりとも断然起たねばならぬ。戦局は生易しいものではない事を銘記す可し。女子挺身隊の人員の如何など、この絶対な愛国、否殉国の真心にあるのみだ。只国の為、捧げ奉る秋は今なのだ。驕った米鬼に徹底的な鉄拳を喰らはせるのは唯々彼女たちの双肩にあるのだ。聞けば中・上流子女の出足が鈍いとの事。自ら知識階級を以って任ずる母達の深い理解と子女の燃える愛国心の一丸となつての進軍を待つ。

映画評 “あの旗を撃て” 東宝作品 阿部 豊 演出

日比俳優合同、米兵捕虜多数出場。比島派遣陸軍報道部隊後援指導。陸軍省後援。文部省推薦。情報局撰定。国民映画参加作品。肩書だけでも一息つく映画だ。が実際見て、この映画の素材の掴み所の悪さ、断片的な運びは、自分は一息も二息もついた。演出者の血のにじむ努力は各所に見られ、米兵捕虜をかくまで使ひ上げた点等敬服の他ない。

この映画の題材は皇軍占領下のマニラと疾風、枯葉を卷くバターン、コレヒドール攻畧戦の実態を描き、その中に情に厚く弱者を援け人道の仇を完膚なき迄たゞきなほす吾忠勇義烈の將兵を描き、そして、米鬼の残虐に倒れる比島兵の目をおほふ不憫さを描き上げてゐる。日本俳優陣は、比島俳優陣と、米捕虜の太々しい迄の演技に圧倒された形であったが、その中にあって、速水部隊参謀に扮した藤田進の毅然たる態度はピカ一だ。その他悪意ない人々のさ程でもない演技は全く知られてゐなかつた比島俳優との共演なら無理であつたらう。それにしてもあの比島将校の弟に扮した子役はうまい、日本にあれだけのことをやってのける子役は居るか。何れにせよ、大東亜戦争の眞の道義的意義と、あれだけ纏め上げ、あれだけ観る人に植えつけた功績は賞されてよい。ウファの「世界に告ぐ」に一步譲るにしても、残虐極りなき米鬼には少からず義憤を感じた。マニラの場面は終始、アメリカ映画を観てゐるやうな感じがあつたが、その中に於て、イ

ンテリ兵長に扮した大川平八郎は印象に残る。今後、彼の様な俳優は益々以て頑張れ。無くてはならぬ俳優になるだらう。終りに 東京はこの様な映画を造り乍ら何故「元禄忠臣蔵韋駄天街道」のやうな映画を造るのか、判断に苦しむものであることを附記してをく。

(眉葦)

二月二十一日(月) 晴 寒風刺々

トラック来襲、米鬼遂に撃退さる。忠勇無比、皇軍將士の敢闘は善く暴戻(ぼうれい)編註…広辞苑六版によると、あらあらしく道理にもとること) 米鬼をた々きつけたのだ。だが吾々は心しなければならぬ。米鬼は必ず来るに違ひない。思い上った彼はきつと来るぞ!

今日大本營幕僚の更迭発表さる。軍令部長永野元帥、参謀總長杉山元帥は夫々辞められて元帥府に列せられ、常時軍總帥を御補佐申上げる事となり、後任は東條首相兼陸相、又島田海相親補せらる。愈、政治と軍の一体化なり。一億擧げて国難打開に邁進する時、この更迭は注目値するものあり。

この日、緬印(緬註…広辞苑六版によると緬は緬甸(めんでん)のビルマ／ヤンマーの略、印は印度の略) 国境戦況活発に動く。

二月二十六日(土) 快晴

噫、南海の小島を真紅に染めて水漬く屍六千五百! 遂に玉砕せり、マーシャル守備隊ルオット・クエゼリン両島の勇士。今日も明日も戦闘は苛烈の度を増す耳。ルオット、山田道行少将以下 クエゼリン、秋山門造少将以下殉国の英霊、六千五百冥すべし。悲憤! 言ふも涙、聴くも涙: “この悲しみ、この憤りの中から、次の日本が生れて来るのだ” 維新の志士の言葉は 取りも直さず、今吾らの心中に漲ってきた。神州を守れ! 断じて守れ! この日勇士玉砕と時を同じくして「非常動員要綱」発表さる。正に待望! これこそ待つてゐたのだ。国滅びて何の学問ぞ! 何を措いても戦に勝つのだ。勇士を玉砕から救ふのだ! 昨日の海兵教官の講話を思ひ出す。「皇国の興廢は唯に君ら青年学徒の雙肩に繫つてゐる」俺は断じて突破する。断じて行ふ。この大國難の眞只中にこの身を投ぜずして何の男と生れきたのだ。幸なる哉、天地の恩愛。死ぬ迄頑張りあるのみ。

二月二十六日以降どうしても書けなかった。どうゆう訳か知らぬが、どうしても書けなかった。書けないのだ。書きたくなかったのではないのだ。どうゆう訳か知らぬが、書けなかった。

三月十四日

寸松亭、遂に原町田に疎開せり。この日朝来の降雨に移転略々。断念せしところ、午后一時牛車の到着により俄然本調子になり、三時半積み込み了り。途中軍用自動車に接触したり、長坂を苦攀（編註…苦勞して攀じ登る）したりして悪戦苦闘の末、遂に同日真夜中十一時半新居に到達せり。

三月二十四日（金）曇天 北風刺々

我軍印度に侵入せりし旨、大本營発表あり。堂々印度国内を征く無敵皇軍の威武。加ふるに感激の印度国民軍の志気盛なる哉。

四月三日 神武天皇祭（月）日本晴 暖氣溢る

午前九時より支那鍋の蓋造り作業。思ったより上出来。十時半頃予告中の梅叔母ちゃん子供隊来亭。悦ちゃんを部隊長に、洋、信、勝、連中。晝食の後、大谷の広田さん宅へ。ハイキング兼野菜を戴きに行く。久しぶりにのんびりと大いに極善の気を養ふ。連中もすっかり田園の気分に分心共に溶け込んでしまったらしい。それより街の方に出てみる。魚を始め種々の珍品？が手に入り、悦ちゃん始め大喜びは傍で見て居ても嬉しい。斯して夕食は待望！ カキフライ（但 使用油は梅叔母さんより賜ったもの也）に又しても歡声を挙げ、連中大喜びの中に午后八時十三分發横浜線で帰途に就く。種々のお土産も共に。

四月四日（火）晴

始業式、新人生二百数十名を迎へて舉行さる。於大講堂 今学期より大いに校内全般に亘り刷新が断行された。正に準兵營化だ。まづ午前七時四十分、校庭集合。直に国民儀礼。勅語・勅諭奉唱の後、一般体操が実施され、八時十分より大講堂に於て礼拝。八時二十五分より授業に入る。教室移動の際は、正・副取締生徒の指揮に従う隊伍を組み、校内・外を問はず、生徒心得の徹底を計り勅諭の御精神に生き、院長訓示のヤコブ書第四章十七節「人善を行ふことを知りて之を行はぬ事は罪なり」を身に体し、總て行動にこの聖句を表現し、又絶対服従の信念に生きる。之等の事を本学年中の標題として、学校即兵營、学徒即精兵の実践化を計る旨の告示あり。今迄の自由なる学園、平和なる学園、緑の学園にも戦雲漲り。米英撃滅の雄叫びは勇躍として湧き上るのだ。南太平洋の戦局を始め、我内南洋方面ビルマ、インド国境方面等戦局の変轉は目ま苦しいとは云へ、大日本必勝の大信念は微動だもしないのだ。我に三千年傳統の大和魂あり何ぞたゆまん、何ぞ怖れん、来れ米鬼。汝

等を我らに注ぎ込んだものは、汝らが軟弱思想を以て我らを毒せんとして夢はやぶれた。我らは目覚めは遅かったとは云へ目覚めた時の力こそ知れ。外国の文化の華を追ひし橄欖の少年達は今こそ八紘一宇の皇祖の教をその生命と頼んで雄々しく起ち上った。そして汝らが注ぎ込みしものも立派にその生命の一助として。見よ、オリーブ（編註…関東学院の校章はオリーブの三葉で広辞苑六版によると枝はヨーロッパでは平和と充実の象徴とされる）の健児らの血の雄叫びを。

坂田院長は言った、関東学院創立以来の校訓、「人となれ・奉仕せよ」は、今こそその眞面目を発揮するのだ。一切を擧げて戦力増強に寄與するのだ。斯くてこそ校訓は生きるのだと。戦に敗れて何が学問だ、只管勝利あるのみ、断じて勝つのだ。遅きとは云へ立起つたのだ、立派に立起つたのだ。橄欖の夢ならぬ、櫻花はふくらんだ。咲き誇る日も近し。見よ朝日に輝く櫻花。大和男子の熱血の血潮が、息吹がそれ、照り映えてゐるぞ。

四月五日（水）晴天 絶好のお天気

本学期第一日目何事もなし。教科書不到着で一向興味無し。騒ぐのは旧二組の連中（註、本年度より従来の三組制度 受験組）廃止で全くの平均学力に組が編成改組せられ、旧三ノ三もすっかり分裂し、田中、飯村、熊倉等同士と別る、面白くない日。おまけに副級長に任命され、又しても嫌な事が増えた。一体誰が三組制度を廃止したのだ。八木か、伊沢か、教頭か、何れその辺の分子に過ぎぬであらう。あゝ思へば三組は懐しかった。全員一致の気風が漸く漲って来たばかりなのに、そして軍人組三組の火の出るやうな猛勉が期待されたのに。如何にも口惜しい。心残りだ。折角三年迄續いたのに、もう一年残して呉れたらよささうなものを。当分の間勉強も面白くなささうだ。

五月一日（月）快晴

今日より又書き初めた。どうしても書けなかった。書きたい気は充分あったのだが。幸、深緑の五月より意想を更新して、思い切って書き初める。今年は例年よりずーと気候が遅れてゐるやうだ。電車の窓から眺めても丁度今頃から若葉が漸く色づいて来たやうだ。筈もまだ出ないし、人の話を聞いてみると二十日位遅れてゐるやうだ。然し、天下満春！春風駘蕩、春日遅々として謳歌してゐる。何と言っても春は楽しい。凡ゆる万衆が息吹くのだ春！春！ 実にいい季節だ。（もつとも、春眠不覺曉は玉に傷だ）。春ともなれば第一人気が暖かい。統制生活の折柄、只これだけではどうにもならぬものだ。

が、大自然の暖い抱擁に合つては、皆、又浩然の氣、まではゆかぬか。たしかに暖かくなった。寒風刺々たる頃よりの、人氣より見れば全く氣持がいい： 有難い事だ。学校も春氣横溢、橄欖（編註…関東学院のこと、広辞苑六版によるとオリブと誤訳するがカンラン科の全くの別種）の丘にも春来て葉ざくらの下、春日を浴びて、各個教練にいそしむ。東部第〇〇部隊の兵隊さん達も幾分のんびりしてゐるやうだ。然し乍ら第二時限、空襲警報ならぬ。三角関数試験警報発令（もつとも予告はあったが）。幸にも吾輩安泰。一、二、三、四、五 題中、一、四、五は教科書より、二、三は応用、二番、張り切つてやったら 案外早く証明出来た。残るは三番。これ又勢に委せていい氣になつてやったらすらく 解けた。これで全解万々歳。努力は神は見捨て給はず。感謝。これで三角形と三角関数はお陰で了つた。全く二重の悦び 感謝々々、何しろあと三ヶ月ないのだ。二ヶ月と二十日！ 畜生頑張るぞ！ 死んでもやるのだ。飽くまでやるのだ。男子に不可能はない。凡ての不可能を可能ならしめるこそ眞の男子の意気甲斐があるのだ。幸なる哉くく心の固き者、その人は 為す事を得ん。幸なる哉く。昌兄も齒を、唇を、噛み締めて頑張つてこそ、眞の勝利の後の喜びは大きいのだ。大きいのだと書いてくれた。人生六十ならばまだ苦しむのは早い。だが人生二十五、今こそ苦闘するのだ。苦闘を克服した人間こそ眞の人間なのだ。苦しみ無き人生は又不幸であらねばらぬ。苦しみ、悩み、！ それだけの喜びは更に更に大きいのだ。

親友戸塚兄への手紙

久しぶりで氣分がせい／＼した。よくもあれだけのものが書けたね。僕は今更乍ら君の熱情に驚ろいた。何だか知らぬがずん／＼引き惹かれてゆくやうな氣がしてハッと氣がついた時にはもう三分の一位のところにまできてしまつてゐた。君の描寫力はもう押しも押されぬ。僕など足許にも及ばないだらう。しかしいい題材を見つけたね。眞実のところ言ふけれど、今迄の君の作品は題材が全然なつていなかったから（失礼々々）。よくもこんなやつを見つけたと思つて敬服の至りだよ。君が強いと言ふなら思い切つて書くぞ、まあゆるして呉れ給へ。決して君にあてつけに書くのではないから。あそこの多摩川畔の情景だが、描寫力はよいが二人の会話がどうも腑に落ちない。恵美子といふ女性をもつと少くともこれ以前に出てきた恵美子は大きく書かれていなかったかな。いきなりあんな女性に扱れては一寸皮肉だ。あの時の恵美子の氣持としては、あの時見える一草一木あらゆるものが激しい息吹の最中にあるやうに思へたに違ひな

い。あれでは余りに可愛いさうだ。あの恵美子は少くとも女学校一・二年頃の子供心の抜け切れない少女としか思はれない。又君の人生再出發論によればそれでもいいかもしれないが……君はいつも肝腎なクライマックスに達すると負けてしまふが、今度ばかりはその様子がちつとも見えな。異状な君の努力がよく判る。然し、（又厚顔の至り多謝）あの壮行会の晩より出發に至るところ辺はあまり單調すぎたやうだ。やはり少しぐらい波があつてもよささうだ。然し、波なんてつけやうと思へばいくらでもつけられるからいいが……余り長くなるからいい加減にするが、暫く休んだらどうだ。海兵受験も控えて相当無理だよ。僕は八月まで止めた。もつとも書く気がないがね。何と言つても第一は勉強だよ、あまり老婆心めいた事ばかり並べて気に障りはしなかったか心配だ。いい気分にかけていい気になって、実に仕様のない人間だと思つて呉れ給へ。

五月二日（火）晴天 春日遅

噫！俺はつくぐ世の中が嫌になつた。俺は悲しい。実に情ない。近時農村インフレと云はんか。農村に於ける醜聞の数々実に情ない次第だ。遠い祖先以来農耕を大本と為す。我が大八州（編註…広辞苑六版によると日本国の古称）の傳統の農民道が今日程廢れた時代はあるまい。誰が何が、斯く純朴たるべき農民をしてせしめたか。帰するところ忍耐が足りないのだ、唇を噛みしめて頑張れないのだ。一億心を一にして頑張ることが出来ないのだ。一部都会人の斯くも憐れむべき無自覚は、否、都会人一部は日本人に非ず、ヤンキー、アングロ也。そして憐れむべき農民は、重慶の分子の類也。もう俺は書くに忍びず、畜生！口には何とも云へる。何が臣道実践だ、何が職域奉公だ、糞喰へ！馬鹿野郎！俺はつくぐ世の中が嫌になつた。先輩諸兄に何の顔あつて合せるべき、済みません！戦争は先輩諸兄にだけお委せて置けばよいのか。噫！実にく情ない。口惜しい。

五月五日（金）雨

古賀連合艦隊司令長官殉職の大本營発表あり。何たることぞく。先に山本元帥の散華あり。今又古賀元帥の殉職の報至る。一億の悲悼、愛慕！戦局は苛烈なり。帝国海軍の威容、又太平洋上に盤石の強みを加える時、山本・古賀と二聖將を續いて失ひしは誰が故ぞ。米鬼なり、英鬼なり。山本を古賀を殺せしは彼らなり。何ぞ撃ちてしまむ。さもなく限り、古賀元帥の御霊は永久に冥すべきぞ。元帥の赫々なるブーゲンビル沖の大凱歌に応へる途は只一つ、總力を擧げて米英撃滅あるのみ。聯合艦隊司令長官後任には、横

鎮長官豊田副武大將親補、又豊田大將の後任には軍事参議官古田善吾大將着任せられ、既に軍機親裁中なりと。今ぞ我ら確固不動なる帝国海軍に盤石の信頼を置いて各職域に一段の奮励あるのみなり。

五日夜、古賀元帥追悼 海軍軍楽隊演奏を聞きつつ。

偉大なり聖將、再び散りぬ、大君の固き御信頼を帯びて
一億の全信望を帯びて、聖將は強く闘った。

闘ひし聖將は遂に／＼散りぬ、

その人聯合艦隊司令長官元帥海軍大將古賀峯一なり。

偉なりしその人なり。陽春五月その報至る。

余りに急なり。余りに心撃つなり。

そして／＼悲憤の涙。追慕の涙は奈何せん。

然り／＼この涙、この思ひをこの一億の心中の或る物を、

今こそ結集するのだ。何處に。米鬼滅撃なり。英魔屈服なり。

元帥の荒御霊かくならで何ぞ瞑すべし。

元帥在天の御霊は照覧給ひつつあり、

偉大なる御霊は、在天の御霊は見守り給ふのだ。

何で応へ奉るべき。大君の辺にこそ元帥は従容として

神国守護の大任に殉じ給ふたのだ。

元帥の心、それは一億の心だ。一億の心意気なのだ。

怖れよ米鬼！ 悔いよ英魔！ 元帥殺せしとは云へ、

大帝国海軍不動の威容在り、大和男子、神州民一億の

古賀あり。

冥すべし元帥在天の英霊！ 怖れ悔いろよ米鬼！ 英魔！

我は此の報に接し、愈々奮励努力、以て所期の目的を達成
せずんば止まじの心意気壯なるを自覚する也。国負ひて華と
散りにしますらをに心は永久に変わらじ。

十九・五・五

五月十二日（金） 雨後曇天

再度將星地に墜つの日、古賀元帥の海軍葬施行の日。

この日朝より五月雨しと／＼と降り、恰もこの日を悼む如し。丁度葬儀の時
刻ともなれば雨は上り、まことこの日を天地共に元帥の御霊の平安を祈り奉
る。一億今ぞ故元帥の偉訓を偲びて只管敵撃滅の一大目的に挺身を誓ふのみ。

この他に元帥在天の御霊を慰め奉る途はないのである。この日、元帥追悼礼拝八木さん司会に依って行はる。莊重な海ゆかばの合唱は高く低く、橄欖の丘辺にこだまして、降りしきる春雨に六角塔も煙り、米英撃滅の憤怒と燃える三春健児（編註…血氣盛んなわかももの）の胸には必ずや感ずるものがあつたに違ひない。我も又、戦機愈々熟し、戦闘を後二ヶ月に控えて、命倍の奮闘を期すのみである。

五月十七日（水）曇 雨屢々

愈々海兵体験迫る、明後十九日。

神様 御心ならば、か弱きこの吾を助け給へ、体だけは如何とも為し難いのだ。只俺は天に任すのみ。そして体験終了後の奮闘を誓ふのみである。人生行路の岐路に起つ吾、右 否 左！明後日その第一歩が極るのだ。そしてその第一歩を過ぎれば、後、俺の努力の如何に依って極るのだ。俺は体験の自信は十分ある。六尺餘の体軀 何で空しうせん。俺の決戦は七月にあるのだ。突進又突進。斯くしてこそ、男子の生甲斐があるのだ。

五月十九日（金）雨氣満溢

海軍兵学校身体検査、都立一中にて舉行さる。幸にも余、合格Aを承る。

この上は努力あるのみ。誓って倒已後（編註…倒れて後やむ〓倒れるまで止めない／死ぬまで努力し続ける）の攻撃精神を發揚せん。

五月二十七日（土）雨

輝く、第三十九回海軍記念日。太平洋の怒濤を圧して進む帝国海軍が四十年前日本海に於て、我に数倍せるバルチック艦隊を堂々と打破ったのだ。正に帝国海軍なれば鉄石の金字塔を打ち建てたのだ。聖將東郷逝きて、將又、山本・古賀両提督散華されて、今こそ帝国海軍の前途益々多難。否、吾に第二の東郷あり、第二の山本あり。第二の古賀あり。第三の第四の…。愈々苛烈を極める太平洋上乙旗、旭日に翻り何れの敵か来らん。鍛えし百練の成果 物見事に發揮こそ見せん。誰か多難と云はん、多幸なり頑張れ、帝国海軍！

吾はこの日に当り、愈々力戦敢奮。以て所期の目的に突進あるのみ。

万才帝国海軍！万才 日本帝国 万才 万才。

五月二十八日（日）晴 暖氣頻湧

朝から畑仕事。西隣の大尉殿方も一所懸命、先ず馬鈴薯の土寄せ、追肥。

それから二十日大根、小蕪の収穫。万才・その後の耕作、南瓜の追肥、道路の拡張耕作、コスモスの定植等々 夕刻に至るまで頑張る。これも田舎に居ればこそ。多謝々々。

五月三十日（火）

午後六時少国民の時間「海の学驚 帆足予備中尉」として、マライ沖海戦の殊勲の索敵（編註…敵をさがし求めること、偵察）機長帆足中尉（編註…マレー沖海戦でイギリス艦隊を発見した偵察機の機長帆足正人中尉）の物語が放送された。その中の一節に予備学生時代中尉がその弟さんに宛られた手紙の中に「人生には凡ゆるところに苦しみがある。その苦しみに負けるやうなのは人間ではない。その苦しみを乗り越えるのだ。この大使命に打ち勝てないやうではだめだ」と諭されてゐる。さうだ 俺は今その苦しみに際会してゐるのだ。苦悩、磐根錯節！

この大先輩は天の与へた大使命であると言つてゐる。我らはこの大使命を踏み越えんが為に生を享けたのだ。この天の大使命を敢然として身に受けて進むところに人間としての生甲斐があるのだ。苦しみに負けるやうでは 眞実に駄目だ。一日一日の苦しみが吾らに与へられた大使命なのだ。

よし！ 俺も頑張る。光榮ある大使命が俺の周囲に満ち溢れてゐる。感謝だ。苦しみ、否、光榮ある使命に生きる日本男子だ！

今日の第五時限、宗教講話「戦争と宗教」と題して八木さんの大説教。大いに感ずる所あり。今日の一日、実に有意義な一日であつた。この有意義な一日。記念する為に徹夜せんことを誓ふ。頑張りあるのみ。

六月十六日（金）曇

遂に来る！ 来るべきものの遂に来る！ 不敵米在支空軍傲慢無礼。我神州北九州を襲ふ。敵は有頂天なのだ。先に我内南洋に侵攻の機を窮ひ、欧州第二戦線を狙ひ、小癩にも北佛ノルマンディの海岸に辿りつき、今又、小笠原に侵攻の手を伸し、同時に北九州の工業地帯壊滅を企て、否、沈滞しきつた反軸陣営の宣傳的效果を狙つて、僅か二十數機内外といふ遊撃的空襲を狙つたに過ぎない。我方の損害、極めて軽微なるものは、来襲機の五割の十機（七機撃墜、三機撃破）を見事破られ、我完璧の防空態勢を逆効果の中に示してしまつたのだ。笑止々々。在支米空軍、米鬼！ 愈々伸び切つた敵の腰骨をたゞき切る時は近いのだ。我に百戦錬磨の勇士あり、闘志溢るる勇士あり、鉄壁の生産陣あり、一致団結の一億あり。一大反撃の秋は今間近いのだ。

故にこそあれ、この位の犠牲否試練は当然なのだ。試練！　これこそ、大東亜建設といふ偉大な使命を帯び今着々と励進しつつある、光榮ある帝國親民の　光榮ある天の一大使命なのだ。偉大なる人生の建設には相応の苦しみがある。日々、否一年中悩み、苦しみが横つてゐるのだ。この苦しみを苦しみとしないで天の我に与へた大使命と思つて乗り切る人こそ眞実の人生の眞の味を榮ある人間として生きる事が出来るのだ。況して一億が与へられた一大使命を擔^{にな}（担の異体字）つたからには、相応の苦しみがあるのだ。この天の試練の敢然として乗り切る者が、後世燦然として、大東亜新秩序建設者として、榮譽を擔ひ、天の祝福を受ける事ができるのだ。光榮なる哉、日本人一億、何のこれしき　頑張れく、一日一日が使命を果す一日なのだ。一日一日が試練を超える一日なのだ。一日一日の大東亜は建設されてゆくのだ。噫　敵、今九州を襲ふ待つべきものが来たのみ今に見よ、一億鉄火の進軍の雄叫びを。

六月二十四日（土）　晴天　戰雲天に満つ

中部太平洋戰線、即ちサイパン島周辺を中心する戦局は愈々逼迫を告げる。敵が誇る物量を持つんでの總反攻は今や最高潮に達したのだ。我がサイパン守備隊の奮戦は、今や連日連夜續いてゐるのだ。血の滲む攻撃は繰り返されてゐるのだ。噫、だが、然るにく安閑として、徒に六尺の体軀を空しうして：　畜生！　昌兄、莊兄、桂兄、等大先輩よ、俺は行きたいく、そして、あの憎らしいく米鬼をぶんなぐつてやりたい。奴等の横面、いや、心臓をぶち抜いてやりたり。怨敵！　見よ、サイパンの激闘！　聞け、欧州第二戦線の死闘！　奴らはく、何ていふ奴だ太々しい。噫！　俺は行きたい一刻も早く。だが俺は待つ、冷静に待つ。信頼すべき軍当局の命令がある迄榮あるお召の日迄、俺は冷静に俺の自分を盡す。目的完遂だ、勤勞奉仕が何だ、苦闘否、大使命だ。俺は沈着に待つ。冷静に待つ。そして頑張る遙か勇士の武運長久を祈りつつ。

七月十九日（水）　曇天

噫！　沈痛の氣漲り、一億の憤怒天地を掩^{おほ}ふ。遂に至る、サイパン玉砕の報！　勇士同胞の最後の突撃の姿何たる神々しさぞ。御身の闘魂　願くは永久に我ら一億の心中を撃たれん事を。明日の出陣を誓ふ、我らの胸中を往来せられん事を。俺はもう何も書けなくなった。涙々！　畜生！　口惜しい！　愈々明日は俺の決戦だ。サイパン勇士の闘魂を今こそ身に受けて最終迄頑張るのだ。

糞！ 頑張らで置くもので！

全力を盡くした。準備は完つた

盡 人事 俟 天命 (編註：胡寅、読史管見。人事を盡くして天命を俟つ)

幸なる哉、サイパン勇士の英魂は俺の全身を激しく打つものあり

「頑張れ！ 我に續け！」と

今迄俺は書きたかった、だが俺には他の大切な業務があつた。準備あつてこそ完勝があるのだ！ だからこそ頑張つたのだ。明朝俺は脈々たる自信を抱いて試験場に臨まんとす。天地の神よ照覧あれ、神州男子順天一麦 (編註：細野氏の自称。順天は天の道に従う、一麦は一粒の麦／人を幸福にするために自らを犠牲にする人：ヨハネ伝第十二章より) 渾身の奮闘を入試何するものぞ。

従容として天命を待つ者順天一麦也。

人事の最善を盡くせし者順天一麦也。

ここに更めて明日よりの奮闘を誓ふものなり。

七月二十日 (木) 晴天

東條内閣遂に桂冠！ 陸海の協力不一致か。否！ 戦力増強人心の一新を画してなり。世相愈々逼迫を告ぐる今日、昭和二十年度海軍兵学校生徒採用試験全国に開始さる。集ふ青雲の海国男子無慮 (編註：広辞苑六版ではおよそ、ざっと、大方、あらまし) 數万！ 此處東京都立一中は都内否、関八州より集ひ来れる數千の男兒續々と詰めかけ今や遅しと開始を待つ。

本日国漢に始まり、最終英語迄四日間の頑張りだ。試験委員加藤少佐の号令一下、上半身裸体の健児ら死物狂ひの健闘だ。我が同志、熊倉、丹羽、戸塚、進藤の各士の健闘を祈りつつ俺も一所懸命書きなぐった。無我夢中だ。この一戦、待ちに待った実力發揮の秋なのだ。本日国漢、振ひ落し行はず、明日の数学と合せてやるとの事、又、夢の中の境地にて歸宅す。

七月二十一日 (金) 晴

俺は何を書いて来たか判らない！ 只夢のやうだ。夢中で何か書いた事は判って居るが俺の一大難関たる数学の日は何を書いたか夢のやうだ。午后四時の数学合格者発表、俺の心臓は早鐘のやうだ、生れて始めてこんなに胸が高鳴るのではない。「あ！ あったく見よ、五〇五五、確実に消えてゐない！ 万才」

七月二十二日（土）雨

遂に待望の慈雨しきりに降る。畑の青物も漸く生気を取戻した。この日 入試三日間物理・化学の日だ。書くだけの事は書いたが、果して？ 発表待たずに、（明朝見ることにして）家にて英語に備ふ。
小磯・米内両大将に大命降下！ 本日組閣完了。

七月二十三日（日）晴

入試最終日。朝、昨日の物理・化学の発表を見る。俺安泰。戸塚遂に駄目！昨日の進藤と合せて二人目の犠牲残る三人、この日も物見事に突破せんものと張り切る。俺は英語は何もやらないので一番心配なのだ！ 然し、噫、幸なる哉、大下さんのお陰なるぞ。單語とコンジュゲイション一つ違っただけでどうやら助ったやうだ、発表午後二時！

「見よ！ 残った、遂に残った。燦たる五〇五五番よ！」

過ぎし數ヶ月の奮闘、今ぞ結実す！

神様有難うございます。感謝します

總て夢のやうなり。果してこの俺は過ぎし數ヶ月何を為して来たか！

判らない、夢だく總て夢だ！

関東の同志熊倉、丹羽両闘士遂に残らず。

噫！ 我一人学術試験最終繼續者たらんとは！

思はざりし、計らざりし。噫！ 總て夢也。

七月二十四日（月）晴

午后口頭試験續行さる。何事もなし。噫！ 過ぎし夢の數々！ 苦しかった事もあった。泣きたい事もあった。だが今になつて顧みればみんな夢だ。今日あることの總ての夢なのだ。神様の御力の然ら使むるところなのだ！ 噫！ 過ぎし… 只夢我の四日間、俺は答案に何を果して書いただらう… 噫！

七月二十六日（火）雨

✕線体格検査、海軍々医学校にて施行さる。兵、機、経、残りも強者、幾百人。鍛えし隆々たる体躯の持ち主ばかりだ。八時から開始で、九時には早くも完了。銀ブラの後歸宅す。愈々、九月の発表を待つのみ！
明日から芝浦タービンだ。工場通年動員に俺が汗闘するのだ。そして、自分で造った快速艦に乗つて太平洋を乗り廻すのだ。快なる哉く。

七月二十七日（水）曇

見よ！ 米鬼の侵寇、遂に大宮テニヤンに至る。

小癩なる米鬼よ去れ、一刻も早く去れ！ 神州は不可侵なるぞ！

汝ら穢れし者の一步たりとも踏む事の出来ぬ。神聖なる神州は神助を祈り
神現に忠誠を誓い奉りし、一億が嚴として守り抜いて居るのだ！

去れ、今早く去れ！ 先にサイパンを侵し、今又テニヤンを侵すとは！

噫！ 不逞の徒輩よ！ 今に思ひ知れ！ 今に覚悟せよ！ 断じて歸さぬぞ！
歸るなら今のうちだ！ この俺がこの腕で！

きつとく物見せて呉れるぞ！ いいか！ 馬鹿野郎！ 覚えてをれ！

断じて歸さぬぞ、貴様を太平洋の藻屑たらしめぬうちは俺の怒は納らないの
だ！ いいか！

（二十七日夕 大本營発表を見て）憤怒やり方なし

八月六日（日）晴天

工場勤奉も既に二旬を経た。大体工場の気風も飲みこめたし愈々、油が乗る
時機だ。学徒動員の眞價も今や最高潮に達せんとして居る。翻って太平洋の
戦局を見れば驕鬼いよくサイパンを侵し、大宮、テニヤンを侵さんとして
ゐる。噫！ 眞に国難至るの感深し、海兵合格通知は九月上旬に全国一斉に
発送されるとの事、希くは我もこの決戦に馳せ参ずることを許し給へ！ 豪
慢無礼極りなき怨敵を断じて倒さで止むべきぞ、俺は必ず征くぞ！

我が四年三組の意気軒昂に昇る。古木（陸士）俺（海兵）石井（予科練）
森村（予科練）等々。僕は空へ！ 君は海へ！ の氣、大いに漲る。

一 花を蕾の若ざくら 五尺の命ひっさげて

国の大事に殉ずるは 吾等学徒の面目ぞ！

噫！ 紅の血は燃ゆる！

二 後に續ける兄の声 今こそ筆を投げうちて

勝利揺がぬ生産に 勇み立ちたるつはものぞ

嗚呼！ 紅の血は燃ゆる！

三 君は鋏取れ 我は鎚 戦ふ道に二つなし

清い使命を遂ぐるこそ 吾ら学徒の本分ぞ

噫！ 紅の血は燃ゆる

四 何を荒ぶか小夜嵐 神州男子ここに在り

決意一たび火となり 護る国土は鉄壁ぞ！

嗚呼！　くれないの血は燃ゆる！

（編註…原文では判読出来ないが意気軒昂とした）

八月七日（月）　雨　大雨頻

疎開学童に與ふ、君らの父は、兄は、戦つて居る、君らの為に戦つてゐる、亜細亜を起す為に戦つて居る、これは大きな／＼天の試練なのだ！

君らの父さん、兄さんは、この大なる試練に打克つてゐるのだ。大きな、そして楽しい理想に輝いてゐるのだ！　だから君らも天の試練に喜んで飛込んで行こう！　そして打克たう、昔から強かつた御先祖達は立派にこの試練に打克つたのだ。その血を享ける君らだ。きつと／＼打克たう。そして父さん、兄さん達が抱く理想より更にもつと／＼大きくて楽しい理想を胸一杯に画かう。考えただけでも胸が躍るだらう、淋しいことも悲しいことも沢山あるに違いない。だがそれらが皆、神様が君らに与へて下さつた試練なのだ。この試練に打克つた者が眞の日本の子供なのだ。今に君らは人間と云ふ者は苦しみを頑張り通さねば大成しないと云ふ事を悟る時があるだらう。苦しみを味はない人は一人前とは云へないさうだ！　君らは幸福なのだ！　そんな若くして、もう神様が苦しみを与へて下さつた。試練をお与へ下さつた。何と幸福なことなのだらう。僕は君らが自分達の幸福な事に感謝して、神様のこの試練に打克つて君らが抱く大きな／＼理想を打建てて呉れる事を祈つてゐる。幸なる哉、疎開学童！　僕は君らの健康を祈つて止まない。

八月九日（水）　曇時々晴

かつて日本に來遊したアメリカ婦人記者は「日本人は米人が笑ふ時に泣き、泣く時に笑ふ不思議な国民である」と云つた。日本精神とアメリカ精神はその地理的位置の如く全く対蹠（たいしきょ）（編註…広辞苑六版ではタイセキの慣用読み、正反対の意）的である。米国及米国人が言語道断の怪物であることは、今更喋々する迄も

ない。先頃新聞に外電として米国の雑誌ライフの表記に、一米人少女が我勇士の頭蓋骨を汚辱して居る寫眞が掲載されたと記事されて居たが、全く靈妙不可思議な事である。果して日本の勇士の中で　米兵の頭蓋骨など故国に持歸る者があらんか。又、日本少女の中に米兵の頭蓋骨を持つて喜ぶ馬鹿者が居やうか？　日本人は斯の如き事を為す者で全く無い！　例へ米人によつて我勇士の骨が汚辱されたとしても、我勇士の靈は九段に立歸つて我らの汗鬨を見詰めて居られるのだ。米人は自己の道義的水準の低い事を世界に暴露したのだ。何たる馬鹿者ぞ、その無智振りぞ！　もう彼等は鬼畜に等しいの

だ。万物の霊長なる人間として又日本人の名誉としても 我らに斯の如き事は断じて出来ない。彼らは野獣の水準よりまだ一段下の水準に在るのだ。事此に考へ及べばこの戦争に若し日本が負けたら！ 実に怖るべき事態が各所に惹起するだらう！ 断じて勝たねばならない。そして彼らを憐れむべき彼らを、非道義な人間が受くべき当然な刑罰を彼らに加へなければならぬ。勝たなければならぬ。断じて勝たねばならぬ！ 人道の正道を歩む者としてもだ！ 又、世界に眞の平和を齎すものとしてもだ！

野獣が一日長く生きれば、それだけ人道の世界が乱れるからだ！
どう考へて見ても彼らは何をし出すか判らない野獣である。

本日工場、登校日に就き休業。学校休暇中に就き事実上休日。依つて十二日の壮行会の準備、即ち田舎より野菜運びに挺身す。夕刻、前田さんのをばさん六氏来訪さる。在ハマ時の思出話に花が咲く、共に夕食の後午後八時十三分発で歸浜さる。この間天幕の件落着す。何よりの幸である。即ち、来る十五・六の二日續きの休業を利して五湖にキャンピングせんと企てあり。同志石井、内田、然し、最大の悩みは天幕なりしが、本日の会談に於て總て決定落着す。依つて御殿場よりバスにて本栖に至り、宿營せんと思ふ。具体案、明日工場出勤の際決定せむ。

八月十日（木） 晴 酷暑

○ 工場の雰囲気がだん／＼嫌になって来た。不良工員の踏梁、指導者の熱の無いこと等俺はだん／＼工場が嫌になって来た。

○ 今度は英兵の我勇士死体侮辱行為が報ぜられる。

曰く、勇士の屍を暴雨の為、凹ある箇所敷ひてその上をトラック輸使用せると。

曰く、我勇士の死体の胸腹を裂き、その中に爆薬を装填し、死体収容に当る、我勇士を一触爆死せんと企つ。

曰く、密林中敵に囲れ自決せる我斥候の死体を樹木に縛りつけ、射撃未熟なる兵士の標的代りとし、容貌が不明になる迄射撃せしむ。

もう俺は何も言はない。彼らは野獣以下の動物である。人道の仇、正義の仇、同胞の仇。断じて倒さで止まじ。靖国の英霊又何で瞑すべきぞ！

○ 偶然！ 原町田駅で猪股さんの智ちゃん、すゑさんに会ふ。をぢさんマニラ入港寸前で撃沈され、折角西貢（さいこん）（編註・香港の西貢市）で買ひ集めた物資の山を、皆海底の藻屑たらしめてしまったとの事。智ちゃんの成長振りに驚く。久方ぶりに立話しに花が咲く。

○ 俺は人に会ふ度に「随分やせたね」と云はれる。不可思議である。

尤も過ぎし五・六・七月は自分としても相当無理を通したから。

然し、感無量全く夢の如し。

○ キャンプ、十五日夕刻出發と定む。準備万端急し。

○ 我学院を始め、所謂港の見える学校、山手の各女学校は全部軍に校舎を徴集されてしまふとの事。青海の見ゆる高台の若人らも又淋し平和の丘も愈々ハマ防備の要塞と化するのだ。

静かな賛美歌の歌声に代って訓練にいそむ兵士の銃音が響く日も近い。然し、残る一・二年生徒も何處へ行くのか？

○ 工場で働いて来ると家へ歸るとぐったりしてしまふ。然し、これではない。この疲労に打克たねばならない。これでこそ学徒の本分を盡す者と云へる。思ひ立つて三角を頑張る事にした。若し海兵に入った場合、遅れて居っては詰らないから。

八月十四日（月）

夕刻七時四十六分發で御殿場に向ふ、十五、十六、十七、と三日間河口湖にて宿營生活を送る。十八日夕歸宅す。

八月二十一日（月） 晴天 炎熱酷暑

不逞なり、米鬼又も来る、北九州、中国西部の神州護持の意気に燃える民は一斉に噉へた。沈着！ 機敏！ 見よ、敵襲下の活動を。そして見よ、敢然として体当りした我荒鷲のその讃ふるべき敢闘精神を！ 今後益々敵襲は頻々たるであらう。空襲を我らの生活に為すのだ。そして／＼最后迄／＼頑張るのだ。甲種予科練採用予定者発表さる。本四年三組有志も續々と採用せられ、今や有志諸兄は九月入隊を待つのみなのだ。

八月二十二日（火） 酷暑

偶然にも横浜線中で麻生に会ふ。彼すっかり陸士將校生徒振り、板につき話し方も大いに張り切つてゐる。彼らの若い意気と熱こそ日本を背負つて立つ者の大いなる誇り、満たされてゐる。決戦場で再会を約して別る。工場生活もだん／＼馴れるに従つて要領が体得されて来た。大部分の工員が入営応召を控えてゐる関係上、我らに課せられた責務は愈々重大だ。彼らに代つて諸機械を操作して生産を一手に引受けねばならないのだ。然し、工員達の中にどうも感じの悪い人が居る。明日は午后登校、予科兵学校の召募講演聴講との事。

八月二十四日（木）曇天時々雨

小磯内閣初の地方長官会議予行され、有難き御言葉を賜りたる旨報道さる。我ら今こそ御言葉を身に体し、断じて国力を總戦力化して頑張らねばならない。

八月二十七日（日）晴天

朝より下駄作りに熱中、午前中一足、午后二足作製す。

先ず／＼上々の出来。木さへあれば以後下駄には不自由しない。今日は一日よく食べる、全くよく食べる。まあ今日が楽しみに働いたのだから…。西部戦線戦雲頻に動き、反枢軸軍パリ郊外に殺到す。

今や独軍は必至の防戦を續く。又東部戦線はルーマニアの共産分子の革命に依り、ブカレスト市に在る独軍は羅軍の包囲攻撃を受くるも、よくこれを破碎しつつあり。先のヒットラー總統暗殺事件と関聯して、愈々独逸も最終段階に突入する形だ。食うか食はれるか。だが祖国日本も、今日程差迫った情勢は今だ且て無い。一斎を挙げて戦力化し、一人の遊休国民も無し。噫！祖国国民は今こそ必死だ！敵は日本抹殺を呼号してゐる！

何糞！今少しの頑張りだ、今に見よ、歴然たる神州日本。總攻撃の火の手は上るぞ！西にドイツ魂、火と燃ゆるゲルマン民族血の闘魂あり！東に大和魂に祖国鎮護の激しい闘魂あり！米英何ぞ怖れん乎。

八月二十八日（月）晴天 相当暑

昨朝川崎駅に貨物列車、横須賀線追突事件あり。重大時局下、人的資源確保の上から言っても到底見逃せざる事也。当局も事件の原因を究め、今後かかる事故の絶無を期せざるべからず。昨日作製の下駄を颯爽とはいてゆく。楽しき哉！もう八月もあと三日で終り。決戦の八月も漸く暮れて行かんとしてゐる。感慨無量である。

八月三十日（水）晴

若林中隊長の壮烈なる生涯を書いた「後に續くを信ず」を読む。全く感激した。若林大尉こそ花も実もある武士である。ガ島（ガダルカナル島）に於ける最後の奮戦の場面など、全く涙無しでは讀めない。部下に対する温愛、正に人間若林の極致である。自分はこの書を読んで愈々断じて若林中隊長に續く事を誓った

若林中隊長之信念

- 一 私は神国日本の天壤無窮を信ず
- 一 私は大東亜戦争の必勝を信ず
- 一 私は後に續く者を信ず。

九月一日（金）

森村君、甲種飛行予科練習生入隊壮行会、森村宅にて舉行。

参集者、内田、石井、飯村、中野、山田陽、山田辰、それに俺。深更十一時迄騒ぐ。遂に終電車間に合はず、泊り込み。

九月三日（日） 晴天 夜半ノ満月特ニ風情アリ

帰宅六時。長本の悦ちゃん、洋ちゃん、幸ちゃん三人連れ来訪中、特に今宵は満月。煌々たる月光は感無量なり。心盡しの馳走に皆で十五夜の宵を過す。噫！ 来年の十五夜は何處の空で見るやら。又々感慨無量なるものあり。思へば今宵皆して集つて、満月の妙味を満喫したのも感謝すべきにあらずや。二十時二十分發で帰宅。駅まで見送る。歸途、悦ちゃんに色々質問を受く。今一番苦しいらしい。俺も苦しかった。然し、今は夢だ！ 出来得る限りの便宜を彼女に与へてやらう。苦しいのは誰でも同じだ。然しいい月だ、寝るのが惜しい。

九月五日（火）晴天

反枢軸軍機甲部隊猛烈な速力で独佛国境に殺到す。愈々独逸は重大決戦の岐路に立つた。即ちベルギー国境破られ、ルクセンブルグ国境又破る。マジノ線、その姿なし。ジークフリード線に於て独軍、よく反枢軸軍の進撃を阻止出来得るや否や！ 独軍の勇奮敢闘を祈り、ドイツ不滅を祈る。頑張れドイツ戦へドイツ！ 海軍諸校の中経理学校合格者は、今日發表通達された。海兵、海機、陸士は数日中に發表の予定なりと。そして合格者は、今月末と来春の二回に分れて入校の予定なりとの事。俺はもう万事を天命に託した。従容として待つのみ也。今更慌てたところで何もならない。静かにく天命を待つだけである。だが一日も早く米英撃滅の決戦場に馳せ参じたい。そしてく怨敵米鬼を打って撃って止まぬぞ！ 神よ！ 心あるならば私の願を受け入れ給へ！ 天よ！ 私をして望を叶はしめ給へ！

九月六日（水）晴天

飯村海経遂に来ず！ 畜生、残念なり。何故々々、彼を合格せしめざるか。彼を除いて他に適格者が居るか！ だが俺はどうだ。こんな俺はもう駄目

だ！ 飯村が駄目なら俺も駄目だ、噫！ 静かにく／＼秋の夕は暮れてゆく。
すだく蟋蟀（こむらえ）（編註…集まって鳴くコウロギ）よ！ 心あるのか、何故泣くか
寂しい夕よ！ 蟋蟀よ！ もう俺は沢山だ！ 噫！

九月七日（木） 曇時々雨

愈々明日発表の旨、新聞に報道さる。もう總て運を天に委せた。只待つ耳。
然し、今日神棚に祈りを捧げる時、ふと… 脈々たる自信が湧いて来た。必
ず来る、必ず合格する！ 物凄い自信が胸を打った。級友山田来る。俺の安否
を気遣って、感謝！

九月八日（金） 雨

皇国の興廢を賭して一億大和一致の總武装のもと、敵米英を玄關口に迎へ
て決戦への總突撃態勢を整備せんとする決戦議会たる第八十五臨時議会は、
昨七日天皇陛下の御親臨を仰ぎ奉り、嚴かに開院式が行はれた。陛下には恐
れ多くも「敵ノ反攻愈々熾烈ニシテ戦局日ニ危急ヲ加フ皇国力其ノ總力ヲ舉
ケテ勝ヲ決スルノ機正ニ今日ニ在リ」との勅語を賜ふ。参列の諸員は戦局を
軫念し給ふ。聖慮の程を恐察し奉るとともに、一同胸奥から迸る滅敵の憤激
に、われら断じて良襟を安んじ奉らざるべからずの誓を新にしたのであった。
この日小磯首相は政府の断呼たる決意を披瀝し、「近く米英撃滅の舉に出で
んとする第一線将士の壯図に策応して、一億生産に励進せられ度」とし、一
大決戦の秋愈々迫りしを思はす。續いて陸海両相夫々戦況報告を行ひ、新鋭
航空機的大量生産こそ正に大決勝の要因なりとし、生産陣の一段の奮起を望
むと。正に上下一体！ 何ものをも怖れん！ 噫！ 神国日本は、世界一の
強国なり。万才！

九月十日（日） 晴天

万事休矣！ 電報遂に來不、噫！ 過ぎし苦闘は總て夢也。然し、この苦
闘の上に更に一段と苦闘を積むのだ。苦闘の無い人生は無い！ 苦闘を経な
い人生に光明は無い！ 苦闘を体験しない人間は大成しない！ さうだこの
苦闘を土台にして、大いなる目的に向って邁進しやう。光輝ある人生を開拓
しやう。過ぎし苦闘を無駄に終らしてはならぬ。今こそ順天一麦精神を發揮
する秋だ！ その眞價を見せる秋だ！ 幸、燈火親しむの秋は今だ！ その
最大値を發揮出来る秋だ！ いざ！ 頑張らん、積み重ねん！
チコ兄より來信あり。イ三七部隊付教官仰付られた旨。

九月十一日（月）曇 時々雨

石川在修先生昇天さる。謹みて哀悼の意を表す。創立以来、学院国漢科の重鎮として奉職され、熱心なクリスチャンとしての先生も又、尊敬の人なり。沈思黙考の人となりは常に生徒をして善導され、関東のコンチャン（編註…ローマ皇帝で初めてキリスト教を信仰した聖人とされているコンスタンチン一世）の愛稱を以て我らは惜しみても余りある先生を呼びならしめてゐた。然し、突如として その昇天に接し、只々、人生のはかなさを痛切に感ず。決戦議会、今日閉会。連日国民生活その他に関し建設的な論議は、議員、閣僚間に取交され、決戦に臨む一億の總意は嫌が上にも、反映されてゐる。ドイツが最終段階に入つた今日、全く一人の遊休者も許されないのだ。街を行くとまだく相当な遊休者と覺しき連中が居る。何たる事だ。断じて許されん！

九月十二日（火）雨

朝六時家を出て夕七時半歸る迄、全く日の目も見ず、暗い中に出て暗くなつてから歸る。想像だにもしなかつた生活だ！卒業迄ずーとこの生活なのだ。それにしても東神奈川の四十分待ちは、癪に障る。実に無駄だ。駅の電灯の暗いことには本は全然讀めない。只、茫然としてゐるのみ…生徒は過去の總てを捨てて只々一途に生産増強の道に突飛んでは云へ…自分等は余りにその生活の変轉の激しさに驚かざるを得ない。

九月十三日（水）曇天

学徒通年動員は愈々軌道に乗つて、至るところに真剣なる学徒の敢闘が見られるが、それと共に学徒の風紀問題が起つて来るのは致し方ない。今日も島田のところ一女工からレターが届き、その女工に対し、事もあらうに、学徒の面目を忘れて、島田の野郎が好意を示したらしいとの風評？かりそめにも学徒の本分を全うし、飽くまでその誇を保たねばならぬ。一女工から求愛されて易々として同意するとは！島田たるもの猛省せねばならぬ。一体鋳物工場の奴らはいけない。女工、女事ム員が何だ。我らは青雲の志に燃え、殉国の赤心を、火と燃えさせてゐる、青少年学徒なのだ！決勝日本の推進力ではないか。我らは只管増産に敢闘すればよいのだ。たかが一女工からのレターぐらい、よせつけなければよいのだ。要するに 学徒の自覚だ！眞に然りだ！

九月十四日（木）曇天

今日の毎日新聞紙上に毎日ベルリン支局長と、ゲッペルス宣伝相の対談が出てゐた。重大危機に直面したドイツ国民の決死の情勢がよくわかる。ゲッペルス氏は今度の戦争は交戦各国が交互に重大危機に当面し、最後までそれを切り抜ける国が勝つのだと言つてゐるが、ダンケルク・フランス崩敗は英国の重大危機であり、モスクワ占領、時間の問題とまで言はれたソ聯もよく重大危機を切り抜けたのだ。今度はドイツの番だ。總統暗殺未遂事件を契機としてドイツは正にひし／＼と重大戦局に迫はれたのだ。然し、当然ドイツは、この重大危機を切り抜けるものと予想出来得る。これだけのことが確固と云へれば大丈夫だ。それに近く、新兵器が出現し米英はその為に、一・二月悩むだらう。とゲッペルス氏は言つてゐる。何しろドイツは大したものだ。

九月十五日（金） 雨天

このところ連日はつきりしない天氣が續く。気分までさっぱりしない。二百二十日も過ぎたが、もう一荒れ来ないと、さっぱりしないのだらう。早く秋晴のからつとした青空が見たいものだ。

九月十六日（土） 雨

この日決意又火と定る。断じて突く、清水高等商船学校！同志を得。福山、熊倉、飯村の三士なり。やるぞ！日本男子の面目に掛けても！きつ／＼やるぞ、苦闘即幸福！然り々々、何でやらで置くものぞ、万才！

九月十八日（月） 晴天

天高く馬肥ゆの秋！そして燈火親しむの秋！来る。連日のさっぱりしない天氣は今日からはからつと晴れて、実にさっぱりとした爽快な天候が訪れた！

九月二十日（水） 晴天

秋程我々を感傷的にするものはない。満天に輝く星を眺めつつ、窓辺に寄りかゝつてゐると、そして耳をじーと澄ましてゐると、集く蟲の声々、いろ／＼の懐しい思出が走馬燈のやうに頭へ浮ぶ…と、流れ星！今度は未来の夢だ。あれやこれとしきりに浮んで来る。暑くもなく寒くもなく、秋は実に好適の氣候である。秋は思に耽る季節である。秋は美しい、そして懐かしい季節である。秋は独り楽しむ季節である。

九月二十一日（木） 晴

久しぶりの電休日。今日は午前中新運搬。午後は兼て約束中の中野氏宅訪問。牛乳、西瓜、ナス、胡瓜、等持って、内田、福山氏と会し、大いに食べ且語る。いろいろの話に花が咲き、就中、石井の話は愉快々々。以後、毎電休日には各氏宅を廻って話し合ふことにする。次は内田の家へ集ることを約す。学校生活中はさうでもなかったが、工場入してみると、話し度い事も時間々々で出来ないし、かうして皆で話し合ふのも一つの大きな楽しみになつてしまつた。

九月二十三日（土） 秋季皇霊祭 晴天

徒に過去の夢を追ふのはセンチメンタルかも知れないが：

噫！ 過ぎし中学生生活。何もかも思ひ出の種だ！ まして今日のやうに、二日連休の日なぞ、大いに遊んだものだった。秋風颯々！ 天高く飽く迄澄み切つた今日のやうな日あれやこれや、思ひ出されるのは楽しかりし過ぎし日、猛烈なラッシュアワーの臨港電車！ 誰か今日のやうな慌しい工場生活を夢みたらう。然し、徒に過去を賛美することは人間の覇気を失はせる。現実の生活に光明を求めるのだ！ 然れば現実の生活は又とない楽しいものとなるのだ。過去は飽く迄過去なのだ。我ら青雲の児は、現実の中に求めるものを

求めるのだ。それでなくて何で新興日本の推進力となる事が出来得ん！ 理想の中の理想の探求！ それは易い。現在の祖国の運命を直視するのだ。凡ゆる力を求めてゐる。偉大なる祖国を愛するのだ。自分は祖国愛の前には何も障碍たり得ない。斯くすれば我らの血汐は憤然とたぎりたつのだ！ そして現実にベストを盡し、光明を求める事が出来るのだ。さうだ！ 「一日中俺達は何をして居るのか！ こんな事をしてゐてよいのか？」よいのだ！ 刹那々に最善を盡くす！ 祖国が要求に敢然と応じてゐればそれに優る最善の道はない。重ねて偉大なる祖国愛の保持者たらしめるものである。

（学徒動員強化の報道に双手賛す）

九月二十五日（月） 晴天

今日は勇壮な仕事大いによし！ 元氣旺盛。金槌の大きい奴を振上げてドン！ とやる。男性的でしかも緊張を要する。このやうな仕事だと大いに能率が上る。

九月二十六日（火） 雨天

米鬼の侵寇愈逞し、遂に比島迄至る。

然し、近寄れば近寄る程戦機は熟し、戦局我に有利ならんとしてゐる。西にドイツ、孤軍奮戦。よく共同の敵撲滅に励進してゐる。

考へれば去る昨年末以来、戦雲必ずしも我に有利に展開せず。物量を恃んで必死に攻寄せる敵の鋭鋒は小癩にも遅かりしとは云へ、遂に比島に及んだのだ。曰く、ニミッツ攻勢、曰く、マッカーサー攻勢、何れにしる貪欲無智の徒輩の血のあがきには違ひないのだ。戦機愈この秋 西太平洋に熟し、一大決戦の秋は至りぬ。我に勇猛！ 無敵皇軍在り。帝国海軍、又嚴然たり！ 新鋭陸軍颯爽と出陣を待つ！ 陸海の荒鷲、必殺の猛攻は正に偉力を發揮せんとして居る。見よ！ 大日本帝国東海に堂々と君臨す！

九月二十七日（水）晴天

逼迫する緊張を世相に感ず。早朝の巷間に見る、煙草の行列買ひ。朝まだきから我子可愛さに面会に駆け集る父・母の一群。買出しに血眼の人の一群。ラッシュアワーの生産戦士の大群、それらの人々を、ぐつとにらむ軍港衛兵・憲兵の人影。臆面もなく食物の話をする省線電車内の人々。誰がかくも変化せる世相を予測したであらうか。巷間から子供らの姿を失ってから既に數旬。それでさへも、一種の淋しさを身近に感じてゐた。だがかくも荒んできた世相！ 決戦愈！ 迫れるを思はせる！ 到底今のまゝの世相は永くは續きはしない。世相の一部分から見ても決戦は近づいた事を知る。然し、その機が未だとしたら？ 一体… この世相は… なるのであらうか、哉…。

九月二十八日（木）晴天

今日は日直当番。終日三階でブラ／＼して居る。中野から“花嫁隠密”借りて完讀する。実に日直は暢気だ。只五月蠅のがいけない。これさへなければ申し分ないのだが。午后残留組来場す。矢張り、勤労作業に従事しないと成績に係するとの事。お陰で午后は、残留組工場見学の案内兼説明役、大いに困惑する。明日は査閲。元高商部教官竹下大佐、視閲との事。大いに頑張らう。

九月二十九日（金）晴天

昭和二十年度関東学院中学部査閲実施さる。

本年度は重大戦局に鑑み、工場勤労作業状態を査閲との事。午前十時三十分我淡路班にも来られる。午后は講評、“良好と認む”の成績、まあいいさ。これで査閲も終り。例年なら一月も二月も前からあれやこれやで、実に天手

古舞いなのだが、僅か昨日、明日実施と発表され、今日もう実施。実に早い。竹下大佐講評に曰く、君らは近く国軍の幹部たらんとする有為な青年なのである。故にこそあれ、自己錬成こそ肝要なのである。工場の内外にあつて働きつつ、自己を修める。この点大いに頑張つて貰ひたい。”

九月三十日（土）曇天

哭け！ 怒れ！ 奮へ！ 撃て！ 南海の小島を純潔の血に染めて、大君の辺にこそ戦ひ抜き、遂に散りにし、大宮、テニヤン、両島守備隊全勇士、將又、在留同胞全員玉と砕けぬ！ 誰かその悲壮にして崇高なる精神を勇敢にして高潔なる信念を想起せざらん。噫！ 小畑英良中将以下、全勇士、全同胞の御魂よ、永へに安かれ！ 冥すべし！ 祖国の後援遂に空し！ 誰かその責を負はん我ら也！ 全一億也！ 今こそ奮ひ起つべし！ 後に續きて怨敵を亡すは誰ぞ！ 我ら也！ 全一億也！ 今こそ起つべき秋なり！ 冥すべし、南海の忠魂よ！ この日甲種予科練適正検査に石井出發す。山田・内田と三人でこれを送る。彼勇躍して行く。

十月一日（日）雨天

兼て、佛印西貢支店轉勤で飛行機座席の無い為見合せ中の喜平兄、急に座席獲得出来、明日出發との事。家中轉手古舞。あれやこれやで大慌て。考へて見れば、二・三年は歸らないのだ。急の出發は少し心残りだ。軍叔父 時刻来らる。そばの壮行会は、喜平兄にはもつてこいだ。俺も食った。

十月二日（月）曇時々雨 十五夜

十時四十分東京發門司行で喜平兄出發、鞆を持つて見送り。横浜で母さん、逗子の叔父・叔母さんの見送りを受け、張り切つて行つた。愈、寸松亭も淋しくなった。そして俺の責務も増大した。親爺に、兄貴二人を海外に送り 南進寸松亭の前途は洋々たるものあり。正に祝福すべき也。誰もその一員として所思を貫徹するべからざる也！

十月三日（火）

増産！ 敢闘！ 疲労を覚ゆ。

十月四日（水）雨天

今日は生産目的達成で、慰勞休暇が午后から出た。南京豆の配給がある。そこで兼て約束中の釣竿を持って梅叔母さん宅を訪問す。夕飯を馳走になり

大いに駄べる。あれやこれ、話に花が咲き、いつか時のたつのも忘れて九時になる。慌てて歸る。就中、悦ちゃんの勤勞奉仕の話聞き、我らとの雲泥の相違に全く驚く。保険局は仕事が無くて毎日探すやうだと云ふ。丸で嘘のやうだ。タービン等、毎日々々追い立てられるやうに、陸續として仕事如山積み。それに來週から徹夜作業だ！ 同じ勤勞奉仕にもこんなに違ひがあるのか。然し、苦しみが大きければ大きい程、楽しみは増大する。凡ゆる苦しみに打克つのが今の日本人の試練なのだ。他の人はどうあつてもよい。只、今の我らの本分は、持てる總力を擧げて国家に捧げ盡すことなのだ！ 然り。

十月五日（木）雨天

久しぶりの電休日、今日は内田の家へ集る。牛乳を提げてエツチラく。然し、馬鹿なことには、内田の家を聞いて置くのを忘れたから愉快。慌てて初音町公衆電話から電話を掛く。やつと着いたのが五時十分前。それから福山、中野、岩井等の食ひ仲間猛烈にやる。内田氏鶏二羽 締めたとの事。恐縮々々。久方ぶりの鶏鍋。珍味・美味！ それに汁粉・紅茶・みつ豆。パイナップル・牛乳 等の馳走。大いに食ふ。内田氏宅、中々の邸宅。相当こつてゐる。それに景色がいい。お陰で楽しい電休日の一日であつた。

十月六日（金）雨天

連日嫌な天氣續き、雨ばかりしとく降つて、秋晴の快適が見られない。庭一面に咲いたコスモスの花が綺麗だ。

十月七日（土）強雨・強風

颱風襲来！ 朝から相当な強雨。晝頃より颱風気味となり、午后四時、鶴見線不通との事に。慌てて早退す。案の如く、浅野鶴見小野間不通。浅野から膝まで没する濁水の中をジャブく歩く。各自夫々の服装がズボン、モンペをまくつての雨の進軍は見物。濁水はレールを隠し滔々と流れ、降りしきる豪雨は、風こそ無いが、猛烈な勢である。やつとの思いで鶴見小野に辿りつき、横浜線不通を案じつつ東神奈川に來たが無事。

十月八日（日）大詔奉戴日 快晴

青空が見える、快適！ 爽快！

ちぎれ雲が飛ぶ青空を横切つて、思い切つて両手を差上げ、うーんと奮張る。青空が無限に拡る、果しない希望に満ちて一羽鳥が中空をかすめる。何とも云へない爽快な気持ちだ！ 待ちに待った青空だ！ 嬉しい青空だ、澄みき

つてく／＼濁りを知らない青空だ。

十月十日（火）晴天

北豪ニューギニヤの北方ビアク島の一角に據り、善戦健闘よく敵米の抵抗を斥け、去る五月二十七日以来今だに赫々たる戦果を挙げつつある。我が葛目部隊の戦況が発表され、寺内最高指揮官から感謝状が授与され、上聞に達せられた旨発表された。部隊長葛目大佐、去る七月二日壮烈な戦死を遂げられ榮えある二階級特進の命が授けられた。今こそ我らはビアク島に驕米を一手に引受け倒れて後已むの信念のもと、龐大な敵軍を次々と屠り、上陸以来五ヶ月余今だ頑として退かぬ。我葛目部隊將兵の労苦を謝し、以てその舉に応へねばならぬ。

勇猛！ 葛目部隊（眉葦 作）

驕鬼来りぬ。攻め来りぬ。

何ぞ怖れん、我に鉄血の闘魂あり

ここぞ、南海の小島ビアク島なり、見よ、壯嚴の旭日に

日章旗を仰ぐ！ これぞ我らが葛目部隊なり

大君の辺にこそ身は南冥に草屍となるも

七生報国の信念は火と燃えて

葛目部隊の闘魂いよく熱火となりぬ

噫！ 七月二日の朝まだき、我らが葛目部隊長！ 遂に倒れぬ

何ものをも怖れぬ將士の顔に涙は光りぬ

然し、次の瞬間！ その涙は偉大なりし部隊長の

不俱戴天の仇、断じて撃つの誓の涙とはなりぬ

見よ！ 聞け！ 烈々たる葛目部隊の挺身突撃の

雄叫びを！ 部隊長の御魂よ安かれ

ビアク島は今だ我確保しつつあり

断じて譲らじ 在天の御魂に報いる道は只一つ

噫！ 葛目部隊！ その勲は永久に輝き

我らの闘士をうたせ給へ

十月十一日（水）晴天

今日は俺の厄日。こんな日は早くたつてしまへ！

左手小指根本に相当深い裂傷を受く。ズキン／＼と痛い

癪に障る。馬鹿野郎！ 恨しいタガネよ。勤勞奉仕行、初の受傷だ。

余り痛いので二時に早退する。こんな日は早く暮れてしまへ！ 糞喰らへ！

畜生！

十月十二日（木） 時々曇天

欧州戦線はこのところ停頓してゐる。一気にドイツを併呑せんとさ乍ら潮の如く押し寄せる反枢軸軍は、ジークフリード線を主軸とするドイツ国境で、遂に如何とも出来なくなつた。ドイツは已に予定し強固なる防衛陣地である国境まで出血無く退き、一人反攻を策してゐるのだ。見よ！「ドイツは十月一杯を以て降服するであらう」と豪語したチャーチルは、「欧州戦線の決勝は春期攻勢を以て決定するであらう」と茶に濁したではないか。盟邦ドイツよ、最後まで戦へ！頑張れ！我ら又、最後の一兵まで頑張り抜くことを誓ふぞ！断じて戦はん。我らの盟邦、又志を同じうせよ！

十月十三日（金）晴天

小癩にも米鬼台湾に來襲す。 昨十二日朝から午后に至るも反復來攻中にと。

愈、小癩だ。既に百機撃墜！ あせりにあせつた米鬼が又々台湾に魔手を伸ばしてきたのだ。南西諸島に來襲した米鬼が、機動部隊・大陸在支空軍を動員しての必死のあがきなのだ。我らは今こそ冷静に大本營発表に耳を傾け、愈、航空機増産に精進し、一大反攻の機至るを待つのみである。

十月十四日（土）晴天

来るべきものが遂に來た！ 台湾に反復來襲せる敵機は延千百機也と。その中 撃墜百十機！ ！ 又我、陸海の精鋭雷撃隊は小癩な機動部隊を攻撃し、現在迄に既に空母二隻を撃沈破、艦種不詳二隻を撃沈破したる旨の大本營発表あり。不気味な東支那海上。遂に日米宿命の決戦は正に近づいたのだ！ 然るに見よ！ 伸び切つた敵補給路は益々我に有利となり、幸先佳し。我猛驚の大戦果は爆発した！ 宿命の雌雄対決するの秋、遂に來た！ 今にして遅れをとらんか、悔を千載に残すは必定也。今こそ断じて起つべきの秋なり！

十月十五日（日）晴天

日米宿命の決戦、遂にその幕を切つて落した。時至る！ 台湾東方海上、彼我の興亡を賭しての一大海空戦は正に至りぬ！ 我に隱忍自重の帝国海軍健在たり！ 百戦錬磨の荒鷲、一たび羽搏けば見よ十數隻から成る敵空母艦隊は次々と西太平洋の藻屑となり、堂々と上がる決戦の凱歌！ 噫！ 御民吾の感激は、光榮は今日を措いて他日の何物に於て得られん！ 感激々々、

今こそ神州に生を享けし感激を第一線後續の誓に爆発せしむるのだ！ 轟撃沈！ 空母七隻おゝ！ 偉大なるその戦果ぞ、我ら待てり、只管待てるこの戦果ぞ！ 銃後は沸き立てり、奮ひ立てり。噫！ 偉大なる大日本よ、小癩なる米鬼の前進を驕れる出鼻を見事打碎いた、第一線將士の忍苦を想ひつ！ 遂に至りぬ！ 決戦の秋は至りぬ。序幕に於ける大戦果を仰ぎていざ！ 我ら断じて續かん断じて撃たん！ 大本營発表に感激しつつ！

十月十六日（月）晴天

秋高^そく天きよき時、わが皇軍醜の艦を、機を嵐如し撃つ喜びの涙せきあへず、今ぞ待ちに待ち得し大戦果聞きて！ かきくらすアメリカ人よ、天つ日の輝く邦の手ぶり知るや、

山本の命^{みこと}よしとうべなはむ撃ち撃ち撃てる空の益良夫舉がるく、台湾東方海上追撃戦の大戦果！

断々乎として鬼畜米艦隊を徹底的に海底深く屠り去る。

神機は到来した！

忍ぶべからざるを耐へ忍び、唇噛みしめて頑張った。

国民の精進が報いられる時が遂に来た！

噫！ 三千年の悠久の歴史、聖天子ゐます大日本の、

御光を耀かすか、滅すかの時は遂に来た！

然るに何ぞ！ 幸先よき哉、隱忍自重・堅忍持久。

只時至るを待ち、見敵必殺の猛訓練を積みし、

我帝国陸海軍！ おゝ、この武者振ひぞ！

自分は学徒報国隊の一員として銃後生産工場にあつて、

平常とは違つた大いなる感激を以てこの戦果を聞いた。

それは余りにくくひしくと胸打つものであった。

自分としてはこの秋に当り直接敵撃攘の矢表に起ち得ない悔悟の念、

そしていよく工場に於いて生産増進に奮起せんとする信念、

いよく脈々たるを感じるものである。

十月十七日（火）神嘗祭 曇後雨

台湾に來襲した機動部隊と別に比島に出現した別動機動部隊を

またく我航空部隊が捕捉攻撃し、見事その企図を挫し去った旨、

大本營発表あり。

打續く戦果に街行く人も工場で働く人も皆何となく嬉しさうな表情が見られる。そして第五十八機動部隊追撃戦に負けずに生産追撃戦も續行せんと誓

ひの色がはつきりと判る

十月十八日（水） 雨天時々曇

またく台湾東方洋上に氣息えんくの第五十八機動部隊を来援せんとや
つて来た新機動部隊を捕捉、空母一、戦艦一を各撃破した旨、大本營から発
表さる。敵米は飽く迄人的損害を急援せんとするものらしい。然し乍ら、
連闘の疲労にもかゝはらず出撃し、敵米艦隊を徹底的に撃滅せんとする闘志
彌高い我航空部隊の勞苦を想ふ時、我らは愈ひたぶるの感謝を捧げるべきで
ある。この秋に当り、我ら鶴首待望の満十七・八年の青少年に兵籍編入の勅
命下り、愈々来月一日より実施せられ、我ら晴れて名譽ある帝国在郷軍人
として待機するところとなった。そして一朝有事に備へて、又防衛招集下令
に備へて生産に、体練に精進を重ねることになった。何といふ生き甲斐ある
ことであらう。万才！ 国土防衛の一兵士として、我らの双肩には神国護持の
鉄血の意氣が燃え盛った。

十月十九日（木） 雨天午后曇天

台湾沖航空戦の耀く総合戦果が昨日十八時大本營から発表された。轟撃沈
空母十一、戦艦二、巡洋艦三、巡洋艦若くは駆逐艦一、撃破空母八、戦艦二、
巡洋艦四、巡洋艦若くは駆逐艦一、艦種不詳十三。飛行機撃墜百十二機。
赫々たる戦果に耀く殲滅戦であった。轟撃沈破実に五七隻、正に戦史に特筆
さるべき大戦果である。然し、この隠に遂に還らざる三百十二機の尊き未帰
還機のあることを銘記すべきである。決戦は深刻だ！ 七月より九月に亘つ
て マリアナ諸島を奪取したニミッツの艦隊はニューギニア島を北進するマ
ッカーサー麾下の部隊と呼応して積極的な比島侵寇の野望を露呈し、屢々九
月以来 比島我航空戦力の消耗を企図しあつたが、十月十日敵五十八機動部
隊は 我南西諸島、台湾に來襲し來つた。これ実に米鬼が焦りに焦つた比島
奪取の野望の一脈なのであつた。執拗極らない米鬼の比島侵寇は十七日比島
レイテ湾に侵入、十八日午后以降、同湾沿岸に砲爆撃を実施中との発表があ
つた。明らかに五十八機動部隊の呼応したマッカーサーの必至のあがきだ！
比島をあやつる日米宿命の一大決戦は今やその導火線に点火されたのだ！
我ら断じてこの戦果をして戦勢轉換の好機として米鬼の不逞なる野望を次々
に撃破せねばならぬ。それこそ一億一人々が各職域に於て最大の努力を傾
注することである。神州は不滅である。

十月二十二日（日）

昨日は会社の帰り、福山と二人で中野の家を襲ふ。実に愉快。柿五十六個もいで大戦果く。

台湾沖航空戦の武勲を嘉せられ、畏くも現地陸海軍最高指揮官に対し勅語を賜った。これ一重に有馬正文少将等の尊い荒鷲の体当り精神あつたればこそ、我ら謹んで還らざる忠魂を想ひ一段感奮力闘せざるべからず！ 遂に比島に 強引上陸す、傲慢無礼者！ いかで撃退せざるべからず！ 小癩なり。ルーズベルトが必至の選挙工作、今こそ彼の鼻へしを折曲げて物見せてやるのだ。

十月二十三日（月）曇天

予科練の海保より来信あり、彼張切つて訓練中なりと。そして俺の海兵不資格を残念がつてゐる。彼ももう立派な海鷲魂を体得して第一線へ胸躍らせてゐることだらう。今日は母さん上京。いろくんと東京の用事を足して来るとのこととで七時頃帰宅したが、まだ帰つてゐない。大方長本にでも寄つて夕飯でも御馳走になつて居られるのだらう。

十月二十五日（水）晴天

レイテ湾上陸の憎き怨敵、その後續々と上陸中なり。米鬼はルーズベルトの選挙戦を操つて必死に戦局好轉を測つてゐるのだ。実に洩太い野郎だ。爲かハワイの戒嚴令を解除したとの事。それならそれでいい。今に見て居れ、いい氣になつて出し切つた兵力だ。今に見ろ。ぐわん！ と一突き。忽ち崩れ去るのは目に見えてゐる。覚えて居れ！ 小面憎い奴らだ！ この野郎。壮烈阿部信弘中尉戦闘機只一機で英空母を沈め去つた。噫、誰かその壮烈な体当りを 想はざる！ 我その報道を讀みて、只々、愈精進励磨！ 偉大なる先輩に續かんとするものなり。

十月二十六日（木）晴天

遂に我が艦隊は出動した！ 待ちに待つて練りに練つた出撃だ！ 沈黙錬磨の帝国海軍遂に出動した。敵はマッカーサーをして対日攻撃の基幹部隊としてまづレイテ湾に強引上陸せしめた。我らはこれを見て、戦局愈 逼迫を覚えた。然し、決戦の機至れりと、敵覆滅の神機を捉へ、対処する帝国陸海軍に全幅の信頼を抱き、生産増強に精進しつゝ、只管快報至るを待つた！ 果せる哉！ 我ら予想以上の輝かしき大戦果がそれも帝国艦隊が白晝堂々。米艦隊に見え、隠忍自重「日本艦隊、何処に在りや」と呼豪した。怨敵も今こそ堂々の戦ひを挑んだのだ！ 長い隠忍！ 久しい沈黙！ その間海上部隊

將兵の髀肉の嘆は、察するに余りがあった。然し、今待望の晴れの決戦場に進撃して驕れる米艦群の胴っ腹に必殺手練の巨弾をぶち込んだのだ！ その得意や正に思ふべし。訓練に訓練を重ね、巖の如く鍛えあげた精鋭無比の我帝国艦隊は颯爽として出現した。

その雄姿！ おゝその偉容！

遂に彼我海戦、否、決戦は火蓋は切って落された。

我らは今こそ我艦隊の烈々たる求敵必殺の闘志を学び、いよく各職域に邁進せねばならぬ。大本営発表（昭和十九年十月二十五日十六時）

我艦隊は昨二十四日朝来比島東方海面の敵機動部隊並に輸送船団に対し、海空相呼応し、之を猛攻中にして、現在迄に判明せる戦果次の如し。

撃沈 航空母艦 四隻（エンタープライズ型を含む）

巡洋艦 二隻・駆逐艦 一隻

輸送船 四隻以上

撃破 航空母艦 二隻 戦艦 一隻

巡洋艦 二隻

○ 我方の損害 巡洋艦二隻、駆逐艦一隻沈没。

我ら蹶然奮起すべからざるべからず、正に決戦の機は到来した。曰く、神機！ 生産能力を最高度に發揮する秋は今だ、いざ／＼起たん！ 續かん！

十月二十七日（金） 曇夕刻より霧雨

天皇・皇后両陛下、新祭神二百九十七柱の英魂永へに眠る靖国神社に行幸・啓 親しく御拝あらせられた。

驕鬼、漸く神州に迫らんとする時、又醜敵撃滅の捷報相次いで舉るとき、護国の神々に親しく御拝あらせた事はまことに畏き極みである。

おゝ、また／＼舉る無敵海軍の大戦果ぞ！

太平洋決戦！ 秋正に^{たけなわ}酣物量を言はせて、選挙政略に踊らされた米鬼の輩は今ぞ續々とレイテ湾の藻屑となりつつあるのだ！ 敵はいふ「今や米海軍は曾ての歴史になかったやうな最大の危機に立った」と 正に然り持てる全兵力を出さば出せ！ 我に無敵聯合艦隊依然健在なり。

余裕綽々たる陸の精鋭待機中なり！ おゝこの捷報^{しょうほう}（編註…広辞苑六版では勝利の知らせ）！ 一億は歡喜している 一億の鬱憤は晴らされた。

強い／＼自信が各人の胸に充ちた。そして／＼心からの万才を唱へた。メリ

ケン野郎ら何するものぞ！ 断じて 仇を討つと言って過ぎし苦闘のあの時を忘れはしまい！

大本營発表（昭和十九年十月二十六日十六時五十分）

一、レイテ島の我陸上部隊は十月二十日以降タクロバン南方及ドラッグ附近に上陸せる約三個師団の敵を激撃奮戦中なり

二、我航空部隊は十月十九日以降レイテ湾の敵輸送船団及其の護衛艦艇を連續攻撃中にして我艦隊亦二十五日未明同湾内に突入、之に強襲を敢行せり。現在迄に確認せるレイテ湾に於ける総合戦果次の如し。

（自爆未歸還機の収めたる戦果を含まず）

輸送船撃沈五隻、炎上十一隻、擱座四隻、撃破二隻、航空母艦撃破二隻、戦艦擱座二隻、撃破二隻、巡洋艦撃沈二隻、撃破三隻、駆逐艦撃沈一隻、撃破三隻、大型上陸用舟艇撃沈十七隻、撃破炎上二隻、

我方の損害 戦艦沈没、中破各一隻の他、若干の未歸還機あり。

大本營発表（昭和十九年十月二十六日十七時）

比島東方海面に於ける彼我海空の戦闘は依然繼續中にして、

現在迄に判明せる戦果の追加、次の如し

撃沈航空母艦二隻、巡洋艦一隻 撃破航空母艦四隻… 以上

十月二十八日（土）晴天

比島沖大海戦の総合戦果発表さる、実に偉大な戦果だ。我が帝国海軍ならでは得られぬ大戦果だ。然し、レイテに陸の友軍を援護せんとする敵の執拗な戦意は撃たれてもく、兵力を補給せんとして居る。龐大な物量に物言はせて敵は損害をひた隠しに隠してゐる。そしてなほも我に決戦を挑みつつある。天晴なる敵よ！ 然し、それ相応の返答があるぞ。

大本營発表（昭和十九年十月二十七日十六時三十分）

十月二十四日より同二十六日に亘る彼我艦隊の比島東方海面の戦闘に於ける戦果並に被害次の如し

一、総合戦果

撃沈航空母艦八隻、巡洋艦三隻、駆逐艦二隻、輸送船四隻以上

撃破航空母艦七隻、戦艦一隻、巡洋艦二隻、撃墜約五百機、

二、我方の損害

艦艇 航空母艦一隻、巡洋艦二隻、駆逐艦二隻、沈没航空母艦一隻、

中破

飛行機未歸還百二十六機

右の他、昨二十九日発表の如く「レイテ」湾に於て戦艦一隻沈没、一隻中破の損害あり。

（註 本戦闘をフィリッピン沖海戦と呼稱す）

大本営発表（昭和十九年十月二十七日十五時）

我航空部隊は引續きレイテ湾内の敵艦船及レイテ島に上陸せる敵部隊を攻撃中にして二十五日夜間及二十六日晝間収めたる戦果中現在迄に判明せるもの次の如し、

輸送船 撃沈一隻、炎上六隻、撃破十一隻、

外に二十六日炎上中のもの二十九隻

巡洋艦 撃沈一隻、撃破一隻、

駆逐艦 撃破一隻、

巡洋艦又は駆逐艦撃沈十隻、

輸送船 撃破一隻・艦種不詳撃破三隻

飛行機 撃墜二機、炎上又は撃破七十機以上

敵上陸地点炎上十七箇所（内四箇所大爆発）

台湾沖・フィリッピン沖、両海戦の総合戦果は、実に偉大である。

実に七十二艦船を轟撃沈破、撃墜六百十二機以上。

正に／＼驚くべき大戦果である。特に空母十九隻轟撃沈、十五隻撃破！

帝国海軍一度立てば見よ、舉るこの大戦果！

二十六日夜間には在支航空部隊密雲を突いて在支米空軍の根拠地、そして日本本土空襲の発進地成都を襲った。我支那方面航空部隊、得意の殴り込み戦法である。戦果はB29撃破・炎上五十七機といふ華々しいものである。成都方面への攻撃は九月八日・二十六日、十月七日それに今回と四回目である。我が航空部隊の逞しい征空の翼に謝し續く健闘を祈るものである。

十月二十九日（日）晴天

噫！ 忠烈、萬世に燦たり。大君の辺にこそ何物も顧みざる神鷲ぞ。

おゝ 我身を以て神風となり、皇国悠久の大義に生き

神州護持の人柱たらん！

噫！ げに悲壯にして、これ程日本男児の本懷に

相当せざる壯舉こそあらん

その名、神風特別攻撃隊敷島隊なり

何ぞ怖れん。見よ燦たり、皇軍魂の精華を！

日本人たるもの齊しく仰げ、この忠烈を！

日本人たるもの断じて憤激せざるべからず！

我、順天一麦断じて續かざるべからず

愈々挺身、日本男児の本懐にもとること無きを

期すべし！ 噫！ 神風特別攻撃隊

戦局の帰趨、岐れんとする決戦段階に處して、身を以て国を救はんとする

皇軍の精華は我らは齊しく感激するところである。

愛機に特別爆装し、機・人諸共敵艦に爆碎する

必死必中の捨身の戦法！ 誰がこんな戦法を予想したであらうか！

何處の人が考へ得るであらうか！

皇軍にして始めて燦然たり。

我が神風隊は兼て、決戦に殉ぜんことを期して隊を編成し、神州護持の人柱たらんと隊員皆覚悟して猛訓練を積んだのである。

人生 元来 勢に余つて死するは易い。

然し、平生死する日を期してひたすらその日の爲に訓練を積むが如き！

噫！ 果して神ならざるものなし得るであらうか

日本人たるもの、この神鷲の靈前に拝跪せよ！

必死必中神風特別攻撃隊！

さらに同隊には必中機隊の他にこれを護衛し且戦果を確認する任務を持つ誘導護衛機隊があり、これらが一隊をなす編成をもつところに中外の決死隊に類例を見ない点がある。基地出発のときの見送るもの見送られる者、凡て、皇国悠久の大義に殉ぜん事を誓つてゐるのである。

この重大決戦に臨んでこの神鷲の覚悟は全皇軍將兵の覚悟なのである。

敵米英は物量と科学を頼みとして反攻しつつある。

然るに我にはその科学を遙かに超越した大和魂！ 必死必中の戦法があるのだ！ 大日本帝国必ず勝つ！ その方途は 今我らの前に燦然と示された。断じて神鷲の壮舉を無にしてはならじ！

必ず續くぞ！ 必ず頑張るぞ！

海軍省公表（昭和十九年十月二十八日十五時）

神風特別攻撃敷島隊員に関し、聯合艦隊司令長官は左の通り全軍に布告せり

布告

戦闘〇〇〇飛行隊分隊長海軍大尉 関 行男
同隊付 海軍一等飛行兵曹 中野磐雄

同 谷 暢夫

同 海軍飛行兵長 永峰 肇

同 海軍上等飛行兵 大黒繁男

神風特別攻撃隊敷島隊員として昭和十九年十月二十五日〇時「スルアン」島の〇〇度〇〇涅に於て中型航空母艦四隻を基幹とする敵艦隊の一群を捕捉するや必死必中の体当り攻撃を以て航空母艦一隻撃沈、同一隻炎上撃破、巡洋艦一隻撃沈の戦果を収め悠久の大義に殉ず、忠烈万世に燦たり、仍て茲に其の殊勲を認め全軍に布告す。

昭和十九年十月二十八日

聯合艦隊司令長官 豊田副武

十一月一日（水） 快晴

朝より日本晴の快適！ 正に雲一つ無し。

然るに、十三時二十五分突如！ 空襲警報発令「B29二機京浜に侵入」と遂に来たか！ 我らの防空態勢は全うし、敵機来れや来れ！ 警報下、平常通りモーターは廻轉し、ハンマーの音は響く、工員、学徒の面もいつもと変らぬ。黙々の色が見える凡ゆる苦難を頑張り抜いて前線へ兵器を送るのだ。それで無くて、何で神風特別攻撃隊勇士に顔向けが出来得ん。やがて「敵機来襲！ 待避」の命がでる。皆静かに起ち上った。そして防空壕へく人並みは續く、少しく焦って居た気分も壕内に入っただんぐ落ち着いて来た。皆待つてゐたものが来た、と言った感じだ。やがて空襲警報解除。狭い壕内から出る、見上る青空に白い雲が糸を引く！ 飛行雲か？ 煙幕か？ 職場へ戻る人の波く動ぜぬ人々の強いく足並だ。米機いつでも来い、我に鉄壁の生産陣あり！

十一月二日（木） 晴天

魚雷挺身隊及肉攻斬込隊の武勲が大本營から発表された。

相次ぐ殉忠の將士の奮戦又々感激の他なし。

愈々上級学校の入試詳細が発表される。

何が何でも入らねばならぬ！

十一月三日（金） 明治佳節 雨天 奉祝明治節

久方ぶりの休日、今日は一日家の菜園の手入をし、薪割りでもやろうと考

へてゐたところ遂に又雨降り： 明治節に雨降りとは珍らしいと母さんが言はれる。さう言へば、昨年も爽快な秋晴れ、文展に行った事を思ひ出す。致し方無いのでひねもすのたりく々と暮らす。明日からの増産に備へて食べて寝るのも一興か？ 愈々近づいた入試に備へて、机に向ふ方が益があるやうだ。何れにせよ折角の休日に降られるとは因果だ。お天道様も少し酷い、俺の休みといふと降らせる、たまには澄み切った青空の下で思ふ存分寝轉んでみたい。休みといふと一日中食べることだ。何しろ一月に二回の休日だもの。それもあの工場の騒音から解放されて、田園の静寂・快適・の中に居かれるのだから。そして何も緊張の要が無く、只、いい加減に思ふ事を考へ盡くすだけだ。自然に食欲が起つて来るのも無理がない。さう言へば 雨降りの休日も良いものだ。負け惜しみでは無い。ボイラー轟音・モーターの騒音・ハンマーの雑音。總ての金属的音階が一定の波のやうに間断なく耳に入り、それが頭の中で駈け廻り、空虚な頭脳を益々空虚なものにしてしまふ。考へれば考へる程、それらの雑音が多く入る。ぼんやりして居れば居るで、又、数多い傷害が待つて居る。工場程人間を中途半端にする處は無い。考へてもいけない、のんびりしてもいけない。緊張すれば疲れる。その工場に平和な緑の学院生活から飛び込んだ我らだ。漸く三月経過して工場生活に馴れたとは云へ まだく成育盛り変轉万化の人生の最中だ。考へたい奴は考へる。のんびりしたい奴はのんびりせよ！ 学院生活はこうだった。思へば無理がない。徒に過去の感傷に耽るのはいけない。只現実の生活の中に生きる楽しみを見つけよ！ と先生は言はれる。そこに若い者としての生き甲斐があると云はれる。凡ての生きる事は現実の生活に於て出発する事は確かだ。然し、その現実の生活といふのが中途半端なのだ。実際に今の学徒は苦難の道を歩んでゐる、 余程しっかりとしないと、時世の波は我らを大過の渦に巻き込んでしまふ。中途半端な生活を生甲斐ある生活に更生するのは、要するに、学徒一人一人の天来の自覚なのだ。この辺にも 学院伝統の宗教教育が燦然として輝き増すことは必定だ。学院当事者も、この辺に思を致すべきだ！

十一月九日（木）晴天

石井信一君子科練入隊壯行会・於石井氏宅

集會者・内田、福山、中野、堀川、松本、片山、島田、長沼、岩井、白井、拙者。

若い血潮の予科練の・・・意気の翼は勝利の翼！

我らが信ちゃんの榮えの入隊だ！

信ちゃんは征くのだ！ 何もかも總て大君に捧げまつつて信ちゃんは

征くのだ。送るもの誰がこの壯舉を感激せざらん、特に信ちゃんの場合は 夫に先立たれた母が男子一人女一人の愛し子を成育されたのだ。その大事な男の子、然も、中学四年まで仕立てて大事なく長男を敢然と大君に捧げまつる母の心境！ 涙々：

そして母は言った！

「あの子が予科練へ行くと言った時、私は一言も反対しませんでした。只立派に働いてお呉れと言っただけでした」

大いなる母の！ 母の愛情は我子を大空に捧げまつる事によって、大いなる榮光を放つのだ。自分達は何かも忘れて送るのだ。信ちゃんをして心残りなく出発せしむるのだ。一同、大いにやった。正に、この日ばかりはの心意気で騒いで騒いで騒ぎまくった。

十一月十日（金）

明日より淡路班ともお別れ。代つて下の石渡班。

待望！ 小型タービンの組立てだ。淡路班最后の日、大いに〇〇る。四ノ三の餞別をもつて（總計 拾七円五拾錢）石井君宅を訪問。同伴：福山、山田。直に帰宅せんとせしが、お婆さんの強引な引止め戦術によって、遂に夕飯馳走になる。恐縮々々 帰宅十時半。

十一月十二日（日）晴天

俺も意外だ、腑に落ちぬ。俺が女学生に監視されてゐるとの事。ビラも不思議だ。変だ？？ 事の次第はこうだ。石井の妹（捜眞の三年生）の友達で、原町田から通つてゐる人がゐるさうだ。その人が俺を知つてゐて、いろいろの事を石井の妹に報告するのだとの事。曰く「関東の細野さんは真面目でせう」曰く「細野さんは歸途東神奈川発十七時三十六分の電車にいつも飛乗りする」とか。一体全体何處の何奴だらう。俺は全然知らない。原町田から通つてゐる捜眞の生徒： 判らない。何奴だらう、おまけに石井のお婆さんまで「細野さんは家の政子（石井の妹）の組で有名ですつて：」。俺は駄目だ： 一体全体 何が何だか判らない？？ 何しろ聞くとこに依れば石井の妹の組ときたら相当いけない連中が揃つてゐるとの話。 変だ！ これから真面目にしてゐないといち／＼報告されるのか：嫌だ嫌だ。然し、世の中は五月蠅ものだ。

今日も石井に招待さる、恐縮。再三辞退したが、どうしてもとの事なので止むなくお伺ひした。恐縮々々。

十一月十四日（火） 快晴

我らが石井の予科練入隊の日。送らる者、送る者、只々神風隊に續かんのみ。

俺は何も書けない、今日の大いなる感激をく、永久に自分のものとして出発するのだ。記念すべき十四日！ きつとく頑張るぞ。頑張らでおくものぞ！ 万才 石井 才才関東健児！

石井入隊後、何故だか俺の心に物足りないものがあつた。変だ？ 考へれば考へる程不可思議なり。その間戦局は目廻しい変轉をした。

醜機B29は連日の如く帝都その他重要地域を襲つた。畜生！ 焦れば焦るほど俺は変だ。俺としてもその原因が奈辺にあるか、

ちゃんと知り抜いてゐる。然し、どうしようも出来ない決心だ。信ちゃん慕う心、空虚な心、俺の心、青春だ！ 否、工場通勤の効果適面だ。石井の信ちゃん兵隊になつた。先に征かれた！ 残念だ。正に戦争は勝敗の岐路に立つた。この秋、内地でぶらぐしてゐる俺の気持。一種の自暴自棄かも知れなかつた。徹底してやつた。愉快だつた。B29の来襲も米鬼の比島侵攻も眼中に無かつた！

白覚！・ 白覚！・ 決断！・

一切を解決して呉れたのもやっぱり…… だつた。

昭和二十年（皇紀二千六百五十五年）

一月十五日（月） 曇天

昨十四日快報至る。待望。北海道帝大予科第一次銓衡合格通知至る！ 眞

に快報也。山田・新井（東高校）柴野（都立）福山（山形）安西（藤原工大）と、皆夫々勇躍せるに、何ぞ吾一人憤激の情やる方無し。この日遂に吾も又撰ばれし。長沼（静岡）を射止め。この所関東春到来、然し、吾はこれから未踏の北海を超えて行く身なり。辛酸吾に至る！ 何ぞ！ 吾に順天一麦精神在り！ 来れや来れ、困苦欽難！ 断じてやらむ。力の限り。根限り。過ぎし三ヶ月の甘き夢、凡て打振立て。人生感意気。男児決心！ “神よ！ 吾の罪も汚れも洗ひ清めよ！” そして新たなる御力を与へ給へ！ “断々乎としてやらん。順天一麦の体当りならん。

七時十分原町田発八時二十分工場着。直二現場・教官室二缺席セル旨傳へ九時出門、十時半長本宅着。札幌ノ件打合せ万事御依頼ス。十三時頃御イトマ、十四時五分東神奈川発十四時四十五分原町田着十五時帰宅。

一月十六日（火） 快晴

去る十四日名古屋附近に來襲せるB29は我ら一億尊崇の的たる伊勢神宮、豊受大神宮、神域・官域に爆弾を投下した。これぞ眞に彼等米鬼の我ら日本人に与へた最大の侮辱だ！我ら如何にして皇国三千年の清史を守り抜いた祖先に対して申訳たつぞ！如何して皇祖玄宗の御霊にお詫び申す哉。噫！日本人たるもの恥を知れ。天罰を受けよ！人類史上神は吾らに凡ゆる幸を授け給ひ、全世界を平和に為し給ふた。天地の大神、これ皆神々の授け給ひし最上の御恵みである。何たる事ぞ。敵、米鬼は自らの神を冒瀆したのだ！米鬼は「日本人尊崇の的たる伊勢神宮を破壊すれば日本人の精神団結は破れるに違ひない」と考へたのだ。

然るに見よ！一億の憤激は愈々爆発した。米鬼よ、貴様の考へた凡ては見事外れた。確かに、日本人は不甲斐ない。神霊まします神宮さへお守り出来ないのだ。日本人の神に対するお詫びの心は遂に貴様ら米鬼に対する必滅の誓ひに通じたのだ！今に見よ、米鬼よ。思ひ知れ、貴様らの考へた思惑が反つて自らを亡す痛手になった事を知るであらう。ルソン島、大マニラ平原を挟んでの日米決戦の時は今や刻々近づきつつあるのだ。

我に山下奉文大将あり。特攻隊魂 全軍に漲り、愈々戦局の主導権の左右を決す 日米大決戦の時は遂に數日に迫った！

あゝ、誰か感奮せざらん、誰か、興起せざらん！

一月十七日（水） 快天気

十一時三十五分發で久しぶりで学校へ行く。冬枯れの三春台も又佳き哉。綺麗に蒔られた生垣も規律正しい学院を偲ばせる。いつも乍ら正門より玄関迄の気分は嬉しい。この時ばかりは学院謳歌だ。秋葉先生に会ふ。「しっかりとやって来い」と激励を受く。裏門下で向ふからやってきた大下先生に偶然にもお会ひする。思へば去年の七月お別れしたきり。張切つて「先生！北海道まで行つて来ます」とやったら、「おゝその意気だ お前なら大丈夫だ。よかったゝ、やっぱり細野は相当いじめたからな。苦勞しなければ駄目だ。まあ張切つてやって来い」思はぬ所で大下さんに出会つて面くらふ。中野氏へ立寄り時計を返して戴き、歸途、福山氏宅訪問。山形行の準備忙し。彼十九日立つとの事。

一月十八日（木）曇

今日もお出掛け、行き先江戸、日航本社細野理事に面会。それより同道にて省線駒込駅に佐藤駅長を訪れる。駅長に依頼中の札幌行の列車切符を受取る。

十八日より列車旅客輸送制限（乗車券発売方法は、軍・公務に限り官廳の証明を以て、又羅災者のみ發行するといふ）実に緊急用務者も乗車困難との事であつたが、佐藤駅長快諾され、往復乗車券を發行さる。感謝々々、二時頃歸宅。矢口へ買出しに行つた母さん・梅叔母さん、四時半頃歸宅さる。札幌の都合万事上々との事。正に出発前の万事好都合。幸先良し。この上は全力を奮つて関係者諸氏の御厚思に報いるのみである。感謝やる方なし、諸氏よ！ 只頑張りに頑張り抜いて見せるぞ！

一月十九日（金） 晴

愈々、初の一人旅行先遠し。北海超えて何と言つても一人旅は淋しい……二十時上野発、實際物凄い混雑だ。四列に並んだ縦列は改札口から始り地下鉄の入口の方迄續いてゐる。やがて改札だ。人の波が改札口に殺到する。人の波々々々。駈けるく、凄じ早さだ、忽ち青森ゆきは満員だ。なほも詰めかける人、人、人の波。仙台まで立通し。寝られぬ夜、汽車の旅は辛い。仙台から青森迄の車窓の景色は実に素晴らしい。北上川は特有の流れを示し我々の目を楽しませて呉れる。一ノ関を過ぎる頃から雪景色がだんくくと美景を見せて呉れる。相変らず汽車は早くもなく遅くもない速さで。いつ青森へ着くのやら……東北の汽車の旅位つまらないものはないと言ふが、否、々々。冬枯れの東北は淋しい。たしかに淋しい。然し、淋しい中にも来るべき春に備へての激しい男性的な呼吸が感じられる。糸をくねらしたやうな北上川の流れ、雪を戴いた遙かの山々一望、暢氣な風景と思はれるがさにあらず、東北の汽車の旅は、確かに寝不足の私の目を楽しませて呉れた。列車が終点に近づく頃から猛烈な吹雪は只でさへ遅い汽車の足をいよくゆつたりにしてしまった。剩^{あまつさ}へ積りに積つた數丈の大雪は僅か、二本のレールの上部だけを残して、あとは一面の雪の山だ。然し、車窓から見える防雪林のえぞ松、とど松に降りかかる景色は、雪を知らない私を大の雪国好きにってしまった。実に素晴らしい、雪だく！ 清淨！ 純白！

人生、雪の如く清く生きることが出来得ないものだらうか。私は無心にパンを嚙りながら考へた。雪景色は夫々の美しさを移りゆく車窓に現して、私の考へは走馬燈のやうに廻つた。二十日夜七時半青森着。連絡船は二十四時頃との事、夜の連絡船は只眠ることだけだった。

一月二十一日朝 遂に踏んだ北海道の土 否 雪！

函館から札幌までは、約九時間。今は遅れて十一時間ぐらいとの事。青森から同行の北大理学部の松村さんと六時半発の名寄行きに乗る。これ又、相

当の雑踏で、長万部まで立つ。南北北海道の冬も雪の日々だ。未開な山野にしまった雪は野も山も文字通りの銀世界だ。全道僅かに六百万の人口は余りに広い、北海道の山野には少な過ぎる。都市と云っても内地のやうに所狭きまでに賑はってゐない。廣野と都市の区別は実にはつきりしてゐるのである。一步都市を距たると、そこは草木繁茂し沃土地に満つ、未拓の地なのである。道人には悪いかも知れぬが、野蠻なのである。汽車の一区間に殆ど人家らしいものも見えない。ただ、雪に埋った山、谷、野、川、畑である。東北の風景をたつた今見て来た目にははつきりとそれがわかるのである。北海道は未開也！ 私の初の北海道に対する印象は斯の如きものであった。だが、未開未拓の北海道も決して眠つては居なかつた。澁刺なる生氣が漲つてゐた。寒波に負けてはゐない。雄々しい生産の島なのだ。

一月二十三日（火） 雪々

愈々待望！ 北海道帝国大学予科入試は本日より二十六日に至る四日間。道内は勿論、樺太、内地、遠くは満州よりの受験生を、秀才を集めてここ学内予科に争烈な狭き門突破の決戦は開かれた。中学の内申によって選拔された自他共に許す秀才共は吹荒ぶ吹雪も物かは、只々、母校の名譽に賭けてもと頑張るのである。二十三日 筆答試問、二十四日身体検査（レントゲン検査）、二十五日 口答試問、二十六日 同右、全力を盡くして天命を俟つ。

一月二十八日（日） 快晴

二十五日受験終了と共に、飛立つ思で札幌を立つ。途中、難関悪路。遂に、二十七日深更上野着。省線終電にやつとの事で飛乗り、横浜着零時半、直に岡野町の山崎邸に、一宿二飯の接待を受く。そして本朝、憧れの原町田へ辿り着いたのだ！ 恙がなかりし旅行！ あゝ、一息・二息： 昨二十七日午後 又々B29帝都へ侵空し、都心（有楽町）を無差別爆撃す。重要工場に損害なきは幸なるも、往年の有楽町ビル街、高級娯楽街、B29の醜翼に屈し、無残な姿を見せてゐる。米鬼の侵空、愈々激し。ルソンの決戦神機熟し、正に神国は重大関頭に立ち至れり。今次決戦の特色は大国民の忍耐競べにあると言ふ。英・独の猛爆・V二号の猛襲に耐えたり。ソ・独軍ウクライナを突破し、「モスクワ陥落。時間の問題」とまで云はれつつ、遂に忍びに忍び、今や独をしてたゞくたらしめて居る。然もドイツの困苦は又凄かった。佛西海岸より撤収し、独佛国境まで喰ひ下り、ハンブルグ・ベルリン、敵機の空爆に遂に殆んど灰燼に帰した。然、ドイツ生産陣はよくやった。だからこそ今や米英上陸軍は反撃猛攻勢に出逢つて後退の止むなきに至つたのである。

る。見よ、白色人にして然り、忍耐し抜いたのだ。況んや、神州日本人にして、この位の困苦がなんぞ！ 忍べ！ 耐へよ！ 頑張るのだ！

一月二十九日（月） 快晴

議会に於て、いろいろ戦時施策が上程・可決されてゆくが、要は、これらの重要法案・施策が一刻も早く実施されるのだ。

二月三十一日（火）

快報至りぬ！ この日は遂に来た。

あゝ過ぎし苦闘、今ぞ結実す！

感激々々。何たる感激ぞや

「ニウガクヲキヨカス、七ヒマデ ヘンナケレバ トリケス」

ホクダイヨカ

正に、午后三時三十五分！

待ってたぞ！ 来たぞ！ 万才々々！ 嬉しい！

二月十七日（土） 快晴

又来たる敵グラマン！ 昨十六日（金）不逞にも機動部隊全主力を以て、我本土近海に游戈、全艦載機を飛来せしめて、硫黄島作戦に我航空戦力を妨害せんと軍事施設、特に、飛行場施設を猛爆したのだ。始めて来襲せる敵艦載機群。小癩々々。約五百米から千米の低空から銃爆撃を加へ来ったのだ。小面憎い、グラマンF6F、その姿、畜生！ 愈々、本工は戦場と化したのだ、遂に来た。来たるべきもの来たのだ。昨十六日、終日来襲して本土各航空施設を狙った敵機は、本十七日又々朝来から来襲した。実に癩に障る。昨日は頑張つて通勤して工場でさんぐな目にあつたので、今日は東神奈川から早速帰宅してしまった。やがて立川方面より約五十機、空を圧して来った。回避！ 双眼鏡ちーと目にあててみると、たゞ、何とも知れぬ思ひがこみ上げて来る。残念だ！ 口惜しい！ 戦爆連合の敵機が堂々とやつて来たのだ。みすく、京浜地区に向つて大空を過ぎて行く。何たる恥辱だ、あゝ… 思はず涙がこぼれた。神州の清浄なる空は 吾人日本人の目の前で汚されたのだ。 あゝ… 奮起せよ、日本人！ 神州・祖国を必ず護持するのだ。やらう、石に嚙りついても頑張らう、平和な希望に耀く祖国を築くのだ。苦しい、忍べく今に今に見てをれ！

二月十八日（日） 快晴

関東対Sの〇〇合戦、愈々最高潮に達す。

今日もK連中とガサく帰って来たら、東神奈川に着くや赤イオーバー「細野さんにお聞きしたい事があるの」とやられた。此処では二回目の猛攻だ。待合室の椅子に腰掛けて話す。大変な事が起きたと前提して彼女は「石井さんが細野さん好きなのですって。天野さんが遠藤さんに、遠藤さんから私に傳って来たのよ」、「堀江さんは困ってゐるし、細野さんは始終考へていらつしやるしね。細野さんの気持どうなのね」、「それにこの間細野さん 湘南のホームと京浜のホームを行ったり来たりしてゐたでせう。それを安田さんが見ちやつたのよ。そして堀江さんに言っちゃつたらしーのよね。細野さん、長谷川さんに何のお話しがあるの。小川さんの事？ 教へてよ。妾、長谷川さんと堀江さんの間に入って困っちゃつたのよ」。矢継早の猛攻だ。彼女、政ちゃんとの事知らないらしい。一体如何したらよいだらう。井上と政ちゃんとの事はけりがついたし、俺と政ちゃんとの事も結末がついたのに、又々、困った事が起きたものだ。安田さんが登場した為にとんだ事になった。それにしても彼女は気の毒だ。非常に迷惑してゐるらしい。全部ぶちまけて話してしまつた方がよいかもしれない。俺はどうしても堀江さんが好きになれない。それに程に熱烈に想つて呉れてゐるのだが。どうしても好きになれない。口を開くのも嫌になつた。一体Sの連中には俺の意に叶つたやうな人はゐない。内田も同感らしい。「この間、堀江さんと安田さんと妾と三人で伊勢佐木町へ行つた時、姓名占ひやつたのよ、そしたら細野さんは学問を以て成功するですって。内田さんは心配事無し幸福なりですって、妾は苦しみあり修養と思つて乗超えよですって」。学問を以て成功すると、意外なり。・？？

二月十九日（月） 快晴

醜翼B29又来る。遙か高々度を堂々と編隊を組みつつ畜生！ 米本土に日本製気球爆弾なるものが舞込んで、既に死傷約五百名との外電を新聞が報じてゐる。果して日本の新兵器なりや。気球爆弾の本体が公表される時は何時？ 隣の川守少佐に聞けばその気球爆弾なるものは、こんなにやくとゴムとの合成にて造り、中に爆薬を詰め、潜水艦にて放つのだと。

それを今盛んに〇〇高女学校工場で製作中也、との話？？？ 今に日本人が大変驚く様な意外な新兵器が飛出すとの話もあり、頼もしき哉、日本科学陣！ 今に見て居れ！ ヤンキー共の膽玉がひっくり返るやうな大事件が惹起するだらう。午后、大下さんとハツちゃんから来信あり、大下さんの端書に曰く「前略 手紙を昨日拝見、喜びにたえない。厳格過ぎた自分の教室の態度が

数人には利益となると信じて居た。しかし次第に、理解して呉れる生徒が少なくなつて来るので、誠に物足りなさを感じて来てゐた。君と云ひ、福山・新井と云ひ特に自分の目を付けてゐた生徒が今日榮冠を得るにつけても限らない喜びを感じる。君は特に体に留意し、眞の仁者、即ち医者になつて貰ひたい」。三号・四号で涙で過した、二・三年頃の思ひでが浮ぶ。英語の時間はその頃の僕らにとつて大の鬼門であつた。「今に見てゐろ、きつと後悔する時が来る」、「いつまでも子供でゐろ、素直でゐろ、早く大人になるな」。「一事が万事だ！」、大下さんは始終僕達に言つた。実に苦しかった。何事を於いても英語の予習・復習だけは怠らなかつた。先生もやるからお前たちもやれと大下さんは言はれた。深更十二時を過ぎた事も毎晩であつた。寒い冬の夜、蒸し暑い夏の宵、好適の秋の夜、春雨を耳に頑張つた。あの頃の毎夜。先生があゝ言はれるのだから今にきつと後悔する時が来るのだと、僕はやつた。あらゆる誘惑に打克つのは少年時代の遊びたい心に年中迫つて来た。然し…遊んでゐる最中でもハツと大下さんのあの顔が浮かぶ。「さうだ！今やるのだ、覚えるのだ」その時分の僕は夢中だつた。往き帰りの道では一生懸命に覺えた。大下先生、たしかにその頃の僕の怖ろしい存在だつた、噫！今にして思へば何もかも夢なのだ。若し僕に大下先生と云ふ先生が、教へて下さらなかつたら僕はこんなにならなかつたのだ。

噫々、頭を自分の手で撲りつつ涙を奮つて机に、リーダーに、ノートに縋りついた二年三年頃の毎晩。あゝ、凡て夢だ。ハツちゃんからは国大突破の榮冠を勝ち獲んと日夜猛勉しているとの事、合格を祈る。本日、徴兵検査身上調査書記入の為、南国民学校に出頭す。

二月二十一日（水）快晴

噫！遂に別れる時が来た。彼女は言つた「今の女学生に心の清い、純情な人など居りませんね、細野さん。男の人が一人の女の事などでよくゝするなどいけませんわ。細野さんは一所懸命で勉強して偉い人になつて下さい。そして妾達が見返るやうな、傍へ寄せつけないやうな偉い人になつてね。それがお母さんを一番幸福にする途だと思ふわ。妾も細野さんの御幸福をいつも祈つてますわ」。さうだ！男児意気感！全精魂を打込んでやるのだ。更に彼女は「細野さん、立派になつて錦を着て帰つて来てね。それまで妾はいい子になつて待つてゐるわね、幸福になつてね…」と言つた。あゝ、男児有情！吾多感也。きつとく大成して一人前の医学者、所謂仁者となるのだ。それ以外に俺は彼女らに合せる顔が無いのだ。さうだ、やるのだ！

二月二十二日（木）大雪

降るく雪が実によく降る。何年来の大雪だらう。山も野も川も凡て銀一色だ。雪好きの僕とても交通機関の不通には参った。

二月二十三日（金）快晴

昨日来の雪害の為、京浜・市電・湘南不通。

依テ東神奈川 通勤不可能、東神奈川ホームでSの猛者連に遭遇！

関東タヂくのところへ、天野さんを通じて正子さんより手袋の贈物、多謝々々！！午后内田の家へ行き、ハッチャンを引張り出し、オデヲンへ”必勝歌”を観に行く。兼て約束中の正ちゃん来る。それより再度内田宅を訪問。夕飯を馳走になり、駄べるく。全くK連中の話は盡きない。話せどく盡きぬ話の種。ハッハハッ：愉快々々。東神奈川午后九時十二分発で帰る。

二月二十四日（土）快晴

もう俺は嫌になった。捜眞の彼女らよ、許して呉れ、もう沢山だ。そう責めないで呉れ、これ以上沢山だ。俺は正ちゃん一人で沢山だ。畜生、恨めしいく。（対〇〇さん、堀江・安田・各妹との会見より帰りて）

二月二十五日（日）雪

又来る敵小型数百機！遂に通勤断念！東神奈川より引返す。硫黄島の我軍の勇戦上陸以来既に五千四百名を殺傷せしむ。実に一分間毎 戦死三名といふ出血作戦。新鋭ロケット砲も現参して米鬼續々と倒れゆく。万才！頑張り小沢少尉。ナマズ頑張れ、祈武運長久小沢陸軍少尉！

神風特別攻撃隊第二御楯隊、廿二日出撃す。

全數十機壮烈命中す。只涙々：十七才の神鷲も在ると云ふ。然るに何ぞ！吾、今だ六尺の体軀を天地に空しゅうしつとあるとは！

三月一日 電休日（木）晴一時曇後雨

硫黄島戦局愈々重大化す。敵遂に千鳥飛行場の使用を開始す。摺鉢山の我主力、北部に移動し、最後の関ヶ原は今や寸前に迫った。物量を俟む敵は猛烈な艦砲射撃を全島に浴びせつつあり、特に黄燐焼夷弾を使用し、全島を焼野ヶ原にせんとする野望ならん。又第一線には戦車を繰出し、我特火点に対しては火焰放射を為し飽く迄同島を奪取せんとしつつある。特に艦砲射撃の如きは廿六日夜から廿七日朝にかけては毎時少い時で百廿発・多い時は五百発といふ猛烈。筆舌に盡し難いものあり。我守備部隊は この敵を各所に殲

滅し決然として敢闘しつつあり、特に海軍斬込隊の奮戦目覚しく連日連夜壮烈な殲滅戦を繰返してをり、硫黄島の戦況 刻々重大化しつつある。

一方、ルソン決戦は物凄い迄の敵の物量攻撃は、日毎に激化し、マニラ市街の如きは敵の重圍下我守備隊は熾烈な艦砲射撃下、決死の奮戦を為しつつあり。 廿六日午后遂に通信連絡絶え、戦況の詳細不明となる。將又、コレヒドール全島濛々たる砲爆煙に蔽はれつつも守備隊最後の一兵に至る迄も軍人の本分を盡さんと、マニラ守備隊と呼応して陣地を確保しつつある模様で、今やルソン島は晝夜間断なき敵の砲爆撃下、愈々、大詰めに近づいた模様なり。（本日、中和田泉龍寺にて祖母の供養讀經の後、墓前参詣を為し新家にて昼食の後帰宅。逗子の叔父来る。快談の後 五時四分發で帰られる）。

三月二日（金） 雨時々曇

本日登校日、午前八時集合。久しぶりで礼拝の後、院長訓示。教頭の卒業後の動向その他に就いて説明あり。報獎金授領の後解散。連中十一号に入つて晝食の後、揃つて伊勢佐木町へ繰出す。時に前十時。佐木の真中を傘に二人宛入つて堂々の行進だ。忽ち横宝に至るに、入場開始は正午也との事。それではと丸善に入る。二階に上り、連中ドヤくと。各自夫々数冊宛購ふ。なにしろ十一時五十分迄ネバる積りだから少しは買わなきゃ。さて予定時刻、係の女の人に「どうもすみません」とやると、「毎度有難うございます。またいらして下さい」。実に愛憎宜し。関東の生徒は今日はやけに気前がいい。面白くもない本をどん／＼買ふ。故に女店員氏、嬉しがるのも無理がない。ハハツハ。それより問題の間諜「海の薔薇」を観映す。従来の外人の演技を日本系俳優が扮したものを断然排して在留外人をして演らした点はよい。それを除いては、やはりスパイ映画の本領を発揮してゐる。 従前のそれに見られる大詰めの大捕物は見られず、女主人公の女間諜が、翻然自非を悔いて大東亜民族本来の姿に立返り、そのアメリカスパイ本部に対する裏切によつて問題の潜水艦は我海軍航空部隊に依つて見事撃沈される といふ型破りのスパイ映画。まあ、久しぶりで肩のこらない愉快な映画。まあいいでせう。帰宅四時半、梅叔母さん、悦ちゃん来宅。

「無医村報告書」「ドイツ初步文法」丸善にて購買す。

三月十九日（月） 快晴

来るべきもの遂に来る！

学校の授業、向ふ一ヶ年間停止の緊急令発令せらる。吾ら兼て覚悟しありとは云えへ、余りに／＼。 硫黄島の戦局、B29の帝都頻襲等々、吾らは当

然 この措置は近きにと信じてゐた。そして冷静にく／＼時局を判断する事に勤めた。だが今、それを得て、期する所ありとは云へ、感慨無量である。全学徒の心中又、騒然たるものあるべし。愈々生産学徒隊を組織し、一意専心 只管生産・防衛に勵進せんのみである。緑の学窓も今は夢。過ぎし淫刺とした生活も夢。噫！ 吾ら如何せん哉。だが、吾順天一麦の決意既に定めり！

慌てず騒がず沈着果斷！ 今はたゞ 目標に嚮つて勇猛進撃のみ、噫！ 快なる哉、御民吾の感慨、心中満々たり。やるべきの秋は今也。只、斷乎決意の四字のみ。

昨十八日午前九時より十時に至る間、天皇陛下、空襲に依る戦災地を御巡幸遊ばさる。只聖慮の宏大無辺、民草の上に垂れさせ給ふ御心のかたじけなさ、戦災者はもとより全一億、いかで感奮せざらん。「必ずこの仇を討てよ」の無言のお諭しを銘記し、各職域に敢闘あるのみ。神州日本断じて不滅なり岩井氏 富山へ疎開。二十四日頃出發との事。近友また缺如す、感無量也。

三月二十七日（火） 快晴

関東学院中学部第二十二回卒業式与行さる。この日朝より一点の雲もなく晴れ渡り、天地万象悉く吾らの卒業の門出を祝福して呉れる。

噫！ 思ひ出多き中学生生活に終止符を打つか。感多き中学生生活、悲喜交々の中学生生活！ 愈々心気一轉して増産に挺身する時が来た。吾ら如何で御民吾の光榮を千載に耀かさで置くべきぞ。吾、この日感激の学院賞を授与さる噫！ 順天一麦の光榮、之に過ぐるはなし。過ぎし学院生活の光榮！ 噫！ 感激やる方なし。午后、内田・片山と石井宅訪問。馳走に預り、午后十時帰宅す。見よ遂に怨宿敵、沖繩を汚す。神州不可侵の必定は破られた！ 祖先・將又子孫に対して何て申訳するぞ！ 畜生！ 米鬼沖繩・慶良間島に上陸す。硫黄島 既に利あらず。栗林中將以下の將士、遂に皇国の安泰を祈念しつつ、最後の總攻撃を敢行せり。今又、醜米 矯米 飽くなき野望を神州南西諸島に露呈し来りぬ！ 今こそ一切を投げうちて飛行機増産あるのみ。頑張れ！ 学徒！ いざ／＼やり抜くべし。

三月二十九日（木）

この日は逗子へ勤奉^{アルバイト}・薪割り・その他。お祝兼お土産にスタンド、箸入れを戴く。多謝々々。明日は先輩山本浩三氏宅を訪れ、北大の様子を聞く予定。そして明日より白線をかぶるか。この日長本の悦ちゃん・勝ちゃん・幸・広各氏、秋田を長駆疎開させるとの事で、母さんと上野駅にて見送らんとせし

が、物凄い人並、探せばこそ、遂に断念して帰る。幸あれ、長本一家！
健やかなれ！ 悦ちゃん・勝ちゃん・幸ちゃん・ヒロちゃん。

四月二日（月） 晴

昨夜半 又もやマリヤナ基地のB29大舉来襲す。帝都西方に主目標を置いて軍機又は少数機の来襲、頻々たる偵察に、予想してゐた夜襲であつた。然し乍ら、我果敢なる制空陣の激撃に散を乱して退去す。原町田にもその中の一機、見事撃墜さる。月光の夜空に醜翼は紅蓮の醜弧を描いてもんどりうって墜落す。眞上にて眞二つの空中分解！ 快なる哉。壯なる哉！ 巨大なる図体は忽ち地上に激突。醜翼万事休矣！ 天を焦して燃ゆる油タンク。始めて見るB29撃墜の実相は眞手に汗を握らせるものあり。本朝、本町田の撃墜現場を見る。翼醜の残骸は見るも無様に四散し、乗員らしき米鬼の黒焦の死体を見られる。醜翼の最后かくも惨め！ 一見するに、敵も相当参つてゐると見える。タイヤ等も、いい加減なゴム製品だ。敵さんゴムには一寸手が出ないと見える。然し、アルミニウム等金属は相当優秀である。部分品はなかくしつかりしている。素人の乗員にも判るやうに、面倒なまでに説明がついてゐる。この辺にも米の人員の痛手があるのだ。こつちも必死なら敵も必死なのだ。やらう。頑張り抜いた国民が勝つのだ！ 吾人は今朝B29の墜落現場を見て、ひし／＼とこの感慨を深からしめた。こつちが苦しい時は敵も苦しいのだ。總力を擧げてやっているのだ。だからこそ吾らもやらう。頑張らなくて何が必勝だ！ 午后、中野氏宅訪問。内田・福山氏来る。四人にて騒いだり、食つたり、珍らしく愉快也。帰宅八時半。

四月十四日（金）

米大統領ルーズベルト急死す。怨敵・宿敵 ルーズベルト遂に死す。

我ら日本人、感慨無量也。愈々太平洋決戦の終結至らんとする秋、愈々日本人の怒を物見せんとする秋、敵乍ら殊勝なりし彼をうしなふとは、彼よ歎く勿れ！ 汝の巻起せし大東亜戦争は吾が大日本帝国の大勝利に終結するであらう。宿敵ルーズベルトよ！ 眠れ！ 永久に／＼。

（編註） 以上前ページで日記本文（一九四三年十一月二十一日～一九四五年十月十四日）の浄書を終える。日記以外の著者ご自身の随想メモ等を左記に示す。…ノート最終ページ…

噫！ 俺はもう駄目だ。

何もかも今までの凡ては驕慢の何でもなかった。
馬鹿だった、俺は愚かだった。

駄目だ！

然し今、此處に第二の目的に突進せん

いざやらん！ 過ぎし苦闘を己がものにして、

生かして断乎としてやらん。

いざやらん、第二の目的に向って

ひたぶるの精進を捧げ盡くす時がきた。

今までの何もかも捨ててだ！

噫！ 夢は夢で終るか

残念也！

（編註：四月十四日を最後に第二分冊の六月八日まで日記の記載がない）

第二分冊（自一九四五年六月八日 至一九四六年五月七日）

北海道帝国大学豫科醫類一年三組

窓越しに月おし照らしてあしひきの 嵐吹く夜は君をしぞ念ふ

（万葉集 卷十一）

（窓越しに 月おし照りてあしひきの あらし吹く夜は 君をしぞ思ふ 詠み人知らず）

北海道帝国大学恵迪寮 南寮五号室住人（裏表紙）

順天院敬人一麥大居士 じゅんてんいんけいじんいちばくだいこち

（世稱 細野眉葦 ほそのびゐ）

六月十二日（火）晴時々曇、雨模様

四朗より来信あり、空襲の状況を詳に報告あり。讀むに不堪、惨憺たる横浜の巷、然し、彼ら学徒雄々しく生産戦に敢闘してゐるとの事、そして戦災後の人心動揺を指揮してある事感服せり。それでこそ学徒であると痛感した。本日三時四十分より五時四十分まで寮特別アルバイト（編註…ドイツ語の *Arbeitsdienst* 勤労奉仕で小遣い稼ぎではない）、猛アルバイトでやったので疲勞を覺ゆ、明日は寮歌祭、大いにフアイト出すべし。

六月十三日（水）晴

久方ぶりの快晴気分良し、手稲の嶺も美姿を現し、見渡す若草原も萌出て遊ぶ牛の群れも嬉々として実に何とも言えない爽快な気分が湧いて来る。寮歌祭は明日、太黒氏にラヂオを持参せさる。久方ぶりのラヂオは望郷の念を彷彿させる。七時報道後、神雷特攻隊出撃の録音を聞く。出撃前夜の荒鷺達の快旦那話声、噫々、神鷺の崇高な姿、涙々。これで十三号は名実共に南寮第一線を行く事になった。文化施設完備、娯樂施設万全、快適十三号。

六月十四日（木）曇後雨

待望！ 寮歌祭、南寮は「藻岩の緑」、「生命の争闘」、「別離の歌」、「津軽の海の」を歌ふ。大フアイトでやる。全部合格万々才！ 快適々々。長木（陽）、片山、山田より来信あり、快調。手紙といふ奴は誰から来ても、何時来ても嬉しいものだ。そのことをこちらへ来てつくづく感じた。筆不精なんて言う言葉は成立しないものだ。

六月十八日（月曜日）晴天風強し

愈々其處此處の谷間に鈴蘭の花が咲き出した。北海道と言ふと第一に鈴蘭を想ひ出す。白く小さな可憐な花！ 愛の表徴！ 私はこの鈴蘭に言ひ知れぬ愛着を感じる。そして高貴な薫、鈴蘭は私の好きな花の一つだ。机の上にこの花を植ゑて静かな宵、独り燈を守るのはこの頃の私の楽しみの一つになつてゐる。ふくよかな香はほどよく疲れた私の頭腦をよりはつきりとして呉れる。たしかに六月の北海道は鈴蘭に明け、鈴蘭に暮れる。鈴蘭こそ北海道とは切つても切れぬ縁がある花だ。本日午後アルバイト第二農場、それを了つて翌明後日の北寮対南寮の野球試合の練習を行ふ。此の頃は運動に快適の季節だ。それにつれてよく運動をやる。ピンポン、テニス、野球と一通りのスポーツマン、猛！ Fightだ。

六月二十二日（金）快晴

久方ぶりの快晴気分良し、室生犀星の「性に目覚める頃」完讀す。多感なり。幼年時代の彼の悲しき日常と少女の死に対する彼の悼詩は特に感激す。本日、木下、斎藤、横田、細野正、各氏寿司やに行き、各々五杯宛食つた由、恐れ入る。今と俺は大耗消、遂に午前中沈没々々。午后第三農場アルバイト、南瓜畠、除草作業。

明治四十四年十月三日、私は第一回の都落ちをした。超えて十二月父なる山本椿莊氏から一封の手紙をうけとつた。ひらくとふぢ子は腸に病を得て亡くなつたことが記してあつた。生前色々お世話になつた旨を感謝すると書いてなのおぢ子は「髪の毛をぢさん」のことを云ひ云ひしたと書き添えてあつた。私はその手紙を見て烈しい涙を感じた。そして私のために小さな救ひ主であつた、今はむなしい彼女の魂に向かつて合掌した。

悼詩

ボンタン実る樹のしたにねむるべし

ボンタン思へば涙は流る

ボンタン遠い鹿児島で死にました

ボンタン九つ

ひとみは真珠

ボンタン万人に可愛がられ

いろはにほへ らりるれろ

あゝらりるれろ

可愛いその手も遠いところへ

天のはゝびとたづね行かれた

あなたのおぢさん

あなたたづねて　すぐめのお宿

ふち子来ませんか

ふち子居りませんか

これはその当時のある雑誌に書いた悼詩の一章である。

(室生犀星著「或る少年の死まで」より、原作は「或る少女の死まで」)

六月二十四日(土)　曇時々雨

九時より南寮対北寮野球戦を行ふ。試合了る頃、漸く雨至り、各選手悪コンディションを克服して汗闘す。然し乍ら、南寮に利あらず無念惜負す。時に十一時二十三分。午後は南寮階下総出動で写真撮影、於小松写真館。夜は残念コンパ兼井藤氏壮行コンパ、一人一藝ファイト、歓迎！　俺は考行糖と愛宕まいりをやる。横田のジンジロゲは仲々見事、彼の如くふだん温和なしい奴があゝいふ場合面をとつての活躍はよい。すべからく世の中の人も見ならうべき也。昨二十二日、手紙大量に来る、嬉し。

六月二十五日(月)　晴

久方ぶりの快晴、めつきりと夏らしくなつて来た。草原に寝て彼方の空を見やれば白雲は静かに流れて如何にも夏と云つた感じだ。この日沖縄戦の本營発表あり。遂に全兵力を舉げて牛島司令官以下、総攻撃を敢行す。

噫！　悲壯なる哉、全沖縄住民又皇國護持の信念の元、総攻撃に参加しありとの来るべき遂に至る！　夕方、井藤、今、大黒、木下と戦局を論じ、激しく闘ふ。死か生か、青年の熱情ほとばしり出で憂國の情、室中に充つ。午后、武者小路の「友情」再讀す。いつも乍ら彼の端麗な筆調には飽きない。静かな北海道の大自然に斯くも静かに毎日を送れる自分達の幸福さがしみじみと味はれる。

○この頃、何とはなしに落ち着かぬ、心抱きて淋しくもだゆ

○梅雨晴れてエルムの林に鳥が泣き

○寝ころんで牛の背中を雲が飛び

井藤氏、勇躍アルバイトに出発する、祈御健康。生活部、非常食糧用として寮生一人に対し一升(米)宛配給す、善處歓迎！

七月一日(日曜日)　晴

本日も何事もなく終わる。午前中第二農場の特別アルバイト、牧草の畜積作業、俄然エキゾチックな札幌農作風景を展開す。午后横田と二人で街へ出る、先ず明治へ行き、リングジュース十五銭、一人三杯計九十銭也にて。次に

南風へ行く、いつものメツチェン（編註：ドイツ語の Mädchen の少女、娘）変じて今日は見えず。ソーダ水二十八銭、一人二杯計一円十二銭。今日は水腹、辛い辛い。親父から来信あり、昨三十日の母よりの来信によれば昌彦兄、五二七菊水号隊長機として某方面に出撃したとの事、噫！遂に愛する兄も征くか、怨鬼必殺の特攻隊として…。作業をやつて居ても過ぎし幼年時代からの兄の幼影が走馬燈の如く浮かぶ。喧嘩をした、悪いこともやつた、遊んだ、あゝ俺と気の合つた兄貴だった。鎌倉、大磯、横浜、そして最後に遊んだ野尻の想い出、いい兄貴だった。リュックに雛を入れて、あの富屋から林檎を喰りながら帰つてきた、あの時の事、汽車の汽笛に独り郷愁を嘆いていた兄、柏原の駅前のおぼやの事、長野の赤いノレンの思い出、あゝ盡きない。「誰か故郷を思はざる」とカヌーを湖に浮べたあの朝の一時、あゝ俺はもう一度会ひたい。然し乍ら、考えて見れば昌兄はあの時から既に己の心中に確固たる死生觀を抱いて居られたのださうだ。俺はやるぞ、兄貴に負けずにやり抜くぞ、確かに兄貴の二十余年の愉快な生涯是一片の小説になる、面白い、正しくて強い兄貴だった。その兄が今や皇國悠久の歴史を鎮護せんと三年の皇國の傳統を安護せむ爲に学びし学問も振り捨てて、今只一途に悠久の大義に生きたが爲に海軍中尉、細野昌彦として敵艦に碎け散らんとしてゐる。おゝ、神鷲は我が兄なり、神鷲は我が兄なり。あゝ、俺の心は落着かない、寝れない…涙々々…。

七月二日（月）快晴 夕方より曇

もう七月だ。早いものだ、来道してから早くも二ヶ月だ。寮生活の眞味も分つて来たし、ホームシックなりをひそめたし、これから愈、本腰になって勉強だ。逗子の治子より可憐な文章来る。健治よりも来る。早速四つ葉クロバーを入れて返事出す。高等商船の熊倉と横浜の七郎氏に発信す。今日は終日、第二農場でアルバイト、何だか今日此頃、心中のわだかまりが消えぬ。父・母より手紙が一番俺には打撃だ、辛い、あゝ、何だか落着かぬ、クロバー野原に思ふ存分寝て、思ふ存分郷愁に涵りたい。終に四ツ葉クロバーの葉を封じて出す。あゝ、俺は又スランプに陥つた様だ、畜生！

七月五日（木曜日）曇後雨

鈍才会寫真、家に送る。午后グランドへ行く一人二円二十五銭、四人、木下、斉藤、青木、俺、計九円。カレーライス、スープ、鯁マカロニ、紅茶。来るべき十一日の全寮コンパの南寮の催物は大体「秀吉と曾呂利」、「或る日の一休」の二つ、何れも武者小路実篤のもの。

七月八日（日曜日）曇後雨

午前中には第二農場のアルバイト、午後は兼て懸案中の宇都宮さん（編註…宇都宮仙太郎の牧場「北海道酪農の父」雪印、メグミルクへとつながる北海道製酪販売を設立）を訪ねる。往路は難航に難航を重ね、二時間を費やし、午后二時到着す。広々とした沃野にそそり立つサイロ、牛舎、オランダ風の風車、瀟洒なお住ひ、この辺切つての大牧場である。製酪所も備へて、仲々立派なお宅である。俗塵を離れてこの別天地に牛と共に寝て、牛と共に起きる生活はすっかり僕も気に入ってしまった。噂に聞いた御一家の皆さん、大変良い方ばかりである。遙か人里から離れての生活はさぞ不足勝であらうが、豊富なミルク、バターを使はれてのもてなしには流石の予科チンも恐縮した。又、今度「泊りがけでいらつしやい」とのお言葉を戴いて帰る。驟雨沛然として至るも、猛ピッチ一時間にして帰寮す。それよりミルクを飲んで就床す。太黒氏、苺、干菓子持参さる。多謝々々。今日のバター作りのお手傳ひは愉快、又とない貴重な経験を得た。

七月九日（月）曇後晴

俺はこの頃スランプに陥ったやうだ、どうも本調子が出ない。奈辺に原因があるかは自分でも分らない。只、何となく気分がはつきりしない。高校時代はようこのやうな事があるものであると聞いてゐたが、俺も遂に一門の高校生になったのか、勉強してゐても作業をやつてゐても頭の中が何だか知らぬが空虚だ。だから考へる、考えれば考えるほど分からなくなつて来る、だから止める、すると元氣が出ぬ。家郷の事、未来の事、過去の事が織りなして往來する。リーベの事、父母兄の事、旧友の事が交錯する。噫！俺の頭は駄目だ、どうしても駄目だ、馬鹿な！昨日の宇都宮さんの楽しさうな家庭の雰囲気を感じ出す、いいな！何うしてあの人は俺の帰る頃になって讚美歌を唄ひ出したのだろう、「牧場の娘」、何がセンチ的の懐しさだ。凡ゆる思索が錯乱して目茶苦茶になった、世の中で一番偉い人は何んな人だらう。一休和尚か丹下左膳か、神様が今お怒りになつて地球全土を暗闇にしたら愉快だ、馬鹿野郎面白くない。午后の作業の時、牧草の中で思ふ存分寝てやつた。畜生！越前の奴、氣味がいい、世の中にあんな奴程、下らない人間は居ない、一層のこと早く往生してしまへ！

七月十一日（水曜日）晴天

艦載機延八百機、関東地区に來襲す。関東西南部海域に母艦群を置き、主

として同地区の航空基地、戦力を破砕する目的らしき形勢、図に乗った米鬼のやり口には重ね重ね切齒するが、斯く近海迄悠々とやって来らしめた我航空・海上勢力の微勢を嘆く。如何に飛機の小さきを感じると共に、B二九の戦力爆撃を恐れず、特攻隊の確保増産に総力を傾注する他に皇國民として祖先に対する申訳があるまい。島田より来信あり、片山は五日に出発し、小川、中野の才山組は富士へ野外演習に行き、内田は授業との事、御当人は長野へ行きさうだとの事。

七月十二日（木曜日）曇

午前中、宇野さんの平安朝文學の話、それから吉沢さんの英訳、午后農場アルバイト。牧草の集積作業、それより今、青木、横田、斉藤と五人でグランド三階へ行く。獐猛に地下食堂ヘライスカレーを食べに下り、満腹して帰寮し、ホールでミルヒを飲み、飯を食ったら完全に沈没す。

○工類一年目、寺山君、昨日グライダー訓練中殉職す。直ちに大学三上外科に入院、今總長以下の学内総力を注いでの看護の甲斐なく、本日午后零時五十五分絶命、昇天せらる。謹みて哀悼の意を表す。八時半より寮内有志によりて追夜あり、冥福を祈りつつ就床す。若き魂魄よ！ 永へに幸あれかし。

（編註…この間、日記の記載なし。この間のごく短期間に出征したのか？）

八月十五日 大東亜戦争此こに終戦す。

畏くも大詔渙発さる、昭和十六年十二月八日開戦以来、激闘四年有半、遂に敗る！ 國敗れて山河あり！ 今静かに静かに過ぎし途を顧みるに、忌まわしき思ひ胸中に往来するのみ。噫！ 悪夢よ去れ、長き悪夢よ！ 永へに去れ！ そして再び平和を愛する日本人の上に訪れる勿れ！ 悪夢より覺めた人々よ、躊躇する勿れ！ 正々堂々と本来の道を歩むべし。鳴る！ 響く！ 悪夢覺醒の鐘の音を！ 長き米英軍の占領があるであらう。だが、器を捨てた、夢より覺めた我々はポツダム宣言の忠実な履行者でなくてはならぬ。文化國として再出発するのだ！ 恐るべきは反動勢力のポツコウ！ 赤化救國の流行、偽民主主義主張者のポツコウだ。戦により疲れた我々は新たな再建に向って眞一文字に進むのだ。戦争中の事は何も云うまい、只悪夢として。然し！ 今後こそ思う事、爲す事、果敢に叫露し行動せん。ミリタリズムは亡びだ。再び「日本人にはミリタリズムでなければ駄目だ」の如き不实な言は避けしめやう。そして何故敗れたか、何が破れしめたか、考究して見やう。覺めたる大和民族の目覺める第一歩だ！ 「幸福なるかな心の貧し

き者、天國はその人のものなり、幸福なるかな、悲しむ者、その人は慰められん、幸福なるかな、心の清き者その人は神を見ん」、「數百年間暗雲の如くアジアの國民を包藏せし、門地と習慣との虐政を斯くの如く奇異に脱し得たる事は將來教育を受くる學生諸子の胸中に自ら崇高なる大志を喚起するに至るべし。青年諸子、紳士！ 希くは皆諸子の最も誠実有力なる勤務を大に要望する所の母國に於て勤勞と信任と。又、それより生ずる榮譽の最高位置に適さんことを勉めよ。健康を保持し情慾を制し、従順と勉強の習慣を養て時機の学ぶべきに遇はづ、學術の何たるを論ぜず、力の及ばん限りは其の智識と妙巧とを求めよ！ 斯の如くして而して諸子は能く重要な地位に適すと謂ふべし」

―クラーク先生、開校演説より―

十月十九日（金曜日）雨

難路悪戦苦闘して本朝着寮す。寮周囲の秋色に暫し驚ろく、寮の諸規約も廃止されて自由な生活になったとの事、戦前の自由の学生生活が送れるのは有難い。早速左記各氏へは通信す。長本三千藏氏、内田平八郎氏、中野政実氏、木下繁喜氏、山田陽太郎氏、細野軍治・治子両氏及家宛。明日より授業だ。余程しつかりせんと駄目だ。充実しそして張切った学生々活へ突進しやう。今、佐藤、青木、横田、堤、高橋各氏と再会す。今、青木両氏の悲壯なる事態に比ぶれば我々は雲泥の差なり。いざ、頑張らん！

十月二十一日（日）

一日中食ったり、ノート整理したり忙しい。相変わらず今、青木、連中と駄べる。午后十時、寒風刺々たる頃突如ストームが始まる。やっぱり寮はいゝ、実にいいところだ。揮一本のモリファイ（編註…恵迪用語化している「盛り＋フアイトか」＝フアイトモリモリの意。以後五個所あり）でスキーを擔ぎ暴れ廻る、鈍才奴の歌声は全寮を揺つてゐる、快適だ。北海道の南瓜は実に美味い、寮の自治が全く許された今日、自主的な日常が気持ちよく行はれる。

十月二十八日（日曜日）

久しぶりに宇都宮さんを訪ねる。快適な天気。自轉車を馳つて懷中にさつま芋二三本、午、夜の二回馳走になり、帰寮十時、帰途太黒氏宅で駄べり。

十月二十九日（月曜日）

一時限二時限の明峯さんは相変わらず。秋山さんは判ったやうな判らぬや

うな？五時限の芳埼さん猛ファイでやる、余り早すぎるぞ。本今朝、井藤氏帰る。昨夕木下氏帰り、これで安心した。井藤氏のお土産、鮭一尾少し塩が甘いとの事、さて如何したらよいやら、家へ送りたいが駄目らしい。夕五時より本科生送別会食、愈々本科生と別れるのだ。就中、竹山先輩の演説は感ずるところあり。「寮は傳統に輝く先輩諸兄の美しき夢（理想）のオアシスであった。その寮で恵まれた諸君がその先輩達の夢を追って学問する。故にこそ、偉大な人物が生まれるのである」と。

十月三十一日（水曜日）

英訳斉藤さん、二時限原さんの時間まで侵してモリファイでやる。お陰でガンツ（編註：ドイツ語の ganz Ⅱ としても、全くの意）耗消す。三・四は体操、午後は第二農場アルバイト、ビート抜き終って南瓜のエッセン快適に食ふ。夕食后、横田と二人して太黒氏宅を訪問す。芋、南瓜、たうもろこし（拙者）、米（横田）持参で彼の室のストーブで炊き乍ら米國女優ナンバーシエン（編註：ドイツ語の schön の綺麗）を搜す。それを彼が今度の明治節に寫生するそう。七時ジャスト帰寮。人口調査有り。本日、山高、福山氏、家より来信あり。直ちに返信を認め置く。明日は大した事もなし。さて、寝るとせん。

昨晚の開識社は余り面白くなし、就中、土方の發言の「何故、北大生に起上る力がないのか？」の問題は興味あった。結局、宇野さんの明言で「北大生は由来、中央と遠ざかつてゐる故の風流雅人めいたところがある。寮歌が卒直にそれを示してゐる。北大先輩の中で、政治家に志したのは凡らくゐない。これが北大の傳統なのだ。内村さん、宮部（金吾）さん、新渡戸（稲造）さん、皆優しい人たちばかりである、この傳統が連なつて北大にはあるのだ、然し、今にきつと北大生の中から政界に覇を爲す者が出でる時があるだらう」と、これに対し論議百出した。

十一月一日（木曜日）晴

一限二限續けて芳村さん、三限西村さん、四限は身体検査、異常無し。午
后明峯さん休講、フライ（編註：ドイツ語の frei Ⅱ 自由、空きの意、英語の free、快適！）そこで帰寮してエッセンを食ひ、又横田と二人で街へ出る。彼飯盒に白米一杯つめてある。先、いづみで振られ、致し方無しに吉田屋に向ふ途中、井藤に会ひ同道して入る。キャベツ、玉ネギのいためたものに肉のついた？もので（二皿で）白米をもり／＼腹につめる。うまいうまい。西五丁目の通り、例の道を夕風に吹かれてフラフラ帰る。実に気分よし、この気

分は一生の忘れ難いものとなるだらう。夜は石狩井、快味！ 青木の室で小コンパーステルケ（編註：ドイツ語の *Stärke* でんぷん、英語の *starch* のことか）馬鈴薯 後、十時半まで芳村さんノート整理、辛し辛し。明日は鮭を持って沈没して宇都宮さんへ行く予定。

十一月二日（金）

今日は朝から沈没、化学ノートの整理を少しやってあとはグーグー寝る。午前十時五十分札幌発で井藤氏寄贈の鮭を持って宇都宮さん訪問、厚別から随分ある。約一時間にて到着、非常によろこばれる。何時も乍らこの家庭の明るさには郷愁をそゝはれる。晩飯後は雑談に花が咲く。同居して居られる新島さん（元農学部教授）は仲々面白い、札子さんに帽子の破れを縫って戴く、多謝々々。彼女曰く「予科の人は誰でも隠れて煙草のむのね」と。

十一月三日 明治節の佳き日

早朝、宇都宮さんを辞して札子さんと同道で札幌まで来る。拝賀式に出席せんとしたが寒いので止めた。そして太黒氏宅へ赴く。ストーブを炊い暖をとる。谷氏来る、やがて今、青木両氏来る。そして又、新沼、木下氏来る。大会合だ。薪割りをやり南瓜をゆで、更に木下氏持参の小麦粉でパンを作る。美味々々言ふばかりなし、そしてラーフェン（編註：ドイツ語の *lachen* 笑う、*Raffen* のかきあつめるか？）を猛烈にやる。そして人生と恋愛、科学者の在り方、医学者の向ふ道に就いて語る。今日は有意義な祭日であった。夕は祝賀會食あり。

十一月四日（日）朝起きたら眞白、遂に雪國へ来た、寒々々々…

たまらぬのでまた太黒氏宅へ行きストーブにあたる。今日は静かに心を落ちつけてレコードを聞きつつ思索する。今日此頃の内地の食糧事情の逼迫が新聞に出てゐる。あゝ日本はいつまで不幸なのだろう。そして日本人の前途！ 暗だ暗だ。約二千万人の餓死者か？ 果たしてこれでよいのだろうか。故郷の父母、兄弟、友人よ、頑張れそして多幸を祈る。

十一月五日（月）本日、一・二 明峯さん 一・三 秋山さん、

いづれも片方の耳から入って片方へつゝ抜け： 午後は芳崎、斉藤、半分、夢ウツツで過す。札幌へ約一万表のさつま芋が入荷したとの事で午後はさつま芋の代用食、余り嬉しくないが、道内の連中よこんで食ってゐる。チエツ、イマイマイシイヤツダ。夜はモリファイでやる。

十一月八日（木）

今日は一日中ノート日、消耗授業日。芳村さん、西村さん、石塚さんと打續いて消耗の一途、余りユウウツなので午飯後街へ出て林檎を四ツ買って帰り、石塚さんの最中、最後席でボリボリやる。目黒と二人で美味い。彼「今後、現役軍人の復員者は教職に立てない」とかい乍ら下らないことを駄べつてゐる。放課後、横田と二人で街へ出る。例の行動にでる。寿司や、吉田やと荒らし腹一杯。帰寮後、又、室で南瓜を煮たので完全沈没（編註…サボる）！

十一月九日（金） 曇天

今日はモリファイだ、一時限安保の英文法、二時限山岡の独文法、三限宇野さんの人文、四時限原さんの独訳、午前中でヘトヘト。午後は癪に障ったので小宮さんの物理沈没す。代返林田氏、雨天体操場で進駐米軍のバスケットを観る。ストーブにあたり乍ら快調也。六限は三戸さんの武道、放課後、又々横田と出街寿司やで飯を食ひ、例のコースを辿って帰る。今日はどうも気が進まないので早く寝る。明日は土曜日、明後日日曜、冬休みは何時からか？…十二月一日からだと言う奴もあるし、十二月十五日からだと言う奴もいるし紛々たる迷説！

十一月十日（土）

下らない半日…つまらない半日、午後は寮のアルバイト、体菜の収穫、ガッツ消耗する。夜は俺、目黒、林、皿木の四人で南瓜コンパ、炊いた南瓜無慮5貫メまたたく間に平らげてしまった。後、観映「海の呼び声」杉村春子の好演技に感ず。

十一月十一日（日）

寒い（寒い）嫌な日曜日 八時起床。終日シトシトと雨が降る。いつになったら晴れるのだろう。太黒氏宅訪問、ストーブにあたる。夜は丹前にくるまって机に向ふ。スチームも通らない寒い寮生活、あゝ嫌だ嫌だ、帰省の風聞がいくつにも分かれて飛ぶ。果して何れが眞偽やら？…在浜諸兄、花岡先生、金子先輩、逗子の治子に音信発す。又、明日から授業一週間、外はエルの林から北風が窓につきあたって、来るべき冬の吹雪の俣ばせてゐる。

十一月十三日

昨日来の降雪で全く寒い、窓から見渡せば一面の銀世界。丁度、横浜の降雪程度。やがて冷厳な冬がやって来るのだ。寮内に頻りに休暇、試験の風評が飛ぶが果たしてその眞否は奈辺にあるや、アルバイト出勤説が起り出したが、余程しつかりせんと駄目だ。一時限の小宮さん沈没、余り寒いので布団の中で讀書していたら既に時は十時。まゝよと次の原さんも沈没（尤も小宮さんは代返）する。三・四の化学から授業することにした。明日は全学排球大会で休校、果たして何をして一日過ごすか考えものなり。俺はつくづく寮生活の無意味さを味わって来た、考へる事とて無し。エッセン、休みの事、噫々何を考へたらよいのだろう。只々無意味に毎日を過ごしてゐてよいのだろうか。近頃新聞紙上を埋める食糧危機の記事はたしかに影響している。「食足りて礼節を知る」で食糧不足で何うして道義日本の確立が得られやうか、早く食糧事情が緩和して平和日本の再来を祈って止まぬ。昨夕、逗子の叔父から来信あり。堀内さんのバターの件なり、善処せん、考へれば考へる程訳の判らないことが増えた、在ハマの諸友から音沙汰無し、何してゐるのだろうか、今年の正月は何處で過ごさむ？両親の元でこたつにでも入って寝正月もよきか、早く帰札して来てスキーでもやらんか、熟慮千万：夜は首藤の家へ行く、同伴木下氏。先づ、彼氏不在で兄なる人と話す、大いに談論風発す、愉快也。彼は兵学校出身の所謂ミリタリズム教育を経て来る人間なり、偏狭なる思想の持主と思ひしに、そは、我相違と違ひ仲々もって快人なり嬉し、後、首藤氏帰り大いに駄べる。彼の妹なる元横浜は紅蘭女学校に在学しありとの人に初見参す。仲々以てシェン（編註…学生用語でドイツ語の schön の綺麗）也。茶菓の接待に預り、九時四十五分迄駄べる。帰寮十時四十分、又土曜日（十七日）の再来を約して。

十一月十四日（水）

全学排球大会のタメ休校。この頃、俺は科学者の在り方について考えてゐるが、どうも分らない。九時より屋内体育場の全学排球大会を見にゆく。予科各チーム振るはず。わずかに医類チームが一回戦に医専を破ったのみ。然し、これも二回戦に惨敗した。午になったので長田と二人で三越へ代用食を喰べにゆく、うまくなし。後、又バレーを見、太黒氏宅へ立寄、林檎三つ嚙り帰寮す。恒例南瓜コンパ開催、沈没。

今日旧師天下先生から来信あり、「君の将来を信じ祈って止まぬ」とあり恐れ入る。友情、難しい問題だ。眞の友達！ 噫、俺はゐないのか、くだらない世の中だ。人を陰で排侮するこんな下卑た行爲があらうか。実際、俺はつくづく嫌になった、信ずる人として無し。只信ずる者は神のみだが彼女は科

学者に宗教は不要だと言った。俺はそれをはねつける自信がない。宗教、潤いのある人生！「非人情な科学者」そうだこれだ俺はこうなるのだ。思索する人間、考える人間として生きるのだ、純情な彼女よ、愛し君よ、俺は今一人の悪魔によって君が汚されんとした事を知った。然し、君はそれを知ってゐるのか、多分知ってゐたであらう、君よ許して呉れ、君を信ずる前に俺は考えたい。だが、俺は君が飽く迄、清浄無垢な君である事を信ずるぞ、石狩乙女、いい名だ、美しい可愛い名だ。噫々あゝいつになったら悩から解放されるのだらう。苦しい夜だ、考える事を与えた神よ、今夜だけは俺は解放して呉れ…。

十一月十五日（木）

二年目正井氏昨夜帰る。一時限、二時限と續けて化学、何が何だかさっぱり分からぬ。頭の中でこんがらがって残す事なく突き抜けてゆく。三時限以後放課迄、明峯さんと石塚さんの博物、明峯さんは性の決定について、石塚さんは始めての授業なので雑！大部分眠る。外には寒風荒み、みぞれが窓につき衝る…又々、変な氣持に襲はる。ホームシックか、じっと窓外の景色を見つめる。大きな風呂敷包みを背負った女の人がローンを横切って行く、どんより曇った寒い初冬の夕、手稲、藻岩の山々は銀の薄化粧だ。遠い故郷を偲ぶ。遙けき両親、同胞の事が思われる…噫、下らない人間が何故こんなに多いのだらう。そして俺も下らない詰まらない人間なのだ。男児と生まれて恥ずかしくないものであらうか。一体何時になったら俺達は濁世から抜け切れるのだらう。

○ひさかたの 天みつ空に照れる日の失せなむ日こそ吾が恋止まめ

…万葉集（作者不詳）

○幼婦（おさなご）は同じ情に須臾も止む時もなく見むとぞ思う

…同上

○念はぬに到らば妹が歡しみと笑まむ眉引おもほゆるかも

…（卷十一 二五四六）同上

○斯くばかり恋ひむものぞと念はねば妹が袂をまかぬ夜もありき

…（卷十一 二五四七）同上

十一月十六日（金） 曇時々雨寒風すさまじ。

五時限六時限の小宮さん沈没して帰る。やがて目黒と二人でミルヒを買いに出る。行先遠し琴似の村外れ、水筒を肩に寒風に吹かれてポプラ並木を行く。線路を渡ってサイルで二人で約五合鯨飲し、水筒に充し夕景の郊外を帰

る。快適の初冬の夕…。今日、宇野さんの「世の中に別れなくてもよいものと別れねばならぬ事程悲しい事はない。例へば、父母、兄弟、親友との死別等である。この事程悲しい事実はない。然るに日本は今それに直面している、それは日本の過去に於ける凡ての楽しい事実を別れねばならないのだ。こんな悲しい事はあるであらうか、別れるのだ。一切の過去の夢をかなぐりすてて、日本はそしてより悲しい未来へ突込んでゆくのだ」と言ったが、これを聞いて俺はなんだか胸の中がつまってしまった。悲しい民族、日本民族！ 数ヶ月前迄は理想に輝く楽しい日本民族であつたのに、あゝ、この事はこの俺達にまで言える事だ、悲しい学徒！ 然し、民族が未来を失つたとは云へ学徒まで未来を失つてよかるべきか？…学徒が理想を失つた悪弊は分かり切つてゐる、俺は進言する、全学徒よ！ 例え祖國が悲しくも未来を失ひたりとは言え、学徒は断じて理想は失はざるべからず、光と愛によつて未来に楽しい希望を抱くべし、これ以外に学徒の生くべき道全くなし、民族とともに衰退する勿れ！（冬休暇の詳細が発表さる。即ち、十二月十六日より一月末迄四十七日間、この長期休暇を如何に有意義に過ごすや、然し、その前に試験が有るや否や…）

十一月十七日（日）快晴

安保さんと小宮さんだけ出て後は沈没。午後は水筒を携げてミルヒを買ひに行き、夕食後木下と須藤氏を訪ねる。鰻で一杯馳走になる。美味々々、すっかりいい気分になる。持参のミルヒと澱粉でミルヘンシテルケ（編註…ドイツ語の *milchenstärke* ≡ 恵迪寮用語？のジャガイモをミルクで煮たものではない？）を作つて戴き皆と食べる。御家族始めての事、恵迪寮の權威あるエッセンの一つのミルヘンシテルケを知らぬとは情けない。然し、大変美味也との言を戴く、下らない事駄べり、九時四十五分辞去す後、帰寮後参号室で林と南瓜を焼き乍ら駄べる。結婚、養家、人生問題に就いて論ず。俺達は教育程度が高まり、人生問題に近づきつつあるのだ。過去に於いては考えられなかったこの問題を真剣に考へなければならぬ事となつた、深更一時まで駄べり就床す。

十一月十八日 曇天

朝からどんより曇つた陰気な天気、一日の計とてなし：

何のために食ひ、何の爲に寝るのか俺には分らない。噫！ 人生誰かよく解かん（編註…昭和十七年恵迪寮歌「春来にけらし」二番の歌詞の一節）。讀書勤勉は君子の事也か、道徳、今の日本にとって恐そ不可解な言葉だ！ 日

一日と深刻化する食の問題、希望なき食の問題、冷い、暖味の豪もない現実の日本、それなのに何たる事だ。道義の墮廃もないものだ。俺達はこの先如何したらよいのだろう、考えざるを得ない理想と現実！　いつまで悩んでも分らぬ事也。

十一月十九日(月)　晴

試験の有無で生徒間の輿論が乱れ飛び、これを尻目に教授会の意見纏まらず、予科長の帰学遅れ決定的段階に入らず、だんだん深刻化する寮のエッセン、石炭と共に慎重な問題とはなった。こんなに悲壮なエッセンで何の試験だ！　断然試験止めるべし。そして休校せよ！　実際、悲壮な世の中になつて来た。今日はまた終日充実した日、語学三時間、数学三時間の猛ファイだ。六時限の吉崎さん終る頃、連日の睡眠不足が祟ってか相当な疲れを覺えた。夜は化学のノート猛ピッチで完成する。目出度しめでたし。朝、午後は軽食でよいが夕食だけは正餐にたっぷりして貰いたい。帰省十六日より：一月末日まで早く来い冬休み、待遠い冬休み、早く来い々々々々。噫！　待遠い事よ！　今度の休日には又宇都宮さんへ行つて来る哉。

十一月二十一日(木)

今日は午後の石塚さん沈没して林田、目黒と三人で東宝へ行く、例の「狐の呉れた赤ん坊」観映、阪妻(編註…俳優阪東妻三郎)主演又久方ぶりの彼の好演技、一度に溜飲が下がった。阪妻ならでは見られぬ場面が多く出て来た。夜は四号室でエッセン作り、快調也。ジャガイモ、シテルケ、昆布等色々作り且食ふ。明日から三日間休暇、何もする事なし、試験は無いと発表されたし。十二月にでも入った、ポツポツ帰省する生徒も出て来るだらう。俺は最後まで寮に立籠り、残少ない寮生活を味ふ心算なり。道内の者は家が近いが俺達内地産はどうも辛い。目黒が「帰省の日の近くになったら寝れんだらう」と言ったが「糞！　大丈夫よ！」と言ったものの：嬉しい帰省の日よ、昨日藤沢の戸沢から、今日片山から来信あり。この処藤沢から續けて来る。いつ見ても懐かしいのは友の便りだ、健在なれよ、友よ。

十一月二十三日(金)　新嘗祭。

今日から三日續きの休日なので皆帰省または援農地へ行く。俺は寮に立籠つて覺醒の歌唄ふ也(編註…昭和十年寮歌「噫妖雲は」の一番の歌詞に「覺醒の歌高誦ふなり」とある)。午后林田と二人で植物園を逍遙す。冬枯れの寂寥なる原始林中を「都ぞ彌生」を高唱しつつ歩む、快適也。温室の菊は久

方ぶりに飢えた俺の目を樂しませて呉れた。西十五丁目で林田と別れ、松村さんを下宿に訪ねたが不在、そこで踵を返して首藤氏宅を訪れる。彼増産に敢闘中、スルメを嚙り乍ら駄目べり帰る。夜は四号でエッセン作り、この処連日就床零時過ぎ、然し、起床八時だから事実上八時間も睡眠してゐる訳也。明日は臨時休業。

十一月二十四日（土）

昨日に引續いて好調な天気。午前中四号室で、「南寮階上管弦樂團」初演奏、サマチャン節、草津節、小原節等仲々威勢よし。午后は「神変じゃ香猫」観映、面白く無し。

彼女へ（過ぎし中学時代の思い出のつれづれに）

エルムの原生林に朧々と月が冴え渡つてゐる。しんしんと大石狩の野氣が迫つて来る。去り逝く秋、迫り来る冬、僕は独り窓辺に寄つて淋しい郷愁に浸つてゐる。窓！ 月！ そして二階！僕は貴方の事を思い出した。美しかった、優しかった君の事を！共に学び苦しんだ君の事を！噫！中学受験時代僕は高校四年突破の完望に燃え立つて、君は女子大入学の張切った乙女心を秘めて毎日々々学び励んだあの頃だった。中学三年だった君と僕、その間には眞剣な学の探求以外に何一つやましい事のなかった二人だった。互いに教え励し合つた二人だった。僕は英語を君は國文法を教え合つたね。たしか君は國文法については僕の及びつかない程熱心だったね。深更、二時三時僕はきつと下を見た。すると君はしきりにペンを動かしてゐた。何糞！女学生などに負けてたまるものか、負けん氣の僕は女などに負けるものか！と眠つたい眼をこすり上げて机にしがみついたものだった。しばらくすると下の君の電気スタンドがパツと消えた。「勝つた！」君より多くやつた。僕は少年らしい優越感に胸を高鳴らせたものだった。時たま連日の苦闘の疲れた僕は君に兜を脱いで床に入る時は一心不乱にペンを動かし辞書を引く美しい君の姿に健やかなれ！と祈りつつ上から見下すのだった。君よ、ほんとうに何一つやましい事のない学問にひたむきな情熱を捧げ合つた二人だったね。そして日曜日に君と話す時の楽しさ、心から問ひ答へ合つた中学生時代らしい二人だった。毎朝あの停留場から君は西へ、僕は東へ別れた事も忘れられない思ひ出だ。打連れて文展に行った時の事も忘れられない。君は日本畫が好きだったね。少年と少女らしい純な熱情に勉強に溶け合つた二人だった。噫！君はどうしてゐるか、憧れの白線生活に入つて夜ふけになると僕は君の事を思ひ出す。憧れの寮生活！そして夜ふけの窓辺に寄つて君の事を偲んでゐる。たしか君も女子大へ入られた事と思うふ、そして好きな國文

学でも学んでおられるだろう。僕は君が飽くまで学に生きる乙女らしく生きられん事を祈って止まない。あの中学女学生時代の事を忘れずに：君は僕が故郷を離れてこの北海の天地に来てゐる事を知らないかも知れない。然し、僕は君とあんなにもひたむきに受験時代を過したお陰でこうして恙なく懂れて止なかった白線生活に入り、感激と思索の毎日を送っている。もう永久に君と会えないかも知れない：凡て中学女学生時代の楽しかりし夢として：然し君よ、いつまでも丈夫であつて呉れ、冬になると風邪を引いた君だったが：僕もきつと成人して眞の仁者として生きる賞悟だ。そしていつも過去を振り返る時、懐かしい中学時代を思い出し、美しかった君を思ひ出し君の幸福を祈ろう。どうか君もあの頃の学問に対する情熱を捨てないで呉れ給へ―北海道帝大予科医類 恵迪寮にて―

十一月二十五日（日）

この頃の僕の楽しみを列挙して見よう。第一に朝起きると南寮階上の便所で小便をし乍ら窓越しに明けゆくグラウンドの情景を眺める事だ。うすくもやのかかったローンの上を鳥が一羽低く飛んで行く、青いローンの上に活動の朝がやつて来たのだ。そして僕もこれから一日の日課に飛び込んで行くのだ。何とも云われぬ楽しい朝のとき、第二に暇な時に木枯風くエルムの原始林を追遙ふことだ。「都ぞ彌生」を口ずさみ乍らあてもなく林の中を行けば可憐な小鳥が懷しげに近寄つて来る。絶体内地では味へぬ白線生活らしい一時だ。第三にコンパだ、飯盒に炊いた南瓜、馬鈴薯をつつき乍ら、言いたいこと考へる事を当り構はず駄べるのだ。あげくの果て激昂すれば、「馬鹿やろ々々々々」、「止める糞たれ」とさえ言ひ合ふが聞く方も言はれる方も平氣だ。「何を鈍才、黙つてゐろ！」と返す。傍らで見えてゐたら、丸で喧嘩だ。然し、そこに溢れる友情の泉があるのだ。言ひたい事、聞きたいこと、知りたいこと、考へてゐる事何でも構わず駄べるのだ、そして友の意見、論説、思想を知り思索し訂正し合ふのだ。これこそ、コンパこそ白線生活でなければ味へぬ氣儘な愉快なときだ。第四に更けゆく寮の夜、窓にもたれてエルムの原生林の上を冴え渡る月を眺て暫し郷愁に耽ることだ。あらゆる事が頭に浮んで来ては去つて行く、ちつとも眠くない頭脳はびんぴんして去つてゆく。そぞろに故郷の両親の事が思はれてならない。故郷を離れた誰でもが浸り得る感傷的なときだ。

十一月二十六日（月）

残る第二学期も余すところ三週間だ。そして待望の冬休み大いにプランを遂行せん。東京の諸新聞を見ると東京諸学校の深刻な食糧対策に就いて出てゐるが、要するに食はないでは学問も道義も何もない。首相邸の倉庫に泥棒が入ってウキスキー、洋煙草、その他貴重食品を盗んで行ったとかの記事を見ると全く嫌になる。そして買出しの強行取締りだなどすでに政府要路者に熱がないのか。夜、猛烈にぬるい湯に入ったら体がブルブル震へる位寒い、たまらず床に入る。いつのまにか夢中を逍遙ふ。八時頃起きて独語をやり十時再床。

十一月二十七日（火）

一限小宮さん、目黒と一番後へ陣取り、スチームを抱いて横になり全く一時間を眠り通した。小宮さん最後尾の席からグーグーいびき声が聞え、煙がモクモク昇ったのは驚ろいたろう。二限原、幸運なる哉！遂にあたらず、冷汗三斗！壁頭「並木君！」、次、古賀、堤、遂に終る。三・四限の芳村さん休講。幹事の八木沢さんとの交渉成つて三限八木沢、例の孔子の論語。今日は大いに脱線して本年度食糧事情の現状に就いて一席、それで終わり。今日はこれでフライ！快調！夜は寮生總會、幹事會更迭の件、舎生大会復活の件に就いて。自治精神の再検討より考へ、完全なる自治寮の確立が目下の急務である故に今回のこの舉は割合に有意義であつたと思ふ。

十一月二十九日（木）

昨夕からの降雪で忽ち銀世界だ、雪の上を登校する。（と云つても一、二沈没）と北海道へ来たと云つた感じがする。北溟城（編註…恵迪寮のこと。大正十五年開学五十周年記念寮歌「爪紅の黎明の風」の歌詞一番に「北溟の城花も散る」とある）のいとなみの重大事の一たる雪の登校、あゝ北國へ来たと云つた感じがする。千石は豊平館でパンを食ひ、木下の二人で駅へ行く。切符入手の件で本州行切符は全然駄目！連絡船缺航！あゝ無念！依つて気晴らしに東宝へ「三味線武士」観に行く。嵐寛寿郎主演、久方ぶりにアラカンの好演技快適々々！然れども休暇近くと云ふに切符入手困難！あゝ神よ、我に一片の東京行切符を与えたまへ！そして安らかに家路に着かせ給へ、我の唯一つの願ひ！あゝ、万軍の主なる神よ。

十一月三十日（金）
癡癡

遂に切符入手見込つく。本日、八時札幌駅旅行相談所に行く。癡癡（編註…恵迪寮では癡癡をねいもうと読み、しつこく、粘り強く、強引にの意）に

頼む申告制は連絡船歟航の爲受付停止との事、受付再開は来月六日頃との事。然るに俺と林田氏必死の努力遂に結実す。来月十日頃買えることになる。彼の助役氏に感謝する多謝々々。今日は月曜日の予科生徒会の予備会として種々協議事項可決の爲、三組のクラス総意を纏める。復員学徒クラス轉入の件、校内喫煙許可の件、長髪許可の件、冬季休暇繰上げの件、校舎内下駄履自由の件、出缺席取簿廃止の件、北大予科独立（札幌高等学校校化）の件、予科終了後、轉科轉学自由の件、内地行切符を学内で購入する件、学校所有農園の開放即ち收穫物の行先明示、そして收穫物を以て寮生・下宿生に代用食の給与をする件、校舎内の整備の件、言々百論千出、夫々総意を可決。来るべき生徒大会に提案して同志に叫合以て速やかなる自由的学生々活に入る事になった。学生なくして学校無し、学園の完全なる自治化こそ緊急欠くべからざるものだ。そして学徒の自覺と相俟って新日本の先端を切るのだ。午後の学内籠球大会は医類一年組、期待に違はず猛ファイで頑張り、医專組を破り第一回を物にする。十日に帰れる事になるといよく落着かぬ。何だかそわそわして来た、早く家に帰っておふくろの顔が見たい、そしてゆっくり考えたい。夕刻、青木と二人で鳥君へ行く。牛の臓物、焼鳥、計五円四十錢也。全く腹一杯になる、仲々美味い、又行く事にした。

十二月二日（日）朝からしきりに雪が降ってゐる

いよく札幌の街も冬らしくなつて来た。昨夕、太黒氏宅訪問の帰途、深更の雪の街を帰途に就いた時の感傷は忘れられぬ。朝、家より速達と小包相次いで来信あり、快適！小包はほしさつまいも、故郷の香りを満喫す。嬉し、速達は待望の旅行外食券、いよく活躍の秋来る。午后、林田と二人で街へ出て衆楽で飯を食ふ、三人前宛食ったら完沈！後パンを二個持つて村松さんの下宿を訪れたが又不在、引返す。冬休暇も五日か八日からとの事、遅くとも一週間繰上げは確実。道内の者はよいとしても内地の者は悲壯なり、何しろ切符の問題これなり。休みに入ったら道内の者はどしどし帰省するだらうが、内地の者は帰れぬのだ、如何せん。幸に、俺は八日乃至十日には買えるのだからよいが：大体休みになったら早速活躍開始してエッセンを仕入れ十五日には遅くとも乗車する予定だ。嬉しいので落着かぬ。

十二月三日（月）

昨夕の第十二期幹事長選舉推薦演説会は何となく落着かぬまゝに了つてしまった。眞の高校寮生活の新発足に当り我々は大いなる難関にぶつかつてしまった。今日は第一限は斉藤さん、壁頭、あてられたしまった。正に晴天の

霹靂！ うやむやの中にやる。途中二、三個所手迷ったがどうにかやり終らせた。「よし、そこまで！」の声にほっとした。中学時代英語はやったからよいものの仲々消耗する。午後は生徒大会で授業休止。そこで目黒、林田と病院の食堂で食ひ且駄べる。夜は寒いので早めに布団に潜る。生徒大会で大体今週一杯と決まったとの事、もう何もやりたい事なし。大いに栄養不足を補ふために寝るべし。睡眠十時間大いによからん。そろそろ寮生もぼつぼつ帰って行く。懐かしの父母の膝へ、気もそぞろに帰って行く。あゝ、俺も帰り度い、それは又いつの日にか？：

十二月五日（水）

待望！ 冬季休暇到来祝賀。帰省訣別、第二学期終了。昭和二十年忘年会、第五号室親睦コンパ開く。南瓜にミルヘンシテルケで盛大にやる。これで最終コンパだ。室住人とも当分お別れだ、又逢ふ日まで：、共に元気にやらん。休み中も南寮五号室の気力を忘れずに、南寮随一の猛ファイ室を謳れた同人よ、いざいざさらば：盛なる哉この宴！ 飲め！ 食え！ 歌へ！ あゝ、はかなき一夕の宴！ 若人よいざさらば！

十二月七日（金）

昨六日夜、札幌駅発で厚岸旅行企つ、同志高橋。久方ぶりの旅らしい旅だ。学生時代、特に予科時代は大いに遊ぶべし。悩みも何もしばし消える。快適の旅行！ 厚岸旅行記

寮に於ける野球部の結成式に時間をとられて吾々が札幌駅にかけつけたのは十時だった。根室行の列車の混雑に窓から飛込んだ。岩見沢、瀧川、富良野は夢の中に過ぎ、目が醒めたのは帯広「腹がへたったな」と一決して料理室から辨当を購入す。流石、世界三大漁場の沿岸を走ってゐる汽車だけあって菜もでっかい、鰯の丸焼きや沢庵と並べてある。

十二月十六日

午前十時発函館行で出札。思い出多かりし寮生活にもしばし別れて帰心一路矢の如し。同日二十一時函館着。

十二月十七日

鮮人、華人輸送の為、連絡船は物凄ひ混雑、直江、荒川両氏の誠意ある交渉の結果遂に十七日二十一時出航可、連絡船に乗船出来。

（編註…当時、支那人の代わりに中華民国人と言う意味で「華人」を使い、「鮮人華人」と総称として使っていましたから。戦争末期、日本の働ける男子はあらかた徴兵され、兵器製造に不可欠な石炭の採掘に支障を来たし、やむなく中国朝鮮から捕虜その他を強制連行して北海道の炭鉱で使っていました。終戦後、進駐軍のおそらく、何月何日までという期限付きの命令で、彼らを全員本国に送還する必要が出て大混雑していた光景は貴重な戦後史の一行です。筑波大学名誉教授 内藤裕史）

十二月十八日

八時青森着、林田氏と別る。午后零時四七分発、福島廻り上野行に車中の人となる。同行伊藤（青山学院出身）、岸（明治学院）、黒沢（東高師範附属中）、林（原増中）の諸君。列車遅延（遅延？）に遅延を重ね上野着翌十九日。

十二月十九日

夕十七時一寸前直ちに諸君と長途の疲れを慰し暫し別る。再会を確約して後、新宿より小田急で帰宅す。夢にまで見た懐かしの家郷！両親の膝元へ帰る

十二月二十五日 ✕マス

帰宅してこの方休養に専一して家より出ないので久方ぶりに出る。行先愛宕石田は小田原さん宅、大山の麓、眺望よき絶好の場処。始めに係はらず歡待さる。茅ヶ崎時代、海水浴に遊んだ頃とは変わりすっかり成人した洋子氏には驚く。あの頃はまだ女学校二年の少女にすぎなかったのが、今日会ったら「これでも女学校を卒業したのよ」と言ふ。考へて見れば洋子ッペ、洋子ッペと云った時代から既に四年は立ってゐるのだ。早いものだ。昔ばなしに花が咲き、洋子氏心遣しの夕飯を馳走になり、後、愉快にトランプ、かるたに興ず。午後九時再来を約して帰る。人生流轉！夢の如し。俺に取って凡ての事を教へ呉れたのは彼女だ。あの時、あの場所では俺は中学生、彼女は女学生、あゝ凡てが過ぎ去った。あの時、あの頃、あの処で彼女の…今はしなくも彼女に会って、俺はあの時の事を考えるのが怖ろしい。彼女は何も言わない、俺は云わない、ただ一言「随分変わったわね！」と。

十二月二十六日（水）晴後曇

アルバイト、昭和二十一年度、学窓雑感。

一体俺の心境は如何なんだろう。今度の帰省位悩多い休暇はない。誤解だ々々々！ 怖ろしい誤解だ。然し、俺は別れた。別れねばならぬ運命だ。彼女は云ふ、二重人格だ。彼女は云った、恋愛をもてあそぶ勿れ。彼女は云った、貴方は不誠実なり。彼女は云ふ、女を侮辱する行爲は止めよ。

噫！ 人よ嘆く勿れ、吾公明正大、唯、勉強あるのみ、唯愛あるのみ。

「人間の心の底には不滅の光があり、美しさがあるといふ事は眞理である。しかし、それと同時に人間の心の底には滅することの出来ない暗があり、醜さがある事も眞理である。私達はこんなにまで善人があるかと驚く事が出来ると同時にこんなにまで悪い人があるかと驚く事も出来る。全く人生には無上の善人もあれば無下の悪人もある。善人ばかり見る事の出来る人は幸福であり、悪い人ばかり見なければならなかった人は禍である」。

二月三日 節分

早朝六時三十五分發で横浜へ行く。ピース三箱入手、当分嬉しい。福山本夕出京との事、依って午后四時半上野まで見送る。例のグループ、彼の心境を思ふにつけても気の毒ではある。幸いあれ！ 君よ、兄が前途に幸あれ。

二月四日(月)

午前中、自轉車を馳ってミルヒ買に行く。獨特の道をガタ々と行く。「杉山様、今日は誓って牛乳のみません」、それから武藤さんですっかり腰を据えてしまひ、さつま芋、南京豆、おまけに午飯まで馳走になる。恐縮々々、午后二時頃帰宅。そしたら井上善之氏来訪さる。又、小田原女史及び洋子氏来訪さる。種々雑談の後、帰宅さる。又午后五時近く、平本保氏来宅さる。何と客人万来の日よ。夜は母さんと武藤さんへお風呂を貰ひに行く。熊沢天皇の笑ひ話に花が咲く。厚岸の井藤より来信あり、目黒からも来信あり、彼ら相変らず手がつかぬらしい。悲哀々々、何処も同じ秋の夕暮れ：

「私、ほんとうに何もかもお世話出来るやうな信頼、尊敬出来るお兄様が欲しいの。女の感情をもてあそぶやうな不誠実な人嫌ひ。貴方に私の云ふ事がお分りなる」

分るもんか、分るもんか！そこが分らないのだ。学生時代の男女の交際！一体各自どんな感情で交際してゐるのだろう。

「男女間の友情位美しいものはない」

友情！ 男女の！ 分らぬ。どうしても分らぬ。彼女の云った言葉、又彼女は云った、噫！ 分らない、たしかに俺は自暴自棄だ、俺には運命の青春

しかないのだ。

二月六日（水） 天候曇

実際若い時代といふものはどうしてこんなに変わこなものだろう。それで勇んでその事にぶつかってゆけるのだ。楽しい時代、悩める時代、あゝ若い時代：今日彼の女は言った。

「貴方は実につめたい感じのする方ね。この間も電車の中でお会いした時、何だかお側に居るのが悪いような気がしてならなかったわ、そして妾のお話しを馬鹿にして聞いていらつしやうやうな気がして……。それに貴方はいつも何だか考えてゐらつしやるのね。遠い遠い妾などの及びもつかないやうな事をね。だから貴方が妾に冷い人のやうに思はれるのかしら、でも：こうして二人でお話してみるとそんな気全然ないね」

冷たい感じのする人、いつも何か考えてゐるやうな人、俺は今日の彼女ばかりでなく、いつかもそんな事をSの人が言ったやうな気がする。そうだ、たしかM子だ、H子もそんな事を言つたつけ。何も俺はそんな事を気にする訳でないが、どうも異性に同じやうな事を言はれると一寸気になる。つめたい感じのする人、若しかするとさうかも知れぬ。一体全体女といふものは俺には分からぬ。然し、俺は彼女の気持がよく分かる。一層：？ 然し、Kが言つたやうに男が眞実になつて、愛する事の出来るやうな女は矢鱈には居ないぞといふ事が身に沁みる。一度、眞実になつてぶちまけてみるか。然し：彼女は確かに俺に対して：があるらしい。俺は断言する、俺のつたない過去の経験から断言できる。だが俺は過去の凡ての事から一寸考えて見やう。尤もそんな事では眞実に彼女に対して愛がないからだ： 然し、下手すると彼のMに対する人格の侮辱になるかも知れぬ。何を考えてゐるのか！ 馬鹿野郎、貴様は男だぞ：（二頁切取られている）

「学者肌のタイプよ、いつも一沫の淋しさを含んだロマンティックな人に見えるのはそれが近づき難い冷厳な人に見えるのね、何時も何かしら感傷を追つてゐるやうな：妾もさういふ人になりたいわ、だって妾さういふ人好きなんですもの……」

二月十日（日）曇

昨日来宿泊の中田氏それに昌兄、余、三人兼て企画中の逗子訪問を企つ。原町田発十時五十二分也。横浜にて降り、駅前なる食堂にて午餐を共にす。曰く、定食一円、お雑煮一円五十銭也とグロテスクなる味を押し込み、余、昌兄出づ。残るは中田氏のみ。彼、最後の一滴まで飲まんとしたるなり。や

がて市電にて来るは横浜一の野天市なる野毛坂也。曰くブラックマーケット、曰く大衆市場、曰く露天市、曰くニコニコ市場。噂に違はぬ大盛況なり、何も買ふ物無し。就中、見世物を無料見学したるは快適なり。ハマに訣別を告げて出づ。

やがて来る相州は逗子みかん、貝ばしらを土産に久木なる叔父宅を訪ふ。久方ぶりに叔父と卓を囲んで杯を重ね、又、良からん。心づくしの馳走に舌つつみを打ち、暫し余興大会なるものをやり、大いに興ず。

二月十一日 紀元節(月) 曇天

明ければ曇なり。紙上に賑ふ、紀元二千六百への疑惑！ 六百のブラック、何にはともあれ楽しい休日なり。治子、健治を同伴して葉山なる中田氏宅を訪ふ。快調なるエッセンにありつく。後、帰逗して夕飯を叔父宅で馳走になり、七時四十二分發で出ず。順調に帰宅す。時に午后九時二十分也。

二月十三日 快晴 朝からポカ々と暖かい一日

午前中は薪割、午後は定例の小田原さん行き、正面に大山の雄姿山又山の丹沢山塊の背後に男らしい雄姿、何かしら胸にときめきを感じる。そして暖かい午后、やがて来るべき春の前の何とも云えぬ思ひだ。春のときめき、来るべき春の暗示！ 青春だ！ 若いものの特権！ 春のときめき！ それにしても良い天気だ。どうしてこんなに素晴らしいのだらう。今日は初午だ。それに好天気、小田原さんで赤飯を馳走になる。総選挙も近づいて第一関門たる被選挙権者の立候補資格確認書の申請も了って、嵐の前の静けさを偲ばせる。夜は母さん、昌ちゃん、武藤さんへお風呂、それで四朗と二人で放送劇「夜光る顔」を聞き乍らお豆をポツリポツリやる。暖かい冬の夜だ。

二月十四日(木) 快晴

昨日小田原さんからの帰途愛宕石田の駅で面白い紳士に話かけられた。「これからはいよく若い人の時代です。君のやうな前途有為な青年にしっかりとやって貰はねばなりません。世界中の何処の國からも信頼され尊敬されるやうな日本を建設して貰はねばなりません」、想えば重大使命だ、過去に於ける過れる愛國心より解放された眞実の世界に自由の若き思索を思ひ切る伸ばすのだ。若き吾ら！ 学徒吾ら！ 見よ、大山の偉大な雄姿、漸く暮れんとする晩冬の空に紫雲を巻いて聳立する雄姿！ 世の俗悪を超越して、只暮れの空に限りなき落着きを見せて男性的な大山の姿、俺の心には何か知らぬが居たゝまらぬやうな熱いものが込み上げて来た。噫、男児一匹何想ふら

ん！ それに俺は若いのだ！ 溢れる若さがあるのだ！ 自由の大地に思ふ存分胸を張って手足を伸ばす事が出来るのだ。大山の雄姿を目の前に彼の紳士の言葉、俺は何とも云へぬ張り切った気持ちになった。ふり仰ぐ俺の胸に大山の雄姿が小事にこだわらずに大志を抱けと激励して呉れた。噫！ 感激の夕暮れ：

二月十五日 快晴

連日温暖の日は讀く。まるで春のやうだ。先般のマ指令に基く政府の公職追放範圍は政界に大波乱を来してゐる。進歩、自由兩党は何と云つても痛手だ。それにしても醜い罪のなすり合いが行われてゐるのは意外だ。新人の立候補が多いがそれだけ中味の空の人が多いのではないだらうか。進歩党当りの立候補禁止者が代りに出馬させる傾向があるからだ。高校三年制の復活が実現した。それに中学五年制も復活した。安部さんが文部大臣になったので、遅かれ斯うなると思つてゐた矢先だ。これで俺達も三年間自由な高校生活が送れる訳だ。中学生も実力がつくし、眞の學問に没入できるといふものだ。

二月十六日（土）雨

雨又雨の嫌な日だ、實際雨程人の氣を面白くしないものはない。何もするのは嫌だ。こんな日はラヂオでも聴いて早く寝るとしようか。それにしても今夜のサラダは美味しかった：楽しい夢でもみ乍ら寝るのも又良からう、明日は天氣なるやう：

二月十七日（日）晴後曇り

絶好のアルバイト日 晴れ 今日には武藤さんへ防空壕の掘反し、そして材木堀り、晝には久しぶりでお刺身を馳走になる。木下より來信あり、彼、悲觀めいた事を言つて來た。即ち二月で休みもおさらばではないのか。そしてドッペリ（編註：ドイツのDoppel ダブル、二度やる即ち落第の恵迪寮用語）も近い等と：ハハ： 快なり、木下よ歎く勿れ、人生六十なんぞ長からん、高校三年制復活なり！ 悠々迫らず人生のスタート、今始りたる也。何ぞ一年、二年の遅きを歡くや、何ぞ怖れんドッペリを、人生六十年也。

Be ambitious boys 目前の事に躊躇する勿れ、我只快なり。遊べ！ 々々！ 若き日を、徒に盧生の夢となす勿れ！ 青春！ 二度となきこの若き時代をむざむざと送る勿れ！ おゝ、若き日何を悲歡するか、アハッハッハ：

現幣原内閣の最後の決断下る！ 即ち、經濟危機突破緊急令下る。金融緊

急措置令、日本銀行預入令、臨時財産調査令が同施行令と共に、又、戦後物質対策基本要綱、食糧緊急措置令及び同施行令、食糧管理法施行令改訂、隠匿物質等緊急措置令、緊急就業対策要綱等が本日を経て発令され且施行された。俺はこの諸対策に対して何も言はない。只この緊急令が完璧に運営され、國民が円満に生活出来る様祈念して止まない。國民も只漫然とこの政府の措置を見つめて成行にまかしてはいけない。積極的に協力し、興國か亡國かの二方途を國民自ら選ぶのである事を自覺せねばならない。果してこの措置に依つて名実共に平和日本が到来するであらうか。インフレの怒濤は遂に爆発点の一步前に到達したのだ。ここに至つて政府は決意したのである。國民又誠心を以て協力し、政府また眞に民主々義的觀點から嚴正にこれが遂行に当らねばならない。「働くかざるもの食ふべからず」の日本は今来る。國民よ、自覺せよ！ 新日本の興亡の秋は来た！

二月十八日（月）晴

窓越しに月押し照りてあしびきの 嵐吹く夜は君をぞ想ふ…万葉集

光々と月は冴え渡つてゐる、月々々々々… 深更の月は今中空を横切つてゐる。俺の心は何だか知らぬが感傷的になつて来た。月美しき月、又、君の事を思ひ出した。俺は月を見ると思ひ出す。君よ、何処に於てこの月を見てゐるか、優しかった君！ 麗しき君！ 俺は君以外の女性を未だ且つて見出した事はない。俺はいつになつても君を忘れない。君も忘れないだらうね。

「私いつも私みたいなのはと云ふへり下つた氣持を忘れないわ。それが人間にとって一番大切な事だと思ひますの」

俺は忘れないあの頃の事が走馬燈のやうに浮かんてくる。あゝ、俺の氣持ちは一杯だ。俺は精神的に君をたつた一人の人と思つてゐる。若い中学時代をあれ程迄に慰め勵して来た君を

「私ほんとうに不幸だわ、何もかも私不幸だわ、私はもうお婆さんのやうね。然し、貴方は幸福ね、私女学校三年の頃は軍人に憧れてゐたの。然し、今は違ふわ、自分の命を顧りみないでそればかりか妻の事も子供のことも顧みない職業なんて嫌だわ。私今好きな職業、お医者さんが好きよ。文学的に尚い趣味を持った医師いいわ…」

S公園にてY子は言つた。何してこんな事を言ふのだらう、分からない？ 第一、俺が過去に於いて交際した幾人もの女學生が言はなかつた事を俺の前で言つた。Y子よ、いつまでも若くあれ、早く大人になる勿れ！

二月十九日（火）曇時々晴

この頃の慌しい世相にともしれば自分の権限を主張して自分の義務を怠る人間が多い。この辺が民主主義の名を追って実を知らぬも甚しいと云ふものだ。特に過去に於いて「誤れる愛國心」に駆りたてられた人の中に多いのは当然の事とは云へ残念だ。若い純情を命を國の爲に捧げんものと軍に志願、入隊、入校した人々に多いのだ。それは無理もない。與へられた思想の外には何ら外部との交渉を絶たれ、むしろ、外部の学問、その他有識者を卑下した彼らではなかったか。そしてそれを以て誇とし、自己の何ものたるかを知らず、只一途に自己に満足し、奢った彼らではなかったか。勿論、俺は彼らを憎みはしない。むしろ、軍閥共が唱へた祖國興亡の秋、一身一家を顧みず、特攻路にはせ参じた彼らの何も知らぬ純な気持ちに敬意を表する。その頃の俺の気持ちは今正直に告白するが、斯くして陸士、海兵、予科練に入って行く友人達を涙なしには送れなかった。中学卒業も迫った時、俺は迷った。何しろ軍閥華かなりし頃、軍人でなければ人間に非ず。当時の世相もそれを当然としてゐた。我々学生間でも優秀なものは挙って軍関係諸校を目ざした。何と云つても陸士、海兵に入らずは学生に非ず、世間も又彼らをして時代の英雄化した。優秀な生徒にして軍諸校を選ばず、高校その他に走るものは激減した。世間又それらの者を非難さえした。幸ひ余は感ずるありて志を曲げた。之、多分に母校の自由主義的ミツシヨン教育の爲とは云へ、余の心中大いに悟る処あつたのであつた。そしてクラーク師の傳統に生くるエルムの学園にはせ集つた。そして俺はつくづくと個人の修養の重要さを痛感した。個人の人格の尊大さを自覺した。過去においてかりそめにも誤れる愛國心に共鳴した事を悔いた。大自然の北國の一隅に於いて俺は自覺したのだった。身を捨てて特攻路へ行つた友人達を氣の毒に思つた。そして一日も早く覺醒されて呉れる事さえ祈つた。その事は多分にその当時の俺の日記に見出される。個人の自由を束縛した教育、人格を無視せる修練、目先の事ばかりに捕れたその日暮しのくよくよした理想も何もない学徒は工場の一隅に怪談？に耽つたのだった。友人より一足先に上級校に入つた俺はその当時のありのまゝの心境をよく在校する友人に書き綴つたものだ。「あゝ、俺は始めて理想といふものを自由に画いた。それは目先の事ばかりに追はれた動員生活中に於ては夢想だになかった事である」と、この俺の親書？は友人達の間に問題を生じたらしい。或友人は怒つて次の如き文を返して呉れた「兄よ！ 兄の感情は余りに時代をかけ離れてはいないか。

今の学徒は祖國と共にあり、そして理想も画けない位、祖國の学徒に対する要求は大きい。学徒は常に祖國と共に運命を共にする他にない」と、余をして時代錯誤亡者たらしめた。余、又反して曰く「返信多謝、兄が賢意良察

す。然れども兄よ、学徒は現実に迷ふ勿れ！ 先人の残せし夢の跡を追ひ、新しき祖國の運命と共にあるや」と。この一文は友人間に大反響を巻き起したるなり、曰く「兄が云ふ、新天地の開拓とは何ぞや！」、曰く「兄は何を以て祖國に報ゆるや！」、余、反して曰く「余は大東亜戦争の成否にかゝはらず」、次時代の夢を實現せん爲に励むを以て可とす。余、もとより祖國の必勝を信ず醜虜揚陸せば擧げて撃退するの他になし。然れども余は俗世を超越して自己の本来に目覺むるのが学徒の道と信ず」。此処に於いて終戦となり、心中秘かに快哉を叫びたる也。あゝ、余の心中本来無一物。世の多くの学徒よ、都塵と共に奉仕した学徒諸兄よ、諸姉諸弟妹よ、自己本来無一物たるを銘記せられよ。常に卑俗より脱せよ、苟めにも過去の苦験に流さるべからず。学徒の眞價は失はれるべからず。余、幸にも諸兄姉弟妹らに一沫の苦言を呈するの自信を見出したればなり。

二月二十日

○ 眞に失恋するものは他の女性によつて救はれない。反つて宗教心や人類愛によつて救はれる。他の女性によつてすぐ癒される失恋は失恋ではなく性慾的欲望である。

○ 恋するものは相手を尊敬し、自己を尊敬する、益々自己を理想的な人物に築き上げやうと思ふ。だから賤しい眞似は出来ない恥を知つてゐる。だから恋するものは自己をいつはれない。二人がお互に愛し合つてゐることがわかるまで内気である場合が多い。

○ 十八九にでもなつたら交際社会に出す習慣は日本にあつてもいいと思ふ。さもなければ無理な恋愛をして一生不幸な原因をつくる恐れがある。

○ 殊に女の人は男の性慾と恋愛とを混同しやすい。性慾は男を卑劣なものにし、おべっかつかひにし、嘘を平気でつかせる。だからお世辞のうまい巧言令色な男は恋愛で女に近づくのでなく、性慾で女に近づくのである。

武者小路実篤「續続人生讀本」より

稚内の長岡より来信あり。俺は彼が表面非常に粗野豪放であるが、内心深く教養を藏してゐるのが好きであつたが、今又、その切なるを知つて益々尊敬の度を深くした。「君の場合、失恋などとは自ら性質を異にするが、ダンテにしる失恋の結果、彼の大作をものにしたとか、恋ほどその結果の如何によらず、其の人を豊かにするものはないとか。よき體驗ならずや」とあり、俺の心境については色々友の諸兄が云つて來てゐるが、昨日の福山が「君にまだある信念が確立してゐないからだ」とある本は云ふ。リーベもフィアンセ

ものりこえてゆけ、汝迷へる子羊よ」と強く言ってきたのと合せて、俺によき示指を示して呉れた。想へば友人程、卒直に意見して呉れるものはない。そして友人程、思ふ事爲す事を打明ける相手はない。有難きは友だ、大切にすべきは友だ。そしてその友の爲にも軽々しい行動は避くべきだ。そして友の爲にこそ恥しくない人間に成るのだ。俺は常にHさんが言った「私のやうなものでは」と言ふへりくだった気持を忘れまい。一歩々々教養をつんで実力ある、そして深みのある生活とかみ合つた豊かな医学者こそ俺の理想である（葉山の中田荘兄来宅、宿泊快談せらる）。

二月二十一日（木）曇時々晴

モラトリウムに明ける今日此頃の世相、小銭、拂拭の市場。息づまつた世俗も益々呼吸困難を偲ばせる、果たして政府のこの緊急最後措置は如何なるや。賛否両論、渦巻く中に日本よ何処へ行くの感は切実だ。

二月二十二日（金）晴

俺はつくづくと青春の悲喜といふものを感じた。否、悟った。何も昨日の出来事からではない。前より感じた事ではあるが、芝山公園の麓に寝ころんで思索した。俺の胸中にあるはつきりしたものが掴めたのだ。内田、山田、島田より来信あり。又旭川の榊谷よりもあり懐し、山田からは石井さんの小母さんも内田も大変心配してゐる。一寸出てお出で、又々悩んでいるのか、喝！ 妄想邪念を飛ばして子供の心になり給へ、早く会つてお礼を述べたい。須らく速く！ とあり、俺は返信にいわく馬鹿野郎！ 俺は人生の喜悲と云ふものを悟つたのだ。汝心痛を止めよと。又内田からも会ひたいからは非来浜せられよとあり、内田にはほんとに申訳ない、ほんとにいい奴だ、俺の親友として恥しくない奴だ、その中出浜しよう。島田からは親愛なる友の御胸に！ と冒頭して、マア青春時代にはなやむだけなやんで御らんない。すれば、貴兄が以前にあつた凡ての楽しかつた事、交合つた方に自分はどの様な心で彼女に望んでゐたか、又現在迄の御交合がどれほど彼女の心を清く美しくしたか、唯、御交合ひするなれば女に美しい清い心を植ゑつけると共に立派な女性にし、他所から見ても絶対的と讃えられる様な、考へる丈で私には実にむづかしい、できない。いいえもつとく私の人格がすっかり築き上げる迄は……とあり、如何にも島田らしい書ぶりだ。然し、俺の今の心は公明正大悟つたから……何事も超越したのだ。思ひ切りやるぞ、深みのある医学者こそ俺の希望だ。武藤さんにアメリカ兵がやって来て仕様がないので泊りに行く。今日は晝間薪取りに行っていたら、来た来た、奴さん隣りの浦島や

と間違へて来るのだ、やつの事で放り出す。叔母さん始め規子ちゃん、さとしちゃん、始めてよく眠れたとよるこんでをられる。俺も米兵の用心棒とは心もとない仕事に使はれたもんだ。実際、だんだんと米兵の横暴が目に見えて来る。敗戦國のみぢめさ！ 仕様がねえ：

二月二十三日（土） 晴

午前七時十五分起床、朝食。同九時半、綿や繁利さん来る。雑談しばし、同十時四十五分武藤さんを失礼し帰宅、同十二時午飯、午後一時発（新原町田）小田原さん行き、五時三十六分愛甲石田発。帰途午後六時半帰宅、午後七時十分前夕食、午後九時寢床。「この前はごめんなさいね」「俺は少からず怒ったぞ」、「ね！ ごめんなさいね、許してね」、然し、俺は怒るもんか、超越して凡てを超越して：

三月四日

昨日から幾分風邪気味だ。一体おれといふ人間はどうしてこんなのだろう。つくづく自分で自分が嫌になった。これは心が安定してゐないからだ。あゝ、早く札幌に帰って心ゆくまで勉強したい。凡てをのりこえて早く帰りたい。せんじつＹが書き置きを文中に「私の都合なんかありません。私の心の都合の方が大切です」とある、一体、あの人の気持はどうなんだらう。分らない、畜生、俺はもう書くのが嫌になった！

三月九日

余り書き度くない、記録のみに止む。待望の文展（編註…広辞苑六版によると日本美術展覧会の略称日展の前身）行き、午前八時十分発にてゆく。昌兄、木下女史、小田原洋妹、小生四人十時半入館。低調！ 見るべきものと無し。帰途、武蔵野館にて「キュリー夫人」観映す。科学者の家庭の言い知れぬ愛情と研究（ラヂウム発見に至る）に対する愛情の一体化につき考えさせられる他、他に望みなき。帰宅八時、洋子妹泊られる。就寝十一時。

三月十日

午前中馬鈴薯植付け作業。午後二時発愛甲石田へ向ふ。小田原家招待の晩餐会に臨む。同行昌兄、同夜はうんざりする…？ ほど騒いで寝る。余興中、洋妹の豚の眞似は傑作なり。余、金色夜叉、その他演ず。興味つくらんとすれど湧かず。

三月十一日

九時小田原家を辞し帰途につく。武藤さんに立寄り兼て約束してあり、規子妹と上京す。銀座を逍遙し後、全線座にて「街の人氣者」観映す、無氣力なる作品なり。何故かくの如き映画を造りしや、少なくとも道徳心頹廢の世情に風まかせなり。後、澁谷に出で松竹にて又觀劇映す。松竹少女歌劇と「女生徒と教師」なり、映画は凡作なり。第一、現代の女学生にあれだけの人が居るや？ 行きすぎた心のする映画だ。あの映画により國民の道徳心の若き人を見る心の批判をせんとするはこれ又無氣力なる演出者により無残にも壞された。新人らしきあの女優は一体身も魂もあるのか、榮養失調の如き女だ。映画も食へのないのか、せめて撮影の時ぐらい飯を食ってやれ雑炊では駄目だ。帰宅九時武藤家へ宿る。

三月十二日

諸兄へ発信す。山田、内田、木下、榎谷、恵迪寮、島田なり。午后はがっかりした。寝不足らしき感あり。

三月十四日

町谷綿屋、祖母葬式通夜参会す。

三月十五日

綿や葬式本家代表として来訪せらる。

三月二十二日

佐藤氏来訪せらる。彼氏のリーベ卵巣癌とかで入院手術、経過思はしからずと同情にたえず。

三月二十三日（土）雨天

順三第二十回誕生日（一九二七年三月二十二日生）、依って午後七時より、寸松亭奥八疊間に於て晚餐会舉行さる。来賓武藤友之助氏、敏君、規子嬢、仲々盛会なり、母さん心盡しの手料理に舌づつみをうつ。

三月二十四日（日）久方ぶりの晴天

終日畑作業に従事す。馬鈴薯植付けをやる。夜は武藤氏を囲んで一杯やる。ほのかなる酔心地なり。噫！俺は自分で自分の心が分らない。横浜から再三再四音信あり。山田、内田より出浜せよと。然し、おれはいつも反信の

度に余は自己の信思が確立してゐないのに兄等と会ひ、不徳なる思索にて兄等と言論し、又兄等の言論に迷はざるを怖ると書いてゐた。移ろい易き若き日を徒に盧生の夢となす勿れ。今こそ俺は自己の信念を確立するのだ。Yが妾ぐらいの心の変る人間はないと言ったが、若い人はどうしても思想が変轉するのだ。多分に現代の若い人にとって最大の缺点是教育はあれど教養がないからだ。故につまらない時事評論、週月刊誌は乱讀するが、崇高なる古人、聖人、文学者の訓には余り目をかささない。此辺に現代の若い人たちは思を致して自己の信念を確立して貰ひたいものだ。帰札も迫った今日俺は休暇中の体験を生かして勉強したいと思ふ。一度横浜へ出て内田、山田、石井、福山に会つてゆつくり話したい。実際、内田、山田に対しては申訳ない。彼らの心中はよく分る。故に申訳ないのだ。凡て腹の中まで打ち明けて話す事の出来る我グループは有難い。内田、山田も夫々自己の信念を生かして俺と痛論するだらう。俺も俺の過去一ヶ月余のスランプの結果を傾注して反駁するのだ。何れだとも待遠しい事だ。

三月二十六日（火）晴

すっかり春いた日和だ。昨日まで降り續いた雨も上つて何となく嬉しいようだ。遂に出浜す。昌兄と横浜までゆき晝食を共にして別る。先ず、山田宅へ赴く。彼の姉氏、腸チブスとかで入院中なり。彼の苦境は察するに余りあり。それより石井兄宅へ行く。兄不在にて、をばさんと話す。余の心境を述べて無沙汰を詫ぶ。片山氏と奥村妹との話を聞き、同情にたえず、奥村妹とは見そこなつた女性なり。彼女こそ典型的な瘦身形のタイプなり。実際、瘦身の人達には愛想がつきた。プライドが高くて（そんなでもないくせに）自尊心が高い。馬鹿な奴らだ。片山兄の心情察するに余りあり、夕食を馳走になる。夜、石井兄帰らる。また四方山ばなしに花が咲き、深夜三時に及ぶ。政子妹に対する感情が變つたのも自認する。又、彼女の俺に対する態度、話しぶりも變つて来た。眞実に愛する者の前では内氣である場合が多いのだ。

三月二十七日（水）晴

晝食後おいとまし、内田宅を訪ふ。同伴石井兄、全く親友と道を歩くと気分がいい。また、内田といふ奴は眞実にいい奴だ。暫く会はなかつたものだから、涙が出るやうに嬉しかった。親友といふものの味を今日ぐらい味わつた日はない。三人で夫々寫真を撮る。ウキスキーの盃に益々兄弟分としての盟を固める。片山兄の話はうまくまとまる。三人夫々言ひたい事を言つて夫々の見解を述べ。こうして互に意思の疏通（疎通に同じ）が出来るのも親友

なればこそだ。只、この上は片山兄の上に幸あれかし。後、福山兄宅へ石井と行く。そして、三人で成美へ行く。如何にも落着いた学校だ。福山もいい男だ。俺といふ奴は何て友達運がいいのだらう。いい友達ばかりだ。福山と別れ、後、横浜駅で信兄と別れ、逗子へ急ぐ。着夜七時、欧州より帰られた原田さん夫妻、来宅中。今日は実に友達のいふものの有難さを味ったいい日だった。

三月二十八日（木）曇時々晴

在逗子、暢気に湘南の春めいた気分に入る。薪割りに精出す。逗子の家もたまにはいい。ぽかぽかした暖い縁側で讀書でもすれば愉しいばかりで何も考へない。「昭和風雲録」を再讀す。嘗て軍國主義者共の跳梁ちやうりやうの後も生々しい。思えば敗戦の今日を明察した人はあの当時一人も居なかつたのだ。軍國華やかなりし頃も夢と一時なり。

三月二十九日（金）

午后二時帰宅す。途次、横浜駅より歩いて往年の岡野町へ行つて見る。荒廃した焼跡に往時を偲ぶ数々がある。家の玄関脇の棕櫚の木、玄関の壁、台所のコンクリート、屋根瓦の破片、そして猪俣さんのザクロの木、裏の井戸、洗濯場、庭の燈籠、植木鉢、あの当時の懐かしい思ひ出を秘めて轉がつてゐる。暫し感慨無量なるものあり。あの四ッ角にも立つて思ひ出を辿る。あの時のあの事、あの人の事、皆で精出して掘った防空壕もそのまゝだ。噫！あの人はどうしたらう。元氣かしら！俺はあの場所に佇んで祈つた。幸あれ！あの頃のあの人達よ！又いつの日か元氣で会はん、それまでそれまでお互に健康であるやう。伊藤さんの塵箱、杉崎さんお門柱、今関さんの燈籠凡てそのまゝだ。懐しい岡野町よ、永久にさらば！夜は久方ぶりに武藤さんへ行く。原島氏来る。

三月三十日（土）晴

いざ帰学となると慌しい気分で一杯だ！あれやこれや帰郷前のプランは何一つ遂行出来ずに又帰るのだ。実際人間なんて云ふものは一個の確立した信念があるのだらうか！何か得んものとあせればあせる程他愛なく参つてしまふ人生航路の難路に差しかゝつたばかりの俺達だ。その中、又良い事もあらう。あゝ、つまらない人間にだけはなりたくない。間もなくおわかれしなければならぬと思ふと悲しい気持ちで一杯なつてしまひます。お別れしても何時までも何時までも御心だけは通じ合ひませうね：ほんの短い間でし

たけれども何だか妹の様なキモチで……。いろいろ教えて戴いた様な気がいたします。いつまでも妹の積りで可愛いがってください。私もお兄さんと思っていますから……。美しい北國を逍遙しながらひとり郷愁にくれてゐる貴方の面影を思いひ浮べると何だか私の心までとても悲しくなつてしまします。「故郷の空」を歌つた時の淋しさうな貴方のお姿が一番貴方の優しいお心にふれた様な気がいたします。美しい声でいろいろ歌つてさし上げられたならと思ひます。叶う事なら御一緒に北海道の野辺を歩いて見度いのに……志を果して何時の日にはかへらん——東大の学生となつていらつしやる日をお待ちして居ります。くれぐれも御機嫌よろしう。（Yよりの音信）

懐しい故郷の山々、いざいざさらば友よ！ やすかれ、永久に永久に、あゝ、何だか嬉しいやうな悲しいやうな。

四月一日（月）快晴

本日より家は第八町会第十五隣組長の職に就く。又母さんは第八町会婦人部長を拝命す。名実共に町内の顔役として発足するので。春だ、暖い日光に身も心もとろんとする。モーターの水を吸み上げる音ものんびりとしてゐる。春だ、春だ。俺は帰らねばならぬ。身の爲だ、学問の爲だ！ 辛い、悲しい、だが俺は帰る。雪の北國へ、暖い故郷を後にして帰るのだ……

目下の処の帰学予定

四月一日：故郷（町谷訪問）墓参

二日 瀬谷行（瀬谷祖父面談）夜横浜ゆき

三日 朝帰宅、在宅準備

四日 切符（上野）長本挨拶

五日 在宅準備

六日出郷、午后二時上野発

実際、俺はまだく駄目だ、下らない人間だ。何故こんなにだらしないのだらう。自分で自分があきれる。噫々、早く帰って眞理の探求にいそしみたい。総選挙は近い。保守、進歩、各党入り乱れての合戦はここ旬日の中に決するのだ。此処東京二区は社会党の勢力進出甚だしく何と言っても社会、自由、進歩の順ではなからうか。

四月十四日（日）晴

九日二十二時十分発で上野を出発す。青森、函館では何事もなく恙なく十一日帰宅す。今、青木、新沼の残寮生諸兄と四ヶ月ぶりで対面す。いよく又充実した寮生活だ。懸念した生活資金の問題もどうやら落着きそうだ。総選

舉も予想通り自由党が第一党なり、案外婦人の進出には驚ろいた。噫！ 何も書く気はしない。嫌な気分だ。

四月十六日（火）晴

十五日より野球部の練習開始で大消耗だ。実際、現代のスポーツは悲壮だ、先ずエッセンを確保せずして何が練習だ。大いに運動班の改革を望む。鯨の大量買出しでもしてからやるべし、考へさせられる事だ。エッセン無くして何が錬成だ。この分では失調だ。然し、スポーツの春は遠慮なくやって来た。

○ 俺の心は真空だ、何も無く早くせんと取返しのかぬ事になってしまふとあれば、あせる程駄目だ。上野から札幌まで来る車中で全つきり俺の心境は変った。俺は今まで假面を被つてゐたのだ。理想主義のだ。然し、世は現実の冷たさ、みぢめさをひしくと起してゐる。凡そ往年の高校生の寮生活は不可能だ。現実には立脚しない理想なんて到底考へられない。理想主義から現実主義へ一片のパンを求めてキュウキュウとしてそして何の「明日に生きん」ぞ、「降る苦しみを共にせん」（編註・昭和六年寮歌「別離の歌」一節）だ。理想主義の假面を捨てよ！ 何も俺は彼らを敵としない、良く理解出来る。むしろ、友として進む。だが、現実の冷厳な事実の前に立てと云ふのだ。そしてそれより前進せよと云ふのだ。

○ 總選舉もどうやら終った、出鱈目な民主選舉だ。反動のインチキ、モウロウたる人間が笛を吹いたに過ぎない。解散せよ！ やり直せ！ 実に下らん。然し、何度やつても同じかも知れん、日本人は全く虚空心なのだから、そして道義心の缺けた、否、全く無い民族に落ちかけてゐるのだから、それにしても婦人候補者の大量進出には驚異だ。彼女らの負ふべき使命こそ重大なりと云へる。

○ 馬鹿な！ 糞喰へ！ 純心な彼女に比べて彼女の態は何だ！ あゝ俺は彼女にしか心はない、純な清い乙女心に俺は泣ける。それにしても彼女は何かと云ふ奴だ、愛の誤解だ。今の女性の最大缺點だ。離れよ！ 去れ！ 然し、考へて見にやいかん。一方、彼女こそ清純な愛を俺に寄せて呉れてゐる。美しい濁りない清い愛を俺は彼女の愛情を忘れてはいけない。そして胸に秘めて勉強するのだ、彼女もきつと俺を偲んでいたいけな気持ちで毎日を送つてゐるに相違ない。

四月十九日（金）

イエス受難日なり、この日我北大予科恵水會は発会す、意義あり。同志と

北一条教会に小野村牧師を訪ひ援助を約す。恵水とは恵迪の恵に牧師来訪の日を取りての水曜日の水なり、併せて恵水、イエス曰くの水とも云へるの義なり。噫、恵水会は果敢に発足す、感激なり。小野村牧師、盛に青年の悩みと哲学及び宗教に就いて強調せらる。味ふべき話なり。恵水会は月曜日は同志の祈祷会及び聖書研究会なり。又水曜日は牧師説教日とす。大いなる希望をもちて発足する恵水会なり、幸あれ！

四月二十日（土）

午前発疹チフス予防ワクチン注射の爲寮にくすぶる。午后久方ぶりにで街へ出る。その前に予科で野球部の座談会あり、坂本先生、先輩諸兄と語る。それより観映「眞実一路」、小杉勇と片山明彦の名演技に感服す。山本有三の名作も映画化されて、あれ迄になれば作者も満足であらう。それより飲食す、然し、あの羊かんには癪に障る。本日、洋子妹より来信あり、彼女悩みを訴へて来る。切なるものあり、返信す。さて、何て云つて来るだらう。

四月二十一日（日）復活節

「我は甦りなり生命なり、我を信ずるものは死すとも生きん」、午前十時より札幌独立教会礼拝に赴く。同伴、今、伊東、牟田、岸、三年目後藤、布村氏、久方ぶりで礼拝に参加す。夜は七時より全寮コンパ、於食堂、エッセン馬鈴薯、豆、海宝麵等、ミルクもあり。各寮階上階下一人宛の入り乱れての大熱演、寮務部の寸劇、松橋氏の舞踊等見るべきものあり。愈々、明日から学校なり。大いに張切るべし、野球部のトレーニングもあり、春ともなればいそがしき事也。

四月二十二日（月）晴

新学期授業開始

四月二十六日（金）晴

自分で自分の心が分らなくなる。これ程不思議な事はない。俺も今このやうな気分だ、だらしな事だ。今日は安保さんにあてられる、ハムレットだ、どうやら出来たから良いやうなもの、ひやひやする。後でほめられて冷汗を掻く。午后生活部のアルバイト、それより夕食後観映「幸運の仲間」、久しぶりでエノケンを見る。明日は体操、化学（有機）、物理だ。松岡が入札する予定だ、後輩の爲一肌ぬがう。

五月一日（水）曇

天長節の記念晩餐会は快適だった。近頃がないエッセンの快調さ、赤飯、煮べの豪華版に舌づゝみをうったのも近頃のエッセン事情から推しても感謝すべきだ。今日は午后より松岡を連れて外出す、吉田やで例のものを食ひ、菊壽しで壽司を食ふ。それより観映「恋愛交差点」、夜は七時より第二回水曜会「聖書の重要性に就いて」小野村牧師より話あり、了って閲覧室で座談会を行ふ。本日、家より来信あり、實際、近頃の俺はどうかしてゐる、思ひ切つて一つの事にぶつかつてゆけない。少くとも張切つてゐた過去の受験時代が懐かしい。工場がいけなかった、こんなだらしない俺にしてしまった工場がいけない、癪に障る。噫！ 又あの頃の俺に帰りたい。身も心も勉強一つに融けこんで頑張れる身になりたい、不快な毎日だ。生きてゐるとは名ばかりなり。消耗してゐると云えばそれまでだが、何となく嫌ふ気分だ。若い時代の再訪しないのだと焦れば焦る程駄目だ。畜生！ だらしない順天一麥よ！ 貴様それでも高校生か、糞野郎、目覚めよ起きよ！ そして頑張れ！ 余、本日より感ずる所ありて断乎禁煙生活に入る。過去に於ける浮動した信念より脱して眞の苦悩に潔ぎよくぶつかつて行く爲に、断じてたぢろぐべからず、男らしく堂々と試練にたえん。

一・エッセンに対する認識の是正、医学徒してもっと積極的に考える事

二・規律ある勉強時間の確立、高校生として三位一体主義の建設に邁進する事

三・ Be gentleman - 精神の具現 北大生として矜持を固守する事、幸福なるかな、悲しむ者、その人は慰められん、心の清き者、その人は神を見ん

以上を信條としてやり抜く事、男児、立志出郷関！ 断々乎として貫くべし。そして眞の高校生活を送るべし！ 個人の完成也（以下一部破却）

五月五日（日）晴

端午の節句なり、今日は午前中、寮にて斉藤さんの英訳の下調べ大体片づける。午飯後何も爲す事ないので午寝と決める。やがて午后三時と覺しき頃、何だか街の方が騒々しい。何事かと見るにサイレンの音、もくもくの中空に沖する黒煙、火事也！ やがて情報入る。南の保善病院附近と廿十条の二ヶ所也と。廿十条！ 太黒の家の附近なりと飛起き、一目散に今の室へ行く。今、新沼とそばがき製造中、慌てゝそれをかけこんで寮をでる。ローンを横切り、病院を横切り韋駄天走に駆つける。幸に火は二三軒先の道の前で食い止められてゐる。万一に備へて荷物を防空壕へ出す、肝腎の太黒不在なり。彼、琴似へ行ったとか、雑の話なり。G Iの機械力で燃えない家はどんな破壊さててゆく、どうやら大丈夫らしい。G I一流の仕事、消火作業は徹

底してゐる。四時半鎮火。先ずビールの馳走になる、喝いてみたので正に快調なり！ 次に握り飯、ホットケーキの久しぶりの甘い物に馳走になる。就中、大福餅は実に美味かった。何だか応援に来たんだか食ひに来たんだか分らない、六時帰寮す。風呂へ入り、飯を食ったら満腹！ さて日記でもつけて…

昭和三年十二月以降観映録

そのわけ(秘蔵) 札幌日活館

海(呼ぶ声)(天映) 同右

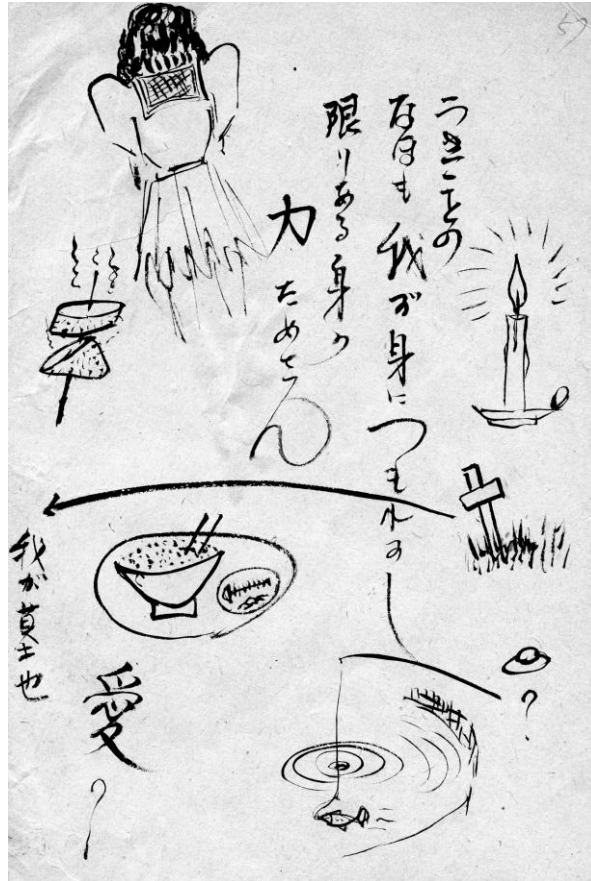
狐(異半)赤ん坊(東宝) 札幌東宝映劇 11/22

神変麝香猫大会(天映) 日活館 11/23

新婚お化け屋敷(東宝) 札幌東宝

三味線武士 (天映) 古同 11/24

軽音楽大会 ミマス館ノ



雑念

夢

白銀時代!! 空想時代!

去る日 来る日?...

恋愛!!

美

社会生活 本能

心算

神の奇蹟?...

「史」は何ぞ!!

アライの林檎!!

悪魔?

End

十字架の招き

懐郷

夢

白銀時代! 恋人

十二月二日 (日) 第一安息日

早天祈祷会 プール横小屋にて捧ぐ

後九時より全寮アルバイトあり。第二農場より大根を運ぶ。そして、その葉の切り取り作業なり。十一時終わる。寮の冬季貯蔵食料なりと。午後は安息日なり。猛眠する。夜、机に向ひて新約聖書に出現せる(特にルカ福音書)女性に就いて調べてみる。明日は明治節なり。神は無知を嫌ひ給ふ、神は学問を愛し給ふ、その神は智識の根源であるからだ。然れども我らの科学的智識は凡て假説の域を脱し得ない。假説は立ち又たほれる―矢内原著マルキシズ

ムと基督教

十一月三日（月）

明治菊之佳節なり、余生を享けしより。二十一度迎ふこの佳き日、時代の変遷はあれど、大帝の御秩威は一島國日本をして世界歴史に一頁を画するまでの國家に爲らしめ給ひし御功績は偉大である。万民齊しく仰げ！この菊香高き大帝の御偉業だ。丁度この明治節の頃は懷愁の念をそゝる時候である。

二十一度迎ふこの佳節の思ひ出が盡きない。昨年この日は眞駒内へアルバイトへ行つた事が思ひ出される。そしてあの丘の上で内地、あの大磯の山の風景が見渡されたのでアルバイトの手を休めてそぞろ郷愁に耽つた事が…。

あゝあの頃は楽しかった、実に楽しかった。暖い湘南の蜜柑山だった。亡き父を先頭に一家揃つてよくハイキングに出かけたものだった。千疊敷！柿

！さつま芋、眞壁、人蔘、大根、白菜、京菜、みかん、白旗神社、牛肉、すき焼、三つ引屋やの天國まんじゅう…そして渡支前の英氣を養はれつつ

あつた父のおもかげ…すべてが昨日の様である。あゝ美しい北國の晩秋の夕暮である。紫紺の雲がエルムの原始林の上に輝いてゐる遠大なる野心を抱く我らに呼びかけている「爲す事あれど、雄々しく強く正しかれ！」と、あ

ゝ莊嚴なる石狩の夕陽なり、遠き訓の野心培ひ（編註…明治四十五年寮歌「都ぞ弥生」五番歌詞一節の「尊き野心の訓え^を培ひ」より）、限りなき恵迪の傳統を承ぐもの、この佳節を迎へ、誰か感激、奮泣せざるやあらん！

静かに夕日は落ちてゆく、手稲山の彼方に、又、来年、そして幾度か廻り来らんこの菊の佳節は如何に在るや。盡きぬ感傷の一日は暮れてゆく…午后五時より奉祝大晚餐会が先輩教授を迎へて寮食堂於て開催さる。ここにも寮の長い歴史の上に絶ゆることのない感慨の秘めた行事があるのだ。全寮生、入浴して制服美しく食堂に並ぶ。此辺にもクラークの伝統に生きる紳士たれ！

の面目が見られる。生活部心盡しの献立に久方ぶりのフィール・エッセン（編註…ドイツ語でフィールはvielの多、エッセンはEssenの食事、こっぴ

い食べたの意）に郷愁も忘れて談笑す。有志のテーブルスピーチもこの日ばかりは朗らかに嬉しく聞える。終つて寮歌祭である。幾多先輩の歴史を唄ふ。この行事も寮生活の重要な行事の一つである。時代の風は吹き猛り、この寮にも人は去り（編註…一高寮歌「嗚呼玉杯に花受けて」四番一節「星霜移り人は去り」）移りゆき、思想の波はひし／＼と相打てども國家有用の志たらんとして、この学舎に馳せ参じた雄心には今も昔も変りはないのである。

熱血をたぎらせ、心から叫ぶ寮生の胸に去来する思ひは何ぞ！あゝ多感の児らが（編註…昭和十四年寮歌「時潮の流転」二番一節「多感の児等の情懷^{むね}熱

く「懷古の涙溢るべし」より）歌ふ寮歌の長い余韻は月夜の原始林の中に消えてゆく、美しい思ひ出を綴る。白線時代の感慨の一駒である。故郷の人よ！ 幸あれ、そして全國の同志よ幸あれ：1947' 11、3' PM9...

十一月四日（火）曇雨・雨

物理休講、数学のみ、余すところ二十余日のみ、白線時代の最もフライである。二年目も終わりだ。そしていよいよラスト三年目の生活だ。そして卒業なり。果して俺は何を爲しただらうか、只そのフライの生活をいいことにして怠慢一途の生活を送ったのではないだらうか、懺悔するのみなり。然りとは云へ無限に続く勉学の世界、眞理探究の道よXマスも近い。俺は信仰生活も来るべき処へ来りし悩み多かり、白線時代も来学年は医学部進学の上をせねばならぬ： 勉学せねばならぬ。余りにKind（編註：ドイツ語の子供）である事を忘れて生意気にも恋愛なるものを軽視して、それを通して人格の完成などと自惚れはしなかっただらうか、あゝ懺悔なる事よ。神よ、私は貴方に許して戴かねばならぬ事ばかりです。罪多きこの順天一麥を許し給へ、幻影追ひて遙道ひ歩く私を御旨ならば貴方が僕として恥しからぬ方へとりなし給へ。あゝ一切をなげうって私の心を取りなし給へ、幸福への道を歩まし給へ、罪人一麥のこの祈を取上げ給へ、主イエスの御名によりて伏して祈り上ぐ全能の神よ！ 絶対なる神よ！ エンマヌエル・アーメン

十一月五日（水）

雲ゆき怪し、午后白雪となりぬ。寒風すさまじき：

物理、西洋史、思想史講義あり、第一限、第二限、第二学期試験成績発表さる。意外の不出来なり。断念したる数学は好成績なり、独逸語、英語コンデ（編註：英語 conditional の条件付きのことか）なり。無念惨敗せり。然るにこのまま三学期の試験何とか突きぬければ無事進級可能との事、まづは安心せる次第なり。然し、英語は不振なり、果して幾点なりや？。佐藤和義にドッペリ（編註：ドイツの Doppel ダブル、二度やるの恵迪寮用語）警告発せらる。他はどうやら無難らしきは嬉し。今学期は平均点稼ぎの爲、全出席せん。何しろ先学期は吉田さんの全缺席をはじめとして十日も出席したら良き方なり。こんな事でよくアベコン（平均点六十点以下）をまぬがれたものなり。正に奇蹟なり。総点五百四十一、平均点六十点ないらしいなり。午后辻村教授ロマ書八章ノ十七講義あり。霊によりて生きるものの強なるを強調せらる。本日新寮生規約草案に関する舍生大会開会さる。執行・審議両機関細則の検討なり。医類三年目の進学問題でもめている。即ち医学部定員八

十名に対し進学希望者百四十六名なりと。定員八十名はマ司令部の命令にしてベッド数によりての定員なりと。最大限百乃至百十名は進入出来得るとして、残員三・四十名の行方は？ 現二年目が八十六名として全部進級できればこれ以上の三年目よりのドッペリ組による増員は歓迎出来ない。白線浪人（編註・予科／旧制高校から本科に行けず浪人すること）も現代の様に全国官立大学医学部及び医科大学の定員が八十名なれば余り翌年に対する希望も持てない訳で、現三年目の苦労はたえない訳だ。果して俺に先見の明があつた訳ではないが、来年はこの苦労はないらしいのが嬉しい限りだ。何とかして超低空でも良いから進級すればいいのだ。頑張るべし。

十一月六日（木）快晴

久方ぶりで身も心も晴れ渡る。本日、英語、ドイツ語、倫理と大消耗日なり。午后本学を中心とする映画「若き日の血は燃えて」観映す。ストリーとしては一寸考へさせられるが、演技、カメラ等で全然駄目。録音の不備も不快である。高校生のロマンに清純な恋を画いたものであるが、あれ位にしか高校寮生活が画からなかったのは演出者の不出来であるとともに、一般人の観心があの位にしか見られなくなったのは移りゆく時代の風と共に旧制高校の断末魔の姿として余りに悲惨である。夜、前夜に引続き舍生大会あり。審議機関、調査機関及び委員長、寮総代選挙規約に関する討論があり、二、三の修正案を除いて満場一致、前期百三十五期委員会提案を可決する。目出度、目出度。調査機関の設置と選挙規約改正に関心すると同時に高校自治寮新しき在り方に就いて考えさせられる。

十一月七日（金）快晴

化学（芳浦）二時限、英語（ヨーロッパ通論）授業あり。第三学期試験が来る二十四日より実施予定の旨発表さる。又しても「メランコリー」なり、早く終了して帰省したい。学期末を迎へて寮の行事も多い事なり。信ずる人に裏切られた事程淋しい事はない、僕は信ずる飽くまで信じ抜く。彼女なしには僕の人生は考えられない。如何なる障害があらうとも最後まで信ずる。僕は自己満足してはいけない。僕は神様によりてこそ強い人間なのだ。信ずる人をきつと僕を信じてゐるに違ひない。

時潮の波の（昭和二十一年度寮歌）

序

厳しかる道に仕えて 限ある玉緒惜しむ

げにさあれ深き因縁の 魂ゆする生命の饗宴

汲まざらめや残の月に 旅の朝早くは明けぬ

一

時潮の波の寄する間を 久遠の岸に佇みて

不壊の真珠を漁りする 嗚呼三星霜の光栄よ

緑の星を夢む時 疎梢を払ふ天籟は

秘誦の啓示語るなり

二

弧窓に流る星屑に 無辺の調律訪へば

測りも知らに底つひゆ 言の棄洩れて伏し祈る

奇しく貴き生命をば 友情を讃ふ歌声の

溶け行く方に馳するかな

三

朽葉ゆらぎて湧き出づる 楡の林の真清水に

己を責めて泣く友の 孤杖を運ぶ逍遙や

遠き誓ひの日を偲び 虚しき春に嘯けば

淡れし影の寂寥よ

四

宿命の道を行く身にも 友を誇らん花筵

銀燭頬涙を照らす宵 沈黙に語る歓喜よ

心を交し思ひ酌み 団欒にふるふ共鳴は

胸の小琴を掻き鳴らす

五

北斗頭上に影冴えて 神秘の息に吹かれつつ

肩組み歌ふ旅の子を 染むる伝統の篝火よ

暮るるに早き青春の日の 追懷を込むる此の盃を

汲まん今宵の記念祭

結

近きかな楡陵を去る日は 還り来ぬ足跡愛しみて

ひたぶると打笑む時ぞ 求めつつ得べからざりし

秀邃しき真理の道は はろかなり我等が前途

進まざらめや

渋谷富業君作詩

寺井幸夫君作歌

十一月八日（土）曇後晴

生理学（人体）石塚教授、ドイツ語（ヘッセ）眞方教授授業出席す。午后横田と南下、先ずニューブランドで飲食、日活館にて「荒野の決闘」（二十世紀FOX）観映す。西部活劇なり。その壮大なるバックに感心す。実話の映画化との事、ストーリーは平凡なり。余りスリルなし。後、久方ぶりでセコンドに行く、喫茶、煙す。レコードに耳を傾け語る。帰寮六時、夕食後、北村助教授提出の「歴史に就いて」論文執筆す。兼て立案中の「マルクス主義歴史観と基督教歴史観」に就いて二時間ばかり費して完成す。明日は第二安息日なり。午前中教会へ出席し、午后福田さんでも訪問せん。帰省の事ばかり考へてゐたら、昨夜帰省した夢を見た。それが不吉なり。T子が第三人者の妄言を信じて（俺の事を兎や角言ふ）俺が帰っても会はないのだ。然し、最後に誤解を聞いて再び俺を信じて呉れる様になるのだが、何れにせよいい夢ではない。然し、帰りたいものだ。

十一月九日（日）第二安息日 曇寒し

午前中教会出席す。白戸牧師説教「隠れなき生活」偽善への警告として偽善とはヒポクリシーなりとす。そもそも秘密や隠匿で通さうとする人々は元々神の實在を知らぬ無信仰者であると云はれた。午后次郎氏大いにおごる。先ずニューブランドにて飽食、喫茶、満腹す。次に観映「不思議な少年」馬と会話出来る少年が成人するにつれて人間本来の目覚めに到達する非常に興味深いものである。そして自分が会話が出来る愛馬の死以来会話しなくなるのである。無料で観たにしては収穫あり。夜、久方ぶりで福田副知事邸を訪問す。いろいろ馳走になる。をば母と久方ぶりでお会ひする。いい方なり、感謝す。「いつでもお遊びにいらっしやい」の言を戴いて帰る。途中無気味な事ありしが、無藤氏と一緒にだったので難無し、最近の殺人事件の横行は市民を恐怖のどん底へ陥しこんでゐる。警察力の無能か？第三國人の暴行か？：いづれにせよ恐ろしい事なり。

水を指してむかしの氷の形を語ったり、空を望んで花の香の行方を説いたところで役に立たぬ詮議というものだ。昔を繰返して新しく言葉を費したつて何にならうか。

：幸田露伴「太郎坊」

十一月十日（月）曇、晴たり降ったり。寒風冷し

俺はたしかに恋愛してゐる。リーベの事が忘れられない。何も過去の事を兎や角いふ訳ではない。只俺は彼女のためにこそ眞の高校生らしい理想に生きてジェントルマン精神を生かして恥しからぬ人間になりたいと希つてゐる。もし、彼女を切離して考へたら到底こんな事は考へられぬ。そして彼女に對してもこの様に努力する俺のリーベにふさわしい様に勉学、人格修養に努力して欲しいと希つてゐるのだ。甘い蜜の様な恋愛を希つてはゐない。我々学生時代の恋愛は果しない苦難の道に乗越えてゆかねばならぬ。世の人の光とならん爲に二人で努力精進し合はねばならぬ。これだけの事しか俺は彼女に希つてゐない立派な恋愛だと思ふ。俺は信じてゐる、如何なる障害に出会はうと絶對的に俺は信じてゐる。眞実だ！ 信じる彼女よ、きっと君も俺を信じてくれ、眞実に！ 俺の眞実の気持、男の熱情、あの時の思ひ出、そんなに涙が矢鱈に出るものか；俺はなるぞ、恥しからぬ医学者に！ 進むぞ！ その勉学の道に！ 彼女の爲にだ！ 噫！ 僕達は絶えず神に繋がれていなければならぬ。神！ そんな遙か遠くに在るものでない。神への近づきの道、そんなものはない。瞬間瞬間に神と結ばれてゐるのだ。僕達と神とはいつも一緒にすぐ近くにあるのだ（俺は最近こんな考へ方を始めた？）俺達の人生なんてものはそんな甘いものではないのだ。もつと切実なんだ、信仰生活だつてそんな感傷的なものではないのだ、眞剣なんだ。噫！ 俺はもう駄目だ、滅入るばかりだ！ 「旧き人」俺はいつも旧き人なんだ。我らは知る、われらの旧き人キリストと共に十字架につけられたるは罪の体ほろびて此ののち罪に事へざらん爲なると、そは死にしものは罪より脱るるなり。瞬間瞬間に於て俺達は旧き人なんだ、そして瞬間瞬間にキリストと共に十字架につけられて罪より脱るる事が出来るのだ。バプテスマと共に罪の体は葬られたのではない、もつと切実なんだ！ 旧き人、旧き人！ 絶えず一緒にんだ。神様もいつも一緒に俺と歩いて居られるのだ、俺達はこの人生に於てその瞬間瞬間に於て「旧き人」と「新しき生命」の岐れ道に立つて居るのだ！ 俺達の信仰は切実なんだ。然り、俺達は眞剣なんだ！ そんな甘いものではない、切実なんだ； 噫！ 旧き人、順天一麥よ、俺は最近こんな考へ方しか出来なくなつて來た。

十一月十一日（火）雪々々 寒風 雪

物理―数学―解析学…洞田…巡視…ジフテリヤ、斉藤…東京…横浜…寒風…帰省…三学期試験…寒い…団子…南瓜…燃料…日光鍋…ベビーフード…ス

プーン：風呂：帰省：数学：消耗：手紙：リーベ：恋愛：信仰：林文夫博士
：演劇：幸田露伴：ゲーテ：池田浩平：物体：肉体：生殖器：明治：外食券
：横田氏：映画：セコンド：林檎：進駐軍：恐怖：夜：惨殺事件：警察：寒
：福田さん：ストーブ：リーベ：ベッド：夢：夢：夢：リーベ：夢。

十一月十二日（水）

朝より猛烈な吹雪である。すっかり冬支度して登校する。物理、西洋史（中世ロシヤ帝國とプロシヤ帝國のボツコウ）の講義あり。帰寮十一時半、寒風肌を刺し、身も心もすっかり冷える。試験が近くなりさうな消息がある。早くとも遅くとも何れにせよ同じなり。早く帰省出来る様にして呉れ、こんな寒さ、到底湛らない。火の気は全くなく、エッセンは悲壮なり。あゝ何とかして呉れ。本日T子より来信あり。嬉し！誰が何と言ったって俺は彼女を愛してゐる。彼女のない人生なんて考えられない。矢張り理数科を選択したさうだ。好きな道に干渉すべきでなかった。先日、あれ程に熱心に理数科を推めて置いて急に手紙にあんな事を書いたものだから、少なからず感情を害したに違いない。その間の経緯を細々と書いてある。そして「来年の三月まで理科をやりまして、又、四月から変わるかも知れません。今の所どうしても理数科をやりたかったものですから入りました」とあり、理知的な勝気な反面が伺はれると同時に一生懸命やらんとする決意は嬉しい。あんな事を書いた俺が果して間違っていたかも知れぬ。お互いに缺点を知らせ合つて眞実を求め、よりよき完徳への道へ歩む。二人の間に何の障害やあらん。信ずるのみだ！俺は彼女をたった一人の異性だと思つてゐる、変わらぬ愛情をもつて進むのだ。帰つてゆっくり話し合ふ日よ、早く来い！その前に彼女の行き方についてもつと考へやう！

十一月十三日（木）晴 後曇

如何にも北國らしい空模様になつて来た。

独逸語、東洋倫理、英語授業を受く。各教授、試験範囲を拡張さんとしてモリファイで進む。教授がやるなら俺もやるぞ。午后観映、同伴浅倉氏、明治にて飽食す。後、「リラの花忘れじ」を見る。東宝作品、井上正夫、高峰三枝子、藤田進、佐分利信、井川邦子等なり。合点のゆかぬ点あり、特にアイヌの青年と北海道開発会社の社長の娘との恋愛問題は分らなかつた。むしろ、映画のピントは井上正夫扮する社長の好演技に合つてゐるやうだ。修道院に入った母もまざまざと逃げたやうな感じである。あれだけのスペクタクル映画と長期ロケの成果を期待して行ったら、全然がっかりしてしまった。日

本映画の発展策はないものかな。愛情を取扱ふ映画が特に邦画の場合、観客に嫌味を抱かせる様な不手際だけは止めて欲しい。帰寮五時、夜は久方ぶりで机に向ふ。余す処二週間でENDだ。故郷に夢は飛ぶ！然し、俺は勉強せねばならぬ！思索せねばならぬ！順天一麥よ！頑張れ！試験何するものぞ！突破せよ、考えよ、讀書せよ、讀書だ！思索の完成だ！でないとい何の白線生活の生甲斐があるぞ！旧制高校生こそ学生文化の最高峰をゆくものであると自他共に許ねばならぬ。

十一月十四日（金）曇 後雪

帰心如矢！化学（電気化学）及び英語（ヨーロッパ通論中のアレキサンドリヤ文化）の授業あり、試験が近づくといふに一向落着かぬ。別に原因となる様な事も無いのだが？俺は今、大きな試験にぶつかってゐる、大きなと敢て言はう、何があらうとじりじり歯をくひしばって切り抜けて行くのだ、男だぢやないか？悩み抜くのだ！確心を持つのだ！きっと勝ぞ、瞬間瞬間に俺の信仰生活があるのだ、罪と十字架、そこに切実な瞬間瞬間の歩みがあるのだ、泣きたい時は神様と二人きりで泣こう！嬉しい時も神様と二人きりで躍らう！

「凡ては時が解決する」と友は云ふ、或は言ふ「貴様は幸福だ」果たして幸福であろうか、假面を被るなかれ、俺は眞剣なんだ、功利主義、利己主義、迎合主義者はもう沢山だ！切実だ！瞬間の悲劇だ、逆説かも知れぬ、十字架の勝利が逆説的は悲劇かもしれぬ。眞剣な生活だ！歯をくひしばってじりじりゆこう、一步一步どんな事があつても前へ進むのだ！止つてはいけない、躊躇してはいけない！前へすすむのだ。

十一月十五日（土）雪

沈没す、午前中巡視室のストーブに暖をとる。弘田、横田、木下、岩田等集まる。十一時突如出寮、奴ずしへ至り飲食す、美味なり。帰途予科食堂にてクリームパンを食す、之又美味なり。午后一時より附属病院講堂にて北大演劇研究会公演「壊れ甕」クライスト作、大友義郎演出を招待されたので観る。自分の罪を自分で裁く悲喜劇な苦境を画いてゐる。裁判官のアーダムは自己の犯罪を意識して自分を裁き判決を下すと同時に此の判決から逃れねばならぬ、即ち我々の興味は過去の出来事よりも未来に於ける事件の終末にかかつてゐる。之によつてクライストは過去の事件よりも未来に於ける事件の進展に物的な出来事よりも心理的過程に興味を移し、劇の重点を本筋より以前の出来事より現在の状況に置換したのである。此の作品は最高義の喜劇で

あらう、クライストの求めたものは偶然の笑ひでなかったことはよく判った。アーダムが矢継早や、四方八方に早口を馳る中に、果して我々の持つ人生に対する「虚偽、傲慢、怯懦」の考へに鋭い反省を求めてはいなかったであらうか。然し、メツチェン役は例の事ながら気になるアクセントである。キャスト中の産婆、その娘エーフェ、下女を除いては大体芸をこなしているが、多分に練習不十分などところがある。書記リヒトは狡猾な処がよく出てゐる。アーダムもよく出来た。恵水会員森田が扮した司法顧問官ワルターも練習をもう少し積んだら上出来であつたらう。そのアルバイトに敬意を表するなり。本邦第二回目の上演にしては獰猛であつただらう。観客層が相変らずなのは無理もない事である。帰寮三時半、夜は寒いので早寝する。明日は第三安息日なり。

十一月十六日（日）第三安息日 曇天なり

白雪を踏んで教会に参る。清浄な気充つ、白戸牧師説教「信仰と聖別」あり、傾聴すべきものあり。帰途は電車来らず徒歩にて泥濘の中に帰る。午后、横田、斉藤と再度出寮南下す。先ず、明治にて喫飯す。日旺の事とて混雑する。次に、横田と別れ斉藤と二人でニューグランドに至り、又飲食す。此処は繁化街の外れなれば静かなり。ストーブにて暖をとるなり。暫し、学部卒業後、その他に就いて語る。友情身にしてみて嬉し。次に本屋に出入し、新刊書を漁る。慾しきものとてなし。三越に至るに食料品係に美しき乙女居りぬ。札幌に於て稀に見るべきなり。斉藤曰く「彼女は多分良家の子女なりしも、荒ぶインフレの嵐に雄々しくも闘いつつ職業婦人として彼処に働くなり」と、働く女性の美しき、その理智的な瞳、額の辺をかすめる言ひ知れぬ一線はたしかにその教養の深さを物語つてゐる。暫し二人で見つめる。斉藤はけだし、愉快なる男なり。次に西林へ行き、美味なりとかねて噂に及ぶジャンケットクリームを食す。又、さつきにゆき、喫茶す。川原、皿木来る。降雪の中を電車にて帰る。けだし、遊びし一日なり。夜、次期委員長推薦演説会あり、雑なり。今西洋、中島（武）、稲垣、四氏が候補す。就中、中立派の重鎮中島武敏氏は偉物なり。彼を措いて他に適任者なし。然るにその内なる情熱の持主の爲に彼の人格を知らぬ寮生多数あり、彼を知るものとして惜しむべきことなり。

十一月十七日（月）白雪乱舞す、

雪中の登校も興あり。午后稻田副知事邸を訪ね、試験中の在泊を乞ふに快諾さる。家より通信及 Geld（編註：ドイツ語でお金）来る。寮費及び借金返

済す。学成りて東京へ帰れ！ とあり、厚情嬉しき、夜投票あり、遂に中立派の長老中島武敏氏次点なり。委員長当選は保守派元老鈴木幸種氏なり。注目された急進党の今西洋三氏及ばずと下位に落つ。鈴木内閣の出現により、我恵水会は入閣干渉せず、此処に創会以来歴代部長、委員を送り、多大なる貢献を委員会に爲して来た恵水会も遂に保守派の組閣により純然たる野党として下る事になった。又、宣いであらう。優秀なる会員は次期委員会には必ず名を爲すであらう。期して俟つべし。

十一月十八日（火）昨日に続いて終日白雪降り続く…

近年稀なり早雪である、一尺も積もったであらう、全く寒い、到底机に向つて居られない、床中に学ぶ。数日に迫った試験を前にして何も手に就かない。果たしてこんな事で良いのか？…そぞろ家が偲ばれる。家ならいくら燃料不足でも手あぶり火鉢ぐらいあるだらう。悪コンディション下に迎へる試験である。午后、例のハシゴクジをやつて暖をとる。ホッケ、ワカメ、キャベツなり。夜が来れば又寒い、噫！ 無情なる試験よ！ されど移ろい易き若き日、玉の如くそれを惜しまん。この苦難の道こそ、人生、眞の道へ続いてゐるのである。

一．あゝ消え果てし青春の

愉楽の行衛 今いずこ

心のままに興じたる

黄金の時よ玉の日よ

汝帰らずその影を

求めて我は歎くのみ

あゝ移りゆく世の姿

あゝ移りゆく世の姿

二．塵をかぶりて若人の

帽子は古び粗衣は裂け

長剣は錆をかうむりて

したたる光り今いづこ

宴の歌も消えうせつ

刃音拍車の音もなし

あゝ移りゆく世の姿

あゝ移りゆく世の姿

三．されど正しき若人の

心は永久に冷むるなし

勉めの日にも嬉戯の

つどひの日にも輝きつ

古りたる殻は消ゆるとも

実こそは残れわが胸に

その実を犇と護らなん

その実を犇と護らなん

―アルト・ハイデルベルヒより―

如何に世の荒波、濁世の塵を沿ひ様と我らの眞実の姿は決して失つてはならぬ。

十一月十九日（水）快晴、

冬陽を浴びて雪を踏んでの登校又楽し、小松と二人で登校する。学校も教室も学年末の気分だ。「之で今学年の授業を終わります、皆さんも元気で冬休みは勉強してください。この続きはまた来学年若し又皆さんの授業を受け持ったらやりませう」と各教授が挨拶する。

思へばもう学年も終わりだ。あと三日で各教授ともお訣れだ、多幸を祈るや切である。委員会も試験中止を目論んで一所懸命だ。然し、此処まで来てしまつて今更寒さを理由にしての試験中止も無理だらう。俺はずるい考へかも知れぬがやらねばならぬものなら、やった方が良くと思ふ。医専食堂で藤井氏に会ふ。南瓜南京に暖をとる。恵水会辻村教授ロマ書九章講義あり。ロマ書九章「何故ユダヤ人はキリストを信じないか」に就いてのパウロの予定の論理に就いての説明なり。夜半九時、突如第三百三十七期委員会に入閣交渉あり、正に晴天の霹靂なり、恵水会として飽くまで進歩派としての線を保持するか、野党として在るか、正にその分岐点に来るなり。超政党内閣として鈴木氏の声明に和するか？…本会入閣交渉は即ち俺に生活部長、朝倉氏に寮務庶務委員なり、キリスト民主党勢力の進出は喜びにたえないが、俺の私的生活の不備を考へると速断を下せなくなつてしまった。こんな問題を早急に解決するのは確かに間違つてゐるのだ。

十一月二十日（木）

鈴木内閣の組閣工作は難航を続け、十九日夜半に入るも寮務部長の決定を見ず、今西（洋）氏は一身上の問題を盾として受諾せず、対談数時間に亘り

、今晚一時遂に鈴木委員長の熱意により受諾、更に生活部長の詮衡に入り、蹴球部長江口昭氏のフアイトを買って同氏に対する交渉に入り、同氏また蹴球部内の事情を察して頑として応ぜざりしが、之又、委員長の熱意に動き受諾、愈々交渉は最終段階の会計部長に入る、時に一時三十分、兼て組閣線上に上つていたキリスト民主党恵水会委員細野順三氏に白羽の矢が立ち、既定の三氏は深更私室に同氏を訪ね、最後の泣落し戦術に出た、対談二十分、今西部長の説得遂に成り、同氏は恵水会より又入閣する事を決定した。なほ、各部部員の撰任は今日に行ひ、遅くとも明日夜までには構成を発表する事になった。凍雪を踏んで登校する。横溝、樟本、吉田各教授より講義受く。午后、横田、斉藤と南下し、ニューグランド、ユーゴーで飲食し、交響映画詩、「緑の小筐」(編註…一九四七年の映画)観映す。試験四日前に観映とは自分ながらあきれる。致し方ない悪友を持ちたるものなりとはお互に言ひ合ひたることなり。一ヶ年の月日を費したにしては味気ない映画なり。只少なくともアルバイトのにはいがするのは一応嬉しい、ロマンチックな夢を画いてゐる。雑に耳にこびりつく交響楽、声楽も日響、東放と来てはもう少し何とかならなかったものか。然し、大映にもこれだけの作品をつくる良心が生まれ来て事は嬉しい、賞讃すべきなり。夜は組閣工作あり、内閣三部長会議あり。

十一月二十二日(土)

難航に難航を続ける組閣工作は昨二十一日(金)対運動部交渉は暗礁に乗り上げたが、熱烈なる各部長の懇請遂に成り、又応援団交渉は団長板谷氏頑として応援団よりの入閣を応ぜず、ねばりつける事遂に今朝に至る。斯くして組閣開始以来数十時間、遂に今朝三時完成す。正に感激なり。各運動部、文化班の精鋭を網羅したベストメンバーなり。超政党主義は実現したり。恵水会は又、三名入閣せり。

委員長 鈴木幸種

寮務部長 今西洋三(文化班)

庶務(内) 寺分元一(無)

庶務(外) 加藤和夫(ホッケー)

文化 榊原敬(同好会)

厚生 今西暢夫(恵水会)

会計部長 細野順三(恵水会)

庶務(寮) 竹内五男(無)

庶務(生) 浅倉悟(恵水会)

生活部長 江口昭寿(サッカー)
庶務(渉外) 深沢利行(畜産)
庶務(購入) 伊藤益義(同好会)
庶務(在庫) 能勢誠夫(ラクビー)
庶務(自給) 石金昌晴(無)
庶務(自給) 高島克夫(無)
庶務(会計連) 稲垣昌利(図書部)
購買 山家貫之(水泳) 以上

十一月二十三日(日) 新嘗祭、曇天、第四安息日

組閣工作が終つて安堵する、心から安息日を迎へる事が出来た。伊藤、朝倉、今西と教会に出席する。白戸牧師説教「神の栄光と苦難」拝聴する。ロマ五の一ノ十一 忍耐と練達の宗教なり、我らは現実の醜さに巻き込まれて悲觀厭世的になつてはならぬ、苦難の中にも無限の恩寵を発見せねばならぬ、そして基督者の生活こそ革新に充ちたものであらねばならぬとし、福沢(諭吉)、新島先生等私学の大先人の逸話を語られる。そして諸君の心の中に如何なる革新が今行はれつつあるか、特に反省して頂きたいと結ぶ。明日よりいよく試験なり、先ず第一日目英語と数学なり。数学ノータッチなり、およそ今度の試験くらい怠慢なりし事は前例なし。さて、如何なる結果になるや、ともあれ全力盡すべし。終れば帰省なり、夢にまで見た故山が迎えて呉れる。あゝ、五日間の苦難よ！そして二月間の楽しい休暇！

十一月二十四日(月) 晴

残雪を踏んで登校、斯くして試験第一日目に入る。積分及び英語(Quality)なり、先ず先ずこの悪コンディションとは云へ完敗なり、積分60、英語50なり。受ければ良いとの事とは云へ怠慢の罰忽ち下る。自業自得なり、後悔先に立たず：然し、ともかく、余す処四日なり、そして楽しい帰省なり。夜は猛フアイトで化学に取組む、頑張るべし。家よりGield(但、帰省費及正月用エッセン費)来る。試験済み次第適当に調達する要あり。いつも乍ら母上の御配慮身にしみて嬉し！ 十二月三日夜出札の予定なり。

十一月二十五日(火) 曇

試験第二日目、無機化学及びドイツ語なり、又しても惨敗なり、化学は全部に手つけたが全部惨敗す。ドイツ語、単語を辞書で引いていたら時間が来る、そして僅か三行を訳したのみ、又もや惨敗なり。あゝ無情！斯して

第二日目終りぬ。余す処三日のみ、そして大いなる希望の休暇なり、この二月休暇をいかにして送るか、慎重に考えねばならぬ。

一．信仰生活の反省そして充実

一．高校生活最後の長期休暇の勉学

A．語学基礎知識の確立

B．讀書の計画実践（外國文学、宗教書）

以上綜合して高校生として恥からぬ人格の陶冶に精進する。具体的な案として、Xマスまでは教会奉仕の傍らA案の実践、Xマス以後新年を迎へて家庭の雰囲気を満たして傍らB案の実践、それ以後一月末までA案の実践である。二・三月は伝統ある寮、過ぎし二年の間限らない温情を以て導いて呉れたこの寮に対して奉仕せねばならぬ。新丸入寮、新学期開寮、記念祭と八月までの任期を持てる全力を奮つてその愛寮心に訴えて奉仕するのだ。名誉あるこの高等学校の寮の自治委員としての生活こそ長き人生に於ける良き思ひ出として残さねばならぬ。眞実と愛情をもつて愛さねばならぬ！ あゝ遙かなり我らが前途！ 進まざらめや！（編註…昭和二十一年寮歌「時潮の波の」一節）

十一月二十六日（水）曇

昨夜来の降雪を踏んで第三日目のドイツ語（眞方教授出題）試験を受く、二題中一題完璧、他は半分、どうやら六十点はとれたらしい。明日は生物に物理、幾分でも自信あり、どうやら峠を越した感あり。新学期は明年四月一日よりと発表さる。又しても長期休暇なり、然し乍ら、及第はいつ決定するや？落第の心配無きも矢張り小人の常なり、止み難き帰心よ！ 今暫しなり。

十一月二十七日（木）白雪粉々として心身共に寒し、

四日目、生物（動物心理学）及び気体運動論（物理）の試験を受く。無難らしき、特に物理はトップを切つて提出す、一応秀才面して。続いて浅倉出す、二人で帰る、吹雪の中を… 明日は解析学に英語なり、全力盡すべし。

十二月二日（雪）

試験無事終り、待望の休暇だ、三十日には凡才會があり、委員引継ぎ紹介であつた。又二十九日の恵水会の送別コンパには突如として眞方先生の東北大栄転が発表され、我々同先生を深く敬慕するものとして悲しき衝撃を与へしめた。そして三年目送別コンパが眞方先生送別コンパと変り、「都ぞ彌生

「を聞き乍らじ」と目に涙を浮べて齒をかみしめて居られた先生の姿が送る者を何かしら熱いものを胸に感じたものである。又、「信仰生活の確信をもて、神の絶対性を信ぜよ、北大のこの良い環境はロマンティスト觀念主義者を輩出するのだ。信仰生活もこの地にあつては他の如何なる所と雖も及ばないであらう。諸君！確信をもて！」と訓された。雪の中をローンの彼方へ去つて行かれたあの先生の御姿こそ我々の人生、特に高校時代の歴史に美しい一ページを画かれたものと云へやう。噫！無情なり。

我が最愛の師去れり、

白雪散り布く宵 白色冷冽の顔を引しめて

我が師は叫べり 「確信を持たん」と

我が高校時代に心から慕ひし師よ

僅か一年の訓育の影に 師を慕ふものの

如何に多き事よ！ その昔クラーク師は八ヶ月にして

札幌を去れり、そして今宵、師は一ヶ年にして

又去れり、良き師は止まらず

師を思ひて泣く遊学の輩よ

師の勉学の大成の爲を思ひて心より

送らん哉！ その栄えある門出を

見よ 美しき上弦の月光を浴びつつ

白雪を踏みつつ去りゆく師の姿よ

送らん哉！ 遊学の友よ、涙を拭けよ

師は去りゆくのだ

我々の後續を信じつつ去りゆくのだ

送らん哉 悲しくも嬉しき今宵なり

十二月九日（火）曇

俺は素直にならなければならぬ、俺の唯一のそして最大の缺点だ。この間もそして昨夜も俺は我儘だった。俺は心からT子を愛してゐる。T子が俺に示す態度、言語を愛してゐるくせに率直に受入れられないのだ。T子は俺を信じ慕つて呉れてゐる。あの手紙もそして先日の三月ぶりの対談の時もT子は心から嬉しさうだった。そしてあの家庭も俺を歡待して呉れた。それなのに何故俺は心から全面的にその純な心を受入れられないのだらう。俺は愛してゐる、他の誰よりも、誰にもましてT子を愛してゐる。眞実だ、T子は眞実を語つて呉れた、その母にも言へない悩みを語つて呉れた、俺はT子に慕はれてゐる。俺はもつと素直にならねばならぬ。何故なら、人間の眞実の苦

しさやら悲しさやらは礼儀といったもののなかではやはらげられ、又忘れられなくてはならないからだ。俺は苦しい、T子も苦しいに違いない。この苦しみを通して互に眞実を求め得るのだ。T子が言った「お互いに過去を反省し、励し合つてゆきませう」。俺達は今この苦しさを疑つてはならぬ。眞実は眞実だ、ちよつとした眼差しの中にも不幸と幸福を見て、たちまち未来の予言をする、恋するものは早急な宿命論者となるのだ。T子が言った「私、こんな幸福で良いかしら」。あゝ、恋する者の前ではこんなに憶病になるものだろうか、あゝ、俺はこんな恋をしたのははじめてだ。あゝ、忘れられないこの悩みよ、惨れなる宿命論者よ、ロマンチストよ、然し、俺は余りにT子を愛してゐる故に勇気がないのかも知れぬ。T子よ！ 知るや、この心の中を！

十二月十日（水）雨

久方ぶりで雨なるものを見る、美しいものだ。帰省してすでに五日、今度の帰省ぐらいショックを受けたものはない。俺の性格がつくづく旧高校生的、非人情的なものである事を知らされた。札幌、それも自治寮と云ふ型の中に閉じ込めて卑俗と離れた生活がこんな頑くかな人間に育んでしまったのだ。然し、俺はこの様な性格を全面的に否定し様とは思はない、混沌たる世相の中に、俺達が求めてゐたものは余りに高すぎるのだ。現実との融和性の乏しい人間かも知れぬ。然し、この現実なるものが果して神の義によりて認められたものであるとは思はない。遙かなる眞理の道（編註…昭和二十一年寮歌「時潮の波の」結「うるはしき眞理の道は 是ろかなり我らが前途」）を踏まえてゐる）、それに向つて前進する事が俺達、青年がいつの世にあつても変らぬ姿であるのだ。情熱の乏しい、確信性のない来年が如何に多い事よ、俺はその中であつて盡きる事のない情熱を燃やし、神の絶対性の確心を持つて生き抜きたい。それでゐて俺が何ぞ非難攻撃されやうと退かない決意はある。俺は消耗を回復した今日、再出発せねばならぬ、少しぐらいの精神的ショックがなんだ！

大乗的に見れば他愛もない事件だ、然し／＼！ 俺はこのままでは俺の良心に済まん。こんな事で悩んで良いだらうか、俺は分らない。余りに恵まれすぎた環境から、こんな事にだけしか悩めない人間になつてしまったのだらうか？…俺一人幸福の渦中にあつていいのだらうか？…もう何が何だか分らなくなつて来た、恐ろしいばかりのサタンが襲つて来さうだ！ 俺はT子の瞳が苦しいのだ、俺達はたった一瞬の眼差しの中に苦しみ抜いてゐる、凡てはあの瞳の中で悶えてゐる、T子よ！ 忘れられない瞳よ！ あの瞳の中

に凡てを知り得るからこそ苦しいのだ。俺はそれでゐてその瞳の中から出られないのだ。あゝ！ T子も苦しいに違いない、その瞳はあの河口湖の宵、二人で静かに漕いだボートの上で、上弦の月を仰ぎながら涙でぐっしより濡れた眼差しの中から見出してからだ。おれはあの瞳の前では何度悩み抜いたか知らない、絶対にあの瞳の前では偽れない。眞実に恋するものの前では人間は憶病になる、何故なら一般の人に対しての様に平気で嘘をつかせない、自己をいつはれないからだ。俺はあの瞳が苦しい！ 然して絶対的に俺を支配してゐる以上、俺はあの瞳の中に生き抜かねばならぬ。苦しい、苦しい：恋といふものは何故こんなに怖しくて苦しいのだらう、恋とふうものはみなこんなに苦しいものなのだらう、俺一人の恋がこんなに苦しいものなのだらうか？ 然し、俺は生き抜く、眞実を求めて！ 然してT子に対する気持は果たして恋なのだらうか。この俺の悩みに対して解答を与えて呉れるものはないものか、瞬間瞬間に於て切り離さされて行く気がする。「幸福なんて云うふものはほんの束の間に存在するのもかも知れない、はっと気づいた時には幸福は通り過ぎてしまつてゐるかもしれない」つまらない考へだ。

1947' 12' 10' AM10:00

十二月十一日（木）快晴

自己を偽れない姿こそ眞実の人間の姿と云へ様、或る行為を善であると知りつつそれを実行しない、これ程の悪はない。今日も俺はもう少しでこの悪に敗れる処であつた。然し、俺は勝つた。学問的良心があつた、少なくともそれを俺は認める。学問的良心の前に何の不純なものがあらう、一学究の徒にしてこの良心が麻痺したら如何だらう、俺はこの良心の前には屈服せねばならぬ。苛癪なく悪のTemptationは来る。

十二月十四日（日）第二聖日なり、朝より晴たるり曇つたり

久方ぶりに家族揃つて安息日を迎へる、教会に出席す。横溝礼子姉洗礼式あり、午後は障子張りに過す。夕方雑踏する原町田マーケットを尋ぬ、スキヤキの材料を購入して帰る、今夜は一家揃つてスキヤキなり。寮生活の単調より一步進んで大いなる複雑なる社会の現実に捉はれてみると俺は老獺にもそれを避けやうとして反つてマンネリズムに陥つてゐるのだ、口にはデンケン（編註：ドイツ語のdenkenで思考する）してゐると見せて事実は怠慢なる生活を夢見てゐるのだ。複雑なる社会、現実の醜さから目を蔽はんとしてゐるのだ。或る意味から云へば良いかも知れないが、それは希望のない人間に止めてしまふ現実の醜さ！ 俺はそれを逃避してはいけない。將又それに巻き

込まれてもいけない、六敷^{むつ}しいところだ。現実の社会の醜^{みにく}さは俺は次の三点に指摘したい。先ず、礼儀作法の單純、無能なる事である、少なくとも哲学的、科学的ヒロイズムの洗礼を受けた現代のインテリゲンチヤが何故宗教を寺院を教会を批判する事なくしてそれに飛び込得やう。最後に理想主義、觀念主義の全面的否定である。これらの缺點から来る社会悪は今や敗戦國の切実性と相俟^あつて師走の俗塵と共に吹き荒んでゐる。そして俺はそれを眺めてむしろ自分だけ抜け出てゐれば良いのだ。そして平々凡々毎日を過ごしているに過ぎぬ。

十二月十六日（火）

人間としての眞の完成への道程として俺は所謂、俗に云ふ「膳^{たん}つ玉の太い人間」と云ふものを数へない。日常茶飯事、デリケートな人間だったら、斯の如き社会相の中では絶対に暮し得ない又、暮らし得たとしても、只、それを表面的だけカバーするのであったら、自己嫌惡に陥り、結局は元のデリケートな心の持主だけの事しなくなるのだ。人格完成程、遠且大なるものはない、誰から見ても間然^{かんぜん}（非難すべき欠点）する事のない人間、信仰の在り方である。エンマヌエル！である。坂田祐先生の云はれた御言葉がつくづくと思ひ出される。デリケートな人間はある意味に於いては社会の良心として道徳、礼儀を知る者として賞讃されやう。然し、眞の信仰の持ち主であつたら絶対に神への背徳者として自己批判に陥り、信仰から離れてゆくのである。デリケートな社会を考えると俺のこの様な考へ方は大いに攻撃されやう。嘘を平気でつく人間の如何に多い事よ！果してこの俺も自己を偽つてゐるかも知れぬ。兎に角、俺は膳^{たん}つ玉の大きい人間になりたい。それも希ふのは俺自身がデリケートな人間かも知れない。誰からも何と云はれても平然としてゐられる人間になりたい。俺はこの日記を逃避所としてこんな事を書いてゐるのではない。自分自身の心が固くなつて行く様な気がする、実につまらない人間だ。俺の様な我儘な融通性のない人間は誰からも顧みられなくなるかも知れない。然し、俺は信じてゐる、きつとこの俺を信じて呉れる人が居ると云ふ事を、ロマンチックな夢でもない。我が道は遙かなり、遙かなり進まざらめや！（編註…昭和二十一年寮歌「時潮の波の」の歌詞を踏まえている。百十六頁参照）

十二月十七日（水）雪

聞けば当地方初雪なりとか、「人、その眞実を捨て、之、その生命を捨てるに等し」である。俺自身の悩みと云うものが理想主義、觀念主義と現実

主義との対立であつてみれば、そこに何の矛盾があらうと、結局、世の人が唯物主観の否を云々する所に矛盾があるのであると信ずる。然し、俺は唯物論を絶対的に肯定するものではない。又否定するものでもない。キェルケゴールの矛盾はそっくりそのまま俺の矛盾である。別の方面で云えばプラトニックラブ（眞の意味の）がプラトンの言つた通り、我々は第一、第二そして第三の肉体を愛する事が出来るとする考へを俺は然り！ としたい。俺は終戦後輩出したオナニズム文学を二流文学とする一流文学者に反論したのである。それは世の多くの人の言うエロチズムでもない、人、その眞実をカバーするのに如何に老獪であらうと、俺は反動なる言葉がその缺陷を大いに暴露してゐるのであると思ふ故、一進一歩、彼岸に辿りつくまで悩み続けるのである。成程、俺は馬鹿かも知れぬ、単純無智かも知れぬ、世間知らずのキント（編註…ドイツ語のKindで子供の意）であるかも知れぬ、それでも何でも良い、俺は歩む、正しいと信ずる道を、バイブルの上に燦然と輝いてゐる眞理の光！ 進まざらめや（編註…昭和二十一年寮歌「時潮の波の」の歌詞を踏まえている）。

十二月二十三日（火）

先日、久しぶりで浅草を見物す、大衆的な雰囲気なり。帰途、地下鉄より銀座に出現す、前日と一轉して正に自らインテリゲンチヤの逍遙の地、模範的繁華街だけあつて一介の熊学生大いに教へられる所あり。宵の銀座、何かしら印象的である。柳の並木を歩みながら煙草の煙を、星空目がけて吹きかけてやった。點滅するネオン、往来する男女の楽しい囁き、喫茶店のいらだたしい物音、インフレの商店街に溢れる美しい商品の数々、凡てが調和して息吹きしてゐる。Xマスを祝う人々の心に果して去来する眞実の求めは何ぞ！ 男女の群のさざめき乍ら往交ふも師走の烈しい風に吹かれてはその囁き声も直に何処ともなく消えて行つてしまふであらう。彼らは何を考へてゐるのだらう。翻つてこの自分も自重せねばならぬ、Xマスも二日後に迫つた、はつきりと一線を画したい、恋々としたマンネリズムより脱せねばならぬ。そして、新生命を拓かねばならぬ、このままでは破滅だ！ そんなだらしない恋であつたら潔く止めよう！ 要するに進むのだ、別に破端が来た訳ではない、信ずるだけだ！ それだけは彼女だつてきつと判つて呉れるに違ひない、恋だ、信ずるのみだ！ Xマスを期して前進せねば駄目だ、果しない苦難の道、永劫の道へ！

十二月二十四日（水）

今宵Xマスイヴなり、そして愈々明日は楽しいXマスなり、そして不甲斐なき自分なり、慌ただしき過ぎし一年なり、神の御前に慙愧ざんきするのみ、静かに静かに顧る。腑して祈上ぐ順天一麥の罪をとりなし給へ、ルターもパウロも凡て日常生活のマンネリズム、思索生活のニヒリズムに深くくひ入って離れなかった事は確かであります。絶えず御手の中より離れんとしてあがいた、情ないこの心を御心ならば許し給へ、あゝ、静かに静かに暮れてゆくイヴなり。午後六時より、T子、速子、規子、四朗とスキヤキを囲んで心ばかりのイヴの祝ひする。そしていろいろと語る。皆、Xマスを期して何かしら新しい出発をして呉れる事を祈る。T子、速子よりプレゼントさる。幸あれかしと祈る、星瞬き美しき夜なり。

十二月二十五日（木）晴、一九四七Xマス

いざ祝へ、歌へ！ 楽しい今宵なり、何もかも凡てこの日の爲に祝福せよ、ベツレヘムに輝きし星は今こそ全世界の凡ての人々の上に輝きわつてゐる、仰げ！ 祝へ、主イエスの降臨を！ 凡ての人よ、その心の中に主キリストの誕生を祈れ！ 午後二時より原町田教会Xマス祝会に出席す。青年会、幼稚園教師、日曜学校生徒の演ずる劇、ページェントに暫し樂さを味ふ、そして各グループ家族に分れて持参の食事に今宵の肉体の糧を戴く。そしていよくキャンドルサービスなり、多分に形式的な所あれど、昨年比べて自分としては落着いた気分になれた。心の中に再び主イエスの降臨を希ふ、花岡師の言はれた如く「昨年は多分に反動的なものであったが、今年は考へるXマスにしたい」の意味がよく、その辺の含蓄がんちくを突つきものであらう。終つて献金する。今宵は美しき星空なり、噫！ その昔のベツレヘムの星は何処に在るや、三人の博士は何処より来るの？ 否！ 今こそ我らの頭上にあり、途上を見よ、T子、速子にプレゼントする、共に帰りつつ。

十二月二十六日（金）晴

絶好のアルバイト日和、午前中XマスLiveを片づけ、午后零時半鶴川中学校目指して出撃す、さつまいも二十貫なり、本町田―坂―景觀―野津田―中学に至り。広田治昭氏と談合し、後リヤカー、自轉車に積んで帰る。途上村野宅に寄る、家人不在なり、慙愧ざんきなり、止むを得ず消耗の体を鞭ち、例の長い長い坂を乗り切つて四時三十分帰宅す。久方ぶりに田園気分満喫す、矢張り内地の田舎は北海道のそれに比べて落着いてゐる、気分だけでもよい、たまにはこうして歩いて見るべしだ、味へない美觀や人情、風俗に接する事が出来る、よきアルバイトの一日なり。

十二月二十七日（土）

師走も一日と押つまってインフレの巷にも新年を迎ゆる気分が漲つてゐる、精神的な正月気分より、矢張り人情の常として物質的な気分の方に人が惹かれるのであらう。疏しい歳末風景がマーケットには漂つてゐる、東京裁判を大詰めに近づいたらしく、東條段階に入つて来た。キナン主席検事、清瀬弁護人、木戸日記、そしてこの東條証言こそ東京裁判の焦点と云へるだらう。戦争の責任を負ひ、天皇の非責任者論を述べたあたり、流石、他の被告と違ひ敬意を表するに足りる。只、軍閥問題でそれを否定したのは肯定出来ない。昭和五年以降、嚴然として政界に君臨していたのは事実である。こうした独善的な考えが國運を如何なる方に導いたのを知らずくに物語っている。又、自衛戦論も國際法規より見てどの程度まで正當なのか、この辺が直接裁判するアメリカ側が戦勝國としてその指導國家として認めるのか興味がある。何れにせよ、新しい年を迎へるに当たり、この様な神ならぬ人が同胞を裁く事は早く終了して貰ひたい、それを祈るものである。午前中、退屈なのでT子宅へ遊びにゆく。丁度在宅なので暫し話す。彼女が言ふ事はよく判る、だから俺は辛いのだ。二人だけで居る時の彼女の楽しさうな様子は事実、この俺も楽しい幻影に襲はれる。斯くあつてはならぬならぬ、学生時代の恋愛はimmobile trust（編註：不動の信頼）だ、表面的なものは二の次だ、良く分かつて呉れてゐるのに違ひない、環境の点と彼女は指摘して訴へたが、彼女としては悩むに違ひない。眞に愛に信ずる人の前では憶病であつてはならないのが眞実の愛だ、その点、T子は思ふ事を良く話して呉れる。帰り際に「夕方来て頂戴ね」と言つたが、互いに交す瞳の中に無限の信頼を訴へてゐる、俺は信ずる、絶対的に！「もう一月で終わりね」「あのカレンダーが全部終るとお歸りになるのね」もう沢山だ、俺たちはセンチメンタリストではない、眞実だ！ immobile trust！だ、楽しい苦しい二人なのだ。

午後、四朗と二人で出浜す、先ず野毛坂マーケットを見学し、森永で一服し、東西汽船本社に昌兄を訪れ、共に某支那料理店で喫食した後、リアルトにて「マーガレットの旅」観映す。マーガレットの演技力に感心する也。美しいヒューマニズムを解いてゐる。肩もこらず別に考えもせずマーガレットの美しい発音に耳を傾けつつ見た。帰宅八時一寸過ぎ、植民地化した横浜である。

十二月二十八日（日）雨

本年度最終聖日、礼拝に出席す、花岡師説教「今年も容し給へ」あり、雨

が静かに降り顧みて神の御前にこの一年の犯せし罪の数々の御許しを願ふにふさわしい聖日である。俺は最後の一线迄来てゐる、自身の冷静な理性の批判をたぎる青春の血潮の前に嚴然と立たしめて決してゆるめてはならぬ。制御せねばならぬ、然し、最近の俺の生活を考へて見ると一步前進した事はたしかだ。大いなる感謝である。信仰生活こそ血と理性の烈しい争ひである。余す三日、そして俺はもつと眞剣に考えて新しい年を迎える。新しき信仰生活に向けて努力前進するのだ。

十二月二十九日（月）曇 時々降雪

師走も押寄り吹き荒ぶ寒風と共に陰惨な一九四七年は去りてゆくのである。肉のみによつて眞実を求めんとしてこの年、然し、終戦、被占領と云ふ生々しい現実には凡ての眞実が覆され、只自己の肉体のみによつて得たる眞実の叫びのみが動かなかつたのである。曰く、エロチズム、デカタニズム、これら一様の頽廃主義を以てする見方は全面的に否定するものではない、流行でもない。次の新生命に至る大いなる躍進の過程と見るべきであらう。肉による叫びが次時代を生むのである。その中にヒュマニズムを失はなかつた事は確かである。巷間に溢れるエロダンス、青年男女のデカタニズム、ラブ、文学界を風潮した可能性文学、凡てがこの過程の主流にあつた。肉のみの生活を否定する、自稱宗教家（特にクリスチャン）よ、猛省せよ、姦淫に同情せよ、共に罪の容しを乞へ、巷間のミーチャン、ハーチャン並の姦淫を誰がしなかつたと云へ様か、そこに生れる肉体の眞実を誰が否定し得やうぞ、デカニズムこそエロチズムこそ躍進の一步である。「神よ、豊かなる恵を全日本若き世代の上に垂れさせ給へ、罪を意識しつつマンネリズムにサタンに従はねばならなかつた、過去より救ひ給へ、眞実には変りはありませんでした、神よ！」 大いなる前進への一步を導き給へ、アーメン」

十二月三十日（火）快晴なれど寒風し

噫！ 過れる一年よ、恥よ敬愛する神の御前に、

過ぎし一年、一月と三月、独善主義者

四月と七月デカダンス 八月一ロマンティスト

九月と十一月ロマンティスト、偽ヒュマニスト

十二月ニヒリスト 何と不甲斐なき一年よ、一つの主義、思想が生き得なかつた過去なり。静かに回顧すればあの頃である、五月六月の毎日である、友人Sと二人で札幌の喫茶店を軒並み歩き廻り、毎夜の如く深夜まで遊び歩いたものである。化粧の分厚いメチ公にチャホヤされ、夜の女に追かけられ、

二人で今一步の処まで行ったのもあの頃だった、そして、飽くまでデカタニズムを否定し、友人Kのヒステリックな嘲笑を罵倒し、一杯のビールと胸をはだけだしたブスメチ公（編註：ブス *metchen* ブス女の意か）の本能的な姿態を口先一つで嘲笑し、G I アルバイトによる収入は凡てこれに貢ぎ、夜の来るのを唯一つの享樂として生活したのである。然し、勉強だけは怠らなかつた、一つのイデヤに生きた二学期より反つて出席率は良かった。そして試験の成績も悪くはなかつた、神より離れんとして懸命にもがいた。眞方教授に一喝されたのもあの頃だった。罪のみが俺を眞実へと導くと信じた。教会を呪つた、反動的にエクレシヤ（編註：英語 *ecclesias* の教会・聖堂）への憧憬は高まつた、然し、俺はロマ書だけは毎夜讀んだ、行きつく処まで体験しやう、罪に入る我身の深きそれでゐてデリケートな過程を体得し様と焦つた、盲従する僕より反抗を以てする僕の愛を神は必ずよみし給ふと信じた。毎日の早天祈祷会が如何に苦しかったか、礼拝出席の苦しかった事、只、水曜日の聖書研究会が唯一の俺のはけ口だった。然し、神は俺を最後まで離し給はなかつた、教会が怖了となつたのである。よし！ 飛び込むぞ、そして四十回記念祭を迎へた、友人と争つた、争へば争ふ程、自分のイデヤの不足を痛感した。記念祭と云ふリズムは大いなる刺激を与へた、収穫であつた。そして、平和なる夏休みを迎へた、思ひ起せば七月十七日の晩、あの席上でT子の視線を受けたのである。それ以来の一月半の休暇の如何に平穩であつた事か、悪夢の幻影である、希望の夏であつた。二人で月の河口湖のボートの上で眞実を求める事の苦難を語り、愛を囁いたのだつた。T子は泣いた。俺は愛し合ふ事の苦難を言つた。只、夢の様な一月だった、クロバーの学舎に帰つたのは九月八日だった、一学期の俺の悪夢は覚めてゐた、余りに平和だった。

夏休みが斯くせしめたのである、熱ひ俺のたぎる情熱は懷人の想となつてつきる処を知らなかつた、ロマンティズムの二人の便りは交はされたプラトニックラブのリミットと云ふものを考へ出した時、俺はとんでもない大罪を彼女に犯してしまつた事を知つた。偽ニヒリストの生活が二回の試験に亘りつつ始まつた。札幌の市街へは一步も出なかつた、月夜の原始林を逍遙した。一片の淡きロマンスを追ふかの如く装つて：十二月帰省！ 恋するもの、愛されるものの苦難を語り合つた。一瞬の眼差しの中に微笑の中にお互の無限の信頼を知り合ふ事を知つた、苦しい二人だけが二人だけである時は涙が出る程嬉しかった、飛び込んだまゝとした教会の門は狭かつた、冷たかつた、信徒の愛に一片の疑問をはさんだ、俺はもう遅かつた。神様は「出直して来い」と言はれた、俺は言つた「何て手離して下さらぬのだらう」、「お前を手

離すと大変な事になるからな」、人々は言った「左に傾ひた」、曰く「偽善家」！ 罪人一麥、罪人一麥の二十二年の一齣は罪に充されて終わってゆく、罪によって結ばれた二人、罪多き一年、あゝ、凡てがサタンの囁きの中に生き得た、この一年よ、さらば！ 罪人順天院敬人一麥居士の青春の一頁は操られてゆく、果しない夢を乗せて親友のサタンよ幸多かれ！

君こそ俺を最後まで信じて呉れた

皆が見捨てた時にも君だけはこの俺をがっちりと

抱ひてゐて呉れた、有難な！

君によつて俺は新しい年を迎へる事が出来るのだ

君のない人生なんて考えられない

幸多かれ、サタンよ！ Good bye-

一九四八年一月五日（月）

大いなるリズムに乗つて古き年は去り、そして新しき年は来たりぬ、我々の希望は果てしなく続いてゐる、その無限の躍動の中に我々のイデアは溶けこんでゆかねばならぬ。青春、それを玉の緒の如く惜しむ（編註…昭和二十一年寮歌「時潮の波の」歌詞一節）のも良いであらう。然り、去りゆくものに潔く訣別する勇氣と確心がなければならぬ、新しきものは限りなく生れ古きものは限りなく亡びきゆく。噫！ 人生二十二年多感なる哉！ 昨日迄はいろいろ楽しく正月気分浸つた、元日は武藤家、二日は中学時代㊦グループ、そして三日は逗子で過ごした。特に、二日の㊦グループの集ひは実に楽しかった、内田、片山、石川、松本、白井、堀川、島田、福山、（中野、山田缺席）、一年ぶり、又、人によつては三年ぶりで顔を合す。大いに飲み、喰ひ、且つ踏る、忘れ難き宵であつた。この日の爲に万難を排して参集した各兄の熱意を感謝して止まない。そして昨日は久方ぶりでT子と二人だけしんみりと話す、静かに過ぎし去年を回顧する、彼女、心盡くしの茶菓をつまみながら、二人のころはいつかゆめへ夢へと誘はれていった、「僕は一日だつて君を忘れた事はない」、「私だつてさうよ」、「あの八月のあの日、二人は結ばれて以来だものね」、「えゝ、ほんとに貴方は私のProtectorになつてね」、瞳々々…微笑…信頼々々！ 彼女は学問の精進を言つた。恋するものの、信じ合うものの苦難！ 新しき年の新しき苦難！ 多忙なる今年なり、寮運営の重責！ 学部進入！ 苦難をより多く、この一麥の上に垂れしめ給へ、苦しみ多かりけるこの一年で平れかし、エンマヌエル！

一月六日（火）快晴

戦争と云ふ大なるショックから序々に経過するにつれて我々は善なり悪なり、その示訓から遠ざかってゆく様である。反動的な思想は行動となつて巷間に溢れてゐる、何も俺は戦争を迎合した訳ではない。反省の不足を嘆くのである。自己批判の不足が悲しいのである。東京裁判に於ける各被告の証言もさうである。何の時代にならうと変らぬ眞実を以て歩んで貰ひたい。戦争が教へた功利主義に負けてはならぬが燃ゆるが如き祖國愛には変りはない筈だ、あの時の何人も否定しなかつた殉國の熱情をも一度この興亡二岐点に起つた祖國に対し燃やして貰ひたい、この眞実に二筋はないのである。新宿の雑踏に立つて俺はつくづくこんな考へをした、悲しい希望である。滅入る様な氣持である。何故こんな氣持になるのだらう。若き世代よ！自重しやう、無限の希望を持つて。信仰の問題も肯定する、既成宗教の墮落も然り、何にも関心のない動物的本能のみに生きてゐる人々の姿よ、生殖器の上に胃袋を載せてゆく人々よ、何を考へて何処へ歩み去るのか！そしてこの俺も！夢と現実。

一月七日（水）晴 午后風出でて黄塵万丈。

久方ぶりで丁子、速子を伴つて横浜に出る、日一日と復興してゆく、横浜の町ははげしい息吹が感ぜられる。先ず、山下公園から港を展望―エキゾチックな氣分に浸る、次に山下町（南京町）を見学す、昔に変わらず繁昌してゐる。二人ともはじめてなので驚ろいてゐる、ザキ（編註…伊勢佐木町）をぶらつく、珍しい人二三人に会ふ、皆生長してゐるのにおどろく、S時代のおもかげだけが変らない。東西汽船に昌兄を訪れ、共に再び伊勢佐木町へ出る。？のしるこは甘味なり、レアルトに至り、観映す、「ブーム・タウン」なり。友情に結ばれた二人の石油脈探索夫が、或は成功し、或は失敗し、その間にリーベとの斗争もありながらも最後には無事に結ばれるといふ筋である。アメリカらしいユーモアな中に恋愛の至高性を強調し、現西部油田を今日あらしめた初期開拓時代の石油探索師の苦勞を物語つてゐる。出館七時、それより平珍でラーメン、持参の餅に飢えをしのぎ宵のザキを歩いて櫻木町より帰宅す。八時半、丁子もすっかり横浜が氣に入つたらしく「懂れてしまつた」との事、然し、俺はくたびれた、足が棒のやうなり、楽しい一日に多謝して寝につく。

一月八日（木）快晴 風全くなく暖なり

終日のたりのたり、午前中淳兄と語る、午后、武藤へ至り、敏に宿題を教へる、自分で考へる処多々あり、後、馬場兄来る。電蓄修理の爲なり、手傳

ふ、午後五時修理成る。共に、うどん、飯（五目）を食す、入浴の後、駄べり帰宅十時半、あはれ一日はいぬめり（編註：藤原基俊の歌「契りおきし」さしもが露を 命にて あはれ今年の 秋も去ぬめり」を踏まえている）！ 風穏やかにして心、又騒がづ、ピアノを鳴らしているのが無性に嬉しい一日であつた。珍しく平穏な日なり。

一月九日（金）曇り

母上、田舎へ不祝儀、自転車借りたら三宅福治氏宅にて人生学を講義する、十三才をふり出しに現在に至る同氏の変転極まりなき人生航路である。全くの孤児としてこの荒廃たる世俗に投げだされ、何がして同氏ヘデカダンスな悪の道への誘惑を止めたか、それは「希望と負けじ魂」である、八百やの小僧、旅館の丁稚、焼鳥屋、保険外交員、新聞記者、鉄工所の職工、食堂のボーイ、寄宿舎の飯炊き、靴磨き等々あらゆる社会の職業を転々として、東京では知られた塗装業界の一人者となるまでの苦難の道である。「人間は苦勞せねば駄目です、他人の飯を喰はねばだめです、希望を失つてはなりません」俺達は学生としてこの話を聞流してはならぬ、学校では学び得ぬ社会学である。体験談である、社会の荒波は如何に高からんとも希望を失つてはならぬ。

一月十一日（日）晴

三人で半原へ出掛ける、余生を享けしより初の半原入りなり、小田急で厚木迄ゆき、厚木よりバスにて約一時間、山又山を走るに一大佳境に入る、戸津川の上流なり。暫し窓外に移る絶景に眼を轉ずるに、どんどこやきとか称する、正月の飾り類を一まとめにして河原に山を築きゐる、兎らを見る。やがて愛川村に入り、半原に入る。周囲は切りたつた断崖、その真中を流れる川、その流域に行儀よく並んだ街々、人口八千なりか、その昔、源氏の落武者どもの屯ろしていたのが、この宿の濫腸（編註：始まり、起源）なりとか、甲斐武田の軍勢が通過したと云はゆる川向ふの山も何故か信玄の面影を偲ばせるに切なし、現は糸場として知られ、軒並何十万と云ふ財産家なりとか、「金の唸る声が聞える」とは昌兄の言なり、やがてこの町の素封家（編註：資産家）にして郵便局を営む。親戚に当る染矢家に寄る、一飯の馳走に預る、よもやまの話に花が咲く、初対面なり。夕暮の町を後にして再びバスに揺られて帰る。帰宅六時、これ又、珍味、キューバの恩恵に預る、余持参の小豆に加味して一家にて味ふ。

一月十二日（月）晴

昨日のバスに幾分疲れる、十一時頃、珍客来る。曰く、明子、節子それに案内として邦子、母娘なり、九年ぶりに対面する。かの北鎌倉、大磯時代、あの山、あの川、あの海を通じて共に学び共に遊び、同じ釜の飯をつついた幼馴染みなり、あの時代の思出話にスキヤキを囲む。あの日あの時あの山、シャンツエ、ツララ取り、夜の団欒、海水浴、シビビー事件、食物の事、夢の様に送ったあの頃なり、盡きぬ思ひ出に再会を期して帰る。最近、自分でも落着いて来た、思想的な方面でもさうであるが、リーベの事もさうである。二人の愛は絶対的なものであると二人が確信してゐるのである。二人は一瞬の眼差しで二人の無限の幸福と信頼を知り合ふのである。訣れは残余半ヶ月後に来る。噫！ 幸福よ！ 君が胸深く在れかし！

一月十五日（木）晴

午前中、半年ぶりで「光への歩み」筆を取る、第五作品とも云ふ創作なり、大作にしたい。午后三時止む、第一章終る。或部分に於て行悩む、然し、過去の体験とも云ふべきもので切抜ける。夜の女の掴み所に自信ない、それより規子と鶴川の村野さん宅訪問す、日本女子大の入学の件なり、彼女まだ帰らず、日曜日教会にて話す事にして帰る。夜は少し勉強見てやる、実力なし、矢張り新制高校に進んだ方が良いであらう。夏の八也子と云ひ、今度と云ひ中学時代の大下先生の講義をそのまま教へる。今考えると八也子は実によくやった、涙ぐましい努力であつた。俺の言ふ事を信頼してあそこまで漕ぎつけた努力は偉とすべきである。今度会ったら賞めてやる事だ。

一月十六日（金）曇 後晴

七時二十九分発で逗子へ向ふ、横浜まで昌兄と同道、木炭の大風呂敷二個なり。九時半安着、慰労にCAMEL（編註…輸入煙草のブランド名）頂戴する、美味！ それより炭を切り晝食を馳走になり、徳治とキャッチボールやる。短軀ながら将来有望なる選手になる素質あり、いやしくも天下の北大の野球部一塁手向ふに廻して「キャッチボールやろう」とは大したものなり、午后二時十分発で帰途に就く。逗子駅で申訳の様なDDT散布をやつてゐた、形式的な日本人の安易な衛生智識が思ひやられる、余程注意してやらうかと思つた、結局DDTの無駄だ。余す処十数日で休暇ENDだ、無爲徒食！ 残念！

一月十七日（土）晴

紅葉（編註…尾崎紅葉）逝いて三十余年、かの熱海の海岸にて「今月今夜まつり」がゆかりの人を招いて開かれたとの事、不断の文学は美しい心を人に植ゑつけてたゆみない床しい、そして考へなくてはならぬ行事である。又漱石にしろ紅葉、蘆花、露伴、藤村にしろ明治文豪の我々に示す教訓は大きい。現代作家たりの作品がどの程度後世に残るか、興味ある事ではないだろうか。四朗と二人で午后三宅さん訪問、をばさんの苦心談を聞く、をばさんにしろ実に話好きである。際限がない、又話し上手、話題の豊富な事も愉快である。T子の進学の事もまだ決定してない様である。規子と云いひ、皆夫々に受験勉強に苦しむ事なり、学問に於ける苦勞は実に結ぶ事必定なり。

一月十八日（月）晴

午前中教会出席、テサロニケ（編註…新約聖書正典中のいわゆるパウロ書簡に含まれる一書）の精神に就いて説教あり。午后、村野艶子氏来訪、T子、規子を交へて進学について話す。日本女子大の現状、受験方法、体験等なり。結局、規子は第一志望日本女子大新制高校、第二、フェリス女学院専門部とする。T子の方は現在の青山学院女子部より新制高校へ編入とする。そこで、これより方針を樹てる事にする。希望は大きいが果して彼女らの学力は如何なるものなりや？… 昨日の話ではT子の進学方針は定ってない様であったが、今日教会より帰途、はつきりと理科系へ行きたいと言ふ。自分自身の考へで誰にも言つてないが、前置きして…。選択の方も物理、化学をやつてゐるとの事、今から準備すれば理科系大学としてきつと入れるだらう。しかし、俺はT子を激励して目的達成の爲、努力すべきだらう。信頼して何でも訴へて呉れるT子の気持を汲んでやらねばならぬ。この一年の勉学、おれはこつちに居ないだけに心残りな事である。頑張つて呉れよ！ 祈るや切なり。人に言へない悩みをお互いに打明けて励し合つてゆくのだ。先日「順三さんは私のプロテクターよ」が思ひ出される。一日だつて忘れる事の出来ぬ二人だ、頑張つてゆこう、大いなる理想を胸に…

一月二十三日（金）快晴

突如、感冒に見舞る、遂に病床に臥す、実に慙愧なり、所謂「御多福風邪」なり、只、下顎のふくれるを見、空拳を歡く、発熱七度二分。十九日以来四日目にして起床す、岩本女史の指圧を受く。「頭を使ふ人の斯の如き病氣は癒しにくい」雄辨を聞乍ら治療をうく。病床に余り臥したことのない余は又辛き事、ロマンティックな夢ばかり見る。「大学の門」、「妻の行方」、「大学」、「望みなきに非ず」、いずれも終戦後可能性文学の代表的作品な

りとか、特に坂口安吾の「妻の行方」はベストワンだけあって、取上げるべきであらう。「肉体の門」に次ぐ田村泰次郎の「大学の門」はあの様な主題に持って来たのは愚である。彼のものではむしろ「大学」の方が愛すべきである。石川達三の「望みなきに非ず」は駄作なり、「肉体だけが眞実なんだ」と言ひたい作者の気持ちは良く分る。然し、あそこまでいってニヒリステイックな考えが浮ぶだらうか？ 俺たちには分らない。何と云っても俺には果して肉体だけが眞実なのかも知だ。田村、坂口、伊藤と云ひ、まだく分らない点多々ある。

一月二十四日（土）雨後曇

朝から雨が降る、メランコリーなり。ふくらんだ頬がうめしい。床の中で「決断」について考へる。決断はたしかに一つの哲学だ、決断して実践する過程を考へてみる、池田浩平の言った事が思い出される、罪と決断 こんなことまで考へてみる。ニーチェぐらい 思い切りの悪い人間は無いだらう。キエルケゴールの方が愉快だ、眞剣味がある、だかも少し… だ。次に「光りへの歩み」のスケジュールについて考へる、今日はよく考へられる日だ、恋愛の檜舞台をふりかへる、その心自体が失恋（良いにしろ悪いにしろ）なのかも知れない。愛に溺れる（誤解かも知れぬが）時代が恋愛なのだらうか、あの主人公が訣れる前の溺愛時代なるものが果たしてこの俺に書けるだらうか、どうも自信がない。凡そこんなもの止めてしまふか、主題が悪いのか？… 又一方、たとへ一瞬なりとも眞実をさらけ出した相手の女性が合ったとしたら、それで充分だ。後は宿命論者であると云う考えも湧いて来る、如何したものか。こんな事を考へてゐたら、T子が見舞に來て呉れる。俺の顔を見て頬に笑ふ、ハハツ… 俺も可笑しい、病氣ぐらい不思議なものはない。或一定の形式を以て人体を苦しめるではないか、それが伴はないものは病氣ぢやないのか、それをその形にはめこむのが医師なのか、医師なんてつまらない商売だ、止めちまふか。T子も昨日「おたふくかぜ」のデイスカシヨンしたさうだ、変な廻り合せが一種特有の珍型に顔がふくれるか…ワハツハツ… 然し、「光りへの歩み」気になる、今日中には完成出来ないだらう、中島氏に申訳ない、怖ろしくフアイトがぬけたものだ。

一月二十五日（日）曇天 第四聖日

謹みて身体の不調のため、教会を缺席す。ラジオチャーチにて礼拝を捧ぐ、鈴木俊郎氏講和あり。

五月九日の日蝕観測のため中央气象台、東京天文台、東北地球物理教室、

電波物理研究所等の日本科学者団体十九班が夫々、礼文島に進出して一瞬の研究をなすさうである。之に關して進駐軍が許可すると同時に他の地区にて觀測研究する米國科学者の記録に添加する日本科学者を激励してゐるが、終戦後初の世界的科学陣に吾しての日本科学者の奮起を祈念して止まない。日本科学者の檜舞台であり、試練場である。切に健康と平安を祈る。

今の世に如何に信念のない人達の多い事よ、世渡り上手と云ふ勿れ、現實に何らの思考もなく妥協する、こんな醜くい事はない、自分の信念に生きる、飽くまで信念にもとる妥協はしない。こんな生き方の万分の一でも持ちたいものである。古人曰く「口は重宝なものだ」信念によらなくて万人にへつらふ（幾分でも相手を信頼してゐる場合なお更である）。こんな大きい罪はない、それは一見正しい人の様に見えるが、見る人が見れば人間の屑である。事実その様な人は最初は好感が持てるだらうが、サタンと交際してゐる様なものである、怖ろしい事である。自分と話の調子を併せて嘘を突いて否と云へば平気で云ふ様な相手は怖ろしいサタンである。例へ他人は如何あらうとその人にはその人の生き方があるのである。そのような時、それに妥協して賛同する様な人間は相手以上の怖ろしいサタンである。何れにせよ、平気で嘘をつく人間の眼は濁つてゐる、汚い、鰯の干魚の様な眼である。一瞥を呉れるとその汚い眼が空に浮き、やがて下を向いてしまふ。神共に在す！の信念がないからだ、罪意識がないからだ、虚偽の罪の如何に大きいかを知らないからだ。尤もそんな汚濁に充ちた眼の中に神の姿が映る訳がない、人生の舞台役者だ、次から次へと姿を替へ、せりふを替えて出沒するからだ、この様な人間は人の心を見抜くのにかたくななものがあるから、うつかりすると知らぬまに乘せられてゐる。注意すべき事だ、その様な時はじーとその人間の眼を注視して一步も退いてはならない、罪を犯してゐる人間（どんな人間にでも良心は少しでもあるものだ）の眼は見れば直ぐ分る、落着きがない、ましてその弱点を掴まれてゐる人は人生の舞台役者にならざるを得ないのだ、考ふべきである。

一月二十六日（月）雨 朝のうち雪

「人善を行う事を知りて之を行はぬは罪なり」ヤコブ書の訓が今日程痛切に感ぜられる事はあるまい、善惡の判断がつかぬならまだましでもあるが、自分の惡心に負ける事が度重なり、遂には慢性になる事を教へてゐる。各々の職域の自分を忘れる事は大きい罪である。各々の持てる良心が麻痺するとんでもない事が起り易い。環境こそ手段の第一関門であらう、「己が心の城を自分で占れ」パウロが言つた様に惡に城を占領されぬ中に激しい自己

批判を行ってゆかねばならぬ。昨年度邦画ベストワンに「今一たびの」（東宝）が選ばれた。我が國社会層の良識による審査であるさうだ。我々日本國民が現実の波に捲き込まれてそれに満足してゐると思つてゐたら、決して然らず、あの映画の示すロマンティックな恋愛に憧れてゐるのである、興味ある事である。二人の男女が数年も訣れてゐても共に信愛し合つて今ひとたびの逢ふ瀬を求めてゐる、その苦難の道こそ我々が胸に画いてゐる夢であり希望であるのだ。それが今度映画コンクール撰定によりて分つた、嬉しい事である。それから男優の演技賞に安城家の舞踏会の森雅之に授与された、彼の性格か素質か実にあの俳優の示したものは大きい新しい俳優の生き方を説明して呉れた。

一月二十八日（水）晴

二十六日午后四時頃の帝銀信濃町支店に發生した青酸加里による銀行員十五名の毒殺事件は三日間に至るも犯人逮捕に至らず、東京地方檢察廳、警視廳捜査にも焦燥の色が濃くなつて来た、何れにせよ、天人共に許さざる慘逆事件の犯人逮捕を希つて止まない。然し、日本人の非科学的な一面を訓へてはいないだらうか、もう少し冷静な行動が銀行員達にとれなかつただらうか、予防薬の注射でない水薬をかしい、又、近在にチフス患者が發生し、医学博士ともあらう防疫官が出張して来るのに、前以て噂が無かつたのも変だし、助手位連れて来さそうなものである。後の祭りかも知れないが、兎に角、犯人の巧妙なトリックのわなの中にまんまと陥つてしまつた被害者には気の毒である。後事の無い様訓へられる処大である。午后出京、池袋に浅倉兄を訪ふ、不在にて日勝館於「運命の暦」觀映、医学者の恋愛の一断面である、何度途中で出やうかと思つた。後再訪、帰らず、明日次郎兄等と会談する事を告げて去る。帰途、電車ラッシュヤワーなり、帰宅六時半、後丁子宅訪問、帝銀事件のゴシップで花が咲く、いつもながらをじさんの話にまくし立てられる。「二十の扉」、「恋愛・結婚談」に十一時まで駄べる。

一月二十九日（木）晴

約束があるので池袋行き、上京。前六時半発新宿行、同行丁子親娘、新宿駅で訣れる。然し、毎朝こんな早く登校する丁子に同情の念、切なるものあり、平安を祈る。浅倉と打連れて大谷口町なる次郎兄訪問、談笑する。訣別以来の話題に盡きず、再び共に浅倉宅に返り、午餐を馳走になり、宗教論、日基教団攻撃、共産党実践力礼賛、寮運営論、帰札打合せ等盡きぬ話題に旧交を温む、後浅兄の後輩（東京師附中）なる人来る。北大受験の希望なりと

か、種々激励する。新宿発PM六時発で帰宅の途に就く。

クレムリンが赤色の扉に閉ざされてゐるならば日本キリスト教団は灰色のカーテンで包まれてゐる。自ら垣をめぐらして、懷疑的で神秘的、センチメンタリズムの温床、日本キリスト教団よ！ 猛省せよ！ 青年共産党の実践力に見習へ！ 日本YMCAの諸兄姉ヨ、マルキシズムの何たるかを知らず、徒に食はず嫌ひは止めよ、その主義に対する忠実、確信！」その逞しい実践力！ 我らはその主義を賞めるものに非ず、行動力を讃ふるものなり。日本YMCAよ、信仰の絶対、革新性を持て！ そして、愛の奉仕に挺身せよ！ ニホンキリスト教団よ！ 過去を兎や角云ふのは止め様が余りに醜い。政治的圧力への盲従！ 金銭への服従！ だ。噫！ 醜なる哉！ 灰色の牧人達よ、羊を追へ！ 優れたる一羊を最後まで追へ！ バックに連るロッキーの山脈が怖ろしいのか、ワシントン、ニューヨークの灯に惑ったか！ 石もて打たれつつもなほ立起つた聖徒に續くは誰ぞ！ GELDに非ず、眞実だ！ 要は信仰の確信性、絶対性だ！ 不動だ！ 日本的キリスト教なるものを説いて興亜讃美歌を編し、ミタリズム信仰に迎合したのは誰か！ アメリカニズムの移入と共にララ救援物質を讃へ、三百万救霊運動とは大量センチメンタリズム・クリスチャンの生産であると嘯くは誰ぞ！ 恥ぢよ！ 神の御前に醜き教団内部の争ひ！ 之が神の御救ひの豊大であるとか、無限であるとか、神秘性であるとか、分からない。どうしても分からない。確信性に基く実践力も分からない。少なくとも哲学的、社会科学のイデオの洗礼を受けた現代の一部の青年たちに何故灰色のカーテンの実体が分り得やう、灰色のカーテンを開かんとしてゐる敬愛する人達も居るが、大くの人達は余りに過去の人生航路に暗い面をかぶせられてゐた。神学校でも出て牧師に倣う。少しは社会人としての地位も認められるし…の如き人達は居なかっただらうか、灰色のカーテン！ 男らしく、緑いろのカーテンに縫ひ直せ！ 親愛なる牧人諸先生よ！ 思索して下さい、哲学して下さい、教会の垣根を外して下さい。

一月三十一日（土）晴

午后、出浜す、有隣堂（編註…書店の名）にて一年ぶりで首藤に邂逅す、二人で野毛を逍遙し、マーケット裏口の喫茶店某でコーヒーを飲み乍ら駄べる。彼、頗に近代女性の無自覚ぶりを論ずる。結局、性の関心なら徹底的に自らを陥す処までゆかねば駄目だと云ふ、往年のハマの三羽鳥娘も今は変り果ててゐる。然し、何と云つても肩書に憧れてゐるから未だ可愛いよは彼らしい言なり、人間一度最低の淵まで墮落しなければ信仰には入れない。今

の教会も信者も信仰を利用してゐると仲々痛いところを突く。櫻木町で訣れて帰宅五時、途中床やへ寄り、親爺とインフレの見透しに就いて駄べりながら刈って貰ふ。それよりT子宅にて昌、四（朗）と共にスキヤキを囲む、炬燵に暖り乍らビールは有難い、ほろ酔ひ気嫌にて支那の便所の話、琉球の話、二十の扉に花が咲く。十一時半頃まで騒ぐ、楽しき一宵なりき。

二月一日（日）晴 第一安息日、申訳なし、

成城なる原田宅を訪ねる。和歌子叔母在宅、美味コーヒー頂く。又々話豊富にて昼間まで駄べる、問題のミシンを分解して三つに分けて提げて帰る。日曜の午后、ラジオを聞く、祝祭日改廃に就いての討論会なり、羽仁五郎氏の説に同意す、即ち、無血革命の前途はまだ成否の見通しさへつかぬ、此の際、これに対する國民の関心の現われとも云ふべき問題の一つは此の辺にもあるのだ。又、日本民族のマンネリズムを攻撃された。夕方より武藤にて広田さん等といろいろと家の事、結婚の事、生前の父上の話をする。武藤氏、広田氏の厚情に接す、多謝。夜九時半帰る。星空に寮歌を唄ひつつ。

二月二日（月）曇 暖気甚し

速子を連れて吉良博士宅へ行く、腫物の治療なり、グリゾンの注射の診療を受く。速子は十一月頃から癒らぬらしいので心配してゐたらしい。然し、「十六七の年頃は糖尿病の怖がるのと事、一応検尿しませう」との吉良氏の言也。早く癒してやりたい、実際、腫物のやうなものでも例へ一個所でもできてゐるとメランコリーなものだ、悪性の皮膚病でなければ良いが。吉良氏は相変らず愉快なり、頻に医者 of 使命の苦難と重要な話される。俺が気に入る位の人だから速子も気に入ったらしい。帰宅十一時、四時十五分發で上京するまで南京豆を嚙りながら速子と話す。いろいろと俺と云ふ人間に就いて批判めいた事を言ふ、今迄他の人に言はれて来た事を裏書きしてゐる。第一に「お兄様とお話してゐると時々ほんとに聞いていらつしやるのだから、上の空で聞いていらつしやるのか、分らない時があるの、返事をうんうんとしていらつしやるから分らないけれど」、「又、時々こんな事もあるの、矢張りお話してゐる時にお尋ねしたり、意見のやうなものをお聞きしたりすると、じつと考えへていらつしやることがあるの、暫くたってからお返事なさるわ」、「皆、お兄様は他の人と一寸違ふ面があるって云ふわよ、妾にだってさうよ、冷たいな一と思う時ととっても好い方だと思ふ時の大きい間隔の波があるの、でも冷たいな一と思つた時でも一寸お話したりすると直に暖い、いつものお兄様になられてしまふ、その時は初めはとってもお怖ろしい様な

気持になるわ、近づき難いのよ」、「でもいいわ、むづかしい事は分らないけれど心からお兄様を信じ、お慕ひしてゐるわ」女の子と云ふものは敏感である、彼女らに対して矢鱈な行動はとれない、考へられない様なデリケートでセンチメンタルな神経の持主である。今日しみじみと速子と話してその事が分った。夕刻上京、鈴木宅を訪ねる。小田急豪徳寺で乗換えて松陰神社前なり、夕飯の後、河野の叔父さん稔兄、邦子姉、澄子などと映画その他の話題不盡知、就中「タロー」なる子猫の演技は愉快なり、就寝十一時。

二月三日（火）寒風強 曇天なり

起床六時四十五分、早朝、浅倉宅にゆかねばならぬので、慌てて洗顔す、朝食もそこそこに七時半に飛び出す。稔兄は六日頃札幌へゆかれるとの事、又向ふでお会ひする事にして：池袋に行くに彼不在にて、信州へ行ったとの事、残念なり。しかし、十日出航の氷川丸を予約せりとの事、好都合なり。さて、引返して後久方ぶりで荻窪なる河合宅へ行く。叔母上在宅にてしみじみと田舎の事、これからの事など話される。生前の父上が如何に人物であつたか分る、人生、社会の凡ゆる表裏を知り、腹の出来た人間であつたか、父上を知るものの等しく賞する所以である。翻つて、我身の切なさ、不甲斐なさ、穴あれば入りたし、これからは我らの時代なり、細野本家の面目にかけても頑張るべし、午餐を潤兄と共にし、一時過ぎ失礼す。「良く来て呉れた、ほんとに有難よ」と涙をこぼさんばかりにして云はれる千代叔母は良き人なり、それより新宿を見学す、三越、伊勢丹に入る。まじり寒風にオーバーの襟を立てつつ、マーケットを見る。いつに変わらぬ品物も余り購ふ人もないのか、白雪のみがそれらの上に吹きつけてゐる。みすばらしき店舗の中に只一軒東久彌古物店に札を掲げた店があつた。上品な娘が淋しさうに椅子に坐つてゐた。宮家の現実の姿、そぞろ胸打つものあり、三時半発にて帰宅する。二日がかりの出京にいささか疲労を覚ゆ、早寝す。余す処、在宅六日、噫！ 雪の北國へ！

二月四日（水）曇のち晴 節分

終日在宅、炬燵にて過ごす、「光への歩み」執筆、帝銀事件、犯人依然五里霧中？： 舞台は仙台へ移る、東北大医院薬局へ松井博士の紹介で青酸カリを貰ひに来た人間があるとか？： 事件発生十日目、迷宮入りか？：

一升二百円の大豆では豆撒きも出来まい、増上寺、成田山、浅草寺では大分撒いたらしい、主食の取締りが叫ばれてゐる折から、はてさてこの辺の処置は考へものだ、聞けば一粒七銭につくとか：

おれが彼女を愛し信じてゐるといふ事を自分自身に言ひかせて励ましてゐる時代が懐かしい最上の思ひ出となる。時が来るに違いない、全く今の俺には他の異性は彼女の陰に隠れて見えないと同じだが俺の心の中の凡ゆる部分に彼女が動いてゐる。何れにせよリーベする事は人間の若き日の一エポックである。何もかもリーベの事に捧げられてゐる。こんな氣持を果してリーベに伝へて良いものか？眞にリーベ（恋する）するなら一日一日リーベに對して悩む処に理性の高い戀愛觀が見出されるであらう。リーベしてゐる事、この事、事態をリーベ（恋人）に伝へられぬ処に今の俺の生き方があるのであらう。只、幸あれかしと祈るのみ、訣れも近し。

二月九日（月）

愈々明日出郷なり、思ひ出多かりし、故郷よさらば！ 又来る日まで、此処一週間ばかり親戚廻りしたので消耗激し、今日は朝から荷造りに急がし、母上が老の眼に眼鏡をかけて一所懸命縫物をして下さる。この母上の爲にも俺は努力せねばならぬ、そして、期待に背いてはならぬ。午后四時完成、風呂に入る、T子宅、土屋家よりプレゼントあり感謝す。今宵最後の家の団欒なり。五時半頃美津子妹来る、別れの挨拶なりとか、共に晚餐す。それより、武藤、花岡牧師宅を訪問す、八時頃T子宅に赴く。最後の訣別なり、をぢさん不在にて皆で話す、いろいろの話にいつしか今宵最後の夜は過ぎてゆく、感慨無量なり。最後にT子の進学の事に就いて話す、矢張り理科系を希望してゐるらしい、第三者の言に未だに躊躇してゐる様だ。然し、詳しい事はお便りしますと言った。この休暇中T子をいろいろの点で知った、そして益々離れ難いものにしてしまった。このT子の爲にも努力しよう。

二月十日（火）

午前九時半集合、於、辨天様際、正午出航す、思ひ出多かりける故郷よ、さらば、静かに暖國の白波を蹴立てゝ… 縣廳の雄々しい建物が税関の優しい乙女の双擁の如きが、ヨコハマよさやうなら、リーベよ健やかなれ… 又会ふ日まで… 氷川丸は静かに波止場を出てゆく、船中、浅倉、藤井兄と同伴、賑やかに…

二月十一日（水） 紀元節 晴天

船中、マンネリズムにして虚脱状態の生活なり、余り面白くなし、時たまホールでココアに故郷の甘い思ひ出を臭ぐ。

二月十二日（木）曇

AM六時函館着港、十時上陸す、先ず市内を見学す、平和な街なり。それより、市西湯の川に遊ぶ、温泉プールにて泳ぐ、快適なり。旅塵を洗ひ落す、又良からずや。それより観映「育ちゆく年」MGM作品、幼馴染が成長して大学に入るまでの凡ゆるエポックをヒューマニティに画いてゐる。ロマンチックな映画なり、感ずる所あり、三時帰船、四時出航す。船は北の沿岸を走る、船中二十の扉に花が咲く、明日は小樽なり、そして札幌なりし。

二月十三日（金）晴

AM九時入港、十時上陸す。市内を逍遙して某食堂にて晝餐す、十二時四十六分發にて車中の人となる、二時札幌着、帰寮す。此処に第百参拾六期會計部長として着任す。今西、鈴木、川嶋、弘田、その他の諸兄と久方ぶりで会ふ、虚脱状態ながら何かが盛上るフアイトを感じる。部屋へ入っているいと複雑な感情を整理す、新しき出發、若き日の革新時代！信仰生活の土壇場だ、自重せん！午后九時より着任早々第一回部長會議開かる。新入寮生收容の件、新委員会部屋構成の件、法文教授入寮の件、會計引継時に於ける盜難防止の件、etc。部屋構成の件を残して円満の中に解決す、解散十二時、何せよ着任早々なので消耗する。

二月十四日（土）曇り 夕方より雪

八時起床、朝食の後、寮裏にてスキーをやる、案外うまく滑れる、快調なり。午后、會計引継の一部をやる、頻繁らしい事務なり、それより退屈。T子、八也子に送信する。夕食後、巡視で久方ぶりで茶をたてる、美味なり。「二十の扉」を聞く、いよく明日正式に引継ぎ、コンパを以て十六日より第百参拾八期委員会の發足なり、人間と人間との赤裸々の体当たりなり、自我をコントロールして団体生活の在り方を考へる。そして、新しい個人を見出すのである。社会の目覚ましい変遷の中に今後の高校寮生活の在り方も至難の問題である。天上天下式、良い意味の天シンランマン式の高校寮生活は捨てたくない。然し、厳しい社会の波はひし／＼と北辺の一高校寮にも押し寄せてゐる、「その中間にあつての委員生活の在り方である。又、その生活の中にある所謂事務と私生活との分離と充実である、委員ともある人間は一応寮内の考へてゐる人間（優秀と云つては誤弊があるかも知ぬが）その人間同士との感情的、事務的な結合である、部長としては絶えず三部の分裂を注視して該委員の驚異（編註…広辞苑六版の表記では境位とされ、おかれた状況や環境のこと）を除き、円満の中に次期まで運営せねばならむのである。

俺は一信仰者としてどれ程自己の信仰を生かす事が出来るか、絶好の機会である。一日一日、祈りの中に委員会の発展、寮運営の好結果を希はん、神よ、力弱き私が今この寮運営の順良なる僕として出発せんとしてゐます、大いなる励ましの御手と苦難の道をとりにし給へ、よりよき人間完成、そして神の下僕としての最善の道は給はりました苦難の一つ一つを乗り越えてゆく所にあるものと信じます、神よ万能の神よ、凡てを知り給ふ神よ、か弱い僕がその最も小なるものでも避けんとしたならば、きびしい鞭をもて打ち給へ、神に在る事によりてよりよき順天一麥の人間としての陶冶を試す事を許し給はらん事を。委員会全員を恵み給へ励まし給へ、そして光栄ある恵迪寮を守り給へ！ 神よ！ 力弱き悪多き僕の願ひを取り上げ給へ！ おおいなるフアイトと自己の在り方を考へさせ給へ！ エンマヌエル・アーメン

二月十五日（日）第三聖日

今西、浅倉と白雪を踏んで札幌教会へ出席す、白戸牧師説教「苦難と慰安」あり、矢張り洗練された話し方である。心から聖日の朝、新しき出発の門出を祈る感謝である、午后正式に引継式、コンパあり、明日から愈々出発である。午后九時コンパ了り、安眠す。

二月十八日（水）

十六日、十七日と我々の予想だになかった事態に遭遇する。寮と社会の関聯としての委員の使命の遠目大なるを思はせる。受験生宿泊を小手調べに續々と重要な仕事が続いてゐる。一つ一つを乗り越えて新委員会の最大難関たる記念祭にぶつかるのである。自己を鞭打つつ神助の元、完全に乗切る事を信ずる。午后外出、明治、セコンドを訪れ、買物を三越、五番館でする、札幌の街は白雪があるとロマンティックな感じがする。冬の札幌も又良き哉である、委員生活の最大のロスである自己の生活のルーズを大自然の環境で補ひ、充実させねばならぬ、幸にして浅倉、竹内とも理解して呉れるし、この分なら完任出来さうである。何しろ寒いので私室へ落着けないのが驚異である、事務室のストーブの側で無爲に過す時間が惜しい、續きたい本も多々あるし、書きたい事も沢山ある、勉強もしたいが猛烈な寒さである。こうして机に向つて居ても手が凍える。足が氷のようになる、いつしか思ひはストーブに飛ぶ： 致し方ないが残念な事である。昨日（十七日）本部会計課へいったついでに福田さん宅を訪れる。叔母上に二月ぶりでお会ひする、お土産を進呈する、喜ばれた、いつか暇を見てゆっくり参上する事にする。

二月十九日（木）曇

午前十時起床、何も爲す事なし、ストーブの傍で駄べる： 無爲々々。銭湯へゆく、ピースを買ふ。帰途、病院前で百メ十円のみかんを買ふ、竹内と二人で食ひ乍ら帰る。快適！ 又北國の情緒タツプリなり、美味！ 雪の道をポカポカと暖った体に冷いみかんを押込み、ピースの煙をプカプカ灰色の空にふかし乍ら我世の春を謳歌する。

二月二十五日（水）晴

午后辻村教授宅訪問、帰札の挨拶を爲す。それより東宝映画「第二の人生」を観る。一応考えへる、浮浪児になる俳優も少し勉強したらよく出来るであらう、現実の社会に訴へる良心的な作品である。夜はストーブを囲んで過す。委員生活十日間、感慨多くして内省あり。部長の職責の重且大なるを知る。自治寮の一要素としての委員のアルバイトの在り方を多く知る。精神的に消耗！ 俺は腹の大きい人間になりたい、修養が少ない、無味乾燥の十日間であつた！ 慙愧なり。「或る意味に於てスランプも良い事なり」と友は云ふ、内省と前進！ 俺の信仰のはかなき事よ、何か一つの（善悪は知らねど）束縛？を自己でつくり、それを一日一時試す事を練習してゐる。そんな事でもしなかったら零に等しいスランプである。

二月二十六日（木）雪

終日、寮に立籠る。過去から抜出る事の出来ないだらしない自分が嫌になる、刺戟がないのも確かである、情熱が持たない。このままだと変てこな人間になつてしまひさうだ。人生なんでもっと必死なんだ！ 眞実だ！ 突込み、汚濁に向つて！ アブラハムの行為は倫理的に表現すれば彼がイサクを殺さんとしたことであり、宗教的に表現すれば彼がイサクを献げんとしたことである。献ずる苦難なのである。

二月二十七日（金）

寮に居るに忍びづ飛出る！ 遊楽館に至り「われ泣きぬれて」松竹京都作品見る。情熱の詩人啄木を捉へるのに小学校を持つて来たのは啄木の全部を見出さんとするには甚しい誤解である。節子夫人の苦しみ抜いて生きる姿は余りに我れ泣きぬれたである、もつとくアルバイトの姿そのものを寫出すべきなり。又、渋民村の畔道をとぼとぼと子供の手を引いて歩いてゐる、泣きぬれた姿でしかない、津島恵子と云ひ、啄木の妹になる月丘千秋と云ひ、女学生の演劇の会話である。啄木を映画化するのがそもそも無理がある処で

あるが、各所にある彼のエピソードをも少し生かしてまとめられなかったであらうか、又、撮影の不備も一大缺点である。特に、函館大火の場など、焚火の周りの踊りにぐらいいしか見れない、日本映画のトリック撮影ほど進歩してゐないものはない。然し乍ら、良い点もなかった事はない、それは俺が映画館を出て来た時「素晴らしいね、いいーね」のメツチェンの讃辞が聞えたからである。現実の醜いものしか見つめられない人々に啄木の抱いてゐる偉大なる情熱と節子夫人の烈しい生き抜く姿はまだく／＼ロマンティックなものを懂れてゐる、日本人にとって幾分でも夢多きものを思ひはせたに違いない。松竹京都の不調寄りの挽回作としては余りに雑である。新人芦田演出も力弱き感なり。帰途セコンドに立寄り、帰寮七時半。然るに俺の不在中、佐々木氏（生活部使用人）の結婚式に部長以上招待されたとの事、鈴木はいい気持ちになってゐる、折詰を皆で食べる、けだし一杯やれたに一大失策を演じた。

二月二十九日（日）雪 第五安息日

竹内、浅倉不在の爲、教会も缺席して終日事務室に籠る。出たのはエッセン（編註…ドイツ語で食事の意）の時だけ、今日で二月も終りなり、慌しきことなり。俺は最近ガンツ（編註…ドイツ語gantz 完全にの意）懷疑的になつて来た、リーベの事にせよ然り、尤も十二月帰省した時、多分この様な面があつた様だ、クリスマス、正月、帰学と短い月日の中に何度俺の眞実を見出さんと努力したか分らない。この日記の該項を読んでみても多分にそれが伺はれる。二人だけで話してゐても極力俺の眞実を鮮明にせんものとあせつた様だ、あせればあせる程致し方ない破目に陥つて来る傾向があつた。怖ろしい事だと知り乍ら懷疑！ 何故、リーベの眞実が信ぜられないのだらうか、リーベ自身の凡てがそれを裏書きしてゐるではないか、俺のリーベに求めてゐるのは一体何なのだ！ 馬鹿な！

神！ 何故俺は打込めないのだらう！ 懷疑だ、

教会！ 教会がいけないんだ、神よ！ こんな汚しい

下僕を何故見放して下さりませんか、早く早く

見放してください、奈落の底へ突き落として下さい

貴方の教会を疑ふサタンを、愚僕を！

何故見放して下さらないのですか、苦しいのです

神よ、全能なる神よ！ 私は苦しいのです

希ひです、見放して下さい、あゝ駄目だ。

三月二日(火)

我早や三月の声を聞けり、誕生月なり。雪の北海道に二十有一年の誕辰（誕生日）を迎ふる、又、快ならずや。使用人に対する理性と感情の問題にて苦しむ。第一に相手の人間性を知る事なり、飽くまで感情で動いてはならぬ、教養から迸る理性で以て相対すべきなり。本日、八也子より来信あり、いろいろの事が書き並べてある「お兄様がいらしたら！と夜はお噂してゐます」との事、又、「私にとつては楽しいXマス、お正月でありましたが、お兄様にとつてはどれ程心苦しいお休暇であつたでせう、我儘勝手に甘えた八也子をお許しください。いつも床の入つてはお詫び致しております」とあり、俺が悩んでゐた事が八也子にも分つたのか？ 敏感なる乙女の心なり、そして純白な美しい心であることか、希くは悪に染まらず雪よりも白く伸びてゆかんことを！ 最後に「大事な会計のお仕事を終つて一日も早くお顔が見たい」とある。言ふ勿れ！ 八也子よ！ 可愛い妹よ、男児徒に懷郷の念に酔はず： 嘘だ！ 嘘だ！ こんな日記なんか出鱈目だ！ 嘘偽の温床だ！

でも八也子よ！ 幸福なれ、悩みあらば床に入る前に祈れ、必ず俺の心まで通するぞ！ 妹よ然あれ！ 考へよ！ 読めよ！ そして書く事だけは忘れるな！

三月九日(火)

三日の雛祭り全寮コンパ、そして六日の新委員会と教授の顔合せコンパ、受験生宿泊と天手古舞だ、現在までに宿泊者八十六名に達し、約三万一千円の収入あり、三日、六日と飲んだので幾分だれ気味だった生活が只！ 忙しいの一言に盡きる、事務に忙殺されて睡眠不足と疲労によつて益々消耗の極に達する。日記は愚か本も読まず、ブランクの状態なり。関東学院より鈴木徳次兄来る、弟さんと受験の爲なり、希くは合格を祈るのみ、あゝ眠い？：

三月十六日(火)

顧みるだに慌ただしかった数日であつた。全国からはるばる集まつた受験生の爲に寮を開放したためである。九日の歓迎晩餐会、十二日の慰労晩餐会、寮歌祭コンパ、そして合格祈願大ストームと凡て中心となつて動いたので大消耗してしまつた。こんな事では開寮して三百人も寮生が帰つて来たらどんな事になるだらう： 俺の九日のテールスピーチが振つてゐる、「今更、何をか言はん、過去数ヶ月の実力を明日より三日間に亘つて思ふ存分發揮してください、かの札幌農学校第二期生の内村先生の或る本の中にあつた言葉をたった一言であるが、決戦場に臨む諸君に捧げたい、「輝かしき成人を

約束された青年の辞書の中には失敗といふ言葉はない、諸君！ 確信を以てください」、我ながら老獪さを以て切抜ける。東高師附中の上野君、湘南中の山岸君と親しくなる。十九日発表との事、全員合格して呉れと祈るや切。何にせよ、十人に一人の狭き門なり、寮へ泊った九十人の中、大くとも十人しか合格しないと思へば感無量なり。本日、丁子宛「聖書研究」四部發送す。又、上野受験生に家澄子と丁子宛書信託す。映画、二十世紀FOX「ジェーンエア」観る、原作より感銘少し、不幸な生立ちの少女が世の人の爲に斗ふ姿、そして妻ある男を慕ふ姿は美しいものである。明日は桑園のトラック上乗りムスケルアルバイト（編註…ドイツ語Muskel Arbeitの肉体労働の意）に行く事にするGeild百七拾円也。

三月十七日（水）晴天

久方ぶりにカラットはれた美しい青空を見る、感ずべき事とてなき早朝六時起床す、行先桑園石炭配炭公団なり、久方ぶりのムスケル（編註…ドイツ語Muskel 筋肉の意）にいささか消耗す、夕方四時までアルバイトす。アルバイトの持つ共通の悲哀！ それは何と云って形容して良いものか、その淋しさに襲われた時、俺は叫びたい、心から叫びたい、然し、それは出来ない。力弱い俺の心よ！ 何故俺達は働かねばならぬのだらう！ スコップを運ぶ肩の辺がたまらなくつらい、自らを殺す事が出来たら…とまで思ふ、走り抜けて見たい。その辺のモヤモヤとした処を！ アルバイト、アルバイト、俺達世代の学生がなさねばならぬ悲しみである。今日も一日友達が肺炎カタルの診断を受けねばならぬ事になった、昨日まで元気にアルバイトしてゐたその友は言つた「おれは明日から寝るぞ、さうすれば直ぐ癒るさ」朗らかな笑を浮かべた友の顔が忘れられぬ、何故俺達は共有の悲哀を避けぬのだらう。

三月二十日（木）

昨十九日、昭和二十三年度新入生合格者が発表さる、高校最後の入試を突破して栄冠を勝ち得たもの三百六十名、悲喜交々の姿を掲示場前に現出す、三千三百数十名の中より選ばれた一割の人達は今日ばかりは踊り狂へ！ 過ぎし数ヶ月の苦闘を如実に覆してしまへ、それにしても内地よりの合格者三十五名は淋しい。道産予科生よ自重せよ。十九日午後一時五十八分發で奈井江に向ふ、今西と二人で恵水会次期委員藤井義彦氏退寮引止めの爲なり、種々説得す、正に二時間半、午後九時半遂に許諾す、万才なり、即に決定した下宿も撤回し、最後の寮生活に盡力される事を誓はれた。いろいろ馳走にな

り、終列車なき爲泊めて戴く。本朝九時半帰寮す、お土産に粉ミルク、練ミルクを頂戴す」いつもく多謝の至りなり。

四月二日（金）

又しても大きいブランクをつくってしまった。開寮準備そして新丸入寮準備と多忙を極め、全く公用の爲に憂身をやつしてしまった訳である。二十三日の予算会議がスムーズに了ったと思つたらそれは全く場違ひのもので、根本的に錯誤してゐたのである。あれやこれやの中に社会情勢は全通のスト突入、通信網の麻痺、そして米ソ対立関係の悪化、それに乗ずるかの如くストに対するマ司令部の覚書が発せられ、この所全くやむやの中である。二十六日には鈴木委員長、浅倉委員と同行で池田在の高島なる鈴木宅を訪れる。久方ぶりで家族の雰囲気の中に融けこんでいろいろ海山の馳走になる。寮の事も忘れて快適の三日間であつた、エスケープは新しいファイトの泉である。公を離れて私のみに返り、大自然の中に送つた三日間であつた。けれど、高島の雪原に唄つた寮歌の思い出は忘れ得ぬ。帰寮三十日夜十一時、八也子より来信あり、大分消耗してゐるらしく「お姉様なんかいろいろ慰めて呉れます、私が一番信頼してお話できるのはお兄様です、そして私と一番良く理解して下さるのもお兄様です、今はすぐにでもお兄様にお会ひしたい気持ちで：いろいろお話したい事がござゐます。お兄様の固い固いあの日の身にしてみたお言葉、八也子はどうしてもどんな苦しい事が起こつても守ります、正しく守ります。お兄様、何時お帰りになるんですの、首を長くして期待してゐます」とあり、多分にセンチメンタルの点であるが、何かショックがあつたらしい、激励の文を返す。開寮で続々と二三年目も帰つて来る、閉寮中の閑散と比べて春到来の活気が全寮に漲るのは嬉しい。やがて新丸も来るであらう、慌だしい中にも自分をみつめて進まう。

五月十二日（水）快晴

開寮三月二十八日、新丸入寮四月五日 宣誓式、洗礼、鈍才会と慌ただけしかつた。そして四月二十日の舎生大会により第四十一回記念祭公開と決し、正に息次ぐ暇なく今日に到る。余は執行委員会のメンバーとして渉外を受持つ、多事多難。或る時は歡喜し、或る時は悲哀にぶつかり、この仕事の現実性に悩み、うやむやの中に今日を迎へてしまった、慙愧である。悲しき者よ、その名は委員なり、俺のゴマ化しが何処まで續くか考へものだ。山師となりしこの頃の淋しさ：

五月十七日（月）

委員会生活と私生活の相克、解決出来ない道なのか、記念祭は一日一日と迫って来る。慌しい雰囲気但凡てを包んでしまふだらう。一つのリズムの中にあつても自己を見つめやう、与へられた時間の中に最善を盡くせばよいのだ。俺と言ふ人間は石にへばるついても「参った」と云へぬ人間だ。噫！俺の生活は空白だ、忘却々々、怖ろしいばかりの忘却が迫つてゐる。昨日、篠原と植物園に伏す、各所に楽しげにピクニックの宴を開いてゐる家庭人が羨ましい。ひそかに望郷の想にかられる。家を出てから三ヶ月、リーベの事も気になる、如何に学んでゐるや？… あたら青春の一駒を北辺の学園にうそぶいて意義なく送る忘却の徒よ、徒に歎く勿れ！俺は自分が責められない人間だ、なんだか無性に自分が可愛くなつて来た、異端だ！背徳だ！だが、こんな人間はそれでも良いのだ良いのだ。

五月二十日（木）晴

今日は生物、化学の授業に出席す、委員生活の最大の缺点是授業出席率が悪くなることである。寮の仕事も急がしいのでつい出られない。事務のアルバイトも確かに負擔であるが、それを抑制して出来るだけ出る様にするのも肝要である。与へられた時間の利用である。本日、T子より来信あり、Geid同封しあり。こんなことまでして呉れなくとも良いであらうに、T子の深情身にしみる、早速返信をしたためる。T子は東大サンデースクールに受験勉強に行つてゐるとのこと、モリファイでやつてゐるらしい、勉強のことで頭が一杯らしい、激励してやる。良き上級学校へ入ることが先決問題である、勉強々々だ。噫！故郷をはなれて三月、我何ぞ人間の子なり、懐人の想！T子よ！知るや幸あれ！

五月二十一日（金）快晴

この前撮つた寫真は殆ど成功してゐるとみてよいだらう、自分としてもこんなに成功したのは珍しい。余程コンディションに恵まれてゐたのであらう、今後の精進を心に誓ふ。今日は午后、山家と岡本紙屋、服部紙屋へゆきアイスクリームを食ふ、矢張り雪印は美味い。後興文社へゆき、寮歌集、便箋と交換す。渉外としての仕事は要するに漠然として見透しをつけてそれを実現すべく努力する所にあると思ふ。個人的に嫌な人でも眞性でぶつかれば解決させて呉れるものだ。それに早計は禁物である。喧嘩早いのは江戸っ子の特徴と云ふが、じっくり腰を落着けてあせらずこちらの意志を十二分に相手方に理解させるのだ、随分いろいろな勉強をしたものだ。昨夕、林先生の家

、深沢と行ったが先生と云ひ奥さんと云ひ快調な人だ。歌舞伎、文楽の話が気に入った。遂に文楽の人形を秘蔵のものを拝見させて戴く。実際に使ってみる、すっかり気に入ってしまった。インテリだけあってその豊かな話題は飽きないものなり。夜は寮務コンパに委員長と共に招待する。こったエッセンに程よくアルコールあり。

五月二十九日（土）雨

対高商戦小樽にて行ふ。ラクビー、排球、卓球、快勝するも野球、庭球は惜敗し、花園グランド原頭、恨み深し。この日余は金庫番に残寮し、浅倉と共に会計の整理を行ふ。午前中午后に亘り大消耗の末解決す。後、遠征軍のエッセン配膳を手傳ふ。一日、寮のためアルバイトをした後の気持ちは爽かなり。噫！高校寮生活にも現実の沖波はひし／＼と押寄せて来てゐる、現実なり、動かない事実だ。俺達はこの事実を率直に認めながらもネイモウ（編註…恵迪寮生用語 粘り強く、押し強くの意）にそれを乗越えてゆかんとしてゐる。馬鹿ものなのかも知れない。或ひはそれを自ら知ってながらも天邪鬼にも得意になってゐるのかも知れない。旧制高校寮生活の悲劇その断末魔になって一層熱演されてゐるにすぎないのだろうか… 本日、家より送金あり、厚情多謝す、丁子に「聖書研究」二部送る、良き一日なり。

五月三十日（日）雨

昨日の高商戦は野球は五―三で敗れ、五種目中三種目制覇す。家よりラーフォン（編註…戦後の刻み煙草として「みのり、のぞみ、紅梅、富貴煙、福寿草、水府、薩摩、桃山、山吹、桔梗」などの市販記録はあるがラーフォンについては不詳）到着す。感激して包を解く、矢張り東京の「ギザミ」は美味なり、手觸りが違ふ。午後、北海道新演劇人協会発表の「墮胎医」を観にゆく、一応感激す。道辯のアクセントが気になる。演技、装置はともかくとして、原作菊田一夫は佳作である。東京でバラ座が公演して好評を拍したのであるが、四時間に亘る長篇を最後まで引ずって観客に飽をもたせなかったのも原作の良さにあるのであらう。「性病予防運動の一環として…」と演出者が云々したる如く一見スピロヘータ・パリダ（編註…梅毒病原体 *Spirochaeta pallida*）の撲滅宣伝演劇の如く思へる。然し、俺のこれから辿る道も医者であることを思えばいささか考へさせられる。眞の正義感に燃え善良に生き抜くことは出来ないのだろうか？…「医は仁術なり」と謂はれてゐる如く、博愛に連る医者としての生き方は斯くも至難なのであらうか、次々とこの主人公の若き産婦人科医の身边に起こる蹉跌、それは彼が追ふヒューマニズムの

土台を障害してゆくのである。善良に生きることの苦難、仁道生きんとすれば邪道にとられるのである。この彼なりのヒューマニズムの追及は「街の聖者」としての生活は最后的な（彼が出征中、原地で手術中感染した梅毒のため）人生の終焉が来るのである。多幸なるべき第二の人生の伴侶は去り、最後までその名を呼びつつも医者としての生き方は自分を許さなかったのである。俺達の求めてゐるヒューマニズムの追及、善良ある生き方が果たして何処まで社会に出た時認められるのであらう？… 夜は床に伏して「出家とその弟子」再読す。

六月一日（火）

夜十時発で池田に向ふ。鈴木宅にて快適な数日を送らんためなり。同行空拳班柏葉、即ち第二部晚餐会用トンカツの油取りなり、正に驚異的な繁雑の中から逃れ出て十勝の平原に悠大な氣を養はん。

六月五日（土）

四時半帰寮す、今日の朝から事務室改善に努力す、相当植木を持込んで寮内随一の好雰囲氣を作り出すことに成功せり。午后、松屋氏来る、上井氏の紹介なりとか、上井さんと聞いてかの野尻湖の思ひ出が浮かぶ、楽しかった数日、ボート、カヌー、萩の花、とりなべ、むつまじき御一家との交遊、野尻の美しい自然、柏原のリンゴ畑等、そしてあの時の和子さんは今や如何に在ます、二人で共に湖畔に腕をとり合つて歩んだのもついこの間の様な気がする。すっかり御無沙汰してゐたのに突然なのでおどろく。午後三時頃生活部使用人の問題で応募したガンツシェーン・メツチェン（編註…ドイツ語 *anz schön Mädchen* 非常に綺麗な娘）来る。すっかり当惑する。夜は八也子に返信したためる、ながらなる河のほとりの故郷に我かたるも兄帰るたのしきー八也子よりー

六月十三日（日）雨

吾等がその全精力を注いで準備した第四十一回記念祭は遂に終った。噫！過ぎし一ヶ月の苦闘は成りぬ、万感胸に迫りぬ！
追出しストームのファイトある姿にも何かしら旧制高校最後の感じがする、あわれがある、遠くから聞こえて来る寮歌にも一抹の淋しさがある。一木一草凡てが最后だ、「都ぞ彌生」の感慨は去らんとしてゐる。

近きかな榆陵^をを去る日は、還り来ぬ足跡^{あとか}愛^{かな}しみて

ひたぶると打笑^{うちえ}む時ぞ 求めつつ得べからざりし
うるはしき眞理^{まこと}の道は はろかなり我らが前途^{ゆくて}
進めざらめや！

（編註・昭和二十一年寮歌「時潮の波の」「結」の歌詞より 百十六頁参照

淋しさよ！ これを乗越えるのだ、この記念祭から如何に吾らが立派に抜
切ることが出来るか？ 記念祭から脱して冷静に自己の生活に切替えること
が出来るから、その切替へだ、微妙だ！ 噫！ 夢よ！ 現実よ！ 記念祭
は終わりぬ、凡て終わりぬ。雨が降る降る 静かに静かに降りしきる雨よ
一昨年も昨年も訪れで恵水会の紙芝居フアンの文子ちゃん、又来る「さやう
ならさやうなら」こうして雨の中を別れたのも三度「細野さんさやうならさ
やうなら」いつまでもいつまでも手をふりつつ雨の中に帰りゆく文子ちゃん
記念祭が生んだ縁でこうして三度、然も記念祭の時だけ会ふ文子ちゃん、今
年で最後だ、永遠にこの記念祭は消えてしまふだらう。だが、文子ちゃん、
恵迪寮の記念祭のこの盡きない思ひ出は永遠に忘れないで呉れ給へ「さやう
ならー」、「さやうなーら」、「さやうなーら」

実に良くやった全寮生諸兄よ！ 感謝の他なし、あれだけの資材でよくこれ
程までのことをやった、偉大なるアルバイトだった。だが、黙々として遂に
やった第四十一回記念祭こそ永遠に吾らの胸中より離れ難い思ひ出となるで
あらう。凡てが動いた、あゝ青春の情熱に何の支障があるであらう。見よ！
この事実でだれがこの事実を否定するや、淋しさを乗切らう、高き理性と
智性の持主である諸兄！ 頑張らう。

六月十八日（金）

記念祭終了後は正に札幌祭りなり、好機至りぬべし、あちこちと市内をね
り歩く。創成河畔のサーカス見学、そして夜店見学も又良し。十五日には丸
井で例のお茶やのメツチェンに会ふ、話するのははじめてだが、何だか都合
が悪かった、相手も嫌気がないらしいので安心して歩く。丸井の屋上で市街
を眺望する。それより、中島公園まで漫步する。池畔の石に腰下す。傍らの
クロバーの草むらより、彼女偶然四ツ葉を捜す。そして一本進呈さる。彼女
の東京辨を聞くのは嬉しい。彼女自身も気をつけてゐるとの事なので、全然
純粹である懐しい東京の語！ 聞くだけでも楽しい！ T子の事など思い出
す。お茶やの前で別れる。「どうぞ又お出かけ下さい」の言を後にして… 十
六日には浅倉氏知人の扶間氏宅へ参上する。夕飯を馳走になり、Kind達

の舞踏を見る。これ又久方ぶりに家へ帰った気分に入る。近所のKind達を集めて遊んだ頃を思ひ出す、親切な方達なり。然し、斯うして始めての家へ夕飯時に上りこんで遅くまで騒ぐなんて高校時代でなければ出来ないだろうと思うと、残り少ない白線時代に別れたくなる。十七日は深沢、篠原と外出す、即ち第一東宝に至り「カルメン」観映す、一応感激す。矢張りフランス映画は良い。それより薄野に至り、おでん、やきとりを食ふ、又苺を買ひ、藤田、今の下宿、高橋某方へ飛び込むPM十一時、家人もびつくりして起き来り皆で苺を食べる、美味なり。フラフラと帰寮したのは十二時半、毎晩出歩くので少なからず消耗した。記念祭のウツプンは十六日の夜の濁酒、ビールに晴らした。実に快適に飲んだ。いくらのんでも平気だった、美味かった、いい気分だった。堀江、篠原、浅倉、竹内に大分ぶつかったさうだが、まあかんべんして呉れ、今日は物理実験、生物実験に出席す、実験の時は実に楽しい。何故だか分らない。計器や顕微鏡を覗いてゐるが無性に嬉しただけだ。この時ばかりは天下だ。夜、緊急委員会開催、以下の案を可決す。

行事予定 次期委員会は二年目とする。

六月二十一日 推薦演説

六月二十二日 選挙

六月二十三日 予算会議

七月五日～十日 第一学期試験

七月十日～二十三日頃 授業あり

七月二十三日～八月下旬 夏季休暇

八月上旬(?) 事務引継ぎ

高野教授 寮宿泊の件、旧委員長に一任すること

教養、PTA役員及び寮委員との顔合せコンパは二十六日(土)実施。

何しろ、長い間の緊張が一時にとけたので大消耗だ、試験も近づくし、授業は出てないし、いやはや泣きたい。然し、ともあれ若きもの ハイデルベルクの思ひ出を! (編註:寮生愛唱歌「アルト・ハイデルベルク」(Alt-Heidelberg: ヴィルヘルム・マイヤー＝フェルスターの戯曲から)一節。)

完結の記

斯くしてこの一誌も了ってしまった。春、今や北國の満喫の時は今、

咲く花、舞ふ鳥

移ろい易き春の日ぞ

身をやく夏、近からん

今こそ我らは全情熱を挙げて
この北國の大自然の美の中で、
躍り抜こう！

唄はん、 楽しき

高らかに！

一九四八年六月十九日午前一時半記す。

北海道帝國大学恵迪寮

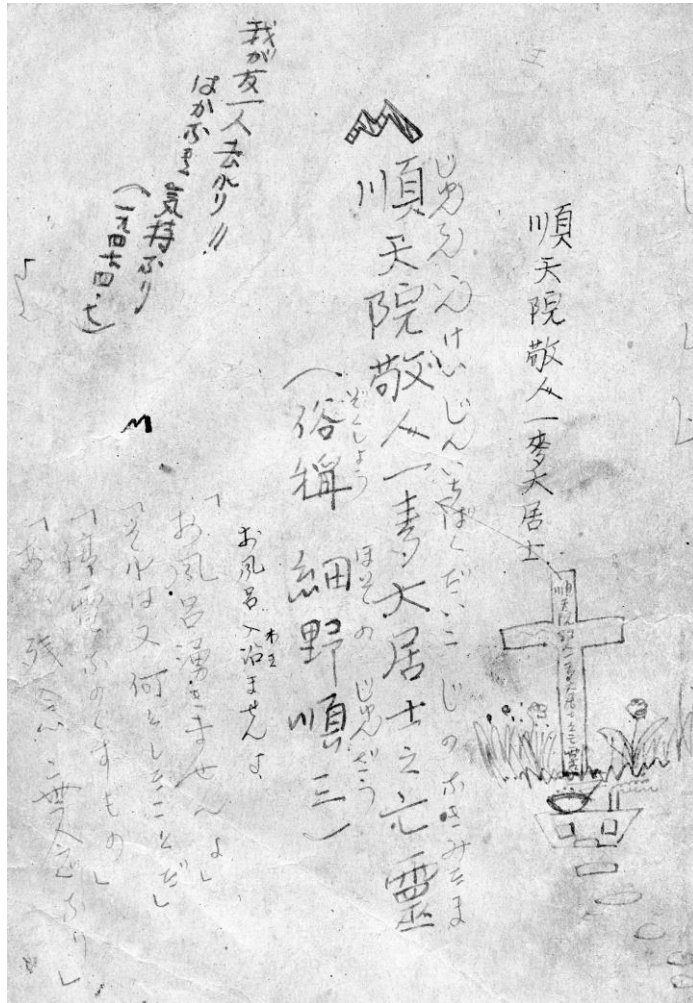
第百参拾七期委員会 會計部長

細野順三 (捺印)

總理大臣 鈴木幸種（民主党総裁下院議員）
外務大臣 深澤利行（自由党委員下院議員）
内務大臣 今西洋三（自由党総裁下院議員）
農林大臣 江口昭壽（民主党顧問下院議員）
大蔵大臣 細野順三（キリスト民主党下院議員）
文部大臣 朝倉悟（キリスト民主党委員上院議員）
商工大臣 山家貫之（民主党上院議員）
運輸大臣 伊藤益義（自由党下院議員 前北海道知事）
逓信大臣 寺分元一（無所属 前運輸次官・東京都長官）
厚生大臣 今西暢夫（キリスト民主党書記長上院議員）
司法大臣 榊原敬（民主党上院議長）
無任所大臣 竹内五男（無所属 東大教授）
無任所大臣 稲垣昌利（自由党下院議員 前山梨県知事）
内閣書記官長 西田恒久（民主党下院議員）
警視總監 板谷実（無所属）

稲垣氏遂に入閣
四・四・三案成立す。
鈴木内閣けふ親任式

官房長 西田（恒）氏
警視總監板谷氏
民主四、自由四、キリスト民主三
組閣工作三日間



（俗称）細野順三

墓碑銘

順天院敬人 一夢大居士之亡靈
じゅんてんいんけいじんいちぼくだいこじ みたま

北海道帝国大学医学部 小児科志望
 札幌農学校はエゾが島 夢淡き東京

Herbsttag J. Hosono
 Der Herbsttag ist da ! Es gibt viele Sinnlichkeit. Ich kann mir die Jugend lebhaft vorstellen, Auf dem Gipfel des Bergen wo wir als Schulknaben Stets unsere Herbstfeuer angezündet hatten. Hil f ich an und wandte mich um. Da droben war man hoch über dem Stücken und konnte in die Ferne sehen. Ich schmeichle mir mit der Hoffnung. Es ist ausgezeichnet gut, Der Herbsttag ist die Welt des Schönen, denn ich habe geliebt Herbstfeuer, Es ist schönes Gefühl in Leben ! Als ich kam Gegenstand, dieser Ort erinnert mich stets an meine Kindheit , Ich selber war an ders geworden. Es ist wahrheit ! Ich bin schmerzhaft aber ic h liebe dich ! – das ende

第四分冊(自一九四九年四月九日 至一九四九年一月二八日)

真実一路の旅なれど真実、鈴振り、思い出す

…山本有三…

その日 その日…来る日、過ぎる日…順三

此の日記を

最愛の婉子に捧ぐ

北大医学部

札幌にて 順三しるす

序に替えて

勉強するために津軽の海を超えて

愛する君の元を離れてやって来たが

どうしてこんなに落ち着かないのだろう

婉子よ、僕の現在のこの努力が

無駄でないことは知ってゐるね

お前が僕から離れ難いのは

矢張りこの努力がある事を

僕は知ってゐる。

そしてこの一頁一頁一行一字が

その逞しい記録であることを

婉子よ 愛する婉子よ

…順三記

(一九四九・四・九)

四月九日（土）

春まだ浅き（編註…昭和十二年第三十回記念祭歌に同じ表現あり）札幌へ帰って二日目 風はまだ寒い。東京に比べて格段の差だ。本日午後一時より南講堂にて入学式あり、予科九十名、傍系十六名、計百十六名集合す。

柳医学部長訓示に曰く、要旨左の如し

- 一・教養・学問両立したる指導者たる事
- 一・官立学校の主旨を自覚して国家の期待に副ふ事
- 一・基礎医学を重視した予防医学の研究をなす事
- 一・国家試験を心配しないで良い事

以って事務関係より注意あり

学士試験は三回実施される予定なり との事あり

夜は婉子へ通信文を書く。

女性の自我に就いて考ふる処を書く、率直な婉子になって欲しい。僕は矢張り愛してゐるので婉子の虚偽のヴェールは感傷なのだ。そんなものは打破って眞実の婉子を見出したいだけだ。僕はどんな事があつても愛してゐる。婉子よ、分かつて呉れるね。

四月十日（日）

聖日の朝、罪人は又しても寝坊する。東京―札幌と急激な変化がいけないのだ。昨日から学校だが、落着けない。環境の変化が第一だ。之に対する順応性が欲しい。スケールの中でベストを盡くす人間になれるか？ 篠原、今西くる。駄弁る。落ち着ける人間が羨ましい。罪のマンネリズムが怖ろしい。この馬鹿の如き顔を見よ、汚れ果てた。外出すれど興味なし。セコンドへ四ヶ月ぶりでゆく。雪が融けて早く澁刺たる春よ来い。

汝羊寮へゆき次郎と駄べる。人間の住む処、欲望のある限り適処なし。早寝して明日からに具へる。

四月十一日（月）晴

婉子宛書簡投函する。解剖学講義あり、人間をはつきり対象として、医者としての専門教育を受けるとなる。何だか淋しくなるのも気のせいのみだろうか。過去の教育から最後のこのコースにいざ入ってみると人間としての弱みをみせつけられた様な気がする。午后、福田さんを訪ねる。下宿の件、再び御依頼する。早く快適な処が見つければ良い。落着きたい。そして勉強したい。然し、如何して僕は弱いものだから、高校生活のマンネリズムから逃れ得

ないのか。人間は考える芦なのだ。この弱さから一步進んで一人で立上れる日が来ないものか。まだくゝ個の自覚が足りないのだ。孤独なんて偉そうなことを云ふ奴に限って人の揚げ足ばかり取って妥協しているのではないだろうか。あんな人間、こんな人間、うよくくしてゐるこの社会の中に近づきつつある自分をたまらなく淋しく思ふ。夜は篠原の下宿で駄べる。感情の問題が矢張り一つの物質を取巻いて火の出る様に起つてゐるのを見るのは第三者として如何したらよいのだろう。

四月十二日（火）晴

寝覚めの悪いのは何も今に限った事ではないが、激しい意欲が減退してゐるのではないだろうか。特に、冬中一・二月 横浜にアルバイトに通つてゐた頃の思い出がしのばれる。一つの目的に向つて進んでゐると、体自身が良く動いて呉れた。すると、この頃は学業と云ふものに対する意欲が衰へてゐるのか？ 折角、新鮮な気分になつて迎へた新学期なのにファイトが出ない。こうなるとうらめしい限りだ。

本日、解剖学伊藤教授、組織学岡田助教授講義あり。岡田さん壁頭から漫談なり。特に、樺太抑留記の思い出なしは面白い。鐵のカーテンの向こう側の実態が如何に人権を無視した独裁の国家であるかを率直に衝かれる。樺太医専校長時代の彼の日本のインテリゲンチヤとしての行為が訓へられる所あり。午后、松竹座へ久しぶりでゆき「大地は怒る」観映、大スペクトルと銘打つだけにスリルあり、ラストの妹娘の修道尼としての心境は素晴らしい。世の中が斯くも皮肉に出来てゐるとは氣づかない、時代は違ふけど二組の夫婦が一つは封建性のため、一つは母の盲愛のため、愛のない者同士が結婚して、その後の努力によつて幸福になつてゆくのであるが、考えさせられた。夜は寒いので床中思索する。

四月十三日（水）晴

天気は良いし、学会出席で教授は休講、閑日なり、篠原の下宿で皆駄べる。それより洞田の下宿に至りエッセンして街へ出でる。徐々に札幌の風俗は春めいて来た様だ。メツチェンもスカート姿が頻見出来る。新学期の出足は挫かれたとは云え、楽しい春来たりぬ、狸小路も賑やかなり。洞田は両親の反対を元に札幌のメツチェンとリーベしてゐるらしいが、眞実であればリーベは全うすべきなり。兎角感傷が支配するから、絶対然らずと信する限り完成すべきなり、激励して帰る。彼も信仰が祖国を救ふものなりと信じてゐるらしい。少しく自論を駄べる。神の子として我らが生れ、育ちやがて社会を

知り肯定してゆくところにサタンの子としての転落の歴史があるので、ユー
トピア実現の爲、信仰がその速度鈍化のブレーキとならねばならぬ。次の聖
日、彼と教会同行する事にする。

四月十七日（日） 復活節

The first day of the week cometh
Mary Magdalene early, when it
was yet dark, unto the sepulcher
and seeth the stone taken away
from the sepulcher.
Then she runneth and cometh to
Simon Peter and to the other
disciple, whom Jesus loved and
saith unto them. They have taken
away the Lord out of sepulcher
and we know not where they have
laid him.

-(ST John chap 20- 1-2)-

マグダラのマリアが約二千年前に主イエス・キリストの復活を見たのは、
実にその墓石が取除かれてあつた事から始つた。あの重々しい墓石をイエス
・キリストは自ら取除いて復活し給ふた。現代の我々はこの永遠の命を得る
ために神の国実現のため重々しい墓石を取除かねばならぬ。この事は基督教
徒の永遠の使命であらう。聖日の朝、北大グラウンドで野球をやる。香川館内
下宿人の東西対抗なり。五割の打率で頑張れど六A対四で惜敗す。午后、寮
へゆきラヂオを聞きつつ午睡す。入浴の後、会計部の状況を聴く。寮の会計
の困難さを知り、金の回転のテクニクに就いて感想を述べる。

こんな事は関係したくないけれど、同じく会計委員を経験した物として
、その感想の一つ二つを語り、激励するのも無意味とはいえない。夜は婉子
へ書信をしたためる。感情と理性の板挟みを戒め、理性のみでリーベを割切
る事の不可能を書く。又、高校生活の「意義、思い出を辿り、文化国家建設
の重且大なる使命を例の傲慢さで書き、ついでに次の下宿の中坪氏宅の事な
ど書く。明日より又授業なり、早く琴似へ落着くべし。生易しい勉強では到
底医者にはなれない。余程しつかりしないと駄目だ。それには満足とは云え
ぬが、良き環境が第一だ。通学には少し不便だが、静寂を求めてゆかう。

四月二十一日（木） 曇 西風強し。

此処一週間寒い西風が吹き捲り、原町田カラツ風を偲ばせる。札幌特有の馬糞風ださうだ。長い積雪期の道路に雪と共に積った？馬糞の雪の溶解と共に乾燥し、この季節風で吹き飛ばされるのださうだ。又、冬籠りのストーブの煤や石炭ガラが共に飛ぶので、その不衛生な事も甚だしい。

去る十九日に琴似の新居に移る。環境に恵まれてゐる。大自然に朝夕接せられるだけでも嬉しい。只、通学の交通だがこれとても汽車やバスの便があるので時間が一寸要るだけで健康には良いだらう。今日は危く乗遅れさうになったが、アルバイト中の事など思い出して独り微笑してしまった。午後の自治委員の選挙中、鷹田が胃ケイレンで苦しみ出したので、直ちに松井と二人で山田内科へ連れてゆき、モルヒネ射って痛みを止める。丁度、気胸患者が居たので先輩某氏に患者のX線寫眞を説明して戴き、気胸療法を見学する。

又、器械操作に就いても教はる。それより鷹田を下宿に送り、伏床させて帰る。別に大した事はないらしい。電車の中でインターン中の山本先輩にお会いする。紫煙荘でお茶のご馳走になる。中学会（即ち橄欖会^{オリーブ}）のコンパに就いて相談する。五月中旬に新制大学の入試があるので、その時に中学部より四人受験に来るさうなので、歓迎会を兼ねて開くこととする。何れ寮の松岡・加藤に相談する予定。横田が京大医学部の編入試験にパスした由、彼の休み中の猛ファイの勉強が実を結んだ事に祝意を表す。彼、本来の面目果して

Peter therefore went forth and that other disciple and came to the sepulcher. So they ran both together and the other sepulcher.

And he stopping down and looking in, saw the linen clothes lying; yet went he not in. Then cometh Simon Peter following him and went into the sepulcher and seeth the linen clothes lie. And the napkin that was about his head, not lying with the linen clothes, but wrapped together in a place by itself. The went in also that other dioscpile which came first to the sepulcher and he saw and believed.

For as yet they knew not the scripture that he must use again from the dead. Then the disciples went away again unto their own home.

(St John 20 of chapter III-X)

さぞ満足ならん。

四月二十二日（金）雨

本日、午前十時より中央講堂にて新人学生八百名に対し、総長訓示、宣誓式あり。総長曰く、

「大学の歴史を顧みるに種々の変遷あり、欧米のそれに対して我が国の大学は歴史的にみて実に短いものしかない。今又、新制度が六月より施行されんとしてゐる。官立六十九校の多数が開講するが、量より質の問題はかりそめにも教育といふものに対しては忠実でなければならぬ。大
学昇格といふ名のみに追はれて、文部省に対して昇格運動を爲したものであつたさうであるが、眞に遺憾（本文では憤懣）である。旧帝大は名実ともに充実した設備と教授陣を備へた大学である。その一つに諸君らは最高教育を受けるのである。過去十三年乃至十四年の教育の終止符なのである。諸君らの喜びは実に大きいと思ふ。我々当局者の意を介して人格学問共に優れた指導者として社会に奉仕するため勉強して欲しい」。

終つて、北大のスクールカラーの一である宣誓式に移る。総長も言つた通り、北大に於いては保証人制度は採らず、飽くまで個人の人格を尊重して、学生自身の宣誓書署名を以てそれに替つていのである。クラーク先生に連なる「紳士」としての学校側の取り扱いに対して、自主的行動をとる責任がある。医学部会議室にて署名する。一時三九分發で帰る。四月も中旬なのに寒い事甚し、憂鬱なり。子供達と歌を唄つたりして騒ぐ。就寝十時三十分。

四月二十三日（土）晴

雨上がりの路を駆へ、そして登校する。解剖・生理講義あり。児玉教授休講にて豊田助教授代講、猛スピードで手骨までやる。午后一二時半放課。汝羊寮に至り、前夜帰札の浅田と駄べる。東都の温暖そして快適な環境を聞く。羨望の他なし。ピンポンに興ず。恵迪寮会計部長山田喜志夫君来る。記念祭に就いて諮問さる。予算の組み方に就いて相談を受ける。要は舍生大会の決議に依れど、委員会の予算の組み方、即ち委員会の記念祭執行可否の動向が凡てを決すると考へる旨伝へる。思い起せば凡てを傾注して頑張つた前年のことが走馬燈の如く往来する。渉外委員として資材購入の爲日夜駆け廻つて夢の如く過ぎた三ヶ月の努力の跡、華々しい成果を収めて終末した六月十三日の記念祭前後の思い出だ。白線生活最後のファイトを捧げ盡したと言つても過言ではない。あの情熱の泉は何か、漠大な資材（材木、紙、ベニヤ、

金具類、絵の具類等）を正規ルートから安いコストで購入した事が記念祭の根本をなす（精神的なものはさておいて）会計面に重大な好影響を及ぼした事は確かだった。凡て熱と努力だ。水の泡の如く、その時のそのものは失ってしまつてはならぬ。ひだぶるの努力はまだく存する自信はある。それより松井と三越に至り、法隆寺壁画展を見る。毎日新聞主催なだけあつてなかなか要を得てゐる。少なからず壁画の美術的、古典的價值に於いて、又、その消失の責任に就いて反省する。四時十三分で帰宅す。土曜日の夜、一週の最後の時を静かに送る。

四月二十四日（日） 寒い季節風が吹く安息日なり。

八時起床、十時のバスで北一條教会朝礼拝に出席す。朝倉・藤井両兄来堂さる。共に聖日の朝を守る。小野牧師説教「山を下れるイエス」あり。「武力に依る平和はあらず、実にイエスがか弱き馬の子に乗つてエルサレムに平和の入城した事実を想起して、吾らが力弱き馬の子となつてこの世の平和を齎らせねばならぬ」と力説される。イエスが今の日本に、否、世界に求めてゐるものはイエスを背に乘せても一步一步エルサレムに入城した小さな幼いロバであらう。即ち、前進して揺るがない若人なのである。青年の持つ使命は大きい。

帰宅せるに森田のリーベ佐藤美栄子女史（附属病院歯科看護師）来訪中、感じのよいメツチェンなり。二人仲よく盛装して出札したので、暇にまかせて洗濯をする。シャツ三、靴下三足を洗つたら消耗したので止める。それよりプロ野球の放送を聞く。夕食後もストーブの傍へかじりついて演藝放送に耳を傾ける。楽しみに日曜日の宵ならん。明日から一週間みっちりしぼられるのである。斯うして、異郷で人情にすがりもがいてゐると時折り故郷の事、婉子の事が思い出される。日曜日の午后はよく婉子と鶴川の山を歩いたものだ。いちばんはじめの日の事、あの場で婉子は悶々とし心境を訴へた。又、あの日には婉子に愛することの苦しさを告白した。二人の前には烈しい試練が待つてゐる。がっちり組んだスクラムで最後まで逞しく前進しよう。

四月二十五日（月） 春未し

九時半の列車で登校する。豊田助教授講義あり。それより篠原の下宿に至り、いろいろ駄べる。牟田兄来る。共に駄べる。就中、深沢との青森よりのロマンスは愉快なり。近頃のヒット版ならん。牟田はむくれてゐた。要は深沢を糾弾して映画とお茶をオゴラせるのみであらう。二時になつたので松井・牟田と三人で汝羊寮に至り、ピンポンをやる。小生、三勝五敗、積極戦法

は打込みの球は何れも入らず、僅かに右ポイントよりの強引打球が時々決まるのみ、レシーブも及ばず惨敗する。オルガンで合唱して帰る。夜は静かに机に向ふ。森田帰らず、リーベと某宅へ一緒に行ったらしい。毎日々が何の意味もなく送られてゆく。教室でノートを撮るのが日課なり、それだけなり。

四月二十九日（金） 天長節（天皇誕生日）

終日雨なり、故に家に閉じ籠って過ごす。婉子より来信あり、先便の返信なり。「どう虚勢を張ってみてもやっぱり平凡ながら愛される存在である事が私の本心の希ひ、「愛とは己の凡てを以て対者に盡くす事、愛される故の愛ならば、それは愛の弱さで眞の愛と云えない」と知ってはいたわ、然し、私自身唯一筋の愛情にのみ縋って生きてゆく女性故、たったそれ一つの動きで生活全部が崩れてしまふとは何と哀れな悲しい存在であらうと思つています」

「愛されたいとは何と悲しい女性の希求でせう」とあり、髪を切つてしまつたとの事、まあ、良かるべし。又、T子の事に觸れてゐる。早速返書をしたむ。

「僕は前述のやうに今の処、只あくせくとして通学してゐる。こんな事は今までの僕（少なくとも予科入学以来）にはなかった。僕の信じてゐるヒュマニティーを僕の心の中に具現させたい。婉子よ、これ以上君に何を言はう。その良き理解者としての君を信じてゐる。愛せらる事では君のみでなく僕として重大な問題だ。即、女性のみでなく男にとって女性を愛することが即ち医学徒としての信ずる道への絶対条件として附加されねばならぬからだ。君の告白はそんな曖昧なものでなく、男として君のその殻を壊すことが愛せられる者、男としての先決問題なのだ。婉子よ、君なら分つて呉れる筈だ：T子との問題にしても僕にも彼女にも女学生的センチメンタルなものがあつた。キエルケゴールの「初恋」にもある通り、君も落着いて女学生時代の思い出を辿つてみて呉れ給へ。初恋は美しい、それを壊すー又、壊す者は自己の成長なのだ。彼女が女学生時代の如き甘き夢（何かと頼りたい様なもの）を今に至るまで僕に抱いてゐるならそれは長い人生の誰でもが経験する一つの時期の感傷として尊重して根こそぎもいでしまふ様な気にはなれない。T子自身の問題である。やっぱりインテリの悲劇はある。恋愛に於いてさへ愛情を素直に告白出来ないものなのか、婉子よ 僕は素直にならう。いくらすねても致し方ない事だ。感情は針の先の様なものー僕だつて君のその感情即ち信じてゐる事が明日にでも変化すると云うふ悲しさはある。そのみに縋り

切る哀しさがある。でも凡てこの世に生を受けてこんな不甲斐ない自分 愛すら行へない人間（多分に信仰の持つ重大性である）なんて到底考へられない。愛される事なら然り、その針の先の様なものを包む一寸表現出来ないが。そのまま信ずる事、そこに僕と君は生きるのだと思ふ。ずるい書き方で許して呉れ給へ」と。

丁子の事に関しては感傷である以上、それを徒に詮索したり邪推してりしてはいけない。誰でもが辿る過程であり、青春の輝きである。女学生のセンチの心を打壊すべきではない。それが夢である日を悟る日は直に来るし、他人が強要する必要はないと思ふ。二人の人に愛されたら少なくとも今迄の僕だったら二人の前から身を引くを以てヒロイズムを楽しんだ事だらう。だが、今の僕は最愛の一人をベターハーフとして愛してゆく決心をしたと結ぶ。

五月一日（日） 第一安息日

久方ぶりの快晴に恵まれて絶好の安息日和なり、八時起床、カーテンの間から朝日がさし込んでとも言われぬ心地よさ、部屋を掃除して気分一掃する。それより兼ねて約束中の能勢兄の荷物運搬アルバイトに出発す。伊藤（益）兄と三人で寮よりリヤカーに積んでごとごとと郊外の清澄なる空気を吸いひつつ競馬場を迂回して漫步し乍ら歩く。間もなく新緑の北の大自然が到来するのだ。道中、内村・新渡戸両先輩の培われた北大伝統なるものに就いて話す。誰が何と云つても現在の四・五十才の人にして宗教的感覚を求めた人は内村先生に、そして国際問題に就いて考へた人は新渡戸先生に、大なり小なり導かれなかった人はあるまい。教育者であるなら然り、いつの時代にも燦然と輝く処の眞理を説き、自ら闘った両先生程の人間が他の日本人にゐただらうか。東大、京大が官僚・財閥の代表者こそ輩出したが、いづ如何なる時代に於いてもこれだけの人に多くの感化を与へ、後輩をして奮起せしめた人があつたらうか。蓋し、両先生を生んだこの北大こそ誇つて良いのだ。そして多くの人に感化を残した八ヶ月在留のクラーク先生こそ日本人にとつて恩人と忘る人はあるまい。近頃とみに北大の学生の品位が云々されるが「汝らは地の塩たれ（編註・新約聖書の山上の垂訓）、塩若しその効力を失はば何をもつてこれに代すべき」のバイブルの一句こそ、北大の伝統ではあるまいか。日本人間にこそ知る人は少ないが、世界の人に知る人は多い植物学者宮部金吾博士こそ黙々として眞理探求の学徒として地の塩たらんとしたその人ではないだらうか。決して北大出身者が消耗してゐるのではない。全国各所に四散した数少ない先輩は地の塩たらんとして黙々奉仕してゐるのだ。自然科学のエンジニアとして信仰者として紳士としての品位は微々だけれど

も現在でも貰かれてゐる。この大自然の中に学ぶ者が何で通り一ぺんの学生としての研學に終らざらんや。茫然たる石狩の野、そして悠々たる大平原の魅力に包まれた学舎に巢立つ学生にして何で秀れる教授にも優る教訓を体得せざらんや。

十二時半到着、エッセンを馳走になり、又リヤカーを引っぱって戻り、南下して帝国座に至り、「ウエスタン ユニオン」観映す。西部活劇なり。殺ばつとしたるシーンの連続、南北戦争当時のアメリカ大陸開拓の影にはこの様な荒っぽい殺りくが行われてゐるのだ。アメリカン ヒューマニズムの陰影なり。観客の中にも矢張り若い人が多いのも肯ける。六時のバスで帰宅、消耗したので早寝する。

「愛する」と強く云ふその来る所はやはり悲しい女性の心から来ている事に：いくら男性的氣憤を装つてみてもやっぱり悲しい哀れな存在である事に氣がついたの、利己主義 全くのエゴだわ。「愛されたい」とは何と悲しい女性の希求でせう。やっぱり平凡な弱い人間だった。そう正直に認めてみると悲しい心だと最初は思つたけれど、自分が所詮乏しい女性として空しい意氣込みと不自然さを捨ててゐる事が良い事だと思ひ始めて来たの：どうしてこう人を愛さなくてはならないのかしら：こんな小さな簡単な事が率直に出来ないなんて全く愚の骨頂だね。―婉子よりの書信中より―
「愛する」悲しい女性の心　愛情にのみ縋つて生きてゆく　愛されたい

五月二日（月） 朝から雨降り

九時のバスで登校、市役所前より市電に乗る。中々快調だ、アカシヤ並木が芽を出したらもつとく素晴らしい札幌になり、快適な登校気分になるのに、解剖学講義、豊田助教授猛スピードで進む。終つてエッセンの後、汝羊寮に至り、日本キリスト者医科聯盟に就いて朝倉に聞く。北海道地方部会の急速な発会が望ましい。結局、アルバイトが必要だ。それより二人で南下、日活館に至り「ジキル博士とハイド氏」観映する。人間に内在する善と善との両面は鎖のやうに切つても切れないものだ。この二重性を扱ったステイブンソンの小説の映画化。感じたことは悪のマンネリズムと云ふ事、恐ろしいことだ。あの薬品の代わりにバイブルだったら：と。現在の自分に就いて考へる：。ハイド氏の多いこの社会にジキル博士は死んでゆくのだ。あの映画を只、興味本位のスリラー映画と解釈するのみではならぬ。蓋し、スペンサートレーシーのメイキャップは上手い、カメラも巧みである。最近、人間の二重性を取扱つた作品が多いが、人間そのもののゆきづまりは案外極端から極端への移行を弊はんとする二十世紀の悲劇的知性に当たるのではなから

うか?…。明日は憲法発布記念日なり、夜は解剖図二枚書いて後、横田兄へ書信を書く。就寝十一時半。

五月三日（火） 新憲法発布記念日。 天候不順なり。

憲法が発布されてすでに二週年、大した不都合を感じらぬと云う政治家の話だが、旧憲法が我が国民を支配して来た事も肯けるが、新憲法が国民を支持してゐるとは全面的に肯けない。国民が新日本建設といふ崇高な理念に一步歩前進してゐることは確かだが、何だかもややとした無感覚と云ふか無關心と云ふか兎に角、はつきりしない。道德律に対するマンネリズム的なものを感じる。何と云つても世界は混沌としてゐる。過渡期の日本国民はより眞剣に自覺して形式のみに追はれることなく、社会の福祉のため奉仕するとゐふ基本理念を第一に頭に置きたい。自己の完成、六ヶ敷^むしいことだが、六三制及び大学の門戸開放にしてもあまりに矛盾してゐる。この狭い日本に二百に近い大学あるとゐふ事が不思議だ。教育者自身の深い反省、文部当局の無分別的便乗主義を攻撃したい。一日中、部屋に籠る、解剖図と首つぴきなり。講義のスピードに追いつけるか、ひしくと學問と人間性の問題に就いて考へる。學問のみに追はれて偏つた人間になつてしまつたらと考えると、あせつて来る。必然的とは云へ悲しい氣もする。予科時代の收穫が幾分でも役立つて呉れる事を祈るのみなり。

婉子より來信あり、大分變つた様だ。それにしても案外單純な處で捨て切れるものなり。

「人間つて何といふ小さな存在だらう、そしてあんなに大切にしていた自我なんて、何てくだらないものだらうと。棄てても棄て切れない自分、自分で最も良いもので信じてゐる自分の姿、完全だと自惚れていた知性の存在が実は小さなくつまらないものに過ぎない事実、現実の中に自己を没しその愚劣と平凡の臭氣の中に身を沈ませ斗ひ抜こうともしないで傷けることも触れることも恐れて唯一人で孤立を守つて大切にしてゐる自我、そんなに大切に／＼掌に握つていたものが何の價値もないものと分つた時の驚き、でもはつとした安堵感もしました。何と恐ろしい心でしたせう。二プラス二が四でない事を百も承知した総明さ世の矛盾・不合理を併合して、その上に正しく足を下して設計してゐる人達、二プラス二が四でないといつて目に角を立てて騒ぎ廻つてゐる己の醜態、進んで現実の中に飛び込んでも滅し切れない自己の姿、全てを洗ひ落して斗ひ抜ひて最後に残された自己こそほんとうの美しい自己ではないかしら、小さな自我を捨て眞の精神の自律を持つた人格となりたい。少しでも成長出来たことを感謝します」とある。

顧みて自分の自画像を見れば四年間に亘る長きものであった。人生否定、現実より遊離して如何に生くべきや、を考へ通した四年間であった。「我々は生命あるものに取囲れた生命ある者である」生きることに、その事が人生なんだと肯定するまでの長き自画像、これは決して感傷ではない。ロマンチックに美化された自我の世界、それから眺めたユートピアを描いてゐた。無惨にそれが碎かれる日は来たが決して力を落とした訳でもない。益々力を増したのだ。虚勢ではない。少なくとも斯う信ずる故に誰でもが建てる若き日の自画像を自ら苦しみ抜いて守り、又、破壊することは当然なのだ。又、問題はその人の課程（人生肯定に至るまでの）にあるのだ。若い生命を当然のことに燃え立たせるのは不必要かも知れないが、此処に重大な岐路があると思ふ。教へられて妥協してゆくのが正しいか、最後まで反撥して自画像を守り抜くのが正しいか、僕だったら、絶対自ら割り出して後者の道を辿ったつもりだ。愛の行為によりて、この現実を身近な一歩から再建してゆこうと決心したのだ。それだけなのだ。今の僕が考える事はそのファイトを充分に發揮出来る自信はある。がそれに斗ひ抜いてゆく自己が如何にしたら完全に近い状態であるかにある。自己がつまづいたら仕方あるまい。医者と人間性の問題が最大事だ。

五月四日（水） 快晴

七時五十分発で登校、午后一時帰宅。床やへゆき、風呂に入り、ラジオを聞く単調な一日なり。少しく消耗気味でヴィタミンB・Cを注す。体力無くては勉強不能なり。少し、春暖になると、気がゆるんですぐに不用心になる。睡眠時間の統一、運動、散歩の徹底を計らう。節煙を実行し、なるべく快適な頭脳に常に保つ要あり、あまり多様に並べても要は実現なり。

五月五日（木） 子供の日

朝から一日中爽やかな五月晴れ、朝日を受けて起床、文化日本建設の子供の持つ使命は大きい。児童文化向上はこの混乱した社会に於いても考うべきことである。快晴に誘われて第一回登山ハイキングを行ふ。同行能勢兄、先ず文化通りを眞一文に三角山麓の小屋に至り、左側の小径を登る。熊笹を分け一路頂上目指す。熊笹がなくなり、径は険しく急斜面になる、加ふるに春陽映えて肌に汗さへ生ずる。いよく最後の岩場になる、物凄い岩だ。往年の健脚で一気に押し切り予想より早く頂上、三角点に達す、見渡せば石狩の平野は春霞の中に模糊として横はり、藻岩、丸山の麓から整然と並ぶ札幌市街は実に美しい。蛇行する豊平川の此方、繁華街、官庁街、そして北大の広い

構内が静かにかすんで見える。背後には遙か樽前山がかすかに浮かび、雪に包まれた手稲の連山が聳えてゐる。山々は聳えてゐる。山々、々、山こそ我らの故郷なりと感歎す。エッセンの後、下山を開始、大倉山までの峰々を辿る。処々に雪が残つてゐるので渴を癒すには好適なり。北海道の山ならではの快味なり。三角山頂より同行の子供達五人連れと干木、熊笹の尾根の小径を辿る。子供達は元氣だ。雪を丸めて頬張り乍ら進む。三つの頂上を超えて大倉山に出て大倉シャンツエにて一服す。国体スキー大会ジャンプ大会の場所なり。それより一気に馳下りる。程なく牧場の広いローンがある。札幌ならではの広い美しい草原、牛達も日陽を受けて思ひつ切りこの爽快を吸収してゐるらしい、牧舎裏の小高い丘で寝ころんで寮歌を唄ふ。水車の処で前行の子供達と別れたと思ったら、このロマンティストは誰にものんびりしてゐると見えて、又、女学校三年の女の子以下七・八人の子供達が親しくなつて呉れる。一緒に楽しく丘を降りたり上ったり、寝たり、はねたり、唄つたりして遊ぶ。摘草の帰りらしい。暖かい春の草の丘に絶好の休日の午后を送る。皆を集めて日曜学校の賛美歌を合唱する。やっぱり、札幌の子供達は親しめる。大ていの子供は教会の日曜学校生徒だ。すぐに気が合ふ。彼らが「さやうなら、さやうなら」と姿が見えなくなる迄手を振りながら丘を降りて文化通りへ出て帰宅する。小母さん心盡くしの子供の日のお祝ひの夕食に舌鼓みを打つ。今日は子供の日にふさわしく一日中子供に囲まれて過す。子供の世界、それは我々大人が腕をこまねいてその幸福を論じ希つてもなにもならない。彼らの世界には彼らの思想がある。僕達はその中に飛込んで共に考へ唄ひ戯れて彼らの自由を尊重してその幸福のために持てる能力を捧げやう。その意味でも今日の一日は楽しかった。又、休日は許す限り野に山に出でて童心の世界に飛込む。夜は入浴の後、明日に備へて早く伏床す。

五月六日（金） 曇 驟雨至り後晴れ

午前八時半より午後三時四十分までぶつ通し講義あり、いささか消耗する。解剖四時間はちよつとひどい。人間なんて生れ落ちてからそこに生きる権利がある以上、断々乎として生きねばならぬが、構成してゐる社会の事を考える必要がある。ともすれば、自由を覆違え社会に迷惑を及ぼしてゐる事が若氣の至りとは云へ多いが考えなくてはならぬ。同室の森田の行為が昨夜、中坪氏の心に触れたが、友人としての弱みを感じるのはのみなり。彼らは無軌道である事は確かだ。理性、少なくともインテリゲンチヤの恋愛は抑制を忘れてはならぬ。彼ら二人が本能にのみ馳られて連日うつつを抜かしてゐる事は眞実であるか如何を疑ふに至るのは当然なり。例へ、眞実としても社会人の

エチケットとしてマナーとしても社会の中の二人である以上、リーベその眞実の苦しみを逃しては礼儀（常識的な日常生活の自覚）と云ったものの中では和らげられ、又、忘れられなくてはならないからだ。世間しらずの恋愛遊戯と見られても致し方あるまい。学生としてその純心さを持つて幾分、社会の人に甘へるのはよいけれど、これとても現在の社会情勢に於ては余程の緊張を要する。最高学府の学生として一個の社会人として対等に扱つて呉れる以上、我々も当り前の様なことだが、その責任を果さなくてはならない。自然法的リーベの在り方の眞実は決して共同社会に於てのエゴイステイックな自由を言ふのではない。我々が登山して風景を觀賞する時でも万人に最も愛される時間なり場所である。二人だけが「愛し愛されるだけで二人の世界が幸福なのなら別問題だが？…」。

五月八日（日）第二安息日 雲行き怪しく時々雨至る

「母の日」、幼い頃より慈厚く育しみ給ひし母に感謝する。札幌教会、母の日礼拝に出席する。平野牧師説教あり。「母性愛こそこの混濁の世にあつても永遠に消えぬ処の光明である。そしてイエスの愛がこの世に行はれるため一人一人を選ばせし基盤はこの母性愛が重大な役目をしてゐる。寛容にして慈愛ある奥義は母性愛として通じてゐる。子の母に対する感謝の気持が不純のない様、未来の母、又、現在の母なる人々はそれに値するだけの立派な母にならなければならぬ。私は眞に立派な母を見るが又その反面、これが眞實の母かと思ふやうな母を見ることが少なくない。生命の春、凋落の秋、絶えず神の御國建設の良きしもべ、それと我子を導き、共に祈る母となつてこそ子の母の日に感謝されるにはふさはしい母と云へる。

午后、能勢の下宿先にゆき、ストーブの傍らで野球を聞いたり駄べったり、飲んだり喰つたりして愉快に過す。彼もやっぱりゆきづまってる様だ。愛と実践、觀念としてのキリストの教、実践としてのコミュニズム、この点の各所に矛盾を抱くものとして、果してこのまま腕組みしてゐてよいのであらうか？ 僕の周囲に動き出した友人の動向は頗る活発である。朝倉のキリスト者医師医学生、看護婦を一体としての愛の行爲としての医療奉仕を目的とする日本キリスト者医科聯盟北海道支部結成の準備及び胎動。又、鷹田の十九世紀に於いても神の奇蹟は行はれてゐるとする。モルモン教派、札幌教会建設の胎動。白鳥のカトリック理念こそキリストの愛の眞実であるとする伝道的胎動等である。能勢が内村先生の無教会（日本民族のキリスト教）に活路を見出してより数ヶ月、彼もすでに赤岩牧師のコミュニスト宣言に懷疑をはじめたらしい。我、又、愛と実践にゆきづまる。聖書を聞くことさえを怖

ろしくなつて来た。ガムシヤラの勉強に追はれてゐる時だけが楽しい？ 要するに時間の経過が希みなのだ。：又、明日から学校だ、O・Kだ。

五月九日（月）曇後晴

登校の通りすがり。鈴木の下宿先にゆく。よもやまの話に花が咲く。思はず時計を見たら十時半、慌てて南講堂に駆け込む。豊田助教授解剖学講義あり、午后、汝羊寮に松井・石金とゆき、ピンポンをやる。勝ちつ破れつ、その合間にはオルガンに合せて唄ひつつ楽しく過して四時十三分で帰る。何だか知らぬがもり／＼ファイトが出て来た。この儘では到底駄目だ、敢えて行わずして消耗はない。基礎医学をみっちり収得してこそ臨床に勇敢に飛込めると云ふものだ。人生二十有余年、男児一度医学修業に志したからには刻苦勉励、断じて初心を貫き、神の愛の使命を果さん哉!! ファイトなり、往年のファイトを呼び起こして基礎医学の難関を突破して以て着々成果を納めん。過去に於て少なくとも勉学の修得法に関しては自分としても経験を積んできたつもりだ。無理につめ込む事の非を熟知した筈だ。百を知りて十を知るの法なり。只、あくせくと覚えてゆく事によつて頭脳の訓練をして確実にポイントを掴んでゆくべし。快適なシーズンを迎へて、この二月断じて突込う。環境を云々してばかりゐても結局、自己をカバーする何ものでもない。要は、断行のみ。純なる断行なり。これ程単純で確実な勉学法はあるまい。

五月十一日（水）快晴 この処毎日暖い春の日和が続く

昨日婉子より来信あり「二十九日付の御便り拝見致しました（眞面目に）。よくわかりました。どうしてこう直に夢中に考へ込んでしまふのでせう。相手の気持ちを十分に尊重したつもりだったけどやっぱり貴方の方が一枚上手だわ、貴方の様に考へられなかったわ、何と云つても大人だわ、人の気持ちをそれだけ冷静に解剖出来る丈でも腕はどうだ知らないけれどやっぱり立派なお医者様だわ、貴方はもう青年後期立派な社会人として生活できますよ。とっても嬉しいの、正直に言つてー今まで貴方の無分別が何かたよりないグン／＼引っぱり廻してほしい気持ちがしてゐたの。急に貴方に対する考へが變つて来たわ、一人っ子の我儘で甘えん坊の私の正体をそのまま出せる様な気持ち。案外夏休みには平凡な女の子になれそうだわ：」とあり。

児玉教授中枢神経系講義あり、北大医学部の權威の一人である児玉教授はやはり、落着いて急所をびしり／＼押へる。それより森田と二人で中央劇場に至り、「偽れる装ひ」観映。フランス映画らしい悲劇なり。エンゲージした二人の間に一人のデザイナーが登場し、メツチェンが彼をフィアンセ以上に

愛する。理性ではフィアンセ、感情ではデザイナーを愛する、その相克がきわどい。デザイナーと別れる時「貴方だってお芝居が出来るなら私だつて出来てよ。わたしは貴方を愛していなかった事よ、誤解なのよ私のお芝居なのよ、帰って頂戴」と言ふが、あの時クローズアップされた三人の顔はクライマックスシーンであらう。そして彼女は二人より去つて独りで旅立つてゆくが、あれだけ理性の強いメツチェンが果してゐるのだらうか？…理性と感情の相克に悩みつ、敢然として身を処した彼女の取つた態度はやつぱり映画だけの女性の心理で、あれに憧れめいたものを寄せるミーチャンハーチャンがあつたとしたら考えなくてはなるまい。豪華なるフアッションショーのシンは綺麗だ。流石に流行の都パリのドレスメーカーがあれだけの設備を擁してゐる事には学ぶこと多々あつた。帰宅五時、自轉車を飛ばして円山公園まで行つて見る、櫻は五分を超えてゐる。夕景の元、あちこち陽気に飲む者、唄ふものあり、昔に変らぬ花見風景がある。その円山公園中を散歩する人々の姿も春めいて平和な風景である。

五月十二日（木） 曇、風強し。

終日教室にあり、春暖の候、すつかりのぼせて身体も頭脳もボンヤリかすんで疲労甚だし。夕景の田園を漫步して帰る。やるせない身の行方、梅の花が其処此処に勾つて写る。はかない花の運命であるが長い雪の間今日のこの短い春を待った植物は精一杯美を誇つてゐる…。

婉子が「もう立派な社会人よ」と言ったが、偽善なのだ。この人間同志の醜い争ひの修羅場を見よ、お互いの腹の探り合ひ、エゴイストの集団の斗争場を!! 無論、その中に飛込んで磨きあげられたものが、残つたものが人間本来の眞実であり美しさであることは分つてゐるが？ これらの偽善者をして神の愛による眞の信仰者たれと祈つてはゐるが、この小つぽけな僕には耐えられない苦しさがある。虚勢を張りたくなる、嘯きたくなる。遊学の身にとつて人情を慕ふ気持ちは大きい医学徒として人を愛し愛されたい欲求はより強い!! されどく、薄っぺらな信仰者は直に神に背を向けたがる。そして人の恨み、感傷に陥つてしまふことだ。背徳の極みだ!! この小さい自分もこの社会の一人なのだが？…じつと唇を噛みしめて青空を仰いで口笛を吹こう。そして一步一步、うまずたゆまず進まう。誰も知らず自分を罵り、嘆いて歩いてゆこう。

五月十四日（土） 曇、夕刻より雨となる。

午前中児玉教授（中枢神経）天野助教授（消化器の生理）講義あり。それより一時半発で帰宅、帰途安孫子氏宅に於ける琴似日曜学校教師会に出席する。三好教区牧師出席さる。要は校舎無きも出発する事なり。着々実践する事なり、幾多の困難あるも神の愛を信じて黙々歩むに然らず、自由の天地なり。結局、旧北一條教会の指導を脱して北海道区直属となり、各教会員を問わず応援を求む超教会で神の子と平和な祈りの元に共に歩むことにする。この一見無理な企てが如何なる結末になるかは知らぬが、躊躇している場合に非ず、一刻一瞬、実践するのだと思ふ。僕は又、中等科（殆ど女学生）の受け持ちとなり、約三十名を擔任する事になる。開校五月二十二日と決定して種々協議の上五時半過ぎ散会する。夜は家へゆき明日の百三十七期委員会コンパの打合せをなす。盡きぬ話に名残りて十時帰る。

五月十五日（日） 快晴に恵まれて

恵迪寮第百三十七期委員会コンパは櫻花爛漫の円山公園にて開催された。鈴木委員長以下十一名出席、盛会を極む。この日入札以来一滴も口せざる小生も遂に意を決して杯を交して旧交を新たむ。又、湧然として新らしきフアイティングスピリット湧き起り、大いに駄べり且唄ふ。寮歌を口ずさみ合唱を交して櫻花の下筵、和氣横溢する。思へば在寮委員会時代の生活こそ吾らの人生に於ける一ポイントとして永久に忘れざるものであらう。

今こそあの清純なる寮歌を涙を持って唄ひ得ざるも、その永遠なる純なる魂に憧れるものに何の変化があらう。旧制高校の重大なる存在意義はそれを経過した者のみの知るものである。還らざる魂の故郷こそ恵迪寮であり、その三年の生活であつた。得べくして得べからざりし眞理の光（編註…昭和十六年寮歌「湖に星の散るなり」の歌詞に「得べくして得べからざりし 秀麗はしきまことの道ぞ」の一節あり）は以後の人生の果てしない航路に漂ひ流れてゆくのであるが、吾らのその生活こそ最も近接したものである。噫!! 今にして嘆けどすでに夢の如し、去りにし三年は永遠に還らず!! 時代の推移と共に新学制としてその姿は消ゆれど魂は消失せず!! あの魂の故郷（編註…昭和十八年寮歌「天地の奥に」の歌詞に「魂の故郷」の一節あり）に灯る久遠の灯りは幾多先人の血と涙もて打建てし眞・善・美探究の金字塔の証明である。そこに明治五年以来の伝統は輝いている。そこに若き血潮の迸しる息吹きが萌え立っている。永遠に帰らない三年の生活を最後まで滞りなく了へ得たことは限らない喜びである。そして又、何日かこの生活が必ず復活されるであらうことを祈り合はう。その生活を了へて大学に進んだものは国民の%にしたら、極僅少で一%位であらう。それだけに正に特権階級（学生

としての)であつたことは事実である。然し、それを率直に認めるが、学生自身、又、そのスクールカラーは新学制により学問の機会均等が計られたとしても失つてはならず、變つてはならない。變つたり失はれることは吾らにしても実は悲しい事である。この時代の変遷の中に生を享けて、この様な感傷に陥ることは、そのみでは解決出来ないものがあると信ずるのだ!! 六時解散、能勢と共に帰り、心ずくしの夕食を共に食べて九時彼は帰宅する。

五月二十日(金) 曇

書かんとして氣進まず、斯くなりつつ今日に至る。漸く授業の倦怠を覚えはじめる。連日、学名のノートにのみ追はれ加ふるに森田の下宿問題なり。何事も若き日のざれ事とは知りつつも狭小なる頭脳には吸収する事いと困難にして、あれこれを考へつつ今日に至り、若い日には多分にリズム的な生活があれども、自分自身のシンフォニーにメランコリックな虚勢?を張るとは悲しけれ。二・三日のメランコリーを吹き飛ばすに、身体の消耗を考へてゐた矢先、学生対抗医学部野球大会とは喜ばしき事なり。依りて勤めらるるままに出場することにした。如何なる事とは存ぜぬも暫しのメランコリーを吹き飛ばすに如かず。早速トレーニングをやる自分乍らそのファイトの存在に感激す。若き日は兎角消え入り勝なれど、暫し春芝草(編註・昭和三年寮歌「郭公の声に」の「番歌詞に春芝草の表記あり」の上を球を追ふは爽快なる極みなり。蓋し教室の講義の所在なさは如何せんや。ノートのみうもれてゆくも医学修得とかの熱意湧かず。講義集録のマシーンに化したるは哀れなり。

婉子よ!!、許せ、暫しの音信措筆は豈、余が志しのみならず、君が双瞳を胸にさ迷ふ不逞の遊学の徒にして自己欺瞞交々至り。愛する君に捧じべきもの何ものもなし。噫!! 婉子よ、美しき君が双瞳は永遠に輝くべし。さはれ余がこのブランクの胸中、騒然たる夕風の後の雷雨にも似て、押寄せる雷光刺々として君が愛を受けるべきや。愛すればこそ余は犯すなり。神知るや君知るや!! 婉子よ!! 愛する婉子よ!! 許せ。志を立てて君が許を離れ、君が双瞳を涙に曇らせしも余が研学の行途、遠く且難なり。されど余は君が抱擁を忘れず、歎きけど、やるかたなき我身にして君が抱擁に帰るのみ。婉子よ許せ!! 永久に我偽ニヒルを嘲へ!!

五月二十一日(土) 曇

中枢神経系、自律神経系及び唾液腺講義児玉教授、天野助教授より講義在り。それより医学部学生対抗野球大会あり、於Cグラウンド。遊撃及左翼手、

バッター三番の重要ポジションを占めて出場すれども消耗して振はず。二年目の軍門に4A-2で下る。4時発で帰宅、入浴して早寝する事にする。斯くして瞬く間に一週も了り、明日第四週に入るのだ。余す処一ヶ月半で夏期休暇なり。プラン多くして自ら楽しむも果して実行出来るや否や。母より音信至る、母の日の返信なり。何もかもこちらのことは気にかけず勉強せよと書かれてあり、夢多き無頼の徒、豈、その罪深き所業の数をザンキするのみ。

五月二十二日（日）第四安息日 花曇りの一日、時々陽光出づ

七時起床、日曜学校開校式、試験前ローンにて開催。中等科、計二十七名擔任する。男三名、女二十四名（琴似中学十四名、北星女学園中等部六名、藤女学園中等部一名、静修高女中等部二名、北星女学園高等部二名、静修女子高校一名、高小卒一名）なり。最初なのでパリサイ人 即ヒポクリテイーに就いて話す。微力にて如何程つとまるか疑問なり。彼らの自由なる信仰を伸ばしてやりたい。それには決して独善に走らず、彼らが従いて来るだけのものと備へなければならぬ。前途は困難にして希望更に大なり。午後は久方ぶりで馬場牧場裏山を訪れ、ローンの木陰で読書する。快適なり。春の日を有意義に使用せねばならぬ。それより円山グラウンドまで散歩してG・I野球を見物する。チムワークが不備だ。スポーツは只技術のみに追はれてはならぬと痛感する。春の午后をすっかり楽しんでしまった。新緑に映える札幌郊外の快適を味はふ。全く素晴らしい。内地的な春とは一風違ふ美しさがある。円山では葉櫻の下で未だ飲み会をするひとがあるが、彼らは如何にしてこの山々の新緑を賞でないのか。今が一番美しい季節だ。萌ゆる緑に盡きない自然の妙を鑑賞する。萌え立つ若草、若芽その激しい息吹は到底自が狭い胸には吸収出来ない。春だ！ 緑だ！ 若草の息吹だ！！

京大の横田より来信あり「矢張り札幌のあの長い雪の生活より解放され、あの百花百草一度に咲き乱れる春の歡び、春の大地の逞しい息吹、やはり北海道なくしては感じられない。美しい大自然の中に育まれたあの三年の高校生活はやはり自分の生涯に忘れ難い意義を与へて呉れたものと深く感じて居ます。思えば兄とはあの支笏湖ゆきが最後でした。あのとき行って良かったと懐かしい気持ちで一杯です。本当に静かな支笏湖でした。一寸あんな気分は味へないでせう」。先日、東大緒方教授が講演された中に、「医者患者を物質視してはならない」とありましたが、仁の道にいそしむ吾々学生の心の底に大いに楔を入れられる所がありました。これから互いに身は數百里離れたとも向ふ道は只一つです。お互いに頑張りませう」とある。センチメンタルを極端に嫌ひだった彼がこの言を連ねるとは、相当札幌の風物詩が

刺激したらしい。追記に「僕はセンチメンタリストではありませんが、やはり兄の前に出るとこの様な気持ちになるのです。どうかご理解下さい」とある。横田去る!! 少くともこの札幌より好漢横田は去った。京都産、快人横田の離札は寂しい。

五月二十三日 (月)

朝、鈴木の下宿へよって十時までいろいろ駄べる。彼流の緩慢な生き方だ。それより、松野講師の筋学(下肢)講義あり、帰途、小森と五番館で喫茶してバスで帰る。昨日、生徒K女学生よりきいた。SSに対する批判に就いて彼に訂正に、要するにTはまだ若いのだから分別がたりないのです。彼としての良い処もあるのだから決して悲観する事はなく、生徒の人格を尊重して楽しいSS(編註: Sunday School)発展させてやるべきであるとの事、一応聞くべからざるものを聞いてしまったので消耗したが、安心も出来た。

五月二十五日

噫!! 悲しきこの想ひ、人として強くなれ!! 生きよ!! と云う事はこの汚れに汚れた社会を認めて二プラス二は四ではないと云ふ事を肯定せよと云ふ事なのか。凡てに超越して雄々しく眞直に生きてゆけぬものなのか? あれだけに凡てを肯定して現実に大きな眼を開いて肯いた筈だ。それなのに、まだこれ以上、この小つぼけな頭を下げよと云ふのか。生きると云ふ事はこんなに始めなものなのか!! 如何にして世に在るや? : 人の世の何ぞはかなき事よ(編註: 昭和六年寮歌「別離の歌」前文に「人の世の何ぞはかなき」の一節あり)。所詮、ロマンチストは生きられぬのか? 神よ!! 希はくはこの崩れんとして最後の祈りを貴方に捧げる僕を、もう一度とりなし給へ、神よ!! これ以上僕を苦しめることは残酷と云ふものです。お願いです!! 神よ!! この世の中が貴方の御旨に離れた貴方の敵のサタンの国であるなら、何故、僕を救ってくださいらないのですか、お願いです神よ!! 貴方のその逞しい力でもう一寸でよいですから、この国を生きられる国にして下さい、お願いです。

今日から千石のフライなりし月・水両日の午后は松野講師の筋学の講義になる。依りて土曜日を除いてフライの時間は皆無となる。

児玉教授曰く「我が完璧なる教室のスタッフを以て全力を擧げて講義をすすめて実習を極力、諸君らの自由なる時間の元に他の講義に消耗する事なく実習に突込めるやうにしたい。この快適なる季節に於て、講義を完全に進めて冬季に於ては屍体の腐敗がないから、諸君らも冬季は余り講義に束縛された

くないであらうから、屍体系統解剖実習に自由に時間を利用出来るやうにしたい」。

まさに然り、歓迎だ!! 待望Geld (編註…ドイツ語のお金) 来る。それにしても帰心は矢の如きものあり春が来たと云ふのに何故か晴れぬ。このわだかまり、昨日のバイブル研究会から面白くない事ばかりなり。

五月二十七日 (金) 曇天 雨時々至る

身体検査あり、チフス予防接種あり、左腕に頻に疼痛あり不快なり。午后の血管の講義も不快なり。婉子より来信あり、返してはと「今までずるずる君に引きずられているのがザンキなり、と云つても永久に斯うして君を考へて人生を終わつてしまひさうですが…結論「寂しさ…援助者・ベター・ハーフ (プラトニック)」としての君を欲求するが故の…から来る学問的情熱のマンネリズムを恐れての後めたさ」とでもしませう。然りとは云へ、柳下の蛙です。高飛びしても決して元と同じ場処へは落ちない模様です。否確信します!! 問ふ事此処に至る、可なりや不可なりや、君の返を待つと。何だか分らぬままにペンを置く。果して婉子に分るや? だけどコンナ毎日を送つていてそんな自信があるのを疑ふ。傲慢な男なり。

五月二十八日 (土) 快晴 ワンダフル・スプリングデイ

十二時三十分放課となる。直に帰宅、洗濯する 干す。夕刻、能勢来る。いろいろ駄べり、第四週を過す。最近めき／＼ファイトが出て来た。思ひ切つて突込時間を有意義に使用して、決してあせらず生きてゐるといふ事の意義あらしめねばならぬと思ふ。信仰が!! 大先輩内村、新渡戸の歩んだ道こそ無限のスピリットの根源だ!! 決して消耗しないぞ!! 勉強せずして、又、人間をつくらずして何をか言はん (編註…人間をつくらなければ人生無意味だ)。人生あたら無意味に等し。生きること!! そののみなり。信じ、愛し、少なくともこの現世を一步前進せしめたい。このヴィジョンだ!! 「少年よキリストに在りて大志を抱け!」然り!! 確かに此処のモウロウとした生活が恨めしい、頼るものは神のみ、その愛の偉大なるを知れ!! 永遠に亡びざる眞理はキリスト教の愛なり!! これを疑ひ迷ふ者よ、躊躇する勿れ!! 只信ぜよ、そしてこの愛の滞りなく行はれたために祈り、そして実践しよう。力弱い吾らなれど眞理の光は行途に燦然とある限り、不動なる歩みの方向が変らう筈はない。何が何でも突き進むぞ!! 愛だ!! ヴィジョンだ!! 今までの凡てが一片の花びらの如きセンチメンタルなものであったことは確

かだ。それを拒否する訳ではないがこの現実を直視して、磨きすまされた不滅の愛に生きる珠玉の如き人間になりたいのだ、前進あるのみ!!

五月二十九日（日） 第五聖日

昨日に続いて晴れ渡った快適日 八時より農業試験所前ローンで日曜学校あり、中等科三十数名に対してイエス伝の概略を話す。今日より約四回に亘ってイエスの生涯を話、それより旧約の物語に就いて語り、パウロより今日に至る。キリスト教の歴史を話す予定、引き続き教師会 安孫子宅にてあり、種々の事項に就いて協議す。新たに三年は垣見姉 五年に奈良兄が夫々受持と決定。六月十二日の円山公園ハイキング兼親睦会の件につきプランを練り、分級教材及び内容に就いても種々の協議あり、又大体、夏季学級は八月初旬と決定する。それより午餐を馳走になり帰宅する。例によって、馬場牧場より円山グラウンドのコースを散歩する。正に快適なり、晴れ渡った春の空、萌えたつ若草、小川の流れは清く、牛の群ものどかだ。市内に居れば日曜の午后など碌な事はない。せいぜい映画か友達と駄弁って終わるに違いない。この快適!! この健全!! 札幌ならではの情緒も然り!! 北国の六月は正に來たれり。豈、都塵に觸れて小市民的生活を求める要あらんや、野に出よ、山に登れ、新鮮な空気を呼吸せよ。大いにロマンチックたれ。この美を健康に吸収せよ。この春の日、徒に都会の中でうごめいてゐる徒輩の氣が知れない：何故なら、円山その他快適な場所に健全なピクニックやスポーツを樂しむ人の姿が妙に少い：こちらには有難いが氣になる事である。六時一寸前帰宅、入浴の後、明日に控えて聖なる安息日を静かに、そして大なる收穫の元に終へし事を感謝しつつ十時三十分就寝する。

五月三十一日（火） 晴天 初夏の氣分横溢する

六月六日より夏季授業時間割発表さる。即ち、土曜日を除いて講義六時間（午後三時三十分まで）毎日放課後実習時間、計午后四時半までとなる。全く言ふ事なし。医学部学生の悲劇が始つたらしい。これに臨床及実習が加わつたら身体極まるべし。今日も解剖・組織・医化と三時半までノートさせられたら、消耗して口もきけぬ。七時半より安孫子さん宅で聖書研究会あり、出席す。傲慢をすてるべし。虚心坦懷なるべし、明朗なるべし。神の愛に生きるべしか、明朗そのもののスポーツマンらしい医学徒たるべし。これだけで良い。子供達に方々で「先生!!」と言はれたが、たえず微笑みを浮かべて明朗なる神の僕として良き先生たらん。将又、眞剣なる医学生として爲す事を眞実に行ひたい。傲慢は潔く捨て、どんな事が起つても不平を言はず口笛を

吹いて微笑みを忘れず、神の愛を知り、そして行ひ一步一步生きてゆこう。
親孝行を忘れず、他の人に迷惑をかけずに朗らかに勉強しやう。こんな子供
じみた気持になったのは珍しいことである。

P M 十時記

六月一日（水） 晴

六月の声を聞き、北海道の最適の季節となれり。今こそ全勢力を盡くして、その大自然の美を吸収せずして南国のロマンティスト、豈、その北上価値あらん。鳥は鳴き、花は咲き、小川はせせらぎ、若草は臭吹きす。生けとし生きるもの、小川の魚から牧場の牛も羊も凡てこの六月の快適を謳歌してゐる。新緑の山々はくつきりと映えて、エルムの大樹が若草の上に憩ひの影を落とす。この日遂に三・四時間沈没して、植物園に至り、暫しローンに伏して郷愁に耽る。午后、松野さん講義、待望のブルスト・ムスケル（編註…ドイツ語でブルストは胸、ムスケルは筋肉のこと）に入る。外科を志す者、断じて謹聴する。それより帰途、福田さん訪問、お祖母さんも来札中にて、いろいろの話に花が咲く。トマト植えを手伝って夕食を馳走になり、又よも山話盡きず。最近の所感を着色して駄べる。名残りを惜しんで八時半退邸する。考る事多くして行ふ事少し、一日二恵を重ねて遊蕩児はまどろみを貪り、寝ぼけ眼をこすってゐる醜体を見よ、汝の夢を捨てよ!! 然るに我未だ失はず!! 神を愛する者、すなわち御旨によりて召される者の爲には凡てを相働きて益となるを吾らは知る。ロマ八ノ二八。その日その事を信ずる!! 力落とさず歩むべし!!

六月五日（日） 聖霊降下節

目廻しい日常の中に早や五旬節を迎へぬ。琴似の小学校運動会のため、S・S（編註：Sunday School 日曜学校）休校なり。静かにこの聖日の朝を祝し平穩に送る。昨日は婉子より来信あり、早速返信をしたためて。S・Sの事、森田の事、又、夕海姉の事など記す。夏休みは士氣・体力の養成につとめ、のびのびと過したい旨認める。そして君には決して干渉しないが、時折はする事があるかも知れないと書く。婉子も全く変ったらしい。自分でも変ったらしいけれど貴方にお会ひすると又、例の我慢娘になりさうですとある。夏休みは楽しいものと決まってる。久方ぶりで終日在宅して花を眺めたり、子供達の潑刺たる姿態に羨望しにけり。我を忘れしのどかな春の一日（初夏の一日）?を送る。明日からまた実習に追われて一週間のノートが始まるのだ。日曜ののどけさは最近の僕にとって実に感謝される尊い日だ。特に

子供達の無心のプレイを見てみると、斯くまで汚れ果てた自分が悲しくなる、眞実だ。そのベストを盡くしてのプレイは涙ぐましい。今日この日のための両親の心づくしの重詰を提げた群、そしてあの（無法松の一生）の無法松の如き親父がねじりはちまきで飛上って応援するのを見てゐるも、今日一日の心の安らぎを覚える。スピーカーが遺失物や拾得物がそれぞれ解決してゆくのを放送してゐるが、この童心の美しいプレイを見て、この平安な雰囲気に浸つてゐる人達が如何に柔和な心の状態にあるのが分る。この子供達のやうな純な心がキリストの最も愛せられた人の心なのだ。然ればこそ如何なる困難の嵐が吹かんとこの子供達がこのまま強く成長して欲しいのだ。帰途、諏訪にあひ、彼の下宿にゆき「新世界」を聞いて帰る。久方ぶりなり。顧みて悔いのない一日なりし事を深謝する。

六月六日（月） 曇

昨夜能勢来たりて泊る。今朝帰る。本日、朴沢・豊田・松野各先生講義あり。終つて三時半より解剖室にてKnocken（編註：ドイツ語で骨のこと）実習あり。当分ある見込み。愈々以て進退谷つて老ふる余地だになし。東大・京大の国立大学設置法、教員免許法を廻る反対学生運動、そしてスト、指導学生の停学処分問題等が刻々報道されて学内掲示板にその報告がはられてゐるが、北大学生間の動きは至つて平穩で、先土曜日の医学部自治会の如きも僅か四十名の出席者のみだし流会となる始末で、全く学生運動は北大にありやの感あり。悪い意味に於ける日和見主義、無氣力、良い意味に於ける深刻な自己、そして現状の批判、学問と学生・政治運動の別々の考へ方である。少なくとも最高教育を受けつつある学生にして無分別的行動はゆるされないのだらう。一部学生の悲憤？…も何処吹く風らしい。なによりも敗戦そして占領下の学生であると云ふ現実の認識と教育の崩壊、一部ファッショ的勢力の台頭と云ふ二面はぶつかつて東大学生のファイティング・スピリットを讃えてゐる様子である。H曰く、「そんな事より学問だくぞ!!」、K曰く「自分が可愛いよ、議会につめかけて警官と争つて死亡した人間を英雄的賛美するなんて、それこそファッショだ」、N曰く、「負けたと云ふ事を忘れてゐる、誰だつて今の教育制度機構が良いなんて云ふ者はいない筈だ。戦争中の自己の姿、そして今日の自分をもっと胸に手を当てて反省してみるが良い。はき違へた学問の自由もいい加減にすべきだ。」A曰く「精神革命こそ急務なり、教育の環境が合理化されたのみで、今のこの知性・教育の低い学生が果して社会に出て文化日本建設などと云ふ大それたお題目を打つと思うと怖ろしい。又、彼ら自身だつてそれだけで決して平安^{ウルホヒ}潤のある大学が出来る

と思はないであらう。要するに限られた範囲で我々には良き学生として心の自由を謳歌して遅れた学問のレベル向上に努力すべきだ」。交々の声あり。然し、大学と云ふ処は愉快な処、そして忙しい処なり。毎日八時半より五時までの授業には消耗その極みに達す。街ゆく女学生は申合せたやうに鈴蘭の花を胸にさしたり、手に持ったりしてゐる。見る眼もロマンチックになる。鈴蘭の六月、最適の六月、アカシヤ並木、エルムの木立、ポプラの木陰、そしてリラの花陰に六月の一日一日が展り開けられてゆく。適温、適湿、新緑萌え立つ春の北海道、例年ならずとも僕にとっては遊学の甲斐を感じる時なり。勉学の方がいそがしいので晝間は殆どこの春を味わえないのが残念だ。然し、その合間々々、通学の途上で出会ふ美しい風物詩はたまらなく僕の情愁をゆすぶる。げに、美しきは札幌の六月なり。上井和子妹より来信あり。家が御多分にもれず追立てを喰つてゐるとの事、又、いつもくお出でくださるのに失礼して思い出す度にゾーとしますともあり、御成長を祈るなり。

六月八日（水）晴

近頃、教室で皆に「細野は消耗してゐる」と云はれる。「去年、忍路灣を横断した頃の猛者の面影はない」と云はれる。確かに自分でも不調なのだ。頭が変だ。初夏だと云ふのにピントがぼけてゐる。軽度の精神分裂症かも知れない、精神衰弱かも知れぬ。そこへ持つて来て、無理に学名をつめこむ故か頭が重い、頭痛とまではゆかぬが…。婉子からの手紙は「貴方はどうかしてしてゐるわ、勉学の方法を変つたらどうですの、額に皺を寄せて考へても分らない事よ」等とある処をみると、眞に僕を知る人にとつてもいい加減外れて居るらしい。と云つても気分転換して、山でも旅でもしてもよいが、一寸でも教室から遠ざかると一度に崩れてしまひさうな気がしてならない。自信がないので、誰がみてもアブノーマルな人間に見えるらしい。このピンチを切り抜ける日はいつか？

六月十日（金）晴

家へ通信する。家族健在を祈るや切なり。もっとも怖れていたものが来たらしい。適当な休息が必要なのかも知れない。然し、医学部の猛烈なしめ方はすさまじい。

六月十二日（日）曇時々雨 第二聖日

琴似日曜学校ハイキング、午前九時小学校集合、それより円山公園にゆく。朝より雨降り、八時頃より止みたるも、雲行怪しかれども一同元氣よく幼

稚科より中等科に至る生徒、良く歩く。礼拝を捧げて後、紙芝居に遊戲に興じ晝食のち又遊び記念撮影をなし、二時帰途につく。夕食のち又外出して、月居を訪ね、いろいろ、SSの事、夏季学校の事等に就いて駄べって帰る、樂しかりし。今日は又、子供達と一緒に飛んだり踏ったり、転んだり実に楽しく過す。子供達は実に良い。紙芝居をやっている時のあの食ひつく様な瞳、離れない強さだ。もう何もかも捨ててもよい。只あの子供達の気持ちだけが凡てだ。あれだけは失ひたくない。僕はあの子供達の気持、あの心の中に持てる能力を捧げやう。そしてあの心のいくぶんでも分けて貰はう。イエスが天国は幼児のものなりと諭された事は眞実だ。何もかもあの子供達こそ眞実なのだ、元氣を出さん!! 消耗している時ではない。琴似教会建堂の実は上らんとしてゐる。今月中には完成する見込みだ。七月十日第一聖日に「子供会」と内定。中等科は人形芝居を予定する。自分で脚色した「パレアナ物語」をやってみよう。凡てに恵れて幸なり。短い期間にいろいろの問題はあるが、一応着実に歩んでゆけることは感謝だ。明日からまた、授業だ。SSの事、教会建堂の事が山積してゐるが、要は神寵の元、自力の凡てを捧げ切れることにあると思ふ。

六月十八日（土） 曇後雨

この処、放課後ラテン語の特別講義があつたので憂鬱をかこつこと一汐なり。今日は又、全国学生自治連合会のスト指令に対し級大会あり。結局一部一党一派の政治運動に連る学連の在り方、又そのストなる非合法手段に対しては活発なる反対意見が集中し、絶対多数を以てスト指令拒否と決定す。又、斯くの如き全学連の加盟続行可否に就いては事が大なる故に一部意見としてスト指令拒否即全学連脱退であるとするものがあつたが、それは医学学生大会に持越すべしとして大勢は全学連脱退に至っているが、後日に持越すことにして解散する。斯くの如きは医学部学生の学生運動低調を物語るものに非ず、学生と云ふ身分を考え、一党一派に偏ったアジ的氣分を一掃して堅実に自己批判してゆくのみである。又、東大・京大事件に対する抗議文に就いては、これ又、彼らの一方的行為に關しての關涉不爲として抗議文提出は反対の可決なる。帰宅二時。夕刻七時よりの汝羊寮に於ける全日本キリスト者医科聯盟北海道支部協議会に出席する。

六月十九日（日） 第三聖日

朝から爽快なる氣、横溢して聖日にふさはしい。SSの生徒達も元氣に集る。今日はマルコ伝第一章を終り、イエスの人格に觸れ、そして奇蹟に就い

て話す。終つてから来る七月十日の会堂竣工記念子供会の準備をする。先ず、中等科は人形芝居、そして合唱と決定。早速、人形芝居パレアナ物語の下読みに入る。皆熱心であり才あり、予期以上の成果を納める。序々に旧き殻から抜け出て居るらしい。何れにせよ、擔任する前には相当問題があったらしいが、今日一生徒の話でも小百合会復活の機運もあり、「先生に変わってからよくなりました」と言つてゐるので、責任大なり。又、一生徒が「今日の私の態度に先生に嫌な気持ちをお与へしたと思つたら、家へ帰つても何だか落着かず、自分の我儘をこのまま先生に受取られてしまひましたら先生に申訳なし、試験勉強も落着いて出来さうありません。それで先生に思ひ切り叱つて戴きたく思ひ、やつて来ました」と言つて来たが、これだけ眞剣に自己を考へ、良きSSの生徒たらんとしてゐるのを聞いて深い反省を覺えた。そしてその生徒がはつきり自分の非を認めてその反省をなして教師に申出て精神的苦痛の解放を望むと云ふ在り方はSSに關係して以来始めての事である。これから眞剣に生徒が精神的糧を望み、その潤ひを尊重して神の愛に生きんとする涙ぐましい努力に接して教師としての自分には実に痛烈な鞭撻であつた。神よ願くは力弱き僕を強め給へ。良き教師、眞実なる教師で良き理解者であらしめ給へ。午後は安孫子先生宅の林檎の袋かぶせのアルバイト最初の試みなれど、SSの生徒一名も交つて伊東・月居と朗らかに勤務を楽しむ。良き午后なり。つくづく神を信ずる学生としてもつく／＼明朗、教養のある学生たらんことを感ずる。この明朗、知性のひらめきこそクリスチャン学生としての最大のものであらう。夜は又、安孫子先生宅で賛美歌コーラスの練習をやる。コーラスは又、楽しい。和氣靄々たる神への連なりの中の良き一日であつた。然し、斯くの如き雰囲気の中でそれをこなして居る自分が時々悲しくなつた事もあつた。

六月二十日（月）

朝の中は暗かつたが徐々に晴れて午后は全く素晴らしい、初夏は日陽がまばゆい。今日は学会のため全科目休講となりて一日中のおんびり過し、明日からのファイトのため、考へもせず、又喰ひ、寝る。午前中机に向ひ、下半期のプランを劃て、それよりラテン語を嚙り、午後は発寒川上流を逍遙する。孤りで川畔の小径を辿る。子供達が釣をしたり、水遊びをしてゐる。切り断つた峡谷を清流が急ぎ、緑の断崖が青空にくっきり映えて美しいばかりだ。川畔の草原には少し強い位の初夏の日ざしがかぶつてはねかへり、川原の細い流を飛石伝ひに渡ると肌には汗がにじみ出る位である。とある川原の草原でゲーテ詩集をひもとき、且、寝る。全く心身共に静かな午后を送り、この

与へられた好適な環境に感謝する。僅か十五分位でこんな素晴らしい処があるとは知らなかった。札幌郊外には一寸歩けば実に素晴らしい処が残っている。街の雰囲気は東京に比べて二級・三級以下のものがあるが、この郊外の各種各様の良さは絶対日本一の都会だ。石狩平野の初夏の逍遙も又、思ひ出の一頁ならん。すべからく勉学の余暇は逍遙すべし。一時たりとも詩人たるべし、ロマンチストたるべし。又夕食後生徒河崎美子、中島悦子来る。絵の事なり。果してやる。又信仰と人格に就いて駄べる。斯うして生徒達が慕って来て呉れる事は嬉しいが自分の不徳を思ふと申し訳ない。この純眞な生徒達を何処までも伸ばしてやりたい。世の汚れに染めず神の愛のみを頼り、健やかに成長する生徒達であって欲しい。明日から授業なり。一日一日が感謝の中に送られる此頃はたしかに嬉しい事だ。

六月二十五日（土）晴

長く続いた雨もさっぱり晴れて今日は、又素晴らしき日なり。午前中学校、午后教会建立アルバイト、各教師。又、中等部生徒も参加して、天井ふきガラス吹き等手分けして楽しく過す。然し、天井吹きは消耗なり、でも一区劃々々毎に磨き挙げられてゆくのをみると実に楽しい教会への奉仕を通しての親睦である。又帰途、疲れを身体にトボトボ運んで来たらSSの生徒が「先生お花あげませう」と云って季節の花束を摘って呉れた。実に嬉しかった。この子供たちのためにも教会を一日も早くつくらう「みんなの日曜学校の教室がもうすぐ出来上がるよ」と言ったらその女の子が「まあ、うれしい」と歡声をあげた。全く鞭打たれる思いだった。「先生、疲れたでせう」と云って呉れる子供も居る。美しい花束を抱いて子供達に送られて帰宅する。この子供達のためにも勉強しやう、奉仕しやう。午后七時より教師会、S・S子供会のプラン六月の教案経過報告、七月の計画、そして夏季学校の第一回打合せをする。皆、良き兄弟姉妹なり。眞剣に明朗にそして眞直ぐに進まう。恵まれた一日なり、感謝する。

六月二十六日（日）晴 第四安息日

午前中SS、出席約九十名。午后教会アルバイト昨日に引続き天井洗ひ。只、獯猛なる奉仕あるのみ、頑張るべし、それだけでよいと信ずる。眞一文字に奉仕あるのみ、消耗を乗超えて明朗に奉仕あるのみなり。子供達の嬉しさうな顔々が浮ぶ!! 八時より新教会設立委員会あり、実行委員に選ばれる。即ち、長老組より二名、従来の研究会より月居兄そしてSSを代表して僕が選ばれる。前途の多難さを見よ。教会建物が出来た後の多難はまだ、その内

容の充実に合って居る。一〇より持てる能力を発揮してひたむきに努力しやう。只、従来はこの様な事で失敗した経験があったから学校と両立させて許される範囲で突込まう。

六月二十七日（月）曇後晴れ

教会アルバイト第三日、漸く完成の色濃くし、即ち壁塗りも完成してもう一息なり。連日の苦闘今にして結実せんとす。超教派の教会が今こそこの新生せんとしてゐる。この勇躍、この感激を如何にせん。そして、それが吾ら青年の力で出来上がるとは!! 午后五時よりSS中等科の人形芝居第二回下読みをやる。皆実に熱心にやって呉れる。そして、統制がとれてゐる。いろいろお茶を飲み乍ら駄べったが、溢れるやうな眞剣味がひしくと迫って来る。体験、豊富を語るにせよ、ウカツには話せない。「^{きちが}気狂い部落周遊記」になりさうだ。女学生の自主的グルッペの誕生が近い彼女らなら必ず出来さうだ。出来上がるに違いない。その事に就いてもいろいろ話し合ったが大丈夫の確信がある。勉強、奉仕、実践を通しての自主的グルッペが出来たら神様はきつとお喜びになるに違いない。帰途、河崎さんで石鹸を拝借して銭湯につき九時半帰る。無念無想なり、グットナイト。

六月二十八日（火）晴

連日の苦闘の色漸く濃くして授業中も消耗甚し。安田教授の警告も夢うつにして全く、夏めいた日ざしに聞流してしまふ。帰途後西山手方面を追遙する。実に素晴らしき夕陽なり、アルベルト・シュヴァイツェルの「人間の心の中には、表には現れて居ない理想主義の光が泉の如く地下水の如く溢れて居る」の言葉を味はふ。彼の言動に書物を通して觸れる時、必ず強い何かを感じる。心服せる世紀の人である。七時半よりの安孫子宅に伝道集会に出席するが、後で、近頃ない大事件を惹起せしめてしまう。皆、いけなさが責任者は小森なり。それと云うのはブルーノーが囁いて曰く、「オイ、山羊のミルク飲まないか」「OK」と言ふ訳で、二人で台所へ侵入して小森持参と稱する? やつを飲みはじめた処へ小森も来て、又久々津妹も来て四人で飲んだものなり。大半を飲み干した処で眞相が判明、即ち、小森がブルーノーに「オイ、俺が家から山羊のミルク持って来るから飲まないか」と言ったのがるの所をたと間違つて聞いて、台所にあつた奴をてつきり小森持参のものと思ひ、俺を誘つて飲み始めたものなり。小森も彼なり一緒になって飲むとは?…。既に時遅く、殻ピンを眺めて青息せるも無爲なり。ああ無念!! でも美味かつた、このアジは忘れられぬ。小森に押しつけてそそくさと帰

る。帰途、大笑して二人で「あと一合ばかり残ったのも飲んでしまへば良かった。

○全てが狂乱怒濤の中にあつた。その中に絶えず自己を見つめて来たつもりではあつたが、ともすれば航路をあやまって岩礁に乗りあげさうであつた。

七月一日 四朗危篤の報に急遽帰省す。

七月三日 夜七時帰宅する。既に意識なし。

七月十四日 午前六時二十二分 昇天す。人事の凡てを盡くしたれど、神、四朗を入要なりとす。

七月二十四日 原町田教会にて告別式執行さる。後、南村の墳墓の地に埋骨御嶽に避暑、奥多摩の清澄なる空気を満喫すると同時に過ぎ

八月十二日 し一月の苦闘を慰す。

八月十九日 御嶽より帰宅。

八月二十一日 婉子との婚約式を挙ぐ。内外共に出発した事を認め合はねばならぬ。

八月二十九日 帰学の途につく。

八月三十日 帰琴す（編註・琴似に帰る）。

九月一日 授業開始、清新な気分でスタートする。

九月四日 下宿先を変更、宮ノ下金子さん宅へ移転する。暖かい家庭的な、雰囲気の中に飛込む。多謝。

九月二十七日 医化学試験を受く、通過す。帰琴して以来、琴似教会、及、日曜学校の目覚ましい発展ぶりに感謝すると同時に一層の奉仕を誓ふ。

二ヶ月!! 何事も過去と云ふ彼方へ押し流してしまふには余りに多事な記録であつたらう。忘却の彼方!! 書く事さへ失ってしまったこの二ヶ月を又、觸れる事は恐ろしい。

十月八日（日） 第二聖日 秋晴れの日曜日

子供達と礼拝を捧ぐ。中等科分級に於てはマルコ伝五章二十節以後を講ず。次回はイエスのガリラヤ伝道に於ける数々の奇蹟について話す事にする。イエスの奇蹟を現代人の知性を以てそのまま事実として認める事は出来ない。生徒達がこの奇蹟を曲解してしまつたり、或程度懷疑したりしたら問題だ。礼拝は司会安孫子長老、説教村岸牧師。午後は久方ぶりで馬場牧場へゆく。カラリと晴れた秋空の元、郊外の田園風景の中をゆく、札幌ならではの満喫である。同行河崎三姉妹、久々澤妹、堀川妹、計六人なり。賛美歌のコ―

ラスをしたり、寝ころんだりして快適な午後である。皆、日曜学校の生徒であるが、実によい子供達である。河崎さんの末娘の佳代ちゃんはお風呂でも一緒になる。背中を流して呉れる。細かい事にまで気のつく子である。週日が屍体と一緒に生活だけにこの一日が本当に楽しい有意義に過ぎねばならない。実習室から開放されたこの快適な一日こそ、現在の僕にとって天恵の最たるものなり。夜は医化学のサブノートづくり及び明日の青年会のための原稿づくりに過す。心地よい秋の夜長なり。

十月十四日（金） 雨時々至る。

本日、簗島教授のみ、実習も止めて二時帰る。家より小包至る。東京のバットを吹かす。秋風短し、家へ通信をしたためる。又、鴨川への通信を投函する。入浴の後医化学ノートを整理する。慌ただしい中に閑日月を見出す。斯くも激しい現実の中に身を落として生きてゆくからには「酬悪にも眼を開じよ」とは余りにも酷である。取巻く人々の言動に身を感じてはならない。自己に忠実に感傷を流し去って雄々しく生きてゆく他はない。去らば最高学府在学のこの渦巻きの中に、激しく身悶えしては長歎息する若き児の命こそあはれなり。空虚なる自分の言行よ、汝のその吐露する言葉窮行する行動は何と愚かしい事よ!! さはれ「起きんがための我ら為すべきか」の限界に身を置く遊子にして何を求めんとしてゐるのか?。この現実の濁流の中の眞実とはそも何処にあるや、仰向いて歩みゆく今日この頃の姿よ、自嘲せよこの濁流に巻き込まれつつ、まだ、抜手を切って逆行せんとするのか!! 愚かしき事よ。「現実主義者にして眞の理想主義者である」と叫んだ先人の道を肯定しつつもふと滅入る己が心よ!! さ迷ふ子羊を追って来て呉れる牧人もなし。札幌に秋更中なり、正に満山紅一色たらんとしている。ホルマリンと屍臭の連続が斯くも束縛しようとは夢にだに思はざりき。一日の経過の何と早き事、噫!! 斯く流して過す事が、即ち一日の現実生きてゆくことであると!! 易々として生きてゐるに過ぎない!! さりとて厳しい現実の姿よ測らき。

But seek ye first the kingdom
of God and his righteousness;
and all these things shall be
added unto you.
Take therefore no thought for
the morrow: For the morrow
shall take thought for the
things of itself.
Sufficient unto the day is the
will thereof.
(St. Matthew chap 7: 33-34)

十月十六日（日） 世界S・S日

午前中、例の如し、特にこの日の中等科一年の教授要目はイエスの奇蹟について合理的な肯定を話す。「当時（二千年前）の信者たちの信仰を認める事が即ちイエスの奇蹟を認める事になる」と、何分、中学一年生なので話すのに骨が折れる。辨証法的に例を引いて話すが果して分るか如何か。午後は野外礼拝を青年会と合同で発寒川畔にて行ふ。参加者はSS七十名、青年会二十名、計九十名で盛大な礼拝であった。三好牧師以下全教師参加する。秋も終端であるので、この日の野外礼拝はその雰囲気にも良き行事であった。終って紙芝居を上演する。S・S教務主任として責を負ひてより一ヶ月半、大体スムーズに事務を運営して来たやうだ。今日は七十名の生徒を正規の日曜学校生徒として学籍簿に記載した。同時に生徒章を授与した。凡ゆる意味にて対外的にも対内的にも事務の責任を感じる。教師会の方も二・三の問題はあれど、教案の報告は行われてゐるし、一応の平安はあるので、このままXマスまで持ち越せる確信はある。何もないやうでこのアルバイトは心痛だ。教会との連絡、そして教師会の運営が難点だが、一気にXマスまで持つて行こう。然し、それだけに無理が伴っては破綻が来るし、自分の精力・体力にも相談せねばならない。

十月十八日（火）

今や全くマンネリズムなり。又、鞆を持って学校へゆきのみ？ 寒さは近い：秋は深更なり：机に向つても勉強する気力なし、読書する気力もなし。噫!! 一体全体、今日は如何した事か？ 何事も忘れろ!! 何事もマンネリズムなり!! 畜生!! 何も手につかない、仕様ない。トリンケン（編註…ドイツ語の *trinken* 飲酒 飲む）でもして寝るとしやう。焼酎でも一杯引っかけ

て威勢よく寝らんかな。こんな一日早く暮れてしまへ!! 嫌な嫌な一日なり。

十月二十二日（土）

昨日午後の予定を止めて帰宅、全関西軍対シールズ軍の野球試合を聞く、3-1で敗る。それより夕食後七時半の汽車で岩見沢の小島の家へゆく。そして今日一日飲んだり喰ったり遊んだりした。就中、郊外風景探勝自転車行は愉快だった。あの梨の味は忘れられない。中々素晴らしい所だ。今度二度目だが小島の両親の歓迎は恐縮である。

十月二十三日（日）第四聖日

S・S礼拝司会及び説教「イエス様の技」を為す。午後は全日本シールズ戦2対1で敗る。夜、バスにて出札、松竹座に至り聖バンサン観映す。「慈善と云われては重荷を擔ぐやうなものだ。はじめは軽いがだんだん重くなつて投出したくなる。只、物を分け与へるなら誰にも出来る。微笑み優しさを与へる事は六^む敷^ふしい」と最後に言った聖ヴァンサン^{サン}の言葉こそこの映画の主題であらう。彼のあれ程激しい貧富の差のあるパリ（一六五〇年頃）でブルジョアの金を有効に、即ち、神の司祭として自信ある行動を取った事は稱讃すべきなり。彼が如何に信念の篤い信仰の人であつたかがよく現れてゐる。彼は絶望を忘れる事を知らなかった。正しいと信じて行へば必ず神はよみし給ふと言った。神を人間が批判してはいけないと強く言い切っている。近來にない感銘を受けた。Geld（編註：ドイツ語でお金）来る。皆元気なりとの事、感謝すべき也。婉子の便りも同封、メランコリーなりとか、その理由の二つを僕が占めて居るらしいが全く参った。

十月二十四日（月）

めつきり寒くなつてストーブの側が一番好い。全身をぬくめてユラユラと煙草をくゆらせる時こそ楽しみの一つなり、今日は札沢さんの時間、婉子に返信を書く。「君のユウツの原因の二つを僕が占めるとは意外、でもバースデーの件は全くの失念なり。新めて「恋人よ幸あれ」と捧ぐ。又、ヒロポンの件は秀れたる余の頭脳のなせる罪故、干渉無用とする。そして若し夫が正しいと信じて社会に見捨てられた人の病のために斗はんと決めんとする時、それを理解出来ない妻の愛情とそれらの不幸の人達への愛情の何れを択んでせう。一人の人を不幸にしての事なら、その夫の行動は罪であらうし? 多

人数の人の幸福なら一人の人の不幸は偲ぶべきで罪にはならないだらう？」と書いてみる。現実をよく眺めるとこんな問題はゴロゴロしてゐるだらうに。夕方、S・S生徒堀川法子さん来る。帯広の実家へ帰る由、藤高女を退学するとの事、折角S・Sの良い生徒であっただけに惜しい。今迄、良師に別れた事はあったが、今度は良き教へ子に別れる事を味った。全く、つらい思ひだ「先生々々」と嬉しいにつけ、悲しいにつけ慕って呉れた彼女だった。もう永久に会えないと思ふと悲しい。「体に気をつけてね、一生懸命勉強して下さいね」とやつと言つてのけた。英語のバイブルにシュワイツェルの言葉と「どんなに苦しい時でも口元に微笑みを忘れない人になって下さい」と書を贈る。このXマスには受洗にまで導かんと思つていた矢先だけに残念である。先生のつらさを味わった。こんなセンチになった事は珍しい事だ。何もやって上げられなかったのが申し訳ない。こんな雑ないい加減な教師ではあったが、それだけに慕って呉れる生徒達が可愛い。中等科の教師は非常にむづかしいらしいが、僕はこの純粋な師弟愛で結ばれる限り、懸念されるリーベン（編註：ドイツ語のLiebenで愛する。文脈から恋愛問題）の問題はないと思ふ、実に朗らかである。一点の黒雲とてない。生徒と先生である。さりゆく彼女にこれからの人生の平安を祈り、幸福を祈らう。四期生と出会ったから、きつと良き女性に成長してくれるに違いない。それにしてもせめてもの送別会でも持ちたかった、他の生徒が聞いたら驚くに違ひない。

十一月十二日（土）曇時々騒雨

午後は北大演劇研究会第八会発表のメーテルリンクの「青い島」を観にゆく。同行、小森及び生徒河崎・戸部両君。

噫!! 偽善者よ、弱き者よ、汝の名こそ憐れなり、弱き者よ!! か弱き者よ!! 何故傲慢に生きるのか、噫!! 俺は又、強き乙女を毒舌をもてその偽れる舌をもて、傲慢にもその強き伸びゆく個性を打砕かんとした。怖るべきことよ、この俺が何が信仰者だ、噫!! 怖るべき偽善者よ!! 信仰の必要性を解くとは、教へとは、偽善に満ちたる、悪に満ちたる弱き人の子の権化たる俺が、人の強さを信じ遅しく人生を開拓せんとする美しき乙女の心に毒の舌で偽善の舌で神の道を解くとは、噫!! 偽善者よ!! もう永遠に救はれぬ!! 何がクリスチャンだ!! 信仰者だ!! 偽善者よ!! 糞!! もう俺は駄目だ!! 駄目だ!! そして酒にゴマ化す手段しか知らない。酒だ!! 酒だ!! 噫!! もう救はれまい。飲めく、く飲め、おお感激の黄金水よ!! 汝こそ俺の唯一の味方だ、おおその色よ、美しき色、そしてこの俺は弱い。婉子よ!! 許して呉れ、俺は弱い!! 婉子よ、許して呉れ!! 神、おお神よ、在

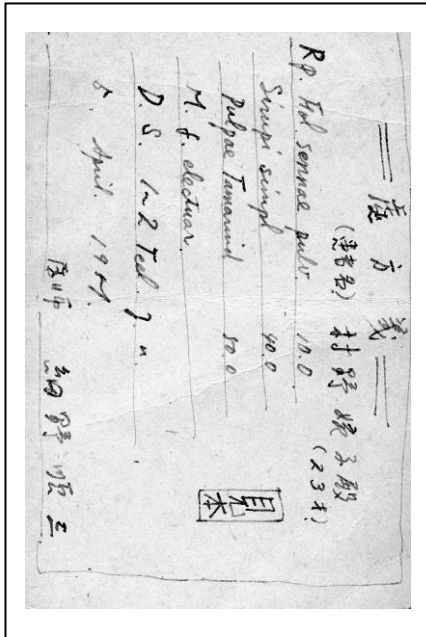
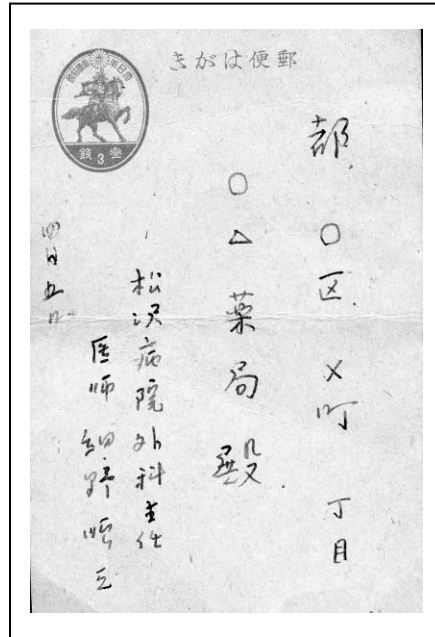
り給ふなら何故この弱き俺を鞭打つて下さらぬのか!! おお神よ!! そして
婉子よ!! 恋しい恋しいお前よ、俺を抱いて呉れるのはお前だけだ!!

十一月二十八日(月) 晴

怖ろしく月日の経つのが早い。瞬く間に十二月だ、Xマスだ、帰省だ、学校も余す処三週間なり。解剖学実習もあと一体で休暇との事、目廻しかつた十月十一月であつた。加ふるに、日曜学校の方も人間的な障害にこそあれ、軌道に乗つてゐると信じたい。教会の方も円滑なる歩みを續けてゐる。只、いけないのは自分の頭だ、益々ボヤけて来た。最後の一ヶ月を猛烈に頑張りたい。S・Sの生徒の膨張は急激なり、遂に二百人に達した。このままでいったら教授困難なので、二部制の実施となつた。何処まで神助により伸びるか分らぬが嬉しい悲鳴となつた。昨日、伊東兄 帰郷さる、札幌を引上げて帰阪するので その彼の彼らしい生き方には何も言ふまい、黙つて送らう(伊東送別コンパが二日続いたので腹工合が少し変だ)。僕は自分なりの頑固な信仰・信条を以てゐる。それによって教会を認め、改革せんと決心して居る。決して現代の教会がキリストのよみしたまう教会とは思はない。否、決して嘉し給はない。僕はそれを信じてゐる。そして生徒に教えて居る。傲慢に教えて居る。僕は今までそれを信じて、或時は実践して来た。誰が何と云はうと僕は僕一人で歩んで来た。現代教会の改革を信念として斗つて来たつもりだ。教会外からの時代もあつたし、教会内での時もあつた。現在は教会内からうじて節を曲げ得ないでゐる。「神、我と共に在す」ただ、それを信じてゐる。神、若し私の味方ならば誰か我に敵せんや、例へて教会の在り方に於て、それを構成してゐる人間が何を云はんと神が教会をつくり給ふのである。邪道は否なり、断じて節を屈してはならない。己が信念を守り、神のよみしたまう教会にするのだ。僕が斯の様な信念を持つて、この琴似教会に連なつて居る事を誰が知らうか? 然し、なんたる幸いぞや、僕のこの在り方、信念をほのかに感じて、生徒の中から信者になる事を申出でて呉れた者が二人ある。その程度の差こそあれ、僕の信念に対する協調めいた大膽なる申出であつた。嬉しい、実に嬉しい、何たる喜びだぞや。あの生徒が思つていた生徒が「私は先生の仰言る事に賛成です」と言つてくれた、感傷ではない。この琴似教会の小事と思つてはならぬ、必ず全国にも同志があるに違いない。信仰は自由なり、政治的圧力に曲げられてはならぬ。教会は存在せねばならぬ。政治的時流にも何も負けない眞の教会が存在せねばならぬ。若し、ある種の圧力に知らず／＼に曲つていたら、その在り方を正道にとりもどさねばならぬ!! 外国ミッシェンの日本教会援助が海外伝道の美にかく

れた、外国の政治的方向の一連であつたり、政略に知らずのせられているものであるとしたら、断じて拒絶すべきである。敗戦と宗教は明確に区別されねばならぬ。信仰は日本人個人々々のものである。教会はそれらに人々の組織である。日本は日本なり、断じてながされてはならない!! 外国ミッションの在り方が曲がっていたら拒絶すべきなり!! 信者よ、奮起すべし、潔く厭悪を断つて借財を返済しろ、内村以下札幌農学校初期の先輩を学べ、それなくして「余は戦雲起らば、日本軍の進撃の前に身を横たえてその進撃を阻止する」と豪然放語した純クリスチャン内村の稱えた無教会主義に何を持つて反論するや、戦争反省せよ!! 然り、外国ミッションよ、貧乏人への金持ちの施しも結構なれど、それで歪曲された神の名による伝道は止めよ!! 反省せよ!! 然り、日本人クリスチャンよ、金持からものを貰つたとしてコビヘツラウ事は不用なり、富めるものが貧しき者に分け与ふる事は当然である。信仰は唯一、神は唯一、国籍は地上の国家に非ず、天上にあり!!

(近方箋例)



第五分冊（自一九五〇年三月一日 至一九五一年二月一日）

“偽らざるの記”

僕は長い間、日記をつけなかった。

心のゆとりが無かったのだ

それを率直に認めやう

だが、今日は友を通して、人生を考へ

人生を謳歌して この青春は実に

貴重な何ものにも替え難い金剛石

であると云う事を 身にしみて感じた

そして 深い反省と共に あの感激的な

白線四年の生活の基礎に立つ、この四年

（然し、実際には余す三年の）医学生々活こそ

それにも況して光彩を放つものであると云ふ事

を知って、深省をなし、中絶してゐた日記

（その生活の記録）を七ヶ月ぶりで記す事にした、
その名を “偽らざるの記” として

一九五〇年参月十一日午后十時三十分

二十三才 順三 記

愛する 婉子よ

人生寂寥の道に、孤杖を運ぶ

又悲しからず。

雪解の野辺に春待つ草の芽を

見出した時 僕の胸は何かしら

生きる歓喜に一杯になつて来た

そっと僕の手を握って、一緒にそれを

見つめる君の眼にも 涙と共に

何かしら “安らぎ” の光りがさした事を

見逃しはしなかった

一九五〇・三・十一

順三 記

三月十一日（土）

しみぐくと人生を知った。共に学び共に謳ひ語った友は帰って行った。樂しかりしこの日であった、僕は寂しくはない：

皆、泣きつきたい程良い友である。皆苦しいのだ。僕だけではないのだ。どうして／＼若人は苦しむのだ。僕だけが唯一人の婉子を信じていると云ふ事は深い反省を要する。唯一人を信じ切れる男と云ふものに對して？ そつとして置きたい：そのまゝに／＼：松井の心中も分る、「俺が愛せられると云ふ事はいけない事なのだ」と云った彼の心こそ強いのだ。「俺は今迄誰も愛せなかった」と云った城戸の心も、只一人、微笑みつつ手を叩いて謳った平田の心も皆分る。皆、泣きつきたい程良い友だ。床の中で「今頃は皆がやってゐると思ひ、その盛会を祈つてゐますよ」と昨日言つてゐた。不参の勝目の心も結局は皆一つなのだ。寂しいが強い勝目なり。だけど僕はこの幸福をそつとして置きたい、僕は信じていたい。何時、如何なる時にても信じ切れる男でありたい、その氣持を掻き乱したくない。そつとして置きたい。そのまゝに／＼：金子様の小母様は良い方なり、僕らの氣持を分つて戴ける方なり、僕は甘えたいのだ。それでいい／＼、今日のこの企てを感謝すると共に、より多く小母様に感謝する。

：第一学年終業記念コンパを了えて：

三月十二日（日）

聖日の朝を迎へ、心身共に爽かなり。午前八時半より日曜学校、又十時より礼拝、その後役員会。三時よりさゆり会と遂に終日を教会に過す。S・Sは最終講義、マルコ伝十六章に入り復活のイエスを訓える。中等科一年共に学び共に睦みし彼らとの授業も之で終る。良い生徒であつた。このまゝ生長して良き信仰の果を結んで欲しい。午後のさゆり会の今後の在り方に就いての座談会は 之又活発なる意見百出し、結局、現在のさゆり会は三月を以て解散とする。そして四月より新らしい会を創る事とする。すべて白紙還元として、中等科、高等科の女学生を中心とする集會に發展せしめる事に意見の一致を見る。本日の出席の會員の意見、活潑で良し。三月の余す期間に準備期間として、月居・細野両教師を相談役として創會の胎動に入る事にする。

本日役員会（午后十二時―三時）に S・S 報告（教会の議に報告するもの）を提出する。奈良兄と二人のアルバイト（編註：ドイツ語 Arbeit 労働、仕事、苦役。この場合、現在日本語化した「アルバイト」とは少し違う）の成果なり。良き聖日と云はんか、然り良き哉！！ 余す一週間にして本学年も最後なり、ファイトを出して頑張るべし。 帰省の日も近し、雪の無い東京で良

き休養を摂らん。

三月十四日（火）

降っては融けく／＼では降る、道路がたまらない。それだけでも憂鬱なのに医学部だけノコノコ通学とは全くの処文句なく面白くない。昨日も今日も只顔を出してゐるに過ぎない。昨日の青年会例会は例の如し、可哀さうであつたが委員会の不手際なのだから致し方ない。矢張り一つの会である以上、会則に従ふべきなり。会則も 知らないであのやうなことをする以上、当然と思つたので追究して総会を流会にただけだ。又、後のアガペとエロスの討論にしても実にくだらない。琴似教会青年会の知性の低さを暴露してゐる。新制高校生と云ひ、女子会員と云ひ頭が悪い。第一、俺達のやうな者に牛耳られてゐるなんてだらしがなさすぎる。又、女性の現実的なのに驚ろいた。ロマンティックな点、全くなし。余す五日の在札生活、又しても南国の渡り鳥の帰郷なり。婉子よりの便りによれば、鶴川でもママと文ちゃんが風邪に感染し、その後、婉子自身も九・五度発熱、五日伏床したさうだ。皆体が弱いのだから大事をとつたのであらうに。彼女も相変らず自虐性が癒らないと見える。「か原因は分らないけれどメランコリーです」とは不可解なり。

三月十五日（水）

余す四日に迫り愈々ラストスパート・ダッシュ!!なり。児玉教授最終講義「脊髓」を終る。一応感傷あり、彼らしい講義に終始したからだ。生理の朴沢教授の講義は一番権威あり、それに彼の外国仕込みの身躰も敬意を表するに足る。午後の解剖実習は余す三日なので、脊側を一気にメスをすゝめる。ファイトを出して全部Exit（編註…ドイツ語で皮膚の意）をむく、猛烈な臭さだ。お陰で帰宅してお湯でいくらこすってみても臭ひがとれない。すっかり手のヒフにしみこんだらしい。午后四時から一時間に亘つて、浅倉・松井・若盛の三人に大岡政談の中の「天一坊」と 紀伊国屋文左衛門伝の中の「振袖火事」のくだりの一席を話す。三人とも感心して聞いてゐる。江戸時代の人情噺 仲々捨て難いものなり。

三月十八日（土）

俺と云ふ人間が一つの強い個性を持った人間であると云ふ事が分つた。先日の木曜日の三好牧師との懇談会の席上で発した俺の言葉は確かにそれであつたらしい。と云ふのも久々津姉が今日「あの時私は確かに細野さんに対して憤りを覚えました。然し、家へ帰つてよく反省してみると、細野さんの言

った事が正しくて、私の持出した問題は確かに愚^ろらない問題であると云ふ事に気づきました。そして細野さんは思ふ事を率直に陰しもせずポン／＼言ふ人で、その代り 陰では言はない人、お腹の中には何も無い人で、あると云ふ事が分り、私の今迄知った人の中では珍らしい性格の人だと云ふ事が分りました」と言っていたが、これも俺の江戸っ子的な性格かも知れない。ズバリ／＼率直に言はないと気がすまない。但しそこには悪意も善意もない人間なんだ、単純と云へば単純であるが、これが俺の個性の一つなんだ。今となつては如何ともなし難い個性として結びついたらしい。今度も余す一日で帰京だが、今度こそ、気儘に、風の吹くまゝに、休養・勉強して来やう。風来坊を自覺してそれに徹底する事を一つの帰省中の目的としても差支えあるまい。

三月十九日（日）

「何もかも忘れて帰つて呉れ」月居の言葉だ、有難い、九死に一生だ。致し方ない、何もかも忘れてこの疲れ果てた身体を引提げて帰らう。南国の君待つ故郷へ!! 逃避行でもない、偽らない忘れる事が必要なのだ!! 何もかも忘れて S・S の事、教会の事、何もかも忘れるのだ。俺は疲労してゐる、精神的にも肉体的にも、その極みに達してゐる、何もかも忘れてそつとして、このまゝ帰らう。故郷の人々の温かい胸に抱かれて、故郷の山々の美しい春の営みの中に休んで来やう。何もかも忘れて：何もかも忘れて：いい言葉だ。札幌よ、琴似よ、春を迎へて呉れ給へ。懐しいいい人達ばかりだ。皆、いい人達だ。美しい教会だ。じーと／＼齒を喰ひしばつて春を待つて呉れ給へ。その楽しい足音が 直ぐそばまで聞こえてゐるではないかしら、「何もかも忘れて：」、「何もかも忘れて：」俺は帰る、「寂しくはない」と最後の虚栄を張つて。故郷の君よ 黙つてそのまゝ何も云はずに 抱き迎へて呉れ給へ。疲れ果てた身を心をそつと抱いて呉れ給へ。馬鹿な!! 「井底の蛙」だつて、でもさうかも知れない でもこのヴィジョンを抱く群を見よ：美しい琴似の教会の人々よ、優しい人達ばかりだ。そら：春の足音にそつと耳をたてゝ激しく息吹し、胸を抑へてゐるではないか。何ていい人達ばかりだらう。又来る日には俺は見違ふばかりのファイティングスピリットに充ちて帰つて来る。それまでお元気で／＼さやうなら、「何もかも忘れて帰る」疲れ果た南国の遊子よあはれ、S・S の生徒達よ いい子ばかりだ。皆いい子だ、優しい、強い子供達ばかりだね。さやうなら。

三月二十四日（金）

二十日午前八時五十四分発出札して翌二十一日午后零時五十分に上野へ着く。その日は旅塵を流し、酒に疲れを癒す。二十二日は御多分にもれず、墓参をなし、先祖代々の冥福を祈る。それより鶴川にゆき 昨二十三日は新宿の第二枋木屋なるとんかつやの二階で第二十四回誕辰（編註…広辞苑六版では辰は日の意で生れた日、誕生日のこと）を祝す。ビールのほろ酔で気分満点なり。全く、学校を離れ、札幌を忘れて故郷の懐しき人々に囲れての帰省生活は豊かであり平穏である。身心共に疲労のマキシマムに達していたので、此処二・三日の平和は全く異った世界の如き気がする。札幌にゐると医学生生活の多忙と非社会的な下宿生活なので自己の確心に求々としてゐたが帰省して、何やかやと社会の現実的な問題に一どきに接するので、それだけでも頭が困乱してしまひさうだ。こちらの人が又。不在中のいろ／＼の問題なりを一人一人 話すので参つてしまふのだ。婉子のデコチャンの問題だつて重要な事である。 かりそめにも一時の感傷や軽率な態度はつゝしむべきで、そこに潜む未知な（未婚者としての）問題を完結して、大いに先輩（既婚者）の体験なりを消化してからその態度を決すべきなり。そんな事はよく熟知してゐると思つてゐたら案外思慮が浅いので怖れ入った。こんな問題こそ冷静な理性を持つて判断すべきなり。そして二人は真剣に思慮して、その先輩の苦難に耐え得るだけの努力を 決して若い時だけの感傷にのみに終らす事なく開拓して行つて欲しい。翻つて僕達二人の場合だつて自虐を捨て努力したい。愛し信じ合えばこそなり。僕の恐れてゐる事は兎に角、婉子が一応形式的にせよ社会に出るので、その見地にたつた僕に対する考え方や人生そのものについての考え方と学生々活、特に医学生々活と云ふ特殊環境にある僕の考え方との相違から来る相互理解の不全より来る不安なのである。何しろ僕は学業にしばらくつけられて、俗に云ふ世間知らず、一種の駄々っ子のお坊ちゃん式の甘い考え方しか出来ない。僕に対する頼りなさは婉子にはきつとあるかも知れない。

一九五〇年九月十二日（火）

思い直して暫らく途絶えていたペンを取る事にした。六月の朝鮮動乱を契機として、又しても嫌ふべき戦争と云ふ現実が我々を包みはじめてゐる。そして七・八月とソビエトを背景する北朝鮮とアメリカを主体とする南鮮軍及国連軍が血なまぐさい命の争鬭を繰返してゐる。そして、国連と云ふ名目の元に日本は保全を約束されているとして、自衛と云ふ名目の元に鉄砲を持った警察予備隊なるものが募集され訓練されてゐる。国連への協力が日本の現実の課題だとする風潮が殆んどを支配してゐる。然し、僕は殆んど日本人

が無神経無感覚で　その風潮に流されてゐると思ひたくない。生きるため、現実の明日からの命の糧を得るために、この宿命の中に身を置かざるを得ないのだらう。生きるためには人殺しの武器を取らねばならぬのか？　この辺に現代の懷疑があると思へる。無神経で只、飯を食へる人間が羨ましい。インテリの弱さ、いつの時代に於ても、インテリの悲劇はこの考へで飯を食ふところにある。実際の問題として、明日からの日本は何処へゆくのか。嵐の中に生まれた厳しさを考えずには居られない。昨日より授業開始。診断学及外科が入つて来たので、実習と併せて八時半より　五時まで全くの通し講義となり、又しても医学生之死の行進である。第一回学士試験は第一生理を除いて殆んど合格の見込である。この秋を生かして読書に運動に頑張らう。婉子は第二段階に達したと書いてきた。この夏休みの約束はたとへどのやうな形で果されたとしても愛する事の表現であつた事は事実である。婉子が不安ならそれはリーベの共通のものであつて、何らとるに足らぬ。僕は幸福である。婉子の愛を信じてゐるだけだ。

九月十六日（土）

静かな秋である。暮れるに早し秋の日もとつぷり落ちて、余りに静かな秋の宵である。久方ぶりに感傷的になる。人生五十余年の半ばにして、今前途に果しない希望ありと雖も過ぎる二十余年を顧みる時、そゞろ寂漠の感無きにしも非ず。故郷を離れ、男児志を立て、異郷に学ぶ者にして胸を打つこの感慨や又大なるべし。過ぎし五年前、最愛の母の元より、人生意気に感じ、決然、遊学立志の道を撰びし日の胸に去来せる感慨に思ひ馳するなり。医学の大道すでに半ばを終え、遊学の志を成すの日は余す二年半なり。噫!!　理想に充ちてエルムの学舎の門を開いてよりのこの方、朝な夕なに去来せる「少年よ大志を抱け!!」の訓統を思ふ時、その不甲斐なき現実の自己に涙した事は幾度であつたらうか。噫!!　今にしてその涙をふり切れる自己こそ寂かなり。本日、戸部晴子妹の出京を聞いて藝術への限りなき精進のための門途を思ひ、將に又十四才の若き乙女の遊学の決意を知りて、そゞろ反省する処大なるは豈感傷のみならんや。希くは妹よ、君の持てる藝術への探究心を發揮して、輝ける栄冠を獲得せられよ。若き君の健康と精励を祈つて止まぬ。お元氣なれ!!　ジェーン台風被害者への義捐金募集は本日午后行はれ、大成功の中に終了す。善意の人々に感謝す。

十月二十五日（水）

一昨日以来の寒波は遂に全道的に降雪をもたらして、例年より旬日（じゅ

んじつ 10日間くらい）早くオーバーの襟を立て、登校する。種々この秋は多忙なる生活であつたが、やがて来るXマス迄、暫らく休息を得る必要がある。スポーツに、読書に、勉強に一応満足のゆける秋を送り得た事を感謝する。遊学の身を夫々に応じて慰め、いたはって下さった人々に盡きぬ感謝を捧げる。昨日も河崎さんで「消耗したらいつでもいらっしやい」と小母様の優しい御言葉戴いたが、異郷の空で隣人の愛に觸れた時程嬉しい事はない。あついコーヒーの御馳走が痛いやうに目にしみる。噫!! 立学の大志を北国エルムの学園に開いてより、すでに、幾人の人が僕の胸中を去来したらう。皆良い人達ばかりである。それらの人の幾人かは疎き縁の人になつてしまつた。会者必離の悲哀とは云え、人間順三の生きてゐる限りそれらの人々の投げかけて呉れたあたゝかい心は忘れまい。思へば札幌へ来てからも幾人の人々が斯うして思ひ出の人の中へ加つていった事だらう。十九才←二十六才、八年間の札幌での青春は誰に比べても恥しくない金字塔を打建てたと云へやう。美しい緑の街・札幌、そこに繰展げられた真理探究の八年間は第二の故郷札幌の思ひ出と共に永遠の清純なる魂へのあこがれとなつて僕のこれからの人生を励まして呉れる事であらう。そして来り去つて行つた、幾人かのこの街の人々の幸福を祈り續けるであらう。又してもストーブが燃える候となる。嚴肅なる冬の現実は一歩々々、この街を包み来つてゐる。燃えたつた過ぎし六月―九月の短かき饗宴の幕を閉じて、人々は静かな反省、そして来るべき次の饗宴の準備に入るのだ。

雪は降りつつある。そして寒さはきびしくある。然し、春は来りつつある。

―（内村先生の言葉）―

げに、人生の嚴肅はよりこの街の人々が味ふべきなのだ!!

十二月二十八日帰省して以来、二月二日出京迄約一ヶ月間、二期期の疲労を完全に回復して再び帰札出来た事は故郷の暖き人々に対して感謝する他なし。特に愛する婉子の細やかなる愛情は何にも増してファイトを呼び起して呉れた。例へ一時なりとも、只一途に愛情の中に浸り切れる時があると云ふ事に、僕は最大の生くる喜びを覚えるのだ!! 愛情は不可思議なものだ。男と女の最大の結びつきがこんなものの中にあり、信じ切れると云ふ事は人間として不甲斐なくもあり、又眞実でもある。

一九五一年、終戦六年目。絶えず繰返される宿命の波の中に、ほのぼのと新春は訪れたのであつた。ダレス特使の訪日、再軍備・講和問題が焦点とな

つてゐる現実の日本の政情。ギリギリに生きてゐる社会党の線は全面講和を称へ、再軍備反対を党大会で決議してゐる。現実の流れは、トルーマン大統領の称へる「世界の自由国家は今や、共産主義の脅威にさらされてゐる。之に対抗する唯一の武器は団結である」に賛同して、反共の旗幟の元に自衛国家像を画かんとしてゐる。警察予備隊然り。単独講和然り!! 日共の非合法化然り。そしてダレス特使一行の訪日は国会の開会と共に一九五一年のフィナーレを奏でてゐる。果して眞の自由主義と云ふものがあるのであらうか? :

二月七日(水)

この日登校六日目。雪の中をバスにて至る昨日までの東京の生活に比べて之は又、裏を返したやうな悪条件な生活である。東京に比して、取上ぐべき点としたらウインタースポーツが手軽に楽しめる位のもの。物價は高く、娯楽機関は悪く、交通機関は混雑し、加ふるに冷寒降雪と来てゐる。内科・病理を了つて、新設リンクで滑り練習を一寸やる。二月中に一通りマスターして、三月には中島リンクへ雄姿を表す予定なり。又スキーは三月帰省まで適時上達すべし。千秋庵及びマツヤコーヒースタンドにゆく。井林・浅倉と駄べる。明日より純粹の札幌人になり済まさねばならぬ。東都の妄念をさらりと捨てゝ、札幌よいとこ一度はお出でを謳歌すべし。面白く、愉快に一ヶ月を送るべし。ストーブの傍で読書も良からずや!! 外には吹雪がファイトを呼びさまして呉れてゐる…。頑張るべし。

二月十一日(日) 第二聖日

昨日は衛生を休んで猛ピッチでスケイティングした崇りで、今朝は足首が痛い。九時過ぎ日曜学校に出校す。引続き礼拝に出席す。午後は中等科礼拝及分級。使徒行伝十五章のエルサレム会談に就いて話す。世界伝道の第一の障害でありし「割礼の問題に就いて」「パウロ対バルナバの論争に始り、エルサレムに於けるペテロ・ヤコブの見解」又それに基づくアンテオケへの書簡に就いて、そして第二次伝道の出発の経過を語る。それより、北一条教会後藤書記を囲んで座談会を行ふ。本校側、池田教頭・高井・月居・岡本・安井・上田・木村各教師・助教師に教務主任として、小生が加る。四時三十分解散。奈良兄見舞、夜はポーカに興ず。十一時迄三時間行ひしが、結局僕が四千二百点浮ぶ最後の追込みが奏功、二位晴子さん、三位高野兄、四位加藤女史の順、楽しく日曜の夜を過す。又良からずや!!

二月十二日(月)

衛生・細菌学を了って退校する。早速三千五〇〇円也、芳賀製スキー高級品を擔いで寺口山ゲレンデに向ふ。先ず、ニセコ行のトレーニングと云った処、はき心地仲々よし。一気に寺口山から裏山へ抜けて下りる。途中吹き溜りにスキーをとられて一回転倒する。四時療養所に至り、小森と駄べる。又食べる、豚汁及豚肉の味覚上乘!! 彼の考え方の変化は矢張り嘘偽だと思ふ。この七面倒臭い社会に孤高を守る事は困難だ。リーベにしても然り。メツチェンに最高の善を求めても偽善でない限り、不可能ならん。人生はゆきづり、リーベもゆきづり、氣紛れのリーベならん。お互い様にこの行きづりに徹し切れないから嘘八百並べたてゝプラトニック、ロマンティックラヴ等と言つてゐるのだ。彼は、お前は苦労してない、お坊ちゃんだ、美しいよ”と言つたが、それも分る。彼が若き肉体を蝕ばまれてベッドに考へる事が何もノルマルとは云はないが、あれだけシンプルに考へられてエゴイズムになれたら幸福だ。彼は本当の事を言つてゐるに過ぎないのだ。只俺が例によつてハイド氏の出現頻度が多いだけだ。ポツと灯ったマッチの火を長く保たせようとしてゐるに過ぎない。所詮数秒の差で元の闇の夜が来るとは知つてゐるが!! 保たせなければ氣がすまないだけだ。然し、この前と云ひ、今日と云ひ、会へば喧嘩だ、糞!! 負けるものか。どちらが先に尻尾を出すか、意地ヅ張りの競争だ。この頃は何だか知らぬがファイトがある。運動を毎日やると体の調子が良い。朝飯が美味い。黙つてゐてもモリ／＼ファイトが出て来る。何か動かないとさっぱりしない。雪が降つても、風が吹いても、ファイトは消耗しない。只、学校の勉強が余り氣に乗らないのが玉にキズだ。夜は七時夕食後、虎造の石松三十石舟をきく。又ボーカー十時半迄。今夜もついてゐるが、四千点浮いてエンド。中村屋の茶菓子で晴子さんのお手並み拝見する。少しお湯が熱かったのが惜しい。お茶と云へば、婉子は二月の予定を着々完遂しつつある事であらう。健康を祈る。僕が落着いた氣分でファイトに充ちてゐるのも、婉子の愛情が重大なファクターとなつてゐる事を信ずる。休み中の樂しかりし思ひ出がクローズアップして来る。僕は幸福だ。愛してゐる。永遠のリーベよ、(こんな言葉を使つて良いのだらうか?) 幸あれかし…。

二月十三日 (火)

例によりて八時のバスにて登校する。婦人科・薬理二時間で二時迄講義。それより南下する。薄野新世界松屋にて、川原・井林・鯨岡・松井等と落合ふ。シャンソン集、メンデルスゾーン等聞くが、どうもシャンソンは飲んだ時でないといびったりしない。尤も長靴をはいて喫茶店に納つてゐる事自体が

おかしいのだ。コーヒーも不味い、M・J・Bにまがいものが混ってゐるのだらう。矢張り新宿のモカ・ボンは良かった。どうもこうして街に出ると思ひ出して愚痴をこぼしたくなる。中村や・最後の日の不二や・等と…前に婉子が坐つてゐるやうな気がする。今頃何してゐるや…。それより、「偽れる盛装」を観る。一応見られる映画なり。京マチ子の好演技はアプレ祇園芸妓の一面を掴んで。雪の中を最終バスにて帰宅する。マンネリズムの冬生活の一員とならねば駄目らしい。冬の北国の生活は単調だ。いそ／＼と背中を丸めて家路へ急ぐ人の群を見るとつく／＼とさう感ずる。昨日、今日とよく降る雪だ。いい加減にして呉れないと住む人間が可哀さうだ!!

二月十四日（水）

昨日に変わって朝よりカラリと晴れた空に太陽が映つてまぶしい位だ。内科各論・病理・細菌と四時迄講義あり。四時廿分発で帰宅入浴する。のんびりとストーブの側で読書又良哉。東京は大分暖かになった事であらう。

二月十五日（木）

報道に依れば東京は昨日来猛吹雪に襲れて積雪二十糎に及ぶとか。防雪設備のない都民らは慌てふためいた事であらう。遙かに札幌より快哉（編註：愉快だ）と思うこと。胸がすくこと。めいた平安を祈る。都民六〇〇万の交通機関がストップしたのだからさぞかし賑やかであつたらうと想像してみる。感情の世界に生きる事は易しい事であるが、客観的にみて此れ程みぢめな事はない。況して、男性の生き方が一方的に此れに傾いた時は憐れである。「相模太郎膳カメの如し」と、時宗の大膳率直にして且、鋭智の程を讃えてゐるが、男性の魅力は野生と理性を兼ね備へた点にあると思ふ、（勿論それが全部だとは言ひ切れないが）。ギリギリ一杯の感情の世界に生きる女性が、それを補ふものとして恋愛の対象に男性のそれを求める所以でもある。感情を表さない男性は往々、平凡な人とみられるが、古より平凡に生きる事の難しさを云ふ人がある事は、この事を裏書してゐると思ふ。信仰が或程度感情の随伴を必要とするなら、戦争は感情を以てさけられないし、まして二つの世界の対立は感情を以てはとけないだらう。現実の冷さが控えてゐる。すれば、世界平和を祈願して二十四時間祈禱しても所詮、平和への心がけをよくする程度のものでしかあり得ないのだらう。

二月十八日（日）

前週後半は全くウインタースポーツに過した。午前中スケート、午後スキ

―で いさゝか消耗の感あり。就中、鯨岡と二人で寺口山より、銀嶺を沿って大倉山附近まで行った事は愉快であった。山スキーへの魅力は百倍した。今日は午前八時半よりS・S第一部礼拝に出席、司会をつとむ。小学科五年級の分級も担当する。それより礼拝。午後は又、中等科礼拝説教「信仰と友情」に就いて、「内村鑑三のベル宛の書簡」より、神により結ばれし友情の眞実について語る。その後二・三年の分級、使徒行伝十六章、愈々、語るも聞くも熱が入って来る。じつと耳を傾けてゐる純心な少女らの瞳をみつめてゐると、自己の信仰の不甲斐なさに身をつまされる思ひである。級より約五人の卒業生が出るが、彼女らの成長が信仰を伴って健かに伸びてゆく事を希望して止まない。美しい信仰・強い信仰は彼女らを必ず、美しい強い女性に育てゝ呉れるだらふ。夜は早くから沈没!! 明日からの学業に備へて。

二月二十一日（水）

三・七度と云ふ高温に街の雪も融けて、道行く人の足を手古摺らせてゐる。午后から例によつてスキーにゆく。寺口山裏山二十五度を直滑降する。潤雪にコンディション上乘ならざれど、志気旺盛なり。帰途療養所へ寄つて、小森と駄べる。彼、来月上旬退院予定なりとか、彼の胸中察するに余りあり。けだし本日、小森の話による一件は傑作なり。即ち、療養所のメツチェン克蘭ケ（編註…メツチェンはドイツ語Mädchen女の子、克蘭ケはドイツ語のKranke患者）が「いつもいらつしやる二人の方の中一人は貴方のお友達で、クリスチャンらしいお医者さんに見えますが（鯨岡の事を評して）、もう一人の背の高い人は違ふ科の方でしょう（余の事なり）？」と言つたさうなり。俺がいつも心掛けてゐるクリスチャンならぬクリスチャン、医者らしくない。医者と言動が実際に客観視された事は正に快適なり。『絶対クリスチャンに見えない』との事『まあ―あの方がお医者さんになるの?』『全くこの事のためにずい分苦労したものだ。クリスチャンの臭み、医者特有のタイプは俺は大嫌ひなのだ。昨日婉子より来信あり。彼女一月でスケートも止めたとの事。津田の方へ力を入れてゐるらしい。又、札幌ゆきを覚悟して、原町田のマゝともいろゝお話して力添えして戴く約束をしましたとあり、案外心細い一面をもっている。一月は余り一緒に生活し過ぎた故か、喫茶店に入つても前に婉子が坐つてゐるやうな気がしてハツとする事がある。行きずりとは云へ、ひどい寂しさだ。二人で旅をしたい!!

二月二十四日（土）

昨夕は河野の叔父に偶然北一条でお会して、ホームでテキにビールの馳走

になる。飲み乍ら、昌彦兄の事を主として話す。僕としても何とかして、話が好転して、無事落着するやう努力したつもりだ。異郷で親戚の人に会ふといふ事は嬉しいものだ!! 今日午後、小樽へゆく。邦子姉の宅を訪れる。旧交をあたため、夕食を共に戴く。稔兄のスケソ鱈の話興味あり。何れにしても北海道に初めて従兄姉が世帯を持った事は嬉しい。本当に気軽に、楽しく落ち着いて時間が送れる事は家から離れてゐる僕にとって大変感謝せねばならぬ事だ。終列車で帰る。昌彦兄の恵子さんの問題については後日記さう。

二月二十五日（日）

礼拝後役員会あり。十一日の教会会議開催の件に就いて審議する。北星の細川牧師招聘問題は役員会での空気は大体異論ないやうである。要するに、琴似教会の自主性を左右する大問題なのであるから、もう少し熟慮しても良いのではないだらうか。午後、中等科、使徒行伝パウロ第二次伝道を了る。小百合会の女学生達の卒業生送別ミーティングが教師謝恩会を兼て行はれるさうで、可愛い委員達が小さい頭を悩ましてゐる。会の形式が如何にせよ、その志だけで立派である。五時より河崎さんに佳代子ちゃんのバースデイのお招きを受くる。久方ぶりで見なさんと一緒に楽しいお祝の御膳を戴く。種々楽しく遊んで、八時半過ぎ失礼する。皆さん夫々の個性を持った良い御子さんばかりなり。

三月二日（金）

慌しく日が経ってゆく。すでに帰学以来一ヶ月も過ぎて了った。講義は今月中に終へねばならぬグランド各教授（編註：ドイツ語のGrund）「基礎」。ここでは基礎医学のことであろう）は夫々時間超過しての熱の入り方である。我国細菌学界の大御所中村教授も、本年度停年なのである。一代の名講義も旬日で終りを告げるのだ。すでに学校には学年末の雰囲気が漂って来た。例年の事乍ら、人知れずその空気の中の一人である事を思ふと、落着きたいやうな、ものかなしい気持ちになる。婉子より便りあり。来年のハイラーテン（編註：ドイツ語Heiratenで結婚する）の事に就いて、大分感情的な文章である。秀子姉のゴールインを知らせて来た。幸を祈るや切なり!! 今日、青木・鯨岡と「又逢ふ日まで」を見る。今度、故意にその機会を逃していたのだが、今日はどうゆう風の吹き廻しか、入ってしまった。矢張り見ない方が良かったのかも知れない。戦争と云ふ不安定な流れの中に、安定せるリーベを希求して、必死にさがき、そして悶え死んで行った悲劇の二人の

結末は余りに残酷である。一シーン一カットが戦争中の東京を思い出させていけない。あの時の事は誰も思ひ出したくない。然し、数度に亘る観客の爆笑は、札幌が直接戦争の被害をうけていない処だからと云っても僕には善意にはとれない。「どうして戦争するのだ？ 分らない？」と軍人の兄に質問する主人公の善意は然し、あののっぴきならぬ流れには抗し難く、尊い犠牲となつて終つて了つた。妥協しない若きインテリ達も最後には何れも流されてしまった。時流の激烈を今の世にも見出されつつある。僕個人のあの時の事を考へると、第二農場の牧草の陰で木下が手に持つて駆つて来た「召集令状」を手にした時、そして、青函連絡船から眺めた函館山の姿、あの時の母・父の顔、そして入隊後の知性のない野獣然とした下士官・将校らの顔、胸につけて帰つて来た陸軍二等兵のマークの事等が 走馬燈の如く去来する。又入隊前の白線生活の快適を思ふ時、人間が自由を謳歌する時代の実に短かく又それだけに樂しかりしかを痛感する。孤漂然として生きてきた自信はある。又それに生きんとして努力して来た。故にあの軍隊生活を自ら慰め得た。そして戦後の困難な寮生活も生きて来た。かう考へると、死ななかつたのが唯一の幸福だ。「死」から逃れ得たのが、あの映画と違ふだけだ。然し、今のこの世に於ても妥協出来ない事の弱味を度々見せつけられる。然し、僕は生きてゆく、孤泊漂々として…。婉子よ！ 分つて呉れ給へ！

(編註…一九四五年七月二日の日記に「来道してから早くも二ヶ月」と記録されており、出征はそれ以前ではない。七月十二日から八月十五日までの日記の記録がないことからこの間のごく短期間に出征したのか？入隊前の白線生活とあることから一九四五年北大入学後に入隊したことになる。七十五及び七十七頁参照)

三月五日 (月)

日曜は八時より五時まであれやこれやと教会関係の奉仕に了るので、今日は休養とする。午前中はのんびりと読書・就床し、午後はスキーを擔いで寺口山へ。晴天のグレンデは全く美しい。アイスバーンなので、クラスト(編註…ドイツ語Krusteまたは英語crustの固くなった積雪の表層の意)甚し。回転に骨が折れるが、転倒もまた良し。転倒したまゝ、陽光に映える白雪に顔を押しつけたり、手で雪面を撫でたりする。気分爽快なり。昨日長兄より来信あり。次兄のハイラテン問題についてなり。「事此処に至つては、二人を結ぶ羽織の紐として、結婚させる他なし。吾々は吾々なりに、母は母なりに、夫々努力してゆく他なし…」と。恵子さんに残された教養の不足、吾々の融合性の問題にしても凡て、努力と諦観の上に立つて解決されるのだらう

。早速返をしたゝむ。「教養、無自覚の女性のあはれさ・みぢめさはそれをあばき立てれば立てる程本人のみにくさ、あがきが出て来る。黙って、育くみ、導き、そして、磨きすまされた知性を以て努力してゆく。愛し合ふ二人が燃え続けてゐる時もそれが消えかゝった時も黙って、育くみ、祝福し、励ましてやらねばならないのが第三人者のつとめ。げにさびしい人の世の情である」と、一番身近な問題だけに、あせりは禁物であらう。今日は福生の野おさんより来信。お兄さんの 神経衰弱よりくる分裂症について、大分悩んで居られる由。お正月もお逢いしたかったが、矢張り気持の中に喜んで貴方達に、心から接するものがなかつたのでせう。とあり、切々たる心境にどんな事があつても苦しみを耐えます。その中、きっと私にも春が来ますとある。種々「精神分裂症」について質問して来たので、暇を見てお返事する事にする。感じ易い、それだけに情純なる魂に触れた様な気持になる。何と云つてお慰め、励して上げたらよいか、分らない。あれと云ひ、これと云ひ、生きることの厳しさをひし／＼と教へらるる日なり。

三月十七日（土）

昨十六日を以て三学期の授業は終った 愈々峠を越えた、下り坂は早い。自重すべきならん。今週は殆ど毎夜の如く、コンパの連続で消耗甚し。昨日は小樽まで出張。夜は邦子姉の処へ宿泊す、稔氏東京出張で不在なり。この夏は世田谷の連中も来遊との事。その時婉子も一緒に如何と誘はる。この頃のデイスカッションの焦点は現在の国家と云ふシステムの中に於ける個人の自由性の問題にあるらしい。毎日の級友達との論点はそこへ集中する。毎日へ連載された「風にそよぐ芦」の石川達三は、その辺の問題を文学者なりに未解決のまゝ、提出してゐる。「戦中戦後を通じて我々が直面した多くの問題の中、国家的に、社会的に、又は学問的に解決されたものがあるだらうか、私はさういふ問題をたゞ問題として提出する事が出来ない。（人間の孤独）・（人間の善意を信ずる）などと云ふ芹沢悠平の感懐は何の解決でもありはしない。むしろ敗北であり逃避である。言葉は美しいし、彼個人はそこに逃げこんで安んじて居られるかも知れないが、社会全体の問題としては何らの具体的な解決でもないのだ。むしろ、個人的解決しか有り得ないと云ふのが作者の結論になつてしまつたようだ。しかし、個人解決で安心できるものならば、他にいくらでも方法は有るだらう」と述べても、あの小説に明るい希望にみちた結論を示し得なかつた理由としては「私にはそれは出来なかつた。現実には日に月に絶望に近づいている。もしもこのやうな現実の中に明るい希望を押し立てやうとするならば、それはファシズム・ナチズムあるいは

コミュニズムに類する集团的で盲目的で排他的な形式をとるに違いない。そういうふ形を最も嫌悪する自由主義者には希望はない。平和と云ひ、自由と云ふ事はことごとく是れ、過去の夢ではないか」と述べてゐる。石川は更に、自由主義者の生き方に就いて「私はむしろ、自分自身をも含めた自由主義者と云ふものをすら疑わざるを得ないやうな気がする。今後吾々の生きてゆく世の中が、資本主義社会であらうと、共産主義社会にならうと、個人は結局きびしい統制の中で個性を奪れ、自由を奪れ国家に奉仕する一個の部分品にすぎなくなつてしまふだらう。その事を嘆き悲しむ。我々はもはやアヴァンゲールの微くさい人間ではないのか。自由主義者の抵抗が、世界の流れを堰き止る力を持っているとは私は信じない」と。その悲哀を綴り、彼、個人の今後の在り方としては、「私は人間と社会とに對する慨^{なげ}きと祈りの心を罩めて『風にそよぐ芦』を書き綴らうと思つた。書き終つて、心たのしきものがない。徒に人間の悲劇をつきまわして、忘れていた不幸の数々を思ひ出させたにすぎないのではなからうか。もしも今日の我々の不幸が、永遠に解決の道をもたないものであるならば、それを事新しく考へて見る必要はないのだ。むしろ一瞬の喜びに憂いを忘れていられる方がいい。私は今、明るくて楽しい清らかに澄みわたつたやうな小説を書きたいと思ふ。それこそ今日の人間が一番望んでゐる文学の喜びでなからうか。私にはまだそれが書けない。それを書くためには、私自身がもつと現実に諦めをつけ、達観し、現実を超越してしまわなくてはならぬやうだ。けだし、(超越)と云ふ事も又一種の個人的解決の方法であるだらう」と述べて結んでゐる。彼石川は文学者として、生き方を見つけようとしてゐるが、我々としてもこの提出された問題には白線時代から考へ続けてきた。小説にも興味をもつてきた。然し作者が無解決のまゝ、あの小説を打ち切つた理由に對しては、共感せざるを得ない。同時に生きてゆく事の寂しさを、むごたらしくみせつけられたやうな気がする。無分別に「風にそよぐ芦」になる人が羨ましい。考へる風にそよぐ芦…寂しい人生である。風にそよぐ考へる芦…然し、考へなき芦共もある小説を読みたくなひと言ふからには、矢張り古傷には触れたくない逃避があるのではあるまいか。

三月十六日午后四時三十五分

北大名誉教授、農・理学博士、学士院会員、文化勲章受賞者宮部金吾博士、血液病にて逝去さる。北大創立以来の大先輩として、全北大生の尊敬を集め、九十一才の老躯に研究を続けられていた先生の逝去は全く哀惜にたえない。思ひ起しても恵迪寮時代、記念祭の晩餐会には必ず御出席されて後輩を

激励された御姿は僕の一生の思ひ出として残るであらう。寮に生活した事のある幾千の人々も必ず先生の温容を思ひ起して、若き日のビーアンビシアスの熱情を呼び換して先輩の激励に応へる事であらう。その事から考へても宮部先生は我々にとって渴望の大先輩であった。死後、もし、種々の煙のもつやうないぶかしさが、その弟子や知人達の間に起るとしたら、全く、先生の遺志を汚す、恥しいものであるとして、よく反省して戴きたい。僕は宮部先生の御昇天を心から悼むものである!!

三月二十五日（日）

復活節礼拝（原町田教会にて捧ぐ）

三月二十六日（月）

十九日に札幌を發つて以来の記録を要約して記すと、十九日浅倉に送られて出札した竹中が、小樽より乗車。車中、一休庵主人金安氏と一緒にになり、無事函館迄来たが、季節風のため連絡船欠航。致し方ないので、竹中の紹介で、末広町の金井氏宅へ赴き宿泊。又、渡辺熊四郎氏宅へも遊びにゆく。翌日は湯の川松の寮へ行き、温泉にて一応旅の塵を拂ひ、湯槽の中で杯を傾く、快適なり。二時頃、森屋デパートに行き挨拶し、丁度24時間遅れで乗船し、青森に着き、午后八時三十五分発上野行急行「北斗」号に乗り、久方ぶりの雪のない風景を賞で乍ら、翌二十一日 上野着午前十一時四十分、車中よりの一句。

“ギャバジンも婆の手を引く墓参り”

（編註：英語 gabardine は、織目がきつく丈夫に作られた綾織りの布、またはそれで作られた外套、上着など）

上野ホームでは、婉子・田鶴ちゃんの出迎へをうく。例のフラウ（編註：ドイツ語の Frau 夫人、奥様）の出迎へを受け、いそぐ？としてゐる竹中と別れて新宿に出る。中村やで約二月ぶりで、くつろぎ、小田急に乗り、鶴川え。此処に三日に亘る、彌次岳多道中は終りを告げ、名実共に東京の生活に飛込む事になった訳である。春の故郷の風景は、必ずや、北国の学業生活に疲れた僕の身心を癒して呉れる事だらう。（雪融けの札幌の人々の事を思ふと、申訳ないが）。最愛の婉子の細やかな愛情は共に送る時間を持つて現実的なものとして、僕を包み始めてゐる。帰省以来五日間、共に過ごした婉子は今迄にない愛情を注いで呉れる。美しい君!! 僕はこの幸福を感謝する。愈々来年に迫ったハイライテン目指して、二人は努力を積み重ねなければならない。より現実を直視して、よき生活の構想を考へて、励まねばならない。この冬

の婉子より、又違った女性として、彼女を二十五日間で見出した。僕はより彼女の中に融合して、リーベンの神髄に透徹せねばならない。僕にない凡てのものを彼女の中に見出して、彼女をベターハーフとして決意した以上、僕の生きゆく道は燦然として輝いてゐる。海あり、山あり、川あり、多事多難な人生の旅のよき道連れとして、婉子と慰め励まし合つてゆくのだ。愛する君よ!! 吾が良き道連れの君よ!! 僕は愛して愛し抜いて止まない。二人にとって思ひ出の鶴川の山々を散策する。静かにして、大いなる動きを秘めた休暇のスタートである。

三月三十日（金）

この間、平穩なる在郷生活なり。

四月十日（火）

昨夜は明治座で新派祭り観劇。兼、竹中・浅倉との伊豆・大島旅行の最終的打合せを行ふ。竹中に案内されて浅草橋の「ひさごや」なる二階でビールで祝杯を挙ぐ。壮途は挙行されんとしてゐる。後、婉子と終電で帰る。本朝八時三十二分発横浜線電車で出発。横浜駅で浅倉・竹中・山本（新加入）に同行して、三島へ。春の湘南を西下す。就中、大磯辺の風光は佳なり。三島より駿豆鉄道で修善寺へ出る。すでに車中温泉客の齎す雰囲気は旅を思はせる。徒歩で修善寺温泉へ出る。桂川の谿流は左にせゝらぎ、花も散つた戸田街道を頻に往復するバスの砂塵を浴びて行く。修善寺で午食。愈々待望の達磨山目指して壮途に就く。連中意気天を衝くバスにて県営キャンプ場まで登る。此処のバンガローは県の援助により設備行届き、富士を背景に静浦海岸、沼津附近の眺望を一気に納める通称富士見高原に点在する三十二ヶより成り、一同その完備に驚ろく。ガイド氏に夕食を依頼し、一人旅の横浜高商某氏も加り五人で山頂目指して出発す。金冠山を右に、小達磨を左に戸田街道を6Kのペースで歩く。桂川も此処まで来ると全くの谷川となり。源氏櫻の咲く山間を背音高く東流してゐる。やがて至る戸田峠で金冠よりの道と合して、左折して愈々熊笹中の小径となる。俄然 眺望は展開して、右は戸田湾の佳景が箱庭の如く傾陽に映えて、遠州灘は全く凪いでゐる。荷物をバンガローに置いて来た一同の足は全く軽調で、瞬く間に小達磨を越える。すれば前方約二Kに緩やかなスロープを東にたなびかせた達磨が、尾根道を引き寄せるが如く悠然としてゐる。首を廻せば金冠の後方に四分を白雪に包まれた富士山がその白色のベールを紫紺色に染めて、静かに駿河湾を抱いてゐる。山頂の眺望更に佳ならんと一同奮起して、ペースを保つこと約三十分。西伊

豆の最高峰達磨山頂に遂に辿り着く!! 此処よりの富士の眺望は日本一なりとの事なれど正に然り。悠、且、寂!! 起伏の多い伊豆の山々にコントラストして、両裾をゆるやかにひいた姿は、今迄の疲労も一度に癒して可ならん。今しも洋上に落ちんとする夕陽は、金色の麗滴をとかして浮び、一陣の風が吾らの頬を通る。西南の一段高き起伏は天城の主峰、万三郎方二郎ならん。伊豆の山々の良さは、この起伏のデリケートな点と、色彩の美にあると思ふ。カメラに納り、洋上に向いた傾面の熊笹に休息する事三十分。名残を惜しんで下山する。帰途は猛烈なダッシュで、一時間半でバンガローに着する。二十四号の窓よりは、夕もやの中に静浦の海岸、沼津市の灯が輝き、旅情一人しみる。カクテルの味覚に酔って、静かな高原を逍遙する旅を愛する者は強い。人の世の情はここにひし／＼と感ぜられるからである。インザームカイト(編註…ドイツ語のEinsamkeit ひとりである)と、孤独、寂寥)、孤独!! 孤独なればこそ旅に出て、慰め励まして呉れる人情に涙する。その人達の幸福を祈りつゝ…静かな高原を歩む。キラ／＼と海岸の町の灯が一際耀き始めたやうだ。涙が出て致し方ない。センチではない。滅びゆく己が古きものへの愛着かも知れない。

四月十一日(水)

昨日に比べて曇天の空には靄がかゝってゐる。四〇〇米下の谷川で洗面する。センターバンガローで朝食。九時発の修善寺行バスに乗る。達磨高原よさらば。修善寺駅でバスを下田行に乗換える。伊豆の山間に眠るいで湯の町々を縫って南下する。爲朝より始まり幾人かの先人の夢を秘めてここに起り、ここに滅びた人々は、言ひ知れぬ故郷の町に愛着を覚えてゐるのであらうか。バスに揺られて過る街の軒々が絶えせぬ湯もやに濡れて古き統り(編註…統理Ⅱ統一して収めること)を語ってゐる。バスが天城峠にかゝる頃から、旅情一汐の春雨が窓を叩きはじめた。視界を横切る山桜がひた／＼と濡れてゐる。山間の杉並木が煙ってゐる。バスガールがこれから入らんとする南伊豆の人情を語り始めれば、バスはコース中最高の峠に差しかゝる。その昔はこの天城越えより他に南伊豆に入る道がなかったとすれば、そこに営む人々の情はさぞかしと、旅の心にも励みが出て来る。氣候風土、共に恵まれ、世々その成業を守って来た人々の町々がか細いこの道を唯一の対外的な連絡路として生きて来たのだから、我々の胸にはそれらの人々の夢こそ、むさぼりかきむしりたい衝動にかられるのは無理もない事だ。湯もやにけむる湯ヶ野の里で小休止。ここは伊豆の温泉町の中、一番、山の湯の雰囲気が漂ふ処とか。ここで一人旅の横浜高商の某氏と別れる。彼の後姿に旅の平安を祈る。

平たんな道路を出れば下田街道の左右の視界は展けて、特有の隆起をもった小山が点在する。蓮台寺温泉は清流の畔に抱かれるが如くけむり、バスはス皮ードを増して愈々待望の春雨一汐ふりしきる下田へ入る。斯くしてバスを捨て、知友北川の自宅を訪れたのは、午后一時半であつた。軽い中食の後、番傘をさしつゝ、下田の町へ出る。先ず日米条約締結の地、了仙寺へ至る。ここは現在ではその昔の性器崇拜の造物、即ち、男女性器を形どつた像物が寺宝として残存され、一般に供覧されてゐるので有名になつてゐる。エロティズムを通り越したグロテスクな感じがあり、竹中が言ふ如く義憤を覚えるのも無理はない。性教育の見地より見ても、団体の中の二十才前後の男女等に与へる悪影響は相当なものだらう。ヤニ下つたあの住職の顔と共に強い反省を覚える。それより下田港を一望に納める海岸の山に登る。黒船の出現に太平の夢を破られた下田の町人の驚愕を察する。憂国の士、松陰の立籠つた辨天島の岩、窟が白波にあらはれてゐるのが印象的だ。何れにせよ、今でも平和な漁港である。道征く町の乙女らに、何かしら開放された明るさ、奔放な中の動かぬ美しさを感じる。それは取りもなほさず、南伊豆の人情のかもしれない。やがて唐人お吉の墓に至る。外人とのゆがめられた恋に生き、苦しみのまゝ、この地に歿したお吉は現代の「夜の女」の先駆をなしたとは云へ、弱き女の宿命を代表して余りあるものあり。そゞろ寂しさを覚える。故にこそ、参詣の人足が、墓前のせんかうの煙に絶えぬのも、いつの世にも変らぬ女の宿命へのはなむけなのか。それより、バスにて蓮台寺温泉に至る。北川の叔母なる人の営む清流荘に至り、旅塵を洗ひ去る。名の通り清流の畔に立てられたこの旅館は温泉随一の豪華を誇るさうだ。暫し酔然として湯槽に枕して憩ふ。外には春雨が降りしきり幽漠の氣漲り、湧き出る湯の音が、清流に和して音知れぬ感境へ誘つてゆく。明日は、東伊豆を北上して伊東までの旅程だ。

四月十二日（木）

水々しい緑葉が陽光に映えて、昨日に打つて変つた快晴だ。山はだに点にする夏みかんの色がまぶしい。身繕ひも早々にバスに乗る。下田湾を右に見て白浜海岸の絶景に差しかゝる。東伊豆随一の風光とかで湾曲する海岸線の岩の上に松の緑が、打ちよせる白波に映えてゐる。海岸線を走る道路はうねりくねり、颯爽とゆくバスの窓ガラスがキラリ／＼と光るのも美しい。巧妙な運転手のハンドル捌きに感心しながら、いつかな時の経つのも忘れる。乗降する人々の言葉にナマリを知るのも嬉しい気持ちになれる。河津浜を過ぎる頃、バスガールが曾我兄弟の父河津三郎の古事を語る。伝統のきびしさに

生きる南伊豆の血を継ぐ五郎・十郎兄弟が紆余曲折の末、仇討を成遂げたと云ふ事も肯けることである。洋上に浮ぶ大島は手の届く風情で車中の吾々を招く。バスガールの唄は大島節が高く低く、尾を引いて窓外に流れてゆく。昨日の天城越と違って、天候の故もあらうが、のどかな海岸コースである。稲取の町へ入って小休止する。ここはモダンな小じんまりした町である。間もなく走り出したバスは北川を経て片瀬温泉を通り抜け、吾々の第一目的地なる熱川へ着く。駅より海岸へ下る事十五分。相模灘をまともに見下した海岸の山腹に、太田道灌が発見したと言はれる熱川温泉の旅館がズラリと並んで、打ち寄せる怒濤に対してゐる。町の右端の海岸の岩上で中食をとる。じり／＼と焼く陽光はすでに春のものではない。久方ぶりの海の景色にすっかり開放されて岩の上に標的をつくり、小石を投げつけたりして遊ぶ。紫外線の直射とこの運動で消耗した吾々は、町の中央の橋のタモトの土産物売場でその娘さんの情に縋って種々歓待を受くる。Tea roomの窓より入るそよ吹く潮風に紅潮した頬が気持よい。吾々がここに置いて出たゲルトが20円であったとは、この場の雰囲気居合し、た人でなければ分る筈はない。それ程、人々の善意が疑はれる程晴れ渡った春の空である。旅のよさ、人情の機微は人の善意をむき出しにしてしまふのだ。旅ゆく者に何で悪人があらうか……。人の世の寂寥をそのまゝ縮図した旅と云ふ天然色のスクリーンには觸れ合ふ人と人との心の琴線に、ひた歩む孤独の強き人々の群像が去来して構成されるのみなのだ。眞に旅行く人に何で悪人があらうか？……寂しければ、弱ければこそ旅に出て、消えんとする心の灯をかき立てるのだ。毎日の生活に人の世の和らぎを忘れた人々よ、旅に出給へ。そして、荒波立ちしづくこの世の中に孤杖を運ぶ人々よ、より己が心を和らぎ、よき旅の道連れと励まし合はうではないか。熱川に在る事、四時間。差しかゝるバスを拾って吉田に向ふ。八幡野を経て吉田に着き、一碧湖への小径を辿る事三十分。期待に反して伊東と云ふ歓楽街を控えての事か、俗化も甚しく、ミィチャン俗の遊蕩地と化してゐるとみるのはひが目か。十年前のロマンティックな思ひ出に浸ってゐる竹中の心を察して、浸透してゆく風俗へのレジスタンを覚える。イギリス或はフランスの如く都会の風俗と、田園の風俗とを夫々確別して両者の侵入混和を許さない人々が羨ましい。現在の日本では都会より相当離れた地では純然たる田園風俗に浸れるが、都会の発展と共にやがてそれらが俗化してゆくのではないだらうかと思ふと、直接の関係分子たる観光客、及び地元の人々の心の問題となつてしまふ。深い教養と高い知性の人々のレベルが向上しない限り、この問題は解決されない。北海道の阿寒の如き悠大な大自然環境はあのまゝそつとして置きたい。出来得れば東京近辺

にも大自然そのまゝの環境を残して置きたい。それこそ人の心が自然に還れる一つのファクターとなるに違いない。湖畔を出て伊東へ出る。今次旅程中難関であった伊東は、浅倉の交渉により、彼のファーター（編注…ドイツ語 Vater 父親）の紹介で日新寮（寮と云っても元の侍従の別荘）へ泊る。予想以上の快適な場所であり、加へて浅倉のファーターが全部費用を済まして行つて下さったとかで、ノーゲル（編注…no Geld 無料）となり、予算が余り、一級酒で湯上りの疲れを癒やす。丹前衣にくつろぎ、旅の労を互にねぎらふ。それより漂然と町へ出て、都会の繁華街と何ら変らない遊樂の巷を歩く。不快になつたので、意を決して古橋らがトレーニングしたと云ふ温泉プールへ入り、猛ピッチで百米をクローリングする。消耗甚しけれど、心地よき疲れなり。帰宅して、名産夏みかんに舌鼓みを打ちつゝ明日の大島行のスケジュールを打診する。

四月十三日（金）快晴

早朝五時目を覚し、入浴して又眠る。連中得意のスローモーションが始つてあやふく八時半出帆の「あけぼの丸」に間に合ふ。関西の旅行団の連中と同船したゝめ、聊か雰囲気壊されたのが不愉快なり。川奈のゴルフリンク及びホテルが快晴に映ゆる海岸に耀くのも美しく、くつきりと上方のみ浮び出した富士の麗容が漸く、うねりだした海上にローリングする船尾より眺められる。遠く天城の連峯が漠然たる春がすみの上になだらかな線を画いて浮んでゐる。相当ローリングすれども津軽海峡の猛者四人、他の団体の客のエルブレツヘン（編注…ドイツ語の Erbrechen 吐瀉物、船酔いのためである）を気にしながら、心地よき太平洋のゆりかごに揺られてゐる。全く伊豆半島が溶かしたるが如く漠然とした時、首を廻らせば早や、大島の雄姿が眼前に浮んでゐる。中央1/3の地点に一際高い点が問題の三原山ならん。単調なる島なりと思ひしが、案外複雑な色彩と起伏に富んでゐるので安心した。船は岡田港目指して一直線に走つてゐる。岸壁がずん／＼近づいて来る。アンコ達の姿が二・三、その上に出迎への人達に混つてゐるのも風情ある景色である。十時半到着、岸壁上でカメラに納り、それより一気に三原山目指して登山を開始。昨夜の休養で身心共に癒した一行は、相当なピッチで急坂を上る。一合目毎に茶屋があつて、アンコ達がユニホーム姿でサーヴィスしてゐる。それらを見無視するが如く一気に湯場まで上る。往年の富士の裾野の演習を思ひ出す。恰も裾野の平原の如き西側が切り立った溶岩のはだがつづく。当時の思ひ出話を浅倉・竹中と語る。湯場で牛乳と夏みかんに渴き癒し、再び歩く。漸く外輪山の一角にたどり着く。見渡せば本年二月の噴火

で流出した溶岩が黒々と外輪の附近まで至つてゐる。依然活動を続ける火山の響が時折、鳴り渡る。恰も戦争中の空襲の爆撃を思はすが如くなり。浅倉が十三日の金曜日なりと云つて不吉の予告をするのが又愉快なり。双眼鏡を通して内輪の眺望する事暫し。又、歩を重ねて、御神火茶やに至る。この辺の溶岩は特に流出甚しく、ここより右方約一Kの外輪の凹部には東京都で溶岩の流出止のコンクリート壁を構築する予定だそうだ。下つて溶岩の直ぐ傍まで至る。噴火当時のすさまじき情景が偲ばれる黒々とした巨大な溶岩の蓄積の上をカラスが鳴きわめきつつ飛来してゐる様は正に地獄の様相なり。それを見渡し乍ら握り飯を頬張る。時間がないので三十分にして引返す。帰途は元村へのコースを下る。寫真やの話では約一時間半は要すとの事なれど、猛烈な勢で下りにまかせて駆け下る。各茶やのアンコ達が目を丸くして驚くのを尻目に三時元村発のバスに約五分前に間に合つた。頂上よりここまでこの間約四十分。砂山を轉すボールの如く九十九曲りを下つた訳である。バスで岡田港に至り、出帆間際の「あけぼの丸」に駆けこみ、テープをふつて名残を惜しむアンコ達に別れを告げて、船内のテラスでサイダーを抜いて飲み且駄べる。伊東着五時半丁度。落日が伊豆の山々を撫でるが如く照らして沈んでゆく。更に、それが伸びて船窓の波頭まで至り、一日の清遊を閉ぢるにふさはしき光景なり。伊東に上陸してビールを買込み、宿所に至る。入浴して一日の回遊に日焼けした顔に互に驚き合ふ。食堂で乾杯。その味、正に百万両なり。心づくしのカレーライスに食欲を充し、何も成したくなし、又成す事もなし、暫し各人各様の思索にふける。暫くして山本あたりからか、浅倉あたりからか、プロテストの問題が出て、議論百出する。日焼けした顔を更に紅潮させて、山本のカソリックの牙城に迫る。今度のマリア昇天の疑問を正すに至りて漸く止み、吾にもどつた時は、竹中・浅倉は風呂に入り竹中はもう床についたらしい。慌てゝ二人は湯槽に入る。全く迷惑至極な酔客である。ザンキなり。床に入り浅倉と駄べる。彼にも落着いたガールフレンドが出来たらしい。もう少し経ったら紹介するとの事に、彼らしい慎重な行き方に一寸感心する。

四月十五日（土）

七時半起床入浴。庭のバルコニーで朝の大気を深呼吸する。皆朝の食欲が増して来た事を語る、健康な事だ。そして四人の日焼けした顔を見よ。浅倉の如きは皮さえむけてゐる。眞に日傭労務者の如き四人の面目なり。十時半伊東発で帰途につく。車中種々語りたきも、漸く疲労の色濃きものあり。又、思索でもあるや。時折窓外を見ては黙するのみ。合計四泊五日。壱千七

○〇円の豪華な旅行を了へた。吾々風来坊四人を載せた湘南電車は今しも熱海を発して海岸線をすべるやうにして、ひた走りに東上してゐる。旅はよき哉!! 旅先の人々よ、幸なれ!! 若き人よ、老ひし人々よ、貴方達が吾々四人に与へられた慰みはこの度の伊豆・大島旅行を思ひ出す度に忘れられないであらう。貴方達が吾々四人に示された善意の数々は、吾々のこれからの人生のよき励ましとなって呉れるであらう。貴方達の平安と幸福を祈らずにはおられない。そして優しき乙女らよ、やがて見知らぬ人に嫁いでゆくであらう、お二人の幸福を祈らう。湯もやにぬれる伊豆の山々よ、湯柱たついでゆの町々よ、そこに活きる人々よ、その日記帳の一頁を敢えて、お捧げする風来坊の心を諒とせられよ!! さらば」(旅先でその人々の人情に接した時程、嬉しい事はない。だから、人生の旅に出てゐるこの社会の凡ての人々は觸れ合ふお互の心をもっと和げねばならない。それが旅を愛する人々の所以でもある)

四月二十日(金)

夢の如き走馬燈さ乍らの休暇は、遂に終末を告げた。昨十九日は婉子と逗子を訪問。途中鎌倉の町も少し見物する。十時帰宅。本日は午前中荷造り発送。又、旅装を整へて、新宿に出る。最後の東京の名残りを惜しんで、例の如く不二屋に至り、婉子と暫らくの時を過す。午后五時半、新宿のホームにて別れる!! さらば婉子よ、また会ふ日まで。繰返される事ながら、胸中を去来する悲しみは如何せんや。上野発六時三十五分急行「北斗」で一路青森目指して北上する。

四月二十一日(土)

午后八時Just小樽着。駅前の「光」で休憩。夕食の後、午后九時半帰琴する。帰北以来の生活動態の大略を記す。

四月二十二日(日) 午前八時半S・S礼拝。午后小百合会説教。

「 二十三日(月) 地方選挙(町議、町長)・小森訪問(夜)。

「 二十四日(火) 青年会例会(司会)

「 二十七日(金) 漸く学業が板についてきた感あり。

「嵐が丘」観映。 同行河崎妹。

「 二十八日(土) S・S教師会 ミットエッセン(編註…ドイツ語のEssen「食事」の意、食事付きで日曜学校の教師会があつたのであらう)。

「 二十九日(日) 船山昭三兄結婚式 聖歌隊員。 夜、小森のリーベの

誕生日、(円山)、話題を投ぐ。

〃 三十日(月) 三学年スタートコンパ(竹中・小島・松井・青木)

五月 二日(水) 船山兄結婚祝賀会(午後七時) 司会。

〃 三日(木) 午前中畑起し。午後一時対北大教養科野球試合

(農試グラウンド) 敗る。午後四時十一分発岩見沢へ(小島招待) 竹中と三人でビール。夜、問題の人大平玲子女史(本年三月目白女子大卒)に会ふ。

〃 四日(金) 在岩見沢。午前中テニス(岩見沢庭球同好会コート)

午後三時四十五分発(急行)で小樽。一休庵主人金安で痛飲快食放談。竹中と二人で春宵の小樽の街を散策する。又佳き哉!! 夜深き頃、邦子姉宅垣を乗り越超えて宿泊

〃 五日(土) 早朝七時半で帰宅。S・S春のピクニック。北大原始

林で楽しきピクニック。子供達と飛んだり、はねたり、唄ったり楽しき一日。

〃 六日(日) S・S 礼拝説教。 午後校長歓迎兼新任教師歓迎親睦会のための晩餐の料理、調理。チキンライス(月居)ヤキトリ(細野)スープ(中村)デザート(渡辺)と各男子教師の本来の腕の冴えを発揮して女子教師を驚ろかす。談遊戯の後、午後十時半散会以上がその大略である。

五月七日(月)

帰学以来正に慌しき二旬、我乍らその多忙に驚く。春の訪れは遅かりしも、どうやら目を廻せば 春めいた風情となり、風来坊も感無量なり。目下の問題は、就中二十九日の小森のリーベ即ち、富生節子女史の問題である。昨日小森宛の書簡が来り、「文中」に僕の事が記されており。本夕、鯨岡がその文章を読んだ処によると「大分細野に惚れてゐるらしい。ファストインスピレーションで来たメツチェンの心は相当怖いぞ、小森はその点で貴様に対して恐怖心を抱いてゐるぞ」との事で、わざわざその帰り途、忠告を置いて行ったが、何れにせよ、僕の知る処でなし。小森なり、節子女史なりの問題である。僕の態度ははっきりしてゐる筈だ!! 鯨岡の話に依れば、小森は塚本女史、療養所のプレ女史にも好意を示してゐるらしい。事此処に至れば、話の外になる。夕刻七時 高井兄来訪さる。彼の清瀬結核研究所入所の件より始り、彼の信仰問題、S・Sの具体的な問題、教会・日本基督教団の問題、牧師の問題、果てはT・B(編註:英語のtuberculosisの略結核)の問題に至

るまで三時間に亘りディスカッションする。彼の彼らしい、在り方、そして今後の活動には 大に好感が持てる。好漢高井兄の健在を祈るや切なり!!

五月十一日 (金)

医学部三年目級コンパ 於円山公園。午前十時半より痛飲開始。ウヰスキー・清酒・ビール etc 此処に至って最高スタッフを揃えたコンパはクライマックスに達する。時に四時。於、公園内「さぐえ」さんなり。松井・勝目・竹中・小島・勝井・浅倉・井林、計八人なり。

へ都ぞ彌生の雲紫に 花の香漂ふ饗宴の筵!!

我が校の先人の植えし櫻花爛漫として

逝く春の 価正に 千金ならん

(編註…北宋の詩人蘇軾そしよくの「春夜」詩の一節、春宵一刻値千金、花に清香有り月に陰有りより)

八時半解散 さしもの大狂宴は終りを告ぐる。

五月十三日 (日)

「母の日」午后、子供会 及座談会。盡くるなき 母の愛を感謝して、赤いカーネーションに故郷の老母を偲ぶ。母よ健在なれ!! この日 母に便りする幼い子供達も母を讃えてその感謝の念は子供会の雰囲気となつてゐった。

五月十八日 (金)

昨日、婉子より来信あり。即ち、来春のハイラートンを伸ばせないだらうか、もう一度考へてほしい。そして理由として、

一 物質的に、他人の援助にすぎる点の反対、

二 僕に対する愛情が全面的に掴めない点を書いて来たが、返信したる如く一に於ては可なるも、二に於ては男の全てを愛情で包み切る事は不可能なり。若しそれが出来ると考えてゐるならおそろく一生の課題として残るものであらう。然し、婉子がこのやうな決心により、従来の箱入娘的甘さから脱して、自分をみつめ、試練してゆくのなら大に歓迎すべき事であらう。我儘な娘としての過去に反省を覚えた点はかつてよい。僕は、そう決れば、もう二年間、大いに学生々活を楽しもう。そして悔のない学生々活を送らう。札幌の二人の生活は、そんなに甘いものでない事は事実ならん。故にこそ一応敬遠すべきであつたらう。これで さつぱりしたようだ。

五月十九日（土）

午前中受講。午后白痴観映。それよりミレット（編註：店舗名か？）。帰途予定変更、敬子さん宅訪問。初対面なれど、よも山の話に花が咲く。矢張り、東京の香りは懐かしい。夕食まで馳走になり、九時半の汽車で帰る。敬子ちゃんも大分札幌に馴れたらしい。婉子の言ふ通り、札幌には少い人なつこい、それでいて知的なセンスのある女学生なり。可愛い女の子である。進学の問題で悩んだらしいが、知らなかったとは云へ気の毒であつた。もう少し早く分れば何とかなつたのに惜しい事をした。

五月二十七日（日）

昨日は大掃除ですっかり消耗する。琴似神社春期祭礼で、夜は拙室で開かれた 青年会委員会後「面影三四郎」なる肩のこらないのを観る。琴似のお祭りの唯一の取得は、斯うして野外で映画をやって呉れる事なり。今の札幌は実に美しい。北大の構内より見る景色、就中、ポプラ、エルムの肩ごしに見える、白雪を残した手稲の連峯はエキゾチックなものであり。アカシヤ並木の札幌の風物詩も悪くない。北大遊学の幸を覚える季節である。先日の返事に対する、婉子の来信あり。その要旨とする処は、「周囲の人から憎まれ、蔑れてもこのまゝじーとして返事したくありません。笑って蔑んで放り出して下さい。どんな憎しみにも耐えてゆけさうですが、心のよりどころである貴方を失ふ事は耐えられない気がします。今考へ続けてゐる事は、私の抱いてゐる貴方への愛情が、リーベと云ふより何か外のもつと深い様な気がします。もしこれが結婚によらなければ貴方から受取れぬとしたら、私は考へ、結婚する決意をもちとはない気もします。矛盾している様ですが、貴方を失ふ事を極度に怖れながら、一方愛されている貴方から放り出されても仕方ないとあきらめている自分に首を傾げます。やはり我儘でせうか。貴方を失はない限り、貴方を理解してゆく様に自らを高め、愛情の在り方について苦しんでゆく覚悟です。どうか変らぬ力添えをお願いします」である。相当感情的になつてゐるらしく、掴めない点が多い。静観してゐるより手はあるまい。自己否定でもあらうか？何か他のフアクターがあるのかも知れない？返して曰く「君の希望している事に対して静観する。愛情を全てとして生ききれない点が、男の弱味だ。愛されゝばこそ強く生きるのだ！だから暫らく考へさせて貰いたい。（今の僕にとって愛されない事は苦痛だから）（勿論結婚と云ふフアクターは抜きにして）僕の心も十日間で大分變つて来た。男の愛情とはこんなものかと自嘲してゐる。静観させて欲しい」まあ、ゆつくり、あせらずみつめてゆく他あるまい。愛情の問題なんて、理屈で掴める

ものでないし：

五月三十日（水）

全く快適な季節だ。斯うして北国の風物詩の中に生活していると、何もかも忘れたくなる。只、大自然の中に呼吸してゐるだけで満足だ。自分が案外素直に生きられるので不思議だ!! 婉子に申し訳ない様な気がする。然し、忘れやうとしてのむなしい努力かも知れない。それで良いのだ!! 漂人順天一麦の生命を失ふ勿れ。今日は午前中の講義を了へて、放射線は休講。晝休み、大事件起る。即ち、辨当を食べてゐる時月居が通りかゝったので夢中で呼び止めて、駆け寄って行かんとした時、医学部中庭の湿地帯に足を突込み、泥沼の中に転倒! 新調のダブルのズボンの両足を膝から下を泥水に浸す。慌てゝ、医化学の彼の部屋へ行き、水洗ひ再三、再四!! その無様な格恰は見物なりき。三時の列車で帰宅。それより寺田さん宅の長唄お稽古五時迄。相当な暑さなので消耗甚し。夕食後、昨日に続いてバドミントン。依然として不敗の牙城揺がず! 入浴九時。高野と一局囲む、敗る。良く学び良く遊び一日なり。

六月二日（土）晴

早朝六時起床、直に駅に駆けつけ、青年会主催の蕨取りに参加する。即ち、総責任者なり。夫々の面々、大・中・小様々の容器を肩に担いで集る。六時三十分桑園駅にて、初めて札沼線に乗る。石狩の原野の中を、一世紀前の汽車が行く、全くのエキゾティズムなり。一駅毎の長い停車も、此処・彼処に席を占めた連中が口を動かし乍ら何やら、駄べり笑いさぐめいてゐる間に過ぎて、九時一寸前、目的地月形駅に安着。これより帝国製麻月形工場長工藤四郎氏（我孫子さんの四男）の配慮のトラックに乗り、一路目的地の蕨叢生地目指す。途中、同工場の従業員の家族も行を共にする。目的地にては蕨・蒨・ウド etc、思ひく、好みくの収穫を得て一同満悦。又宜しからずや。楽しきおべんとうも華かに、そして、漫談に花が咲き、午后のスケジュールに入る。愈々待望の工場長宅のコンパなり。ビール・サイダー・そしておはぎの馳走に、から党・甘党夫々、その意を充す。就中、蕨には全く興味なき、福島・小生の二人、最後までさしつ・さゝれつ。良き一日なり。午后五時九分発にて帰途につく。駅で、鈴木幸種兄に会ふ。車中、よもやまの寮時代の思ひ出話にふけり七時半、桑園着。彼は月形高校の講師のアルバイト中なり。琴似駅前に出迎への会員に迎へられて、一同収穫に膨らんだリック、バックの重みも忘れて家路を辿る。その後姿に幸あれ。

六月三日（日）

本日より日曜学校分校開校となる。場所は本町池田長老宅。僕は分校の教師として、高井兄と二人。細川校長の説教あり。午後は月居と、山羊事件あり。空気銃を担いで正に悪童地にはびこるの日なり。夕食に雀やきが膳にのつたのは忘れがたし。

六月五日（火）

夜亀田医院宅にて集会あり。琴似夜間高校の聖書研究会員の参会あり。

六月七日（木）

本日十時半より、今度東京国立第三病院、即、相模原病院長に就任の本学第三 外科・教授 柳莊一博士の最終講義あり。諸君の前途は正に洋々たるものあり、私が北大に赴任してより三十年。その間醫學は驚異的な発展変化を辿った。おそらく、諸君が社会的地位を固められる二・三十年後には又、より以上の発展変遷があるであらう。凡らく諸君よ、近視眼的な研究勉強は止めて、医学の社会福祉に対する分野に貢献されよ。例へ財をなさなくともよい。諸君が常に日本文化の指導者であり、良き医師であり、与へられた社会環境の発展、向上に、その与へられた全力を注いでこそ、幸福の人生と云へる。諸君の御幸福を祈る”と結ばれる。一世を風びした柳外科の大御所教授も遂に、日本外科学会の要請に応へて、その居を移す。又、壮なる哉！先生の御多幸御健在を祈る。部長及び病院長の挨拶あり。四時の汽車にて帰る。それより長唄お稽古。六時より前進座公演（中村翫右衛門一行）を観劇。亀田夫人と御一緒なり。余り面白くなし。さりとて帰る気にもならぬ芝居だった。

六月八日（金）

本日より北海道医学会。引続いて日米医学教育研究会が十一日―二十まで開かれるので、学校は動きがはげしい。傍観者はフライ（編註…ドイツ語の frei 自由の意）なり。即ち今日は一日休養する。初夏の日差しの嬉しくて終日、書いたり、考へたり、寝たり、起きたり。婉子より来信あり。「現在の貴方の心の中には私に対しては憎しみ、さげすみしかないと思ひます。投げ捨てる様に御幸福に！」と書かれたお氣持が苦しい位―いえもう何を申し上げても私の粧ひとしか解っていたぐけない様な気がします。唯一言申上げたい事は今もなほ貴方に対する私の愛情―敢えて申します

、尊敬は変りありません。貴方がどんな態度をとられても決して私は変らないつもりです。二年間も持ちつぐけたものを今更捨てる気にはなれません。勝手にお便りしますからお返事は望みませんがよむだけお願ひします」とあり。愛育研究所（日赤側）の研究生として入所した由。婉子も之で落着きが出来たやうだ。實際の話昨年の婉子の生活では、あの性格で可哀想でならなかった。あれでは無理だ。ギリ／＼一杯の生活だ。これで自己の我儘が出ない限り良き成長をなすであらう。健康と幸福を祈る！

六月九日（土）

昨夕奈良来訪。夕食の後 二人で小森訪問。十時半迄駄べる。種々面白結局リーベ論もこの年まで来てしまったら水掛論の域を出まい。それより婉子に返信を記す。先ずこちらの日常の情況報告に始まり、彼女の就業を祝す。僕の勉強又、社会福祉への信念はその使命の重大をプライドと共に抱いている。僕のクリスチン！　こうよんでよいのだらう？　僕は愛してゐる、と。

愛情なんて云々する資格など僕にはない。愛し愛される、唯それだけに生きてこそ、僕の今後はあると思ふ。自然のまゝに愛していればよいのだ。僕のこの世に生を享けし重大使命は　愛するクリスチンによつて支へられ、励まされてゆくのだ。この頃の二人の問題も、余り飛躍しすぎたらしい。僕の責任を多分に感ずる。来年のハイラーテンを不可と認め合つただけでよいのだ。何もこれからそんなに飛躍する事はない。

午前中学会に出席。それより、食堂で例のライスカレー。南下、ブーチャンに会ひ、丸井でアイスクリーム。別れて一人で名画座「栄光への道」、大空に散る恋」を観映。小森にバス停留場で会ひ、狸小路ブラ／＼歩き、明治でクリームソーダにウイスキーを一本買って飲む。ゲルの余りなくて酔いたい時は之に限る！

六月十日（日）

日曜学校は小学校運動会のため、本校にて合同礼拝。司会高井兄。説教細野兄。礼拝後、小バザーに就いて婦人会より緊急提案あり。提案内容不徹底にて十三日に審議持越となる。晝食後、小学校の運動会を見物、降雨となる。役員席で晴山駅長、亀田夫人（PTA役員）、工藤兄と見物する。降雨の中を元氣よく駆け廻る子供達のファイトに感服する。帰途、河崎さんへ寄り、御馳走になる。リプトンの香は久しぶり。佳・文・美連中と　オハジキなるものをやり惨敗する。トレーニングなり。夜は頻と降る春雨の音を聞き乍

ら、之又久しぶりでノートを繙く。それより下へ降りてお茶、トランプ教授。春雨の音を懷しみつつ床についたのは十二時過なり。

六月十一日（月）

依然として降雨なり。日米医学教育研究会開会式の日なれど休業す。午后より小母さん文楽人形芝居へお出かけ。何を為すともなく、留守番を兼て、在宅する。余す一ヶ月で第二回学士試験なれど何も手につかず、徒に無為の日を送るのみ…。雨の合間を見ては庭に出て花壇の間をぐるぐ廻ってみる。久しぶり、明日から登校してみようか…連中どうしてゐるか？ 夜は之又久しぶりでトランプを切る。最初はポーカー。本日は全然ついてなく、三千点沈んでエンド。次ナポレオンは中尉まででストップする。

六月十二日（火）

登校・車中、青年会委員会のコンパの件でもめる。西村の前で寺田姉まで掴へて、打開策を練る。結局、全責任をもって事後收拾に当る事にして、この土曜日に開催とする。この件ははじめからケチがついていたので面白くない。婦人科田畑さんの例の調子の講義。十時より来学中のエル大学小児科主任教授ダロー博士の「体液の平衡度について」内科と合同した講義あり。午前一時の汽車で帰る早慶戦を聞く。後半の慶応の進撃を早稲田遂に逃げ切つて勝つ。之で早慶共同率となり、決勝を争ふ訳なり。五時のバスで、高野氏、晴子さん、崇江さんと四人で松竹座「文楽公演」に行く。豊竹山城少掾休演なれど、吉田文五郎始め、太夫・人形一座来りて仲々の圧巻。且、堪能したり。就中、艷姿女舞衣、三勝半七酒屋の段は見ものなりき。文五郎の老ひて猶芸道に精進する姿は敬服する。本日母より来信あり。予想通り、昌彦兄の結婚式で多忙なりしとか。でも万事円滑に運び現在でも円満にいつているらし。夏休みには早く帰れとの事。どうもこちらの本意ではないが、親孝行の唯一は帰省なれば、虚勢を張つても致し方あるまい。

六月十五日（金）

札幌神社例祭 降雨。本日より本格的受験体制に入る。午前中医学会出席。帰途、街を見るに「札幌祭」で相当な人出なり。生憎と午後より降雨となり同情やん方なし。

六月十六日（土）

小児科休講、眼科のみ。午後は本日の青年会委員会コンパ用の山羊を屠る

。撲殺係・荒川、皮はぎ係・月居、内臓摘出・細ののスタッフなり。
午後七時より、寺田良子姉宅にてコンパ開かる。

六月十七日（日）

終日降雨頻り。 午后、明後十九日の募金バザー計画を練る。スタッフ、次の如し（○印各部責任者）

総務責任者 我孫子長老

一、アメリカ中古服部 ○亀田婦人会長 以下婦人会オールメンバー

一、雑貨品部 （黒砂糖・豆・茶・石鹼・その他…）

○福島（青年会） 中村・渡辺・荒川（男）

一、食堂部 （パン・ミルク販売）

○細野（青年会）・小野・河崎・我孫子・山崎（女）

一、会計 ○月居（青年会） 及各部責任者

一、会場係 ○細野・月居・福島

一、宣伝係 ○平野・渡辺

何分急な決定なので充分準備出来ざりしを恨む。然れども全力を盡くすべし。

六月十八日（月）

雨上りを利してバザー準備。

六月十九日（火）

午前中 晴後曇、午后雨。 前記の如き各スタッフメンバー最善を盡くす。幸ひ、宣伝期間なくも人出多く好評なり。就中、福島の活躍目覚し。午后降雨となり、中古品部は会堂内に移る。客足ぐつと減り、閑古鳥泣く（特に雑貨部）折柄、来る。小森・奈良の面々と例の二階に上り、月居・福島・小生と五人で空気銃で標的を射ち、且、賭ける。奈良最悪の日なり。二回行ひ二〇〇円集まる。即ち、ワインとサイダーで景気をつける。又楽しからずや。それより、六時後片づけ。また大シュルンペン（編註…ドイツ語のschlumpfeで憔悴、泣きべそ）！ 降雨・オート三輪車のエンコ・馬車積み等…。それより夕食。七時半より青年会例会に臨む。先ず僕が発題講演なり。主題の「キリスト教女性観」約十五分に亘って発題する。附ずいして主題にまで及ぶ。後細川牧師の講演あり。次でデイスカッションに入る。小森・奈良 例によつて駄べる。上田姉、又、彼女らしき譲った発言あり。月居・前田も言を發す。未だ論盡きせずして時間のため会を閉づ。次回もこの主題を究めた

きものなり。久しぶりの活気ある例会なりし事を感謝す。

六月二十日（水）

午后より登校。丸善にて寫真を頼む。それより、医学会に出席。c・p・cなり（編註：Clinical Pathological Conference）臨床病理カンファレンス）、各教授の診断に興味を呼んだが、米国教授には気の毒な疾患であった。出題者の意志、又病歴の記載にも考へさせられる点多々あり、日本的、教授根性を少しみせつけられたやうな気がする。即ち病理所見はECHINOCOCCUSなり。北海道地方病、それも人に知られぬ札文島の寄生虫では余りにも気の毒な疾患であった。

帰途、桐生姉と一緒に。彼女矢張りスポーツウーマンらしくテニスの話ばかり。北里在学中、五年もラケットを振ったらしいので相当ならん。いつかお手合する事にした。快活で、健康である点スポーツマンは良所だ。夜は連日の疲労か能率上らず、明朝に廻る事にして就寝十一時半。満月の夜なり。

この頃の言動・又生活そのものに、少しくアブノルマルな点があるなら、それは誰のせいでもない、皆自分が悪いのだ。

六月三十一日（土）

試験準備の憂鬱を覚える。薬理及び細菌を一応通解するが、果してどの位覚え、てゐるものか？今日は登校して小児科・眼科の講義を受く。それより気分転換に何か快適な手段はないかと考へた。挙句の果、一〇〇円で市内一周名所観光バスと決る。あくせくしてゐるまにアカシヤの花も散り、鈴蘭の香も失せてしまった。之では大変だ。六月の札幌、年中で最高の季節であるべき筈だ。一番手っ取り早くて良い訳である丸井前一時半発、大学・植物園・円山公園・動物園・グラウンド・中島公園をバスガールの喋々する間に、窓より観光都市札幌の自然美を速観する。見馴れた処も斯うしてバスの窓よりその雰囲気に揺られてみると目新しく、感ずるから不思議なり。大学の構内等も実に美しいと思った。

最後に降りる時、バスガールが「皆様方の御旅行の安泰をお祈りしてをります」と言ったのが実に嬉しかったから変なものだ。夜は小森の家でカジノ。奈良・細野同率とある。帰宅十一時。俄然下の茶の間ではブリッジに熱が入つてゐる。又一席加つて十二時過ぎになる。

七月三日（火）

午后、受験勉強の気晴らしに鯨の下宿へ行き、苺を摘まんでいたら竹中来

る。彼も同様の気分らしい。三人で療養所の方へ散策する。空は澄んで緑の山々が美しい。相沢某宅で苺を二貫目購入し、摘みみながら発寒川原に出る。それより発寒橋を渡り帰宅し、ミルヒをかけて約五〇〇匁を三人で平げる。又美味なり!! 「東京ではこんな事は出来まい事ぞ」と、ペロリく、三人の健タンは盡きない、怖い事だ。

七月六日（金）

久方ぶりに登校するに、石川、井林あたりに頻にひやかされる。

天候の具合もおかしくなつて来た様だし困つたものだ、と云ふ訳でもあるまいが一時間で失敬して円山へ行く。即ち竹中訪問なり、彼在宅して何やらゴモくしてゐたらしい。

第三次試験日改造案を示す。大勢は我々に不利に展開してゐるやうである。今夏の計画について駄べる。東京のあの夏の猛暑を思ひ出す。むせ返るやうな寝られぬ夜の暑さ。アスファルトをはね返してまで照りつける、炎くが如き晝間の太陽。思ひ出しても夏の東京は歓迎出来ない。それに九月五・八日と病理と衛生の試験も在る事だし、この機会に涼しい北海道で、病理でも身を入れて勉強したい意欲も湧いてきたし、竹中と二人であれやこれやと駄べる。皆、暑さを避けて北海道へ逃げて来るのに、何も暑さを求めて上京する事もあるまい。只、問題になる点である処の婉子の諒解と昌兄の結婚の問題である。母・叔父よりも帰つて来いとは来てゐる手前がある以上……困つたことだ。九月の試験でも済んで涼しくなつたら帰省して、東京の都会的感覚に触れて来るのも悪くはないだらう。さうすれば婉子も分つて呉れるだらう。学生時代に出来るだけ勉強したいし、又、牧歌的な涼しい処で北大生ならでは味へない処の感傷を追ふのも無意味とは云へまい。お互いにマイナスにならないリーベである事を欲する以上、分つて呉れるだらう。浅倉もその点話したらよく分つて呉れた。頼もしい男だ、そして友達だ。

三人で苺を猛食しつつ伊豆の思ひ出を辿る。小雨の降りしきる中をバスで帰る。丁度七時なり

七月七日（土） 七夕祭り

全く快適な気候だ。今日のこの雨も又風情あり。第一学期最終講義あり、出席す。それより、昨日来考案中の福田さんを訪問す。ご主人上京中で小母様一人。いろくとお話しの末、北見の件を切出す。この前の如き待遇は望めないが、どうぞお寄り下さいとのお話で、結局、参上する事にする。さて如何なる旅日記になるや。それより雨の中を駅に至り、これ又昨日来劃策中

のT女史と会見す。西村に至り、アイスクリームで^{のど}を潤し、先ず序々にKの意向を伝える。その辺のテクニク老練なる事を自覚す。ザンキの他なし。理性の勝ったT女史は口辺に微笑さへたゝへて感情を殺さんと努力するが、すでに眼光ケイ／＼として輝き、結膜の血管は発赤して、我一言一句、又、我眼を射るが如く凝視する。噫!! 女性とは斯くも強きものなるか! 翻つて、男性たるものの 老獪に反省を覚え、会見四十五分にして尚々と別れる。夜は茶の間で例の如くポーカー倶楽部例会。まあ、浮き沈みなしの老練なるプレイぶり。

七月八日(日)

朝より暑くもなし、涼しくもなし。快晴の中に聖日を迎へる。

S・S中等科礼拝八時半。説教「花を讀へよ」礼拝後Kに昨日の動情を伝へる。午後は日曜学校、花の日礼拝。それより公共施設を訪問する。療養所に至り野外礼拝。その後新国林檎園に至り、臨時教師会。夏季学校に就いて開催し、次の如く可決する。

日時 八月十六日(木)——十九日(日) 四日間。

人員 全科約一五十名。教師、細川校長。岡本・池田・奈良・小森・細野、計六名。助手 北星学園高等部生徒有志。内容・その他。後日決定!

今日の一日は実に感謝すべき一日であつた。

美しい初夏の緑、小川の流も美しく、花は彩々に咲き乱れ、一点の雲もない青空に陽光はさん／＼と輝き、況んや、可愛い子供達が抱へた花束を公共施設の人々に差出して、労苦に謝す姿は一言の註釈なしにほの／＼とした善意をかもし出して止まない。感謝の中に終る。

夜は鯨と奈良署長宅に行き小森も加り、ポーカーに興ず。ワインも加り、酔然たる雰囲気なり。本日の調子物凄く、全くツいてゐる。他の三人の不調につけ入って十一時迄に、二万五千点の大量を浮かせる。僕としても近來稀にみる好調なり。奈良、一万六千沈み、之又、大変なマイナスなり。斯くして意気揚々として引揚ぐ。先日の挽回遂に成る。

七月九日(月)

本日より一週後に迫る。第二回学士試験目指して、本格的一夜漬、速攻戦に入る。泣いても笑つても余す二週間なり。その後の旅を思つて頑張るべし。然し、東京へ帰らないと(一応伸ばしたにせよ)なると一寸淋しい氣もする!

何糞、まゝよ。泣いて過せ!!

七月十一日（水）

昨夜来から降雨になり、今日も一日降ったり止んだりの天気である。

庭の赤バラが美しい。霞草は満開。夏菊ももう少しで開くところ。雨に打たれた苺が一人愛らしい……。この夏休みいざ帰らないと決心したら、途端に胸中を去来する思ひに悩む。婉子の優しい微笑みの中に、疲れ切った身心を癒すべきであつたらうか。我家の気儘な生活にエネルギーを挽回すべきであつたらうか。

然し、余す一年半の学生生活をもう少し考へ直して送つてみたいのだ。社会へ出てからでは二度とこの様な生活は出来ないのだ。最後の思索時として、また、従来 of 甘さにたたえてみたいのだ：

然し、僕は眞実に婉子を愛してゐるのだらうか、否、愛してゐるくゝ絶対だ。唯、僕は勉強したいのだ。強くなりたいのだ。こんな僕でも医者として世に立つと定めた以上、「良き医者」になりたい。だから考へたい。勉強したい：こんな単純な気持ちになれたのが不思議だ。

七月十三日（金）

この籠城生活に終始したので、天下の情勢は皆目不備なり。僅かに外来者、新聞を通してその推移を知るのみ。朝鮮動乱の停戦会談に世界の耳目が集中しているの感あり。中共・国連両軍の首脳の善意ある解決を希望する。遂にたまりかねて、昨日竹中来訪の時一寸話の出た野球をやりに円山へ赴く。十二時五十分のバスで鳥居前下車。仲々、円山風情も悪くない。この涼しさでは暑中休暇でもあるまい。全く涼しいすがくしい緑の薫風が円山から吹き下して、坂下グラウンドは絶好のコンディションなり。観光バスが次々とドライブしてゐるのも楽しい風景である。久しぶりで打つては走り、走つては捉へ、青葉のグラウンドを駆け廻つたので消耗する。公園入口の喫茶店でサイダーにのどを潤す。

この頃の涼しさは、丁度、東京から軽井沢へでも避暑に行つたやうな気分になる。喫茶店の窓より見える白樺の木、円山の住宅地の風景、そして山の緑、歩く人々の姿等。そして我々のいでたちと云ひ申し分ない位、都会の俗塵からかけ離れている。浅倉が東京から帰省して来た学生の話として、「本当に恵まれた環境である」と云つたが、全く恵まれた生活である。竹中の下宿に至り、北海道の地図を拡げ、又、一くさり駄べる。連中全くだいい気なものなり。それでも試験が気になると見えて、五時半には夫々家路さして引揚げたところは殊勝である。夜は苺そしてブリッジ。老練なプレイで最高位を

占める。でも、平均十三・七はまだく。寮時代の面目更になし。今日は遂に午前中の二時間のみ、で沈没なり。明日・明後日の二日のみ。でも今更慌てふためいたところで致し方なし。暢気にやるべし。

七月十九日（木） 晴

第二回学士試験施行第二日薬理学。

先十六日（月）の細菌学は先ずウイルスの山が当り、七十点确实（最悪）と云った処で、昨年大量八十人不合格と云ふ大物を射たが何と云って、本日の薬理学は主任真崎教授だけに大物中の大物、全力を注いでこの学課に準備した連中も多いだけに結果如何？と。試験場は悲壮なる空気が漲る！

定刻十時半、先ず、時間係の助手入場。続いて監督の助手五人、最後に真崎主任教授入場して火蓋を切る。四問中、全部手をつけ、一〇十五、二〇十五三〇二十、四〇十五と、結局六十五点（最低見積り）確保？

結果判定は十月の発表を待つのみ。それより福田さんに赴く。途中、竹中と第二農場及びポプラ並木を散策し、又、クラーク銅像前で女子学生アルバイトの学内写真やさんをひやかし、更に駅前へ出て、ニシムラでアイスクリーム。北見の件、俄然雲ゆき悪化して、牧場にはルンゲT・Bの克蘭ケ（編註：肺結核の患者 ルンゲ（Lunge）ドイツ語で肺、T・B結核、克蘭ケ（Kranke）ドイツ語で患者、病人）二人が例の本宅の方で療養しているとの事。叔母さんも大変恐縮して居られるし、暫く考慮する事にする。帰途 竹中の下宿に至る。八月一日以降のスケジュールに就き協議す。結論出ず。二人のスケジュールの目的が相違してゐる事に気づく。一応、二十一日の放課後迄に考へておく事にする。石川の下宿へ声を掛け、バスで崇江さんと一緒になり、風呂で〇と一緒に入り、夜は早目に切上ぐ。城戸 咯血した由。大事件なり。大いに体力に疑問を持つものなり。自重して然るべし。ここまで来て彼倒るの報は試験中ならば猶更悲報なり。

好漢五百助こと城戸諄の再起を祈る。

七月二十日（土）

病理学（武田）試験、自信あり。夜、小森宅にて大コンパ。ストームやる。

七月二十二日（月）

夜発、一九五一年度北海道内大旅行の途につく。第一次出発。即、十勝・日高国・襟裳岬（道立公園）を経てアポイ岳登山。帰途 支笏湖にて 北大

寮で泊りヨット練習。

七月二十八日（土）

帰宅。経費 二、〇〇〇円。

八月一日（水）

朝発、第二次出発。同行竹中正大。即ち、北上して旭川を経て土別に至り、天塩川を遡河。名寄から興部に至り、オホーツク海岸を下り、遠軽に出て家庭学校訪問。後、福田牧場に至り、更に南下して北見から網走に出て、モロ貝塚見学。休養の後、船にて知床半島に。ウトロに渡り、知床半島を横断してラウスに至り、国境の町の緊迫せる情勢を視察。南下、標津を経て釧路に出て帰札する。

八月十二日（日）

帰札。経費三、〇〇〇円也。

此処に総計五、〇〇〇円で今夏の大旅行の幕を閉ず。

帰札以降、八月十六日迄、連日夏期学校開校準備。

八月十六日（木）より十九日（日）

四日間、夏期学校開校。

八月二十日（月） 九月の試験に準へて勉学開始

九月 五日（水） 病理学（安保）試験。自信なし

九月 七日（金） 衛生学（井上）試験。自信あり

九月 九日（日） 陽の節句。決別コンパ、於拙宅。

九月 十日（月） 発 七・三十 帰省の途に就く。

九月十一日（火） 十一・十五 上野着。帰宅

九月二十日（木）

帰省以来、毎日の如く降雨にさまたげられて、憂鬱な事おびたらしい。然

し、久方ぶりに故郷の温い手の中で愛する婉子と共に在る事は六月以来の消耗を一気に挽回して余り在るものあり、婉子もこの四月以来の問題に觸れる事を極度に怖れているらしい。単なる感情の行きがかりと極めつけられないものもあるが、多分に女性心理の齎らすものとして、いたはってやるべきなり。女性が現実的に安易なコースを希んだとて、それを指弾するに及ばない。理想なきも非なれば、互に理解し合って努力するに及かず。愛すると強く来るところのものを把握している限り、解決はあるべきなり。

この日鯨より七月の学士試験（薬理・細菌・病理）合格通知あり、祝宴を張る。

九月二十二日（土） 大祝宴。

九月二十三日（日）

前田六郎兄来る。久方ぶりで旧交をあたため、杯を交す。朝八・五八発で日向薬師見学・七沢温泉ピクニック。喜平兄・六郎兄・婉子の四人。相模原の丘陵の中にこんなクラシックな環境があったとは思へない。北海道では味へない情緒なり。初秋の山道も又、気分爽快にして、故郷らしい気分を満喫する。こんな行事がこんなに楽しいものかと、つくづく我身の幸ひを味ふ。七沢の溪流も美しい。国宝の薬師も懐古的な動かぬ雰囲気を与へて呉れた。何から何まで感謝された一日。七沢温泉の風呂の中で、六郎兄としみぐこれからの構想を語った。

九月二十四日（月） 秋分の日

昨日と引続き快晴。婉子と逗子へゆく。家中在宅。叔母上もすっかり元気で安心した。兼て、一九五一年度タイトルを目指して猛練中の健治と将棋を指す。初盤戦より中飛車戦法が押して、一気に終盤へ持ちこし、そのまゝ押し切って、早々に健治投了して、再度タイトルは我手に安存する。スキヤキの馳走で、すっかりくつろいで、よもやまの話題に名残を惜しんで五時のバスで帰る。帰省中の最もよき一日ならん。

九月二十五日（火）

小岩にゆくも竹中不在、浅倉帰京した由なので訪れ、幸ひ会ふ。札幌の情報を入手する。試験発表の時のナンセンスも楽し。それよりピカデリーにゆき、婉子と会ひ「イヴの総て」を観る。仲々の傑作。

本年度洋画ベストワンならん。婉子と町田へ帰る。祭典なれど降雨のため悪

了。

九月二十七日（木）

婉子、風邪に冒さる。祈回復。午後二時、銀座不二やで、竹中・浅倉と会ふ。銀ブラをして後、スバル座に赴き、今西洋三を呼び出して、「シラノ・ド・ベルジュラック」を観る。その間、日比谷公園宮城前広場散歩する。帰途、新川町の上野の宅を訪れ、大歓迎をうく!!

「剣菱」は美味し。すっかり馳走になり、大機嫌で一同ハイヤーで引上ぐ。終電を逸し、浅倉の家へ泊る。

九月二十八日（金）

セントラルリーグ、名古屋―松竹、巨人―大洋戦を見る。夕刻帰る。

九月三十日（日）

原町田テニス同好会コートでラケットをふる。約一ヶ月ぶりなので調子出づ。

十月一日（月）大藏祭礼。

愈々訣別なり。三週間の在郷生活思ひ出を秘めて、暫しの別れなり。婉子との最後の夜の語り合ひも感慨無量なり。熱き接吻の訣別の心に代えて…。健康を祈り合ひつつ…さらば

十月二日（火）

朝九時三十五分、上野発。同行、浅倉・竹中。函館にて小憩。函館山登山。湯の川温泉。

十月四日（木）

朝六時十五分札幌着。第一時間の高杉教授の臨床講義に出席し、以て第二期のスタートを切る!!

十月六日（土）夜拙宅にてコンパ（鯨・小森）

十月七日（日）対商大戦野球試合（円山球場）

十月十日（水）月形へ釣にゆく（月居）

十月十三日（土）教会バザー。おでん・やきとり、開業。

十一月一日（木）丸井前で小山姉に二年ぶりで会ふ。旧交をあたたむ。

十一月二日（金） 病院開院三十年記念日。休講。

登別温泉北大分院へゆく。同行、浅倉・竹中・鯨岡・井林の五人。例によって無軌道五人男。登別温泉、秋の湯治行と洒落れこむ。第一滝本の東洋一の浴場設備に哑然とする。湧出量・温泉の種類等、正に日本一ならん。スケールの大きい事にすっかり感歎する。

十二月三十一日（土） 午後七時記す。

余す数時間で一九五一年も終らんとする。○に感慨無量である。社会的には次の如き十大ニュースが示す如く、日本の行く手の困難にして嚴肅なる事実を物語っている。然し、その中にもほのかな、ほんとにほのかな平和への希望があつた！ 何と云つても一九五一年は終つてゆく。そして新らしき一九五二年の構想は成つた！ 生きるぞ。逞しく。信じて…

一九五一年十大ニュース〔事起順〕（NHK）より

○亜細亜競技大会（印度ニューデリー）

○マッকারサー元帥解任（東京・ワシントン）

○櫻木町事件（横浜）

○貞明皇后喪儀（東京）

○追放解除（全国）

○民間航空再開（東京・福岡・札幌）

○電力危機スト（大阪）

○台風ルースの災害（西日本）

○講和條約締結（サンフランシスコ）

○社会党分裂（東京）

講和・日米安保兩條約国会通過（東京）

一九五二年 年度 構 想

元旦記

一、キリスト者としてのヒューマニティーを根本とする 医学者としての学生々活の最高学年を真剣に学び、且つ、片寄らざるパーソナリティを養ふ事

一、許婚者婉子とのリーベの最後の一年をベターハーフとして恥しからぬ人間たるべく努力すること。

右の構想に基き 左記予定を画つ

一九五二年 一月上・中旬 充分なる休養をとる。

一月下旬 帰学、スタート開始。

二月←三月中旬 勉強、スキー・スケート。
三月下旬←四月中旬 見学旅行 且、休養。
四月下旬 最終学年勉強。公的生活（教会関係）を止
む
六月下旬 只、健康のため、テニス・登山・等：
七月上旬 婉子来札予定。
七月中旬←八月下旬 帰省・実習の傍、夏季スポーツ及び
インターン病院決定。
九月上旬←十一月下旬 最終学期、勉強総仕上げ。
十二月上旬 帰省
十二月中旬 帰札、卒業試験準備。
一九五三年一月下旬←三月上旬 卒業試験
三月中旬 ハイラーテン準備、及卒業式
三月下旬 ハイラーテン

一九五二年一月一日（火）

二つの世界の対立の中に今ぞ世紀の年は明け始めた。今や吾が日本の前途は混沌として明察するを得ず。講和独立とは云へ、先ず旧交戦国への賠償問題（特に比律濱は強硬である）印度・中国との講和条約締結問題は、本年初期の国際問題とならう。二つの世界の緩衝地帯である日本でのイデオロギーの争斗は右・左翼強硬派の暴力にまで及びはしないか。国内治安を目的として発足した予備隊が、再軍備の具体的なものに肩代りする事は必然であらうし、再軍備に対する若き世代の考へ方が個人々々の心の量に、従って、苦悩は広がってゆく。再開の国会も当然、現内閣の提案案が可決されてゆく以上、流れゆく時の動きは、全く不明らしくなくなってゆくだらう。問題の五二年この中に在って、僕は果して心ゆくまで修学出来るだらうか。流れれゆくものを無視して温床の中に学生々活をエンジョイして良いのだらうか。ともあれ、羽根突きの音と共に正月は来た。全ての人は只この二・三日だけは楽しく過すのだ。ともあれ、正月は来たようだ。

―午後一時記す―

一月二十五日（金）

又暫らくの訣別の時が来た。何回となく繰り返したとは云へ、悲しい思になるとは…。二人で肩を並べて陶酔した観劇の宵。夜の更けるのを忘れて語り合った二人だけの炬燵。柔らかな日差しを浴び、飛び廻った冬の庭。手と

手をとり合つて黙つて歩いた寒夜の道。然し、又、暫しの別れの時が来た。又逢ふ日まで君よ幸あれかし。君あればこそ吾強し。敢然として生きるのだ。
恵子姉と三人で新宿へ出る。そして東京の街に灯のともる頃上野駅へ向ふ。竹中と二人で一路北上する。淋しい。

一月二十七日（日）

連絡船、暴風雪のため缺航。一日遅れて今は午后四時半札幌着。雪の札幌の人となる。又しても始まる雪の生活。負けまいぞ。

三学期予定表

一月二十八日（月） 登校開始。

二月 二日（土） この日までに挨拶廻り完了。

二月 三日（日） S・Sスキー遠足。

〃 六日（水） 北大開学記念日。 休日

〃 七日（木） 第九グルッペ（編註…ドイツ語Gruppeの群・集団）

（・スタートコンパ午後五時於「いろは」

〃 十日（水） 春香山ツアー・スキー行。前八時発

〃 〃 〃 午後六時 在琴似北大生送別会。於琴似神社々務所

二月 十一日（月） この日までに三月の見学旅行渉外事務完了。

完